

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(105)

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-XII

(伊集院IC～市来IC)

いち の ほら い せき  
市ノ原遺跡

(第5地点)

(日置市東市来町)

2006年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

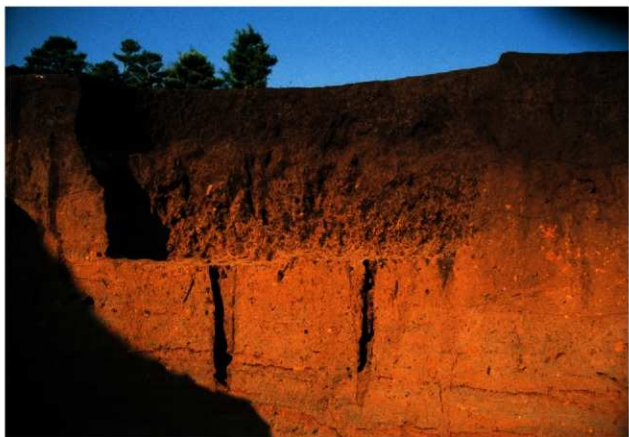
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書

市ノ原遺跡  
(第5地点)

二〇〇六年三月 鹿児島県立埋蔵文化財センター



石斧集積遺構



3号落とし穴



三角埴形土製品・石製品



打製石斧

## 序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（鹿児島IC～市来IC間）の建設に伴って、平成8年度から平成10年度にかけて実施した日置市東市来町湯田に所在する市ノ原遺跡（第5地点）の発掘調査の記録です。

市ノ原遺跡は、温泉地湯之元の市街地を見下ろす台地上にあり、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代から中・近世にわたる複合遺跡であり、発掘調査によって各時代の遺構や遺物が数多く発見されました。特に、旧石器時代の礫群や縄文時代の集石・落し穴・土坑など、検出された各種の遺構は、本来、集落に付随する遺構であり、当時の文化を解明するうえで貴重な資料と考えています。

本報告書が、県民の皆様はじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査に当たりご協力いただいた国土交通省鹿児島国道事務所、日置市教育委員会並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 上 今 常 雄

## 報告書抄録

ふりがな	いちのはらいせき だいごちてん							
書名	市ノ原遺跡 第5地点							
副書名	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	ⅪⅢ							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第105集							
編著者名	繁昌正幸・三垣恵一・(寺原 徹・森田郁朗)							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL0995-48-5811							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
いちのはらいせき 市ノ原遺跡 第5地点	かごしまけん 鹿児島県 ひよし 日置市 ひがしいちまちよう 東市来町 ゆだ 湯田 あさうすいちのほろ 字上市ノ原	462161	29-67	31° 39' 10"	130° 20' 05"	確認調査 19961001 ～ 19970315 本調査 19970421 ～ 19980316 19980506 ～ 19990331	11,700	南九州西回り自動車道鹿児島道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
市ノ原遺跡 第5地点	散布地	旧石器ナイフ形石器文化期 細石器文化期  縄文  弥生 古墳 古代  中世～近世・近代	ブロック4か所  礫群1基・落し穴1基・ブロック1か所 集石6基・落とし穴3基・土坑3基・石斧集積1か所  土坑3基  道跡77条	ナイフ形石器・台形石器・三稜尖頭器・石核 細石刃・細石刃核  前平・押型文・春日・深浦・出水・指宿・市来・黒川・石鏡・石匙・石斧・削器・石皿・磨 敲石類 刻目突帯文土器・壺 成川式土器・須恵器 土師器・須恵器・内 黒土師器・土師甕 青磁・白磁・染付・薩 摩焼・陶器				
要約	市ノ原遺跡(第5地点)ではナイフ形石器文化期のブロック4か所と細石器文化期のブロックが1か所確認され、特にナイフ形石器文化期のものでは良好な接合資料が得られた。ブロック内にナイフ形石器や台形石器などの石器もあることから、石器製作に伴うものと考えられ、興味深い。縄文時代早約期には落し穴がまとまって検出されたほか、扁平に拱理する安山岩製の打製石斧が折損品を含めて相当個数出土している。また、打製石斧4点からなる石斧の集積のほか、三角埴形の土製品及び石製品や大洞式系の浅鉢形土器の小片などが出土していることから、東北地方あるいは北陸地方との直接的あるいは間接的な交流の証の可能性のあるものとして興味深い。古代以降、特に中世から近世・近代と推定される多数の遺跡の検出は、当地が交通の頻繁な地域として重要な位置を占めていたことが考えられることから、「市」を冠する地名とも相まって興味深い。							



第1図 市ノ原遺跡(第5地点)位置図

## 例 言

- 1 本報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（鹿児島IC～市来IC間）建設事業に伴う市ノ原遺跡（第5地点）の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県日置市東市来町湯田に所在する。
- 3 発掘調査は建設省鹿児島国道工事事務所（当時。現国土交通省鹿児島国道事務所）の受託事業として、平成8年度から平成10年度にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査事業は平成8年10月18日から平成10年7月3日にかけて実施し、その後、整理作業を平成15年度に行った後、整理作業及び報告書作成事業を平成17年度に実施した。
- 5 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。
- 6 挿図のスケールは、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は建設省鹿児島国道工事事務所（当時。現国土交通省鹿児島国道事務所）が提示した工事計画図面に基づく。
- 8 発掘調査における図面の作成及び写真の撮影は調査担当者が行った。
- 9 遺構実測図の浄書及び出土遺物の実測・浄書は整理作業員の協力を得て整理担当者が行った。本報告書に使用した写真図版のうち、遺物撮影については、吉岡康弘が行った。
- 10 本書の執筆・編集は繁昌正幸・三垣恵一が担当した。また、年代測定及び科学分析については委託した。
- 11 本遺跡の出土遺物は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、活用する予定である。なお、本遺跡の遺物注記の略号は“市5”である。
- 12 発掘調査にあたっては、河口貞徳氏（鹿児島県考古学会会長）・上村俊雄氏（鹿児島大学助教授・現鹿児島国際大学教授）・森脇 広氏（鹿児島大学教授）・小林哲夫氏（鹿児島大学教授）に現地指導をいただいた。また、整理・報告書作成作業にあたって山田昌久氏（首都大学東京助教授）に遺物の指導を受けた。

# 凡 例

## 1 遺 構

- (1) 遺構図の縮尺は、縄文時代の集石が1/20、落し穴および土坑が1/40、石斧集積が1/10、古墳時代の土坑が1/40、中世から近世・近代の道跡を1/50、および1/100で掲載している。
- (2) 遺構位置図は1/400で掲載している。
- (3) 出土状況図の遺物番号は、本報告書の遺物番号と同一である。
- (4) 遺構番号は、整理作業の段階で北および東側からの順で遺構ごとに付した。

## 2 遺 物

- (1) 遺物の出土状況図（平面分布図）には、それぞれに縮尺を付した。
- (2) 遺物観察表における遺物の色調は、客観性を保つために農林水産省農林水産技術会議事務局監修の新版『標準土色帖』2003に拠った。
- (3) 遺物観察表における出土層の表記は、発掘調査時の取り上げ層位に拠った。

### (4) 土 器

- ①縮尺は基本的に1/3で掲載し、縮尺が異なる場合には各図面に示してある。
- ②丹塗りは間隔が疎のドット、黒色は間隔が密なドットのスクリーントーンで表現した。
- ③径の復元ができなかった遺物の実測図の掲載順は、左から外面・内面・断面の順である。

### (5) 石 器

- ①縮尺はナイフ形石器・台形石器・三稜尖頭器（角錐状石器）・石鎌・石匙・スクレイパーなどを2/3、磨製石斧・打製石斧（打製土掘具）・礫器・磨石・敲石類などを1/3、石皿・砥石類を1/4で掲載している。
- ②磨石・磨敲石・敲石類、石皿・砥石の使用面（磨面）は基本的に白抜きとし、礫面（自然面）をドット、節理面は斜線、明瞭な擦痕については一部実線で表現している。打製石斧・磨製石斧の擦痕は実線で表現している。
- ③磨石・敲石類の分類は、磨面のみが観察されるものを磨石、磨面と敲打痕が観察されるものを磨敲石、敲打痕のみが観察されるものを敲石としている。なお、磨敲石や敲石の一部にはこれまで凹石・棒状敲石とされているものが含まれる。
- ④石器観察表の計測値で（ ）書きのものは欠損品における残存値を示す。
- ⑤各石器の残存部位、破損状況は可能な限り観察表に掲載した。
- ⑥各遺物包含層における各器種ごとの石器総点数は、必ずしも個体数を反映するものではない。
- ⑦打製石斧の使用痕については実体顕微鏡による観察を行った。
- ⑧旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物で、素材となる剥片に二次的な加工が認められるものの、示準石器として認定できない石器については「加工痕のある石器」として分類し、縄文時代のものについては「二次加工のある剥片」とした。
- ⑨石材の同定は主に肉眼観察によるものである。本遺跡から出土した遺物に利用されている石材は、次表の通りである。なお、表中の分類略号と本文・観察表の表記は一致する。



石材名	分類略号	特徴および利用状況
黒曜石	Ob 1	漆黒で透明感がなく、灰白色の不純物を含む。風化が進み色調が灰色を呈するものが含まれる。薩摩川内市樋脇町上牛鼻（系）産の黒曜石に類似する。旧石器時代のナイフ形石器・台形石器・三稜尖頭器・細石刃・細石刃核、縄文時代の打製石鏃・石錐・楔形石器・スクレイパーに利用されている。
	Ob 2	銜色や茶褐色で透明感、光沢があり不純物を多く含む。鹿児島市吉野町三船（竜ヶ水）産の黒曜石に類似する。旧石器時代の細石刃核、縄文時代の打製石鏃・スクレイパーに利用されている。
	Ob 3	黒色で光沢があり白色の不純物を多く含む。大口市日東（系）産の黒曜石に類似する。旧石器時代のスクレイパーなどに利用されている。
	Ob 4	銜色で良質の黒曜石である。若干の不純物を含むものもある。宮崎県えびの市・熊本県人吉市の桑ノ木津留（系）産の黒曜石に類似する。縄文時代の打製石鏃に利用されている。
	Ob 5	黒色で光沢があり、若干の透明感がある。霧島系の黒曜石に類似する。縄文時代の打製石鏃などに利用されている。
	Ob 6	青灰色で若干の不純物を含む。長崎県針尾崎産の黒曜石に類似する。縄文時代の打製石鏃などに利用されている。
	Ob 7	黒色で光沢があり不純物をほとんど含まない良質の黒曜石である。若干の透明感をもつものが含まれる。佐賀県伊万里市腰岳（系）産の黒曜石に類似する。縄文時代の打製石鏃・スクレイパーに利用されている。
	Ob 8	黒色で光沢とすりガラス状の透明感がある。産地不明の黒曜石である。縄文時代の石鏃などに利用されている。
安山岩	An 1	灰色で輝石や石英、角閃石を多く含む。鉄分を含むものは灰褐色を呈する。輝石や石英を多く含むものは日置市東市来町湯田（遠見番山）産の安山岩に類似する。旧石器時代の敲石、縄文時代の打製石斧・磨石・磨敲石・敲石・石皿に利用されている。
	An 2	黒灰色で無斑晶である。薩摩川内市樋脇町上牛鼻（系）産の安山岩に類似する。縄文時代の打製石鏃・楔形石器・スクレイパーに利用されている。
	An 3	灰色で不純物が少なく、サヌカイトに類似する。産地不明のものを含む。縄文時代の尖頭状石器・石匙・楔形石器に利用されている。
頁岩	Sh 1	にぶい黄色・黄褐色・オリーブ黄色・灰白色でシルト質が強く、節理が発達している。旧石器時代のナイフ形石器・台形石器・三稜尖頭器・スクレイパーに利用されている。
	Sh 2	灰色～青灰色で節理が発達したものである。一部に変成を受けたものがある。縄文時代のスクレイパー・磨製石斧・打製石斧に利用されている。
石英 鉄石英	Qu Fe・Qu	石英は白色、鉄石英は赤褐色を呈する。縄文時代の打製石鏃・石匙・楔形石器・石錐に利用されている。
チャート	Ch	緑黒色で白色の筋が入るものもある。縄文時代の打製石鏃・石匙・石錐・楔形石器・スクレイパーに利用されている。
花崗岩	Gr	黄褐色を呈する。縄文時代の磨石に利用されている。
蛇紋岩	Ja	暗緑色で硬質である。縄文時代の垂飾に利用されている。
蛋白石	Op	浅黄色で旧石器時代の敲石、縄文時代の磨敲石に利用されている。
凝灰岩	Tu	溶結凝灰岩を含む。灰色・緑灰色・赤灰色を呈し縄文時代の敲石に利用されている。
軽石	Pu	黄白色で気孔を多く含む。軽石製品に利用されている。

# 目 次

	ページ
カラー図版	(1)
序 文	(5)
抄 録	(6)
例 言	(8)
凡 例	(9)
目 次	(11)
第 I 章 はじめに	1
第 1 節 調査に至るまでの経過	1
第 2 節 遺跡の概要	1
第 II 章 発掘調査の経過	8
第 1 節 調査に至るまでの経過	8
第 2 節 調査の組織	8
第 3 節 調査の経過（日誌抄）	10
第 III 章 遺跡の位置と環境	13
第 1 節 地理的環境	13
第 2 節 歴史的環境	13
第 IV 章 発掘調査の成果	19
第 1 節 発掘調査の方法	19
第 2 節 遺跡の層序	23
第 3 節 発掘調査の成果の概要	32
第 4 節 旧石器時代の調査	33
第 5 節 縄文時代の調査	56
第 6 節 弥生時代の調査	191
第 7 節 古墳時代の調査	194
第 8 節 古代の調査	215
第 9 節 中世の調査	219
第 10 節 近世以降の調査	239
第 V 章 発掘調査のまとめ	268
第 VI 章 分析結果	275
写真図版	293
あとがき	

## 挿 図 目 次

第1図	市ノ原遺跡（第5地点）位置図…（7）	第36図	ブロック3出土接合資料8遺物・最石実測図…48
第2図	南九州西回り自動車道関係遺跡位置図…4	第37図	ブロック4出土遺物実測図ほか…49
第3図	市ノ原遺跡調査地点位置図…6	第38図	礫群…50
第4図	周辺遺跡…16	第39図	1号落し穴…51
第5図	市ノ原遺跡（第5地点）周辺地形図…20	第40図	細石器文化期ブロック図…52
第6図	調査地点グリッド図…21	第41図	石材別出土状況図（1）黒曜石出土割合…53
第7図	調査地点トレンチ位置図…22	第42図	石材別出土状況図（2）頁岩ほか・出土割合…53
第8図	土層柱状図…23	第43図	器種別出土状況図…54
第9図	土層図（1）…24	第44図	出土遺物実測図…55
第10図	土層図（2）…25	第45図	遺構全体図（1）…57
第11図	土層図（3）…26	第46図	集石（1）…59
第12図	土層図（4）…27	第47図	集石（2）…60
第13図	土層図（5）…28	第48図	2号落し穴…62
第14図	V層上面コンター図…29	第49図	3号落し穴…63
第15図	III層上面コンター図…30	第50図	4号落し穴…64
第16図	遺物出土全体図…31	第51図	縄文時代土坑…65
第17図	ナイフ形石器文化期ブロック図…34	第52図	石斧集積遺構…66
第18図	石材別出土状況図（1）黒曜石…35	第53図	石斧集積構出土石斧…67
第19図	石材別出土状況図（2）頁岩・安山岩・その他…35	第54図	打製石斧分類別出土状況図…67
第20図	石材別・黒曜石産地別割合…36	第55図	土器集中出土状況図…68
第21図	器種別出土状況図…36	第56図	土器出土状況図（1）…69
第22図	ブロック1出土遺物…37	第57図	1類土器（1）…71
第23図	ブロック2出土遺物（1）…38	第58図	1類土器（2）…72
第24図	ブロック2出土遺物（2）…39	第59図	2類土器…73
第25図	ブロック2出土接合資料1・2・3出土状況図…40	第60図	3・4・5類土器…74
第26図	ブロック2出土接合資料1遺物実測図41	第61図	6類土器…76
第27図	ブロック2出土接合資料2遺物実測図42	第62図	7・8類土器…77
第28図	ブロック2出土接合資料3遺物実測図43	第63図	9・10類土器…79
第29図	ブロック2出土接合資料4・5出土状況図44	第64図	11類土器…81
第30図	ブロック2出土接合資料4遺物実測図44	第65図	12・13類土器…82
第31図	ブロック2出土接合資料5遺物実測図45	第66図	14類土器…83
第32図	ブロック2出土接合資料6・7出土状況図45	第67図	13・15類土器…85
第33図	ブロック2出土接合資料6・7遺物実測図46	第68図	15類土器…86
第34図	ブロック3出土接合資料8出土状況図47	第69図	16類土器…87
第35図	ブロック3出土接合資料8…47	第70図	17類土器（1）…89

第71图	17類土器 (2) .....	90	第108图	IIIb層出土石器 (9) .....	136
第72图	18類土器 .....	91	第109图	IIIb層出土石器 (10) .....	137
第73图	18・19類土器 .....	92	第110图	IIIa層石器出土状況图 .....	139
第74图	20類土器 .....	94	第111图	IIIa層出土石器 (1) .....	140
第75图	21類土器 .....	95	第112图	IIIa層出土石器 (2) .....	141
第76图	21・22・23類土器 .....	97	第113图	IIIa層出土石器 (3) .....	142
第77图	土器出土状況图 (2) .....	98	第114图	IIIa層出土石器 (4) .....	143
第78图	打製石斧分類模式图 .....	99	第115图	IIIa層出土石器 (5) .....	144
第79图	24・25類土器 .....	100	第116图	IIIa層出土石器 (6) .....	145
第80图	26類土器 .....	101	第117图	IIIa層出土石器 (7) .....	147
第81图	26・27類土器 .....	102	第118图	IIIa層出土石器 (8) .....	148
第82图	28類土器 .....	105	第119图	IIIa層出土石器 (9) .....	149
第83图	28・29・30類土器 .....	106	第120图	IIIa層出土石器 (10) .....	150
第84图	30・31類土器 .....	107	第121图	IIIa層出土石器 (11) .....	151
第85图	31類土器 (1) .....	108	第122图	IIIa層出土石器 (12) .....	152
第86图	31類土器 (2) .....	110	第123图	IIIa層出土石器 (13) .....	153
第87图	32類土器 .....	111	第124图	IIIa層出土石器 (14) .....	154
第88图	32・33類土器・突帯 .....	112	第125图	IIIa層出土石器 (15) .....	156
第89图	突帯 .....	113	第126图	IIIa層出土石器 (16) .....	157
第90图	34類土器 .....	115	第127图	IIIa層出土石器 (17) .....	158
第91图	35類土器 .....	116	第128图	IIIa層出土石器 (18) .....	159
第92图	35・36・37類土器 .....	117	第129图	IIIa層出土石器 (19) .....	160
第93图	底部 (1) .....	119	第130图	IIIa層出土石器 (20) .....	161
第94图	底部 (2) .....	120	第131图	IIIa層出土石器 (21) .....	162
第95图	底部 (3) .....	121	第132图	IIIa層出土石器 (22) .....	163
第96图	特殊土器 .....	122	第133图	IIIa層出土石器 (23) .....	164
第97图	IV層出土石器 (1) .....	124	第134图	IIIa層出土石器 (24) .....	165
第98图	IV層出土石器 (2) .....	125	第135图	IIIa層出土石器 (25) .....	167
第99图	IIIb層石器出土状況图 .....	127	第136图	IIIa層出土石器 (26) .....	168
第100图	IIIb層出土石器 (1) .....	128	第137图	IIIa層出土石器 (27) .....	169
第101图	IIIb層出土石器 (2) .....	129	第138图	IIIa層出土石器 (28) .....	170
第102图	IIIb層出土石器 (3) .....	130	第139图	IIIa層出土石器 (29) .....	171
第103图	IIIb層出土石器 (4) .....	131	第140图	IIIa層出土石器 (30) .....	172
第104图	IIIb層出土石器 (5) .....	132	第141图	IIIa層出土石器 (31) .....	173
第105图	IIIb層出土石器 (6) .....	133	第142图	IIIa層出土石器 (32) .....	174
第106图	IIIb層出土石器 (7) .....	134	第143图	IIIa層出土石器 (33) .....	175
第107图	IIIb層出土石器 (8) .....	135	第144图	IIIa層出土石器 (34) .....	177

第145図	IIIa層出土石器 (35) .....	178	第173図	成川式土器 (12) .....	212
第146図	II層出土石器 (1) .....	180	第174図	成川式土器 (13) .....	213
第147図	II層出土石器 (2) .....	181	第175図	特殊土器 .....	214
第148図	I層出土石器ほか (1) .....	182	第176図	古代の土器 (1) .....	215
第149図	I層出土石器ほか (2) .....	183	第177図	古代の土器 (2) .....	216
第150図	I層出土石器ほか (3) .....	184	第178図	古代の土器 (3) 須恵器 .....	217
第151図	I層出土石器ほか (4) .....	185	第179図	古代の遺物 .....	218
第152図	I層出土石器ほか (5) .....	186	第180図	遺構全体図 (2) .....	221
第153図	I層出土石器ほか (6) .....	187	第181図	道跡位置図 (1) .....	223
第154図	I層出土石器ほか (7) .....	188	第182図	道跡位置図 (2) .....	224
第155図	I層出土石器ほか (8) .....	189	第183図	道跡位置図 (3) .....	225
第156図	三角埴形土・石製品 .....	190	第184図	道跡位置図 (4) .....	226
第157図	弥生時代の土器 .....	192	第185図	道跡実測図 (1) .....	227
第158図	その他の石器 .....	193	第186図	道跡実測図 (2) .....	228
第159図	古墳時代土坑 .....	194	第187図	道跡実測図 (3) .....	229
第160図	鉢形土器出土状況 .....	195	第188図	道跡実測図 (4) .....	230
第161図	土器出土状況図 (3) .....	196	第189図	道跡実測図 (5) .....	231
第162図	成川式土器 (1) .....	198	第190図	道跡実測図 (6) .....	232
第163図	成川式土器 (2) .....	199	第191図	道跡実測図 (7) .....	233
第164図	成川式土器 (3) .....	200	第192図	道跡断面図 .....	234
第165図	成川式土器 (4) .....	202	第193図	中世の遺物 (1) .....	236
第166図	成川式土器 (5) .....	203	第194図	中世の遺物 (2) .....	237
第167図	成川式土器 (6) .....	204	第195図	中世の遺物 (3) .....	238
第168図	成川式土器 (7) .....	205	第196図	近世の遺物 (1) .....	240
第169図	成川式土器 (8) .....	207	第197図	近世の遺物 (2) .....	242
第170図	成川式土器 (9) .....	208	第198図	近世の遺物 (3) .....	243
第171図	成川式土器 (10) .....	209	第199図	遺跡の残存状況図 .....	267
第172図	成川式土器 (11) .....	210	第200図	打製石斧多重投影図 .....	272

## 表 目 次

第1表	南九州西回り自動車道調査遺跡一覧……5	第19表	土器観察表(7)……250
第2表	市ノ原遺跡地点別調査概要一覧……7	第20表	土器観察表(8)……251
第3表	周辺遺跡(1)……17	第21表	土器観察表(9)……252
第4表	周辺遺跡(2)……18	第22表	土器観察表(10)……253
第5表	礫群構成礫計測表……50	第23表	土器等観察表(11)……254
第6表	1号落とし穴計測表……51	第24表	石器観察表(1)……255
第7表	集石計測表……59	第25表	石器観察表(2)……256
第8表	2～4号落とし穴計測表……61	第26表	石器観察表(3)……257
第9表	土坑計測表(1)……65	第27表	石器観察表(4)……258
第10表	石斧集積遺構出土石斧観察表……66	第28表	石器観察表(5)……259
第11表	土坑計測表(2)……195	第29表	石器観察表(6)……260
第12表	道跡計測表……235	第30表	石器観察表(7)……261
第13表	土器観察表(1)……244	第31表	石器観察表(8)……262
第14表	土器観察表(2)……245	第32表	石器観察表(9)……263
第15表	土器観察表(3)……246	第33表	石器観察表(10)……264
第16表	土器観察表(4)……247	第34表	石器観察表(11)……265
第17表	土器観察表(5)……248	第35表	石器観察表(12)……266
第18表	土器観察表(6)……249		

## 写真図版目次

カラー図版1	石斧集積遺構, 3号落し穴…(1)	図版22	縄文時代中期土器(1)……………314
〃	2 三角埴形土・石製品, 打製石斧…(3)	図版23	縄文時代中期土器(2)……………315
図版1	遺跡遠景・遺跡近景……………293	図版24	縄文時代中期～後期土器……………316
図版2	標準土層……………294	図版25	縄文時代後期土器……………317
図版3	遺物出土状況……………295	図版26	縄文時代晩期土器……………318
図版4	礫群・2号落し穴……………296	図版27	縄文時代後期～晩期土器……………319
図版5	3号落し穴・逆茂木痕(2号落し穴)…297	図版28	縄文時代石器(1)ほか……………320
図版6	3号落し穴・逆茂木痕(3号落し穴)…298	図版29	縄文時代石器(2)……………321
図版7	4号集石・6号集石……………299	図版30	縄文時代石器(3)……………322
図版8	6号集石……………300	図版31	縄文時代石器(4)……………323
図版9	楕円形・山形押型文土器出土状況…301	図版32	縄文時代石器(5)……………324
図版10	1号土坑・2号土坑……………302	図版33	縄文時代石器(6)……………325
図版11	3号土坑・石斧集積……………303	図版34	縄文時代石器(7)……………326
図版12	石器出土状況(1)……………304	図版35	縄文時代石器(8)……………327
図版13	石器出土状況(2)……………305	図版36	縄文時代石器(9)……………328
図版14	紡錘車出土状況……………306	図版37	縄文時代石器(10)……………329
図版15	道跡……………307	図版38	縄文時代石器(11)……………330
図版16	ナイフ形石器文化期の石器(1)…308	図版39	弥生～古墳時代土器……………331
図版17	ナイフ形石器文化期の石器(2)…309	図版40	古墳時代土器(1)……………332
図版18	ナイフ形石器文化期の石器(3)…310	図版41	古墳時代土器(2)……………333
図版19	細石器文化期の石器ほか……………311	図版42	古墳時代土器(3)……………334
図版20	縄文時代早期土器……………312	図版43	古代の遺物・中世の遺物……………335
図版21	縄文時代早期～前期土器……………313	図版44	中世～近世以降の遺物・痕跡……………336

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局(中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局に改称)は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課(組織改革により平成8年度より文化財課に改称)に照会した。この計画に伴い、文化課が平成3年6月に鹿児島ICと市来IC間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、当事業区内には、27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて、平成8年度から平成12年度にかけて、毎年度、計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお、事業区間内の遺跡の概要については、以下の通りである。

## 第2節 遺跡の概要

- 1 一ノ谷……日置市伊集院町下谷口字一ノ谷の飯車礼台地から西側へ延びた標高90～95mの丘陵端部に位置し、調査面積は1,250㎡である。中世～近世の古道・五輪塔及び染付や近世～近代にかけての掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ピットが青磁・染付・土師器・薩摩焼などと一緒に発見された。
- 2 永迫平……日置市伊集院町下谷口字下永迫の恋之原台地から延びた支脈が盆地状の水田地帯に落ちる直前の標高約150m程の小台地上に立地している。調査面積は14,000㎡で旧石器時代ナイフ形石器文化の2か所のブロックと細石器文化期の細石刃が出土し、縄文時代早期前半の前平式期には9軒の住居跡を始め、3基の連穴土坑と9基の集石、多数の土坑を検出。その他、古墳時代から近世にかけての遺物も出土している。
- 3 下永迫A…日置市伊集院町下谷口字下永迫の標高85～110mのやせ尾根に挟まれた谷間に立地する。調査面積は2,600㎡で、縄文時代後期の指宿式土器と石鏃、古墳時代の成川式土器、古代～中世では土坑・集石が検出され、青磁・白磁が出土した。
- 4 柳原……日置市伊集院町下谷口の標高約90～100mの山間の谷間、傾斜地及び周辺のやや高いテラス状の尾根部に立地する。調査面積は6,000㎡である。縄文時代早期の集石4基や後期の石匙、石鏃、古代の土坑、焼土跡と共に土師器・須恵器が発見された。
- 5 上山路山…日置市伊集院町大田字上山路山の標高約130mのシラス台地上に位置する。舌状台地の端部にあたり、平坦面から続く緩やかな斜面と、谷頭を含んだかなり急な斜面とからなる。調査面積は6,000㎡である。旧石器時代細石器文化の遺物と縄文時代(早期・後期)、弥生～古墳時代の遺物が発見された。主になるのは、縄文時代早期で遺



構は、道跡や集石、遺物は岩本式・前平式・吉田式土器等が出土した。

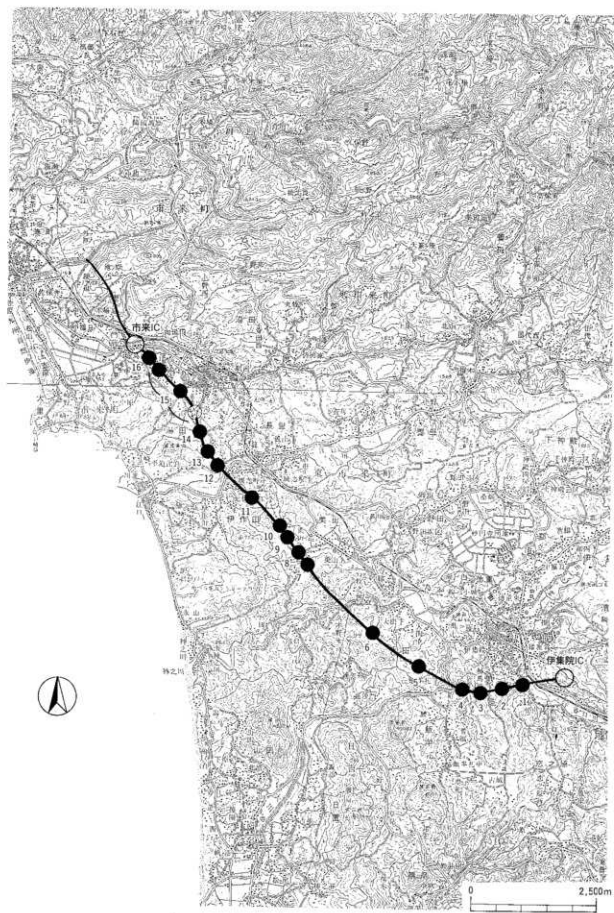
- 6 大田城跡…日置市伊集院町大田字下城山迫の標高約120mの台地上に所在する。調査面積は4,000㎡である。中世山城の可能性を指摘された遺跡であったが、山城の存在を示す遺構は検出されなかった。旧石器時代ナイフ形石器文化、細石器文化の遺物と縄文時代早期の集石、土坑等の遺構と岩本式・前平式土器等の遺物が発見された。
- 7 堂平窯跡…日置市東市来町美山の標高約85～92mの傾斜面にある江戸時代の薩摩焼の窯跡である。調査面積は3,500㎡で、窯、作業場、物原が発見された。窯は長さ約30m、幅1.2m、傾斜角17°の半円筒形をした単室傾斜窯である。陶器（甕・壺・徳利・土瓶・こね鉢・摺鉢・動物形土製品）、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・のし瓦）や窯道具が多量に出土した。
- 8 池之頭……日置市東市来町美山字池之頭にあり、美山池北西部の標高約80～100mのシラス台地の尾根状部分に立地し、調査面積は7,500㎡である。旧石器時代のナイフ・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃、縄文時代早期の集石8基・前平式・吉田式・石坂式土器や中期の春日式・並木式・阿高式土器、晩期の入佐式や黒川式土器が出土した。また古墳時代の成川式土器（甕・壺・高坏等）が多く発見された。
- 9 雪山……日置市東市来町美山字雪山の標高約95mの台地東端に立地する。調査面積は2,700㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石2基と前平式・春日式土器・石鎌・石皿・磨石、古墳時代の成川式土器が出土したが、主体は近世～近代の薩摩焼の遺構・遺物で、灰跡・物原・土坑等が薩摩焼（茶家・土瓶・摺鉢・瓶・碗）、染付（碗・皿）や窯道具と一緒に発見された。
- 10 猿引……日置市東市来町長里字猿引の標高約110～115mの尾根状の台地に立地する。調査面積は800㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群1基と三稜尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石や細石器文化の細石刃核・細石刃と縄文時代前期の曾畑式土器・黒曜石片が出土した。
- 11 犬ヶ原……日置市東市来町伊作田字犬ヶ原の標高約66mの独立丘陵のシラス台地に立地する。調査面積は、2,000㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の浅鉢・深鉢・石斧・石皿・石鎌・石匙、古墳時代の成川式土器（甕・壺・鉢）等が出土したが、主になるのは平安時代で、掘立柱建物跡（4間×4間・総柱）が製鉄に関する遺物（鞆羽口・鉄滓・鉄製品）・土師器・須恵器と共に多く発見された。
- 12 向梅城跡…日置市東市来町伊作田の標高約50mの独立台地上に所在する。調査面積は14,000㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化の剥片尖頭器・ナイフ、縄文時代草創期の隆帯文土器が多量の石鎌と一緒に見つかった。また古墳時代の竪穴住居跡や中世～近世にかけての空堀・帯曲輪・堀切・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・灰跡などが発見され、中世山城の遺構が検出された。
- 13 堂園平……日置市東市来町伊作田の遠見番山から下る斜面の裾部にあり、標高約50mの平坦地に立地する。調査面積は2,000㎡で、旧石器時代のナイフ形石器文化の礫群9基と剥片尖頭器・ナイフ・台形石器と細石器文化の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石4

基・吉田式・塞ノ神式土器や轟式土器等が発見されている。また古代の土師器・須恵器等も出土している。

- 14 今里……日置市東市来町伊作田字今里の標高約65mの台地端の傾斜地に所在する。調査面積は14,000㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群、剥片尖頭器・ナイフ・台形石器や細石器文化の細石刃核・細石刃・調整剥片が出土し、縄文時代の集石や前平式・深浦式・出水式・黒川式土器や石匙などの石器、古墳時代の成川式土器が発見された。
- 15 市ノ原……いちき串木野市市来町大里字ムシナから日置市東市来町湯田字市ノ原に至る標高約50m台地西側に所在する。調査面積は62,000㎡である。遺跡は第1地点から第5地点まであり、旧石器時代ナイフ形石器文化、細石器文化、縄文時代（早期～晩期）、弥生時代の住居跡・壺棺、古墳時代の住居跡、古代～中世、近世の街道跡など多時期に渡り、多種多様な遺構・遺物が発見された。
- 16 上ノ原……いちき串木野市市来町大里の東シナ海を望む標高40mの台地上に立地し、三方は急峻な傾斜面となっている。調査面積は2,000㎡で縄文時代の集石3基、土坑が検出され、塞ノ神式、轟式土器と石斧・石鏃・石匙などが出土した。古墳時代では竪穴住居跡1軒と土坑・成川式土器が、古代～中世は土師器・須恵器・青磁・滑石製石鍋が発見された。

#### 既刊の報告書

- 「一ノ谷遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (31) 2001,3  
「池之頭遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (32) 2002,3  
「今里遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (33) 2003,9  
「市ノ原遺跡 (第1地点)」  
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (49) 2003,3  
「犬ヶ原遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (50) 2003,3  
「上ノ原遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (62) 2003,3  
「下永迫A遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (72) 2004,3  
「永迫平遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (93) 2005,3  
「柳原遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (94) 2005,3  
「大田城跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (95) 2005,3  
「堂園平遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (104) 2006,3  
「市ノ原遺跡 (第5地点)」  
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (105) 2006,3 (本報告書)

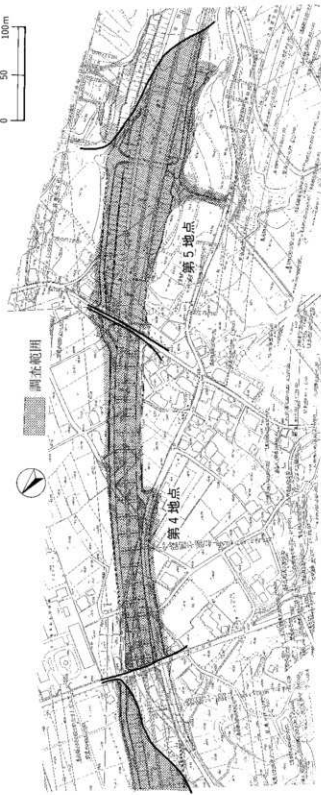
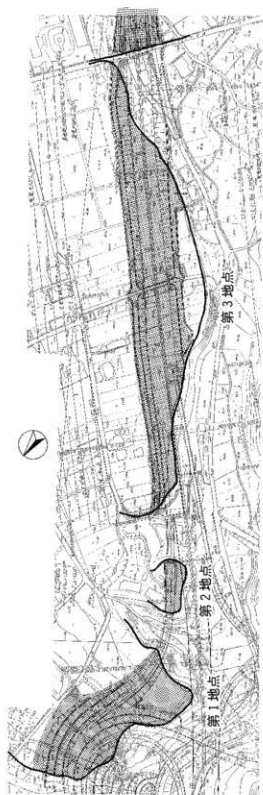


第2図 南九州西回り自動車道関係遺跡位置図

第1表 南九州西回り自動車道調査遺跡一覧

番号	遺跡名	所在	調査期間	調査面積	調査内容	時代	備考
①	一ノ谷	伊集院町下谷口	確認 H8.10 全面 H8.10～11	調査面積 1,250㎡	三田、桑原田	中世 近世	国立科建博物館、工芸 陶磁器 赤土シスター報告第31 2003発行 縄跡 柳井実朝郎「ナガノ」石影石誌 細石刀 柳井実朝郎、東北工芸、前平式工器 形式目録第1巻、東北工芸、前平式工器 土器 佐藤文士郎報告第93 20035発行 土器 佐藤文士郎報告第93 20035発行
②	水辺平	伊集院町下谷口	確認 H8.10～12 全面 H8.12～H10.7	14,000㎡	三田、桑原田 三田、桑原、三田、中原 桑原田、川口、大津	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石器) 縄文(早期、後、晩) 古代～近世	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石器) 縄文(早期、後、晩) 古代～近世
③	水辺A	伊集院町下谷口	確認 H9.10 全面 H10.5～7	2,000㎡	瀬田、三田、元田 之上園、栗林	古代 中世	土器、集石、土師器、煎茶器 青磁 佐藤文士郎報告第72 20043発行 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 七土器、青磁 藤原道隆 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 20055発行
④	柳原	伊集院町下谷口	確認 H9.1 全面 H10.7～10	6,000㎡	瀬田、三田、元田 新宮、中原、川口、大津	古代～中世 中世～近世	土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 七土器、青磁 藤原道隆 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 20055発行
5	上山路田	伊集院町大田	確認 H9.2 全面 H9.5～H10.3	6,000㎡	三田、桑原田 三田、桑原田 寺原、桑原田 成之助、鶴口	旧石器 縄文(早期、後) 縄文(中期、後) 縄文(早期)	銅片、砂岩 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 成之助 柳井実朝郎 銅片、砂岩 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 20055発行
⑥	大田城跡	伊集院町大田	確認 H8.12～H9.3 全面 H9.12～H10.3	4,000㎡	三田、桑原田 成之助、鶴口	旧石器 縄文(早期、後) 縄文(中期、後) 縄文(早期)	銅片、砂岩 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 成之助 柳井実朝郎 銅片、砂岩 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 20055発行
7	堂平宮跡	東市来町美山	確認 H10.5 全面 H10.8～12	3,500㎡	瀬田、柳島、宮田洋一、 成之助、鶴口、大津	江戸	土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 成之助 柳井実朝郎 銅片、砂岩 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 20055発行
⑧	成之助	東市来町美山	確認 H9.8 全面 H12.7～8	7,000㎡	成之助、鶴口、大津 宮田洋一、三田	旧石器(細石器) 縄文(早期、後、晩)	細石刀形、細石刀、磨石方、高田式、石版式 成之助 柳井実朝郎 銅片、砂岩 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 20025発行
⑨	栗山	東市来町美山	確認 H12.5 全面 H12.6～8	2,700㎡	成之助、鶴口、大津 宮田洋一、三田	縄文(古) 縄文(古)	銅片、砂岩 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 成之助 柳井実朝郎 銅片、砂岩 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 20025発行
⑩	船引	東市来町長里	確認 H12.5 全面 H12.5～6	800㎡	宮田洋一、三田	旧石器 縄文(古)	銅片、砂岩 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 成之助 柳井実朝郎 銅片、砂岩 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 20025発行
⑪	大々原	東市来町伊勢田	確認 H9.5、H10.6 全面 H11.12～H12.2	2,000㎡	瀬田、三田 牛ノ瀬、鶴口、大津	旧石器 縄文(古)	銅片、砂岩 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 成之助 柳井実朝郎 銅片、砂岩 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 20035発行
12	向勝城跡	東市来町伊勢田	確認 H8.11～12 全面 H9.4～H10.3 H10.7～8	14,000㎡	瀬田、西園 鶴田、舟 八木津、橋手	旧石器 縄文(早期、中、後) 中世～近世	銅片、砂岩 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 成之助 柳井実朝郎 銅片、砂岩 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 20035発行
⑬	安國中	東市来町伊勢田	確認 H8.11～12 全面 H10.5～11	2,000㎡	瀬田、西園 八木津、橋手	旧石器 縄文(早期、中、後)	銅片、砂岩 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 成之助 柳井実朝郎 銅片、砂岩 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 20066発行
⑭	今里	東市来町伊勢田	確認H8.13 全面H9.4～11	14,000㎡	瀬田、西園 成之助、鶴口	旧石器(細石器) 縄文(早期、中、後、晩)	細石刀形、細石刀、磨石方、高田式、石版式 成之助 柳井実朝郎 銅片、砂岩 土器、陶土、土師器、煎茶器、鉄製品 20035発行
15	井ノ原 早稲良養	東市来町湯田 市来町大津	確認H8.10～12 全面H8.12～H11.7	62,000㎡	瀬田、西園、宮田茂樹 成之助、鶴口、大津 瀬田、柳島、宮田洋一、 八木津、中原、瀬田、 成之助、鶴口、大津、 宮田茂樹、松村、松崎	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石器) 縄文(早期～晩) 縄文(中期～晩) 近代 古代～中世 近世	縄文(ナイフ) 縄文(細石器) 縄文(早期～晩) 縄文(中期～晩) 近代 古代～中世 近世
⑮	上ノ原	市来町大里	確認H8.13 全面H10.7～9	2,000㎡	瀬田、宮田茂樹 之上園、栗林	縄文(早期) 古墳 古代～中世	集石、土器、磨石 形式目録第1巻、東北工芸、前平式工器 土器 佐藤文士郎報告第62 20033発行

○報告書発行済



第3図 市ノ原遺跡調査地点位置図

第 2 表 市ノ原遺跡地点別調査概要一覧

調査区分	調査地区名	調査地区コード	調査地区面積 (㎡)	調査地区形状	調査地区位置	調査地区概要	調査地区説明	調査地区備考
第 1 調査区	市原遺跡	12000	平成 9 年 4 月 22 日 - 3 月 16 日	3160	9 号棟・庫内	調査地区概要 調査地区概要	調査地区概要	調査地区備考
			平成 9 年 4 月 22 日 - 3 月 31 日	3000	6, 4 号棟・6 号棟	調査地区概要	調査地区概要	調査地区備考
第 2 調査区	市原遺跡	4000	平成 9 年 4 月 22 日 - 6 月 23 日	4000	8 号棟・8 号棟	調査地区概要	調査地区概要	調査地区備考
			平成 9 年 4 月 22 日 - 7 月 31 日	2000	調査地区概要	調査地区概要	調査地区備考	
第 3 調査区	市原遺跡	22000	平成 9 年 4 月 22 日 - 7 月 31 日	400	調査地区概要	調査地区概要	調査地区備考	
			平成 9 年 4 月 22 日 - 平成 11 年 3 月 31 日	31700	調査地区概要	調査地区概要	調査地区備考	
第 4 調査区	市原遺跡	12000	平成 9 年 4 月 22 日 - 3 月 31 日	400	調査地区概要	調査地区概要	調査地区備考	
			平成 9 年 4 月 22 日 - 3 月 31 日	12000	調査地区概要	調査地区概要	調査地区備考	
第 5 調査区	市原遺跡	31700	平成 9 年 4 月 22 日 - 平成 10 年 3 月 31 日	7000	調査地区概要	調査地区概要	調査地区備考	
			平成 10 年 5 月 6 日 - 平成 11 年 3 月 31 日	4000	調査地区概要	調査地区概要	調査地区備考	

## 第Ⅱ章 発掘調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経過

建設省（平成13年1月より国土交通省）九州建設局鹿児島国道工事事務所は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会文化課（平成8年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い、文化課が平成3年6月に伊集院ICと市来IC間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、当事業区間内には27か所の遺物散布地及び確認調査が必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、鹿児島国道工事事務所と文化課との協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事の間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・緊急発掘調査が実施されることになった。

これを受けて、平成8年度から平成12年度にかけて、各年度計画的かつ継続して各遺跡の確認調査及び緊急発掘調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることとなった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センター（平成4年4月設置）が実施した。

市ノ原遺跡に関しては、平成8年10月～12月に確認調査を実施し、遺物包含層が確認されたため、平成8年12月～平成9年3月、平成9年4月～平成10年3月、平成10年5月～平成11年3月、平成11年5月～平成11年7月の期間に本調査を実施した。

市ノ原遺跡は総面積が62,000㎡と広く、道路の建設に伴っているため距離が長い。このため、遺跡を5つの地点に区切って、北側（市来町側）から、第1地点・第2地点…と呼称し、第5地点までを設定した。

市ノ原遺跡第5地点は、平成9年4月～平成10年3月、平成10年5月～平成10年8月の期間に本調査が行われた。

### 第2節 調査の組織

〈発掘調査・平成9年度〉

調査主体	鹿児島県教育委員会
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 吉元正幸
調査企画者	〃 次 長 尾崎 進
	〃 主任文化財主事兼調査課長 戸崎勝洋
	〃 調査課長補佐 新東晃一
	〃 主任文化財主事兼第三調査係長 池畑耕一
調査担当者	〃 文化財主事 前野潤一郎
	〃 文化財主事 森田郁郎
	〃 文化財研究員 中原一成
	〃 文化財調査員 松村智之
調査事務担当者	〃 主 査 前屋敷裕徳

	主	査	政倉孝弘
	主	事	追立ひとみ

〈発掘調査・平成10年度〉

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長 吉永和人
調査企画者	〃	次	長 尾崎 進
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎勝洋
	〃	調査課長補佐	新東晃一
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	池畑耕一
調査担当者	〃	文化財主事	宮田洋一
	〃	文化財研究員	寺原 徹
調査事務担当者	〃	主 査	政倉孝弘
	〃	主 事	溜池佳子

〈整理作業・平成15年度〉

作成主体	鹿児島県教育委員会		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長 木原俊孝
作成企画者	〃	次	長 田中文雄
	〃	調査課長	新東晃一
	〃	調査課長補佐	立神次郎
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濱修
作成担当者	〃	文化財研究員	寺原 徹
作成事務担当者	〃	主 査	脇田清幸

〈報告書作成作業・平成17年度〉

作成主体者	鹿児島県教育委員会		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長 上今常雄
作成企画者	〃	次	長 有川昭人
	〃	〃	新東晃一
	〃	調査第二課長	立神次郎
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	牛ノ濱修
作成担当者	〃	主任文化財主事	繁昌正幸
作成事務担当者	〃	主 査	寄井田正秀

報告書作成検討委員会 平成17年12月27日 所長ほか 11名

報告書作成指導委員会 平成17年12月21日 新東次長ほか 4名

企画担当者 宮田栄二・東 和幸

遺物指導 山田昌久（首都大学東京 助教授）



### 第3節 調査の経過（日誌抄）

調査の経過は、日誌抄をもって紹介する。日単位の記録では煩雑になるため、月単位にまとめた。  
〈平成9年度・平成9年4月21日～平成10年3月23日〉

- 4月 プレハブ設置。グリッド設定。レベル基準杭設置。I・II層掘り下げ。
- 5月 D-14～16区、E-13～15区、F-13～15区、G・H-11～15区、I-11～13区、II層掘り下げ。D-14・15区、E-14区、F-13・14区、G～I-11～13区、III層掘り下げ。C・D-13～16区、III層上面で硬化面を検出。D-14区、竪穴状遺構検出。D-13～16区、道路状遺構検出。確認トレンチ（1～6T）設定、掘り下げ。尾崎次長来跡。
- 6月 D-12～14区、E・F-12～15区、G・H-12～14区、III層掘り下げ。D・E-13～16区、道路状遺構検出。E-14区、石斧集積検出。E・F-14・15区、ビット・土坑検出。E-13区、焼土遺構検出。
- 7月 D-12～15区、E・F-12・13区、G-11～16区、H-11・12・14～16区、Q-14～16区、III層掘り下げ。E-14・15区、F-12～16区、下層確認トレンチ設定・掘り下げ、台形石器出土。
- 8月 D-12区、G～J-15～17区、III層掘り下げ。E-14区、F-12～15区、G～I・Q-14区、下層確認トレンチ掘り下げ。堀越正行氏（市川考古博物館）、本田道輝先生・渡辺芳郎先生（鹿児島大学）来跡。
- 9月 D～F-11・12区、G～J-16～18区、III層掘り下げ。F・G-14区、IV層掘り下げ。押型土石器出土。E・F-14・15区、G・H-14区、V層・VI層掘り下げ。G-14・16～18区、H-14区、下層確認トレンチ掘り下げ。河口貞徳先生（鹿児島県考古学会長）、上村俊雄先生（鹿児島大学）現地指導。内村正弘文化財課長、吉元所長来跡。
- 10月 D・E-11・12区、F-11・12・13区、III層掘り下げ。E-13・14区、F-13区、H-17区、IV層掘り下げ。E～G-14・15区、VI・VII層掘り下げ。ナイフ形石器出土。林 謙作先生（北海道大学）、藤尾慎一郎先生（国立歴史民俗博物館）現地指導。栗島義明氏、尾崎次長来跡。
- 11月 E～H-20～23区、I・J-30・31区、III層掘り下げ。I-16・17区、IV層掘り下げ。G-14・15区、H～J-14～17区、VI・VII層掘り下げ。橋 昌信先生（別府大学）、山崎純男氏（福岡市教育委員会）、西久保敏彦氏（市来町教育委員会）来跡。
- 12月 H-13区、VI層掘り下げ。E・F-12～15区、G～I-12～17区、J-17区、VII層掘り下げ。F-13区、G-12・13・16・17区、H-12・13・16・17区、I-16・30～32区、下層確認トレンチ掘り下げ。細石刃等出土（I-31・32区）。渡辺 誠先生（名古屋大学）、高橋 護先生（ノートルダム清心女子大学）、吉崎昌一先生（札幌国際大学）来跡。
- 1月 E-20～22区、F-20～22区、G-20～22・25・26区、H-20～22・25・26区、J-17～19・30・31区、K-17～19区、III層掘り下げ。I-31・32区、V層掘り下げ。G-11区、H-11区、J-32区、VI層掘り下げ。E-12・13区、F-12・13区、G-11～13区、H-11～13区、I-12・13・17・31・32区、J-17・32区、VII層掘り下げ。G-11区、H-11・20～22区、I-17・18・20～22・31・32区、J-17・18・20～22区、下層確認トレンチ掘り下げ。武末純一先生（福岡大学）、本田道輝先生（鹿児島大学）、杉山真二氏・堀口氏（古環境研究所）、佐々木氏（読売新聞）、吉元所長、尾崎次長来跡。

- 2月 C-12～15区, D-12～15区, E-20～22区, F-20～22区, G-20～22・25・26区, III層掘り下げ。E-11・12区, F-11・12区, G-11・12区, H-11・12区, IV層掘り下げ。E-11～13区, F-11～13区, G-11～13区, H-11～13区, J-32区, VI層掘り下げ。J-32区, VII層掘り下げ。G-22区, H-20～22区, J-20～22区, 下層確認トレンチ掘り下げ。梅北浩一氏(伊集院町教育委員会), 内村正弘文化財課長来跡。
- 3月 C-11～16区, D-11～16区, E-20・21区, F-20・21区, G-20・21・25・26区, III層掘り下げ。E-10～13区, F-10～13区, G-10～13区, H-10～13区, VI層掘り下げ。23日で調査終了。河口貞徳先生(鹿児島県考古学会長), 上村俊雄先生(鹿児島大学)現地指導。

〈平成10年度・平成10年5月6日～8月19日〉

- 5月 プレハブ設置。C～F-17～22区, IIIa層上面精査, 古道跡検出, 掘り下げ。C-19区, D-20区, 集石検出。C～H-11区, VIb層掘り下げ。C～F-17～19区, 下層(旧石器)確認トレンチ設定, 掘り下げ。吉永所長, 川添俊行氏(宮之城町教育委員会), 古閑・椎葉氏(埋文サポート), 尾崎次長来跡。
- 6月 G-10区, 下層(旧石器)確認トレンチ設定, 掘り下げ。細石器文化期の包含層を確認, 拡張, VI層掘り下げ。D-11区, 下層(旧石器)確認トレンチ設定, 掘り下げ。遺物が出土せず。C～F-17～19区, 下層(旧石器)確認トレンチ掘り下げ。E-18区, ナイフ形石器文化期の包含層(VII層)を確認, 拡張(E-18～20区)。D-19区, 細石器文化期の包含層を確認, 拡張。E-19～22区, F-21～23区, G-19・20区, III・IV層掘り下げ。E-19区, 縄文早期の集石検出。E-19～22区, F-21～23区, 下層確認トレンチ設定, 掘り下げ。尾崎次長及び当センター職員の内田, 溜池, 桑波田, 横手来跡。
- 7月 E-19～22区, F-18～23区, 下層(旧石器)確認トレンチ掘り下げ。F-18～20区, ナイフ形石器文化期の包含層(VII層)を確認, 拡張。F-20区, IV層掘り下げ。G・H・I-18区, 下層確認トレンチ設定, 掘り下げ。IIIb層から遺物出土, 拡張。H・I-18・19区, III層掘り下げ。G・H・I-20～24区, V層までを重機で剥ぎ取る。G-20～22区, H・I-19～22区下層確認トレンチ設定, 掘り下げ。H・I-21・22区, 細石器文化期の包含層(VI層)を確認, 拡張。堂平窯跡の草払いに宮田ほか6・7名出かける。
- 8月 H・I-21・22区, VII層掘り下げ, 遺物出土。VI層出土遺物の一部をカラスが原位置から動かしてしまい, 一括で取り上げざるを得なかった。G・H・I-22～25区, III層掘り下げ。H-23・24区, I-24・25区, 下層確認トレンチ設定, 掘り下げ。池之頭遺跡のプレハブ予定地の草刈りを行う。19日で調査終了。

〈平成15年度・整理作業〉

整理作業を4月から9月まで, 県立埋蔵文化財センターで行った。

- 4月 整理作業開始。図面及び遺物の確認, 点検。遺物を土器と石器に大きく分け, 土器の接合を開始する。
- 5月 土器接合。実測委託用石器の選別。

- 6月 土器接合。石膏による補強。
- 7月 土器接合。完形に近いものを中心に実測するものを選別する。実測開始。
- 8月 土器実測。
- 9月 土器実測。本年度の整理作業を終了するため、遺物及び実測図等を仮収納する。

〈平成17年度・報告書作成作業〉

整理作業及び報告書作成作業を平成17年4月から平成18年3月にかけて、県立埋蔵文化財センターで行った。

- 4月 整理作業開始。実測図及び遺物の点検、確認。土器の接合。遺物台帳によりデータをパソコンに入力する。地形図等の下図作成。実測用遺物選別。石器（主に打製石斧）の接合を試みる。
- 5月 土器の石膏による補強。データ入力。ドット図の整理。土器実測。
- 6月 ドット入力。土器実測。
- 7月 土器実測。
- 8月 土器実測。土器（主として縄文土器及び調整痕の明瞭なもの、土師器・須恵器など）の拓本とりを開始。実測用土器及び石器の選別。
- 9月 土器拓本。土層及びコンターの縮小コピー及び貼り合わせと下図作成、鉛筆トレース。道跡のコピー。遺構のトレース。ドット図の点検。
- 10月 土器拓本。土器の実測及び点検、修正。遺構のトレース。仮レイアウト。文章作成を開始する。石器のレイアウト。
- 11月 遺構及び土器のトレース。遺構・遺物の仮レイアウト及びレイアウト。遺物写真撮影。文章作成。
- 12月 遺構・遺物のレイアウト。文章作成及び修正。入札のための起案。
- 1月 文章確認、修正。入札。校正。一般遺物の収納。展示用遺物の復元。
- 2月 校正。現場図面及び遺物の実測図の整理、仮収納。展示用遺物の復元。
- 3月 校正。報告書掲載遺物の整理、仮収納。報告書納入。これにより、市ノ原遺跡(第5地点)の報告書作成作業の全てを終了する。

なお、報告書作成にあたっては、企画担当者のほか下記の方に指導・助言をいただいた。  
前迫亮一・森田郁朗・中原一成・上床 真・相美伊久雄・元田順子・内村光伸・堂達秀人

## 第Ⅲ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

市ノ原遺跡第5地点の所在する日置市東市来町は、薩摩半島の基部、ほぼ中央部の西側に位置している。西は東シナ海に面しており、約6kmの海岸線は、総延長約30kmの吹上砂丘の一部となっている。町の北西部や北部には重平山（標高523m）・中岳・矢岳など山地が多い。これらの山々に源を発し、町のほぼ中央を流れる大里川、中央南部を流れる江口川と、南部の同市伊集院町境を流れる神之川が西流して東シナ海に流れ込んでいる。これらの河川が中央部や南部の火山灰台地を削り、段丘化した沖積平野を形成している。

本遺跡は、大里川と江口川に挟まれた標高60mほどの舌状のシラス台地基部に位置しており、東シナ海まで直線距離にして約2kmである。また、温泉の多い鹿児島県であるが、台地の東麓には県内有数の温泉街である湯之元温泉がある。台地南西には、標高180mの遠見番山があり、江戸時代にはその頂上に海上を監視する番小屋が置かれていた。

### 第2節 歴史的環境

本遺跡の所在する日置市東市来町と隣町のいちき串木野市市来町は、古代においては薩摩国日置郡に属していたと考えられているが、市来という地名については、「和名抄」などには見当たらないという。『東市来町郷土誌』によると宝亀年間（770～780）に大藏政房が市来院郡司に任ぜられて市来大里の鍋ヶ城に拠ったことから市来氏を称したとある。大藏姓市来氏は以後4代続き、建久年間（1190～1199）には、政房の孫の宗房が院司を勤めたとあるが、これについては政房から約400年後に孫が存在したとは考えられず、信憑性には疑問が残る。

中世には、惟宗姓となった市来氏は南朝に属し、北朝方の島津氏と対立しているが、1341年に本城であった鶴丸城が落城し、室町期に再び島津氏に対抗して鶴丸城に拠った市来久家も1462年に滅亡している。

近世には、参勤交代に利用された九州街道が本町内を通っており、いくつかの脇往還も存在していた。本遺跡の北に隣接する市ノ原遺跡第4地点では道跡が検出されており、関連性が指摘されている。

本町では、南九州西回り自動車道関連の調査が開始されるまでは、発掘調査が行われた遺跡は数が少ない。ここでは、調査・報告がなされている遺跡を中心に、見ていきたい。

#### 上二月田遺跡

本遺跡の東約6kmに位置する。1987年に発掘調査が行われた。縄文時代後期と考えられている住居跡が2基検出されている。遺物には、平椀式・塞ノ神式・深浦式・西平式・黒川式・夜臼式・高橋I式土器などがある。

#### 仮牧段遺跡

本遺跡の東約6kmに位置する。1990年に県営圃場整備事業に伴い調査が行われた。古墳時代の溝

が2条検出されている。縄文時代早期の押型文土器・円筒形条痕文土器や、古墳時代の成川式土器が出土している。

#### 陣ヶ原遺跡

本遺跡の南東約5kmに位置する。1991年に広域営農団地農道整備事業（日置2地区）に伴い調査が行われた。古墳・中世・近世の遺跡であるが、確認調査では時期不詳の土坑2基が検出されたのみであった。

#### 桜原遺跡

本遺跡の南東約5kmに位置する。1991年、陣ヶ原遺跡の調査中に広域営農団地農道整備事業（日置2地区）区域内で発見され、調査が行われた。縄文時代晩期と考えられている住居跡が1基検出されており、黒川式土器・条痕文土器・刻目突帯文土器が出土している。古墳時代の成川式土器も出土している。

#### 前畑遺跡

本遺跡の南約2kmに位置する。1994年に県営中山間地域農村活性化総合整備事業に伴い確認調査が行われた。遺跡付近は上部から長期にわたり流れ込んできたシラス混じりの台地で、同一包含層中から縄文時代晩期から中世にかけての遺物が出土した。

#### 後庵堀遺跡

本遺跡の南約2kmに位置する。1994年に県営中山間地域農村活性化総合整備事業に伴い確認調査が行われた。前畑遺跡とは異なり、土層の堆積状態は良好であるが、成川式土器と須恵器が同一層内から出土しており、成川式土器の下限を考える資料になるとされている。

#### 伊作田城跡

本遺跡の南約1.5kmに位置する。伊作田城跡の推定地にはいくつか説があるが、平成3年度に鹿児島県教育委員会文化課によって行われた、北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書では、本遺跡を伊作田城跡としており、同年9月に東市来町教育委員会から依頼を受け、分布調査を実施した五味克夫氏・三木 靖氏と県文化課はいずれも小字浜ノ丸から府城に通じる部分の全てが、非常によく保存された山城で、南北朝時代のものであるとしている。以上2回の分布調査の結果を基に伊作田城跡の推定地として1994年に県営中山間地域農村活性化総合整備事業に伴い確認調査が行われた。帯曲輪の構築が確認されたほか、古墳時代の遺跡の存在が確認された。

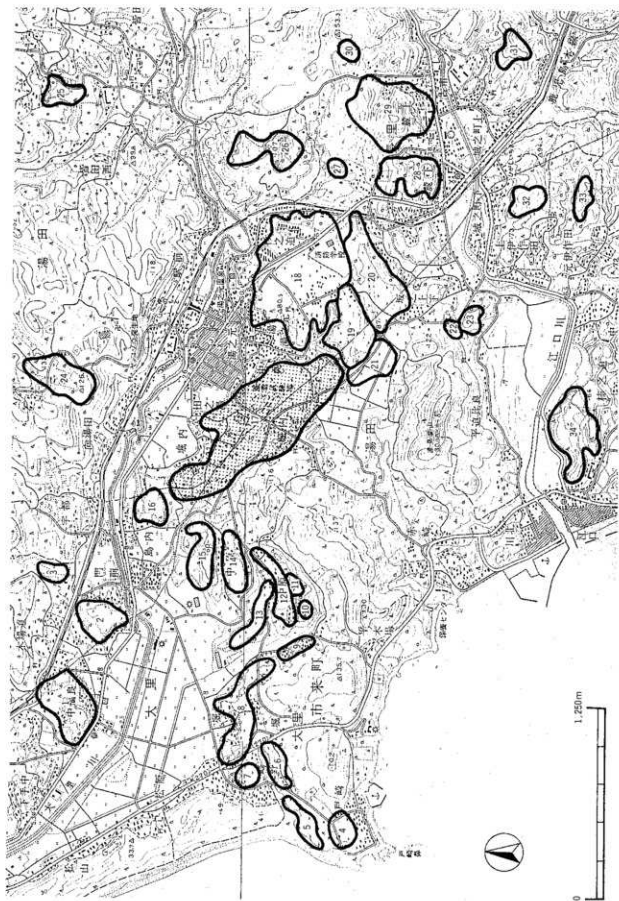
#### 池之頭遺跡

本遺跡の南東約4kmに位置する。旧石器時代から、中世までの複合遺跡であるが、主体をなす時代は古墳時代である。狭い尾根上に成川式土器が出土しており、住居跡などの遺構が見られず、手捏ね土器の出土が多いことから、祭祀場などの可能性が指摘されている。

※日置市東市米町内で南九州西回り自動車道に関連して調査が行われた遺跡のうち、報告書が刊行された遺跡は、本遺跡以外では池之頭遺跡と今里遺跡、犬ヶ原遺跡・猿引遺跡及び雪山遺跡がある。詳細についてはそれぞれの遺跡の報告書をご覧ください。なお、伊集院IC～市米IC間で分布調査によって確認された27遺跡の概要については、各遺跡の報告書に掲載してあるので参照されたい。

#### 参考文献

- 東市米町教育委員会「東市米町郷土誌」1988
- 東市米町教育委員会「上二月田遺跡」  
東市米町埋蔵文化財発掘調査報告書1 1988
- 東市米町教育委員会「仮牧段遺跡」  
東市米町埋蔵文化財発掘調査報告書2 1991
- 東市米町教育委員会「陣ヶ原遺跡・桜原遺跡」  
東市米町埋蔵文化財発掘調査報告書3 1992
- 東市米町教育委員会「前畑遺跡・後庵堀遺跡・伊作田城跡」  
東市米町埋蔵文化財発掘調査報告書4 1994
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター「池之頭遺跡」  
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(32) 2002
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター「今里遺跡」  
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(33) 2002
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター「猿引遺跡・雪山遺跡」  
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(53) 2003
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター「市ノ原遺跡(第1地点)」  
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(49) 2003
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター「犬ヶ原遺跡」  
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(50) 2003



第4図 周辺遺跡

第3表 周辺遺跡(1)

番号	遺跡名	遺跡番号	地形	所在地	時代	遺構・遺物・備考	文献
1	上城詰城跡	28-3	台地	いちき串木野市市来町大里上城詰城ほか	旧石器・縄文・弥生・中世	台形石器・縄文土器・白磁・青磁	⑥
2	鍋ヶ城跡	28-7	台地	いちき串木野市市来町大里木場迫	縄文(草・早・晩)平安(9C後半)中世(12~16C)	白鳥平式・須恵器・白磁・青磁	⑦
3	本寺屋敷	28-51	段丘	いちき串木野市市来町大里本寺屋敷	古墳・中世・近世	成川式土器・土師器・五輪塔	
4	戸崎原	28-46	段丘	いちき串木野市市来町大里戸崎原ほか	旧石器・縄文・古墳・中世	細石刃莖・土器・成川式土器・土師器・土鍾	②
5	戸崎平	28-45	丘陵	いちき串木野市市来町大里戸崎平ほか	中世	土師器・土鍾	
6	深田前迫	28-44	丘陵	いちき串木野市市来町大里深田前迫ほか	古墳・中・近世	成川式土器・土師器・陶器・磁器	
7	崎野堀	28-43	丘陵	いちき串木野市市来町大里野崎堀ほか	弥生・古墳中・近世	土器・土師器・白磁・染付・陶器	
8	田中堀	28-42	段丘	いちき串木野市市来町大里田中堀ほか	縄文～近世	土器・土師器・陶器	
9	上平山	28-41	段丘	いちき串木野市市来町大里上平山	弥生・古墳	土器	
10	下諏訪	28-11	台地	いちき串木野市市来町大里中原	縄文	土器片・打製石斧	①
11	中諏訪	28-12	台地	いちき串木野市市来町大里中原	古墳	土師器・須恵器	①
12	西ノ鼻	28-39	台地	いちき串木野市市来町大里西ノ鼻ほか	古墳中・近世	土器・土師器・陶器	
13	半崎堀	28-40	台地	いちき串木野市市来町大里半崎堀	弥生～近世	土器・土師器・陶器	
14	東園	28-38	台地	いちき串木野市市来町大里東園ほか	古墳中・近世	土器・土師器・陶器	
15	妙見前	28-37	台地	いちき串木野市市来町大里妙見前ほか	古墳中・近世	土器・青磁・陶器	
16	上ノ原	28-13	台地	いちき串木野市市来町大里島内	縄文・古墳・古代・中世	竈/神式・轟式・磨製石斧・竪穴住居跡・土師器・須恵器・青磁・滑石製石鏡	①
17	市ノ原 (本報告書)	29-60	台地	いちき串木野市市来町大里市ノ原前～日置市東市来町湯田上市ノ原ほか	旧石器・縄文・弥生・古墳古代～中世・近世	ナイフ形石器・台形石器・細石刃莖・集石・土器・石器・竪穴住居跡・埋壘・土坑・成川式土器・焼土・溝・須恵器・街道跡・掘立柱建物跡・鍛冶炉	
18	諏訪原	29-61	台地	日置市東市来町湯田諏訪原ほか	古墳・中近世	土師器・陶器・染付	
19	森園平	29-62	丘陵	日置市東市来町長里森園平ほか	弥生・古墳	弥生土器・土師器・須恵器	
20	浦田	29-63	台地	日置市東市来町長里浦田ほか	古墳・中世	土師器	
21	今里	29-67	台地	日置市東市来町伊作田今里ほか	旧石器・縄文・古墳・古代～近世	尖頭器・ナイフ形石器・細石刃莖・集石・前平式・深浦式・出水式・石匙・成川式土器・土師器・須恵器・青磁・陶器	③



第4表 周辺遺跡(2)

番号	遺跡名	遺跡番号	地形	所在地	時代	遺構・遺物・備考	文献
22	堂園平	29-90	丘陵	日置市東市来町伊作田堂園平	旧石器・縄文・古代	礫群・ナイフ形石器・尖頭器・細石刃核・葉石・吉田式・塞ノ神式・轟式・黒川式・土坑・土師器・須恵器	②
23	向梅城跡	29-17	台地	日置市東市来町伊作田字上梅	旧石器・縄文・古墳・中世・近世	剥片尖頭器・ナイフ形石器・剥片・隆帯文・石鎌・前平式・米来式・堅穴住居跡・成川式空堀・曲輪・堅穴状遺構・炉跡・青磁	
24	市右衛門堀	29-59	丘陵	日置市東市来町湯田市右衛門堀ほか	弥生・古墳・中世	土器・土師器・染付・磁器	②
25	勝橋	29-55	丘陵	日置市東市来町湯田勝橋	弥生・古墳	土器	②
26	古城跡	29-13	台地	日置市東市来町長里字古城原	縄文(晩)・弥生・古墳・南北朝	土器・弥生土器・成川式土器・石罫	④
27	番屋城跡	29-10	丘陵	日置市東市来町長里字番屋城	南北朝～室町	消滅	
28	平之城跡	29-11	台地	日置市東市来町長里字平之城	南北朝～室町・近世	空堀・古墓塔・製鉄炉・炉壁・鉄滓・流動滓	④
29	鶴丸城跡	29-5	丘陵	日置市東市来町長里鶴丸小学校一帯	平安・南北朝～室町	空堀・土罫・礎石	④
30	得仏城跡	29-15	丘陵	日置市東市来町長里字得仏城	中世		④
31	総陣之尾	29-14	台地	日置市東市来町長里字陣之尾	中世		
32	大ヶ原	29-65	丘陵	日置市東市来町伊作田大ヶ原	旧石器・縄文・古代～中世	細石刃核・細石刃・黒川式・石鎌・掘立柱建物跡・鍛冶炉・土師器・硫黄	⑤
33	金木山	29-66	丘陵	日置市東市来町伊作田金木山	古墳・近世	土器・陶器	
34	伊作田城跡	29-12	台地	日置市東市来町伊作田字浜之丸	中世(南北朝～室町)	伊崎田道材居城・帯曲輪・曲輪	④

## 引用文献

- ①市来町「市来町郷土誌」1982
- ②鹿児島県立埋蔵文化財センター「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書(Ⅰ)」  
〔鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書〕61) 1992
- ③鹿児島県立埋蔵文化財センター「今里遺跡」  
〔鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書〕33) 2002
- ④鹿児島県教育委員会「鹿児島県の中世城館跡」  
〔鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書〕40) 1987
- ⑤鹿児島県立埋蔵文化財センター「大ヶ原遺跡」  
〔鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書〕50) 2003
- ⑥市来町教育委員会「上城詰城跡」  
〔市来町埋蔵文化財発掘調査報告書〕7) 2000
- ⑦市来町教育委員会「鍋ヶ城跡」  
〔市来町埋蔵文化財発掘調査報告書〕4) 1997

## 第Ⅳ章 発掘調査の成果

### 第1節 発掘調査の方法

平成8年10月から12月にかけて確認調査を行った。確認調査は地形を考慮して合計8か所にトレンチを設定する場所を定めて周辺の伐採作業を行った後に、2m×5mを基本としてトレンチを設定し、表土から人力によって掘り下げを行った。

この調査により、小高く残っていた北側の部分は表土の下からすぐにシラスが出て来たことで、既に遺物包含層は削平を受けたか、層自体が堆積しなかったかによって残存していないことが判明したため、調査の対象地域から除外することとした。それ以外の相対的に低い地域からは、全てのトレンチから遺物が出土したことから、遺跡の残存する地域として発掘調査の対象とすることとした。

確認調査の後、市ノ原遺跡の本調査は第4地点の南側から北側に向けて行うことになり、第5地点は第4地点及び第3地点の調査から若干遅れて、平成9年4月から本調査を開始した。

調査は、調査対象地域全体の伐採作業から開始し、その後、グリッドを設定した。北側の市ノ原遺跡第4地点から第5地点にかけては道路の線形が西側に大きくカーブしていたため、第4地点で設定したグリッドをそのまま延長して使用することはできなかった。そのため、第5地点の北側の端で、道路の中心線と直交する線を南北方向の起点の線とし、南側に向けて10m毎に区画を行い、1区から順に設定した。東西方向は、道路の中心線と南北方向の交点を起点として東及び西側に向けて10m毎に区画を行った。東の端をAとし、順にB、C、…として進入路の端のPまでを設定した。それぞれの区画は、D-14区などと呼称することとした。

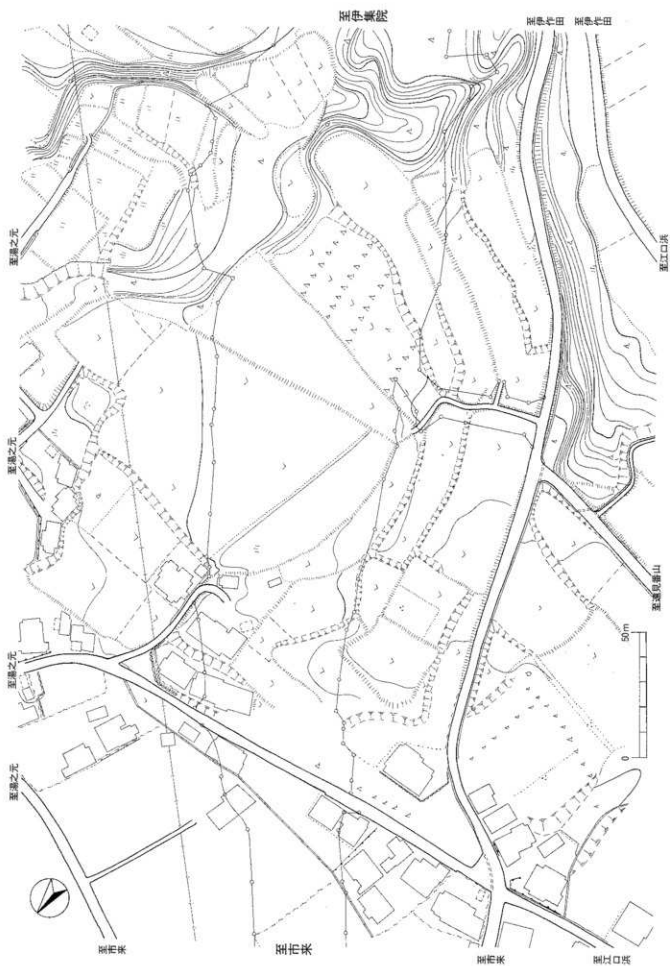
本調査は、西側からの進入路を中心としてその北側から開始した。北側から順に重機によって表土剥ぎを行い、II層以下を山鉾によって掘り下げて行った。この地域は、II層の残存はほとんど見られなかったことから、実際にはIIIa層以下の掘り下げからが調査の中心となった。包含層の掘り下げによってまとまった遺物の出土が見られた場合には、道具を移植ごとに代えて慎重に掘り下げて行った。

また、各遺物包含層の掘り下げが終了した時点で清掃を行い、遺構があるかどうかの確認を行った。それによって遺構が確認された場合、検出時の写真撮影を行い、半裁するなどにより調査を行い、埋土の状況を確認するとともに断面の写真を撮影した後、完掘して写真撮影を行い、実測するという手順で調査を行った。

IV層の調査が終わった時点でトレンチにより下層の確認調査を行い、遺物（遺構）が確認された段階で遺物（遺構）の分布する範囲を広めに重機でVIa層まで除去し、2m方眼の小グリッドを組んで掘り下げを行った。遺物の集中する範囲をブロックと認定し、図面や写真に記録を行った。

さらにVIIb層の掘り下げを行った後、VIIa層は全域的に掘り下げ、遺物の集中区をブロックとした。部分的に、VIIb層も掘り下げ、遺物・遺構の残存が見られないことから、本地域の調査終了とした。

平成10年度は南側にかけて面的に調査を行っていき、遺物・遺構が確認されないことを見極め、市ノ原遺跡第5地点全体の調査終了とした。



第5図 市ノ原遺跡(第5地点)周辺地形図



第6図 調査地点グリッド図



## 第2節 遺跡の層序

市ノ原遺跡（第5地点）は、調査実施当時から起伏が大きく、隣接する第4地点及びそれに続く第3地点がほぼ平坦であることとは対照的である。起伏に富んでいるということは、ある意味で旧地形が残存しているということであれば、地層の残存状態が良好であると考えられたものの、実際に調査に入ってみると規模に大小の差異はあるが欠失している層も見られた。以下、基本的な層序について概略を述べる。

I 層 表土、耕作土。

II 層 灰黒色土。古代から中世の遺物包含層。

本遺跡では、土師器、須恵器、陶器、磁器、染付、籬の羽口などが出土した。

IIIa層 暗茶褐色土。縄文時代晩期から古墳時代の遺物包含層。

本遺跡では、刻目突帯文土器、打製・磨製石斧、石皿、磨石、打製・磨製石鏃、成川式土器などが出土した。

IIIb層 茶褐色土。縄文時代前期から後期の遺物包含層。本遺跡では、市来式・出水式土器を中心として、打製石斧、磨石、敲石、石匙などが出土した。

IIIc層 黄橙色火山灰質土。6,400年前の鬼界カルデラ噴出起源の一次降下火山灰。通称は、アカホヤ。

IV 層 青灰色土。縄文時代早期の遺物包含層。本遺跡では、前平式・押型文土器、磨製石斧、敲石などが出土した。

Va層 黒色土。

Vb層 黄色火山灰質土。11,500年前の桜島噴出起源の降下火山灰。通称は薩摩。

VIa層 黒色粘質土。

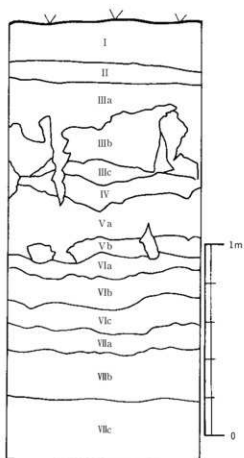
VIIb層 黒褐色強粘質土。旧石器時代細石器文化期の遺物包含層。本遺跡では、細石刃、細石刃核、剥片、破片が出土した。

VIc層 暗褐色粘質土。

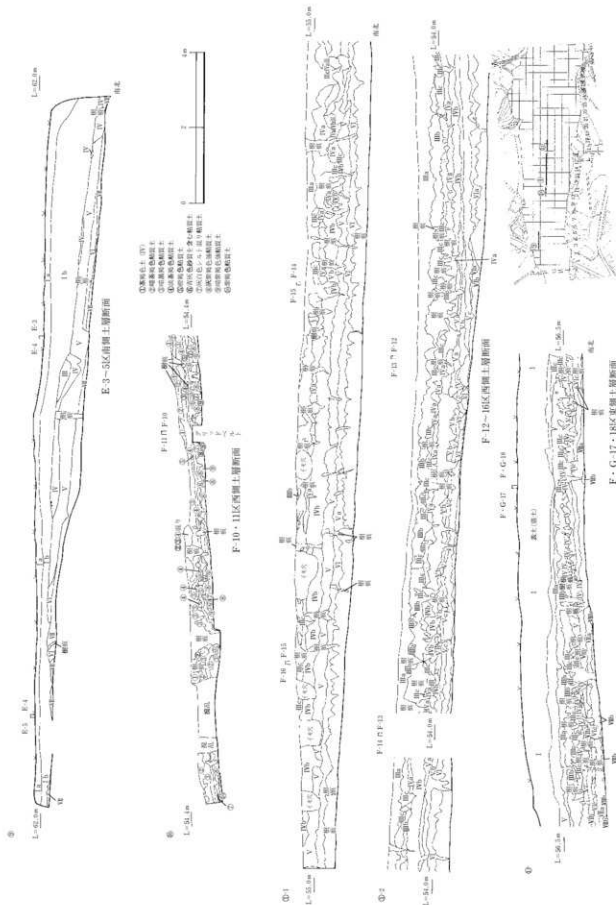
VIIa層 暗黄褐色火山灰質土。旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物包含層。本遺跡では、ナイフ形石器、三稜尖頭器、台形石器、スクレイパー、剥片などが出土した。

VIIIb層 暗黄白色土。

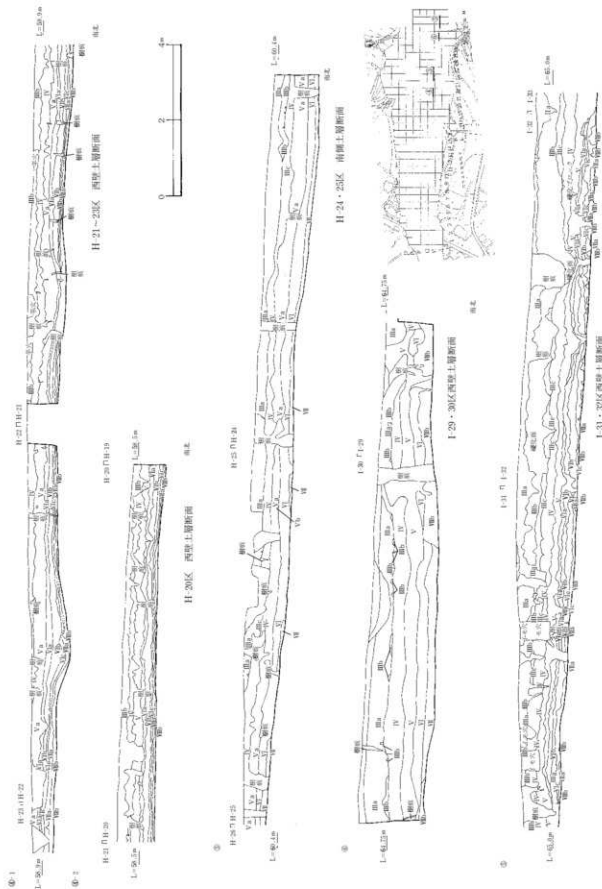
VIIc層 黄白色火山灰質土。24,500年前の始良カルデラ噴出起源の火山灰。AT(火山灰)。シラス。



第8図 土層柱状図

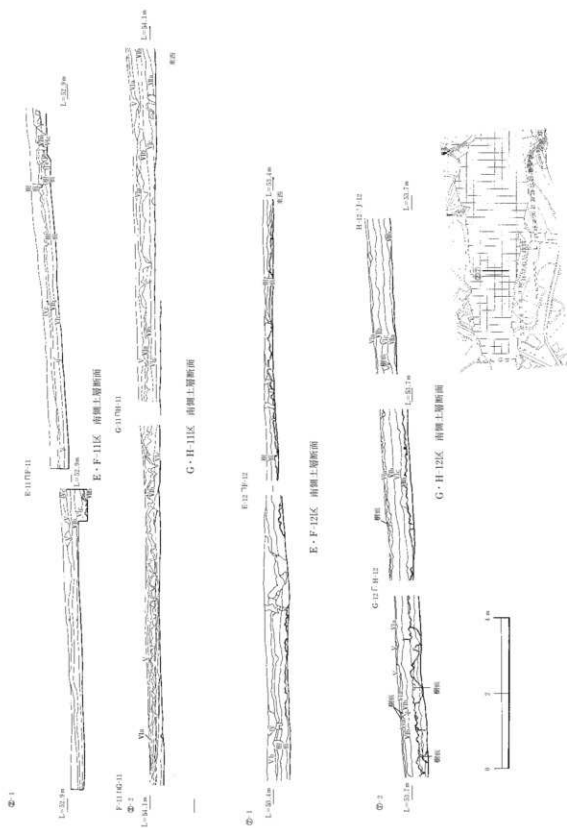


第9圖 土層図(1)

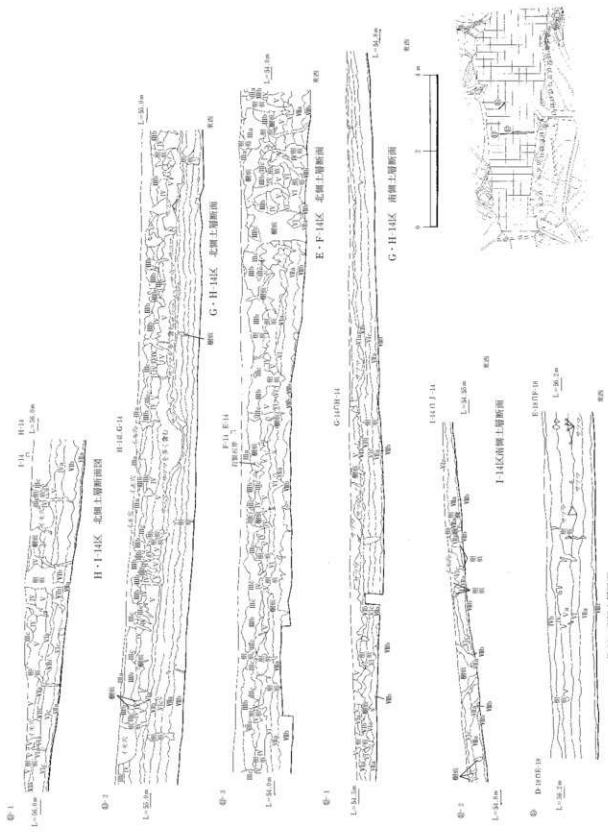


第10図 土層図(2)



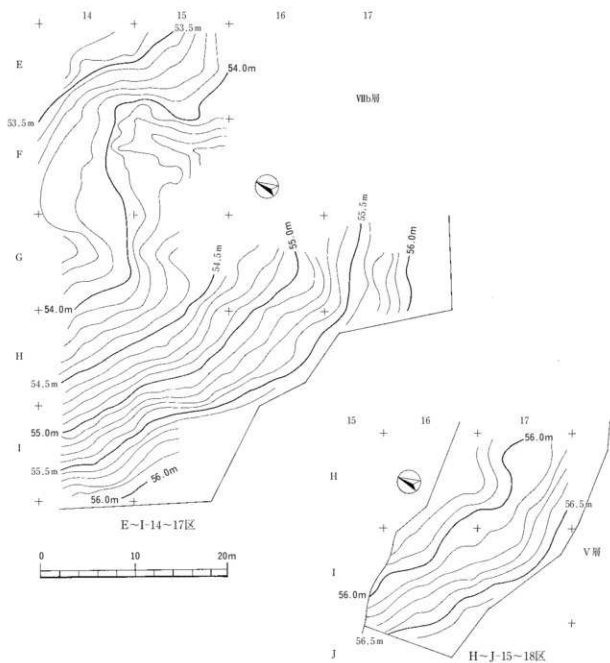


第111圖 土層圖 (3)

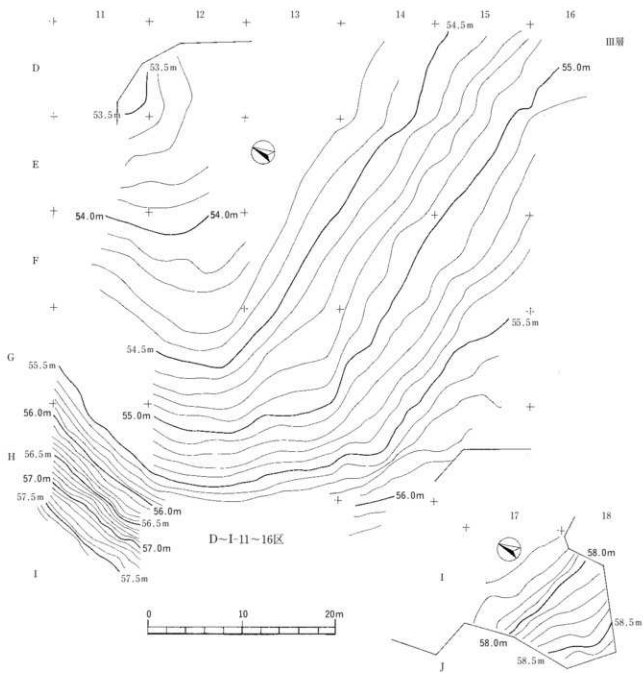


第12図 土層図 (4)

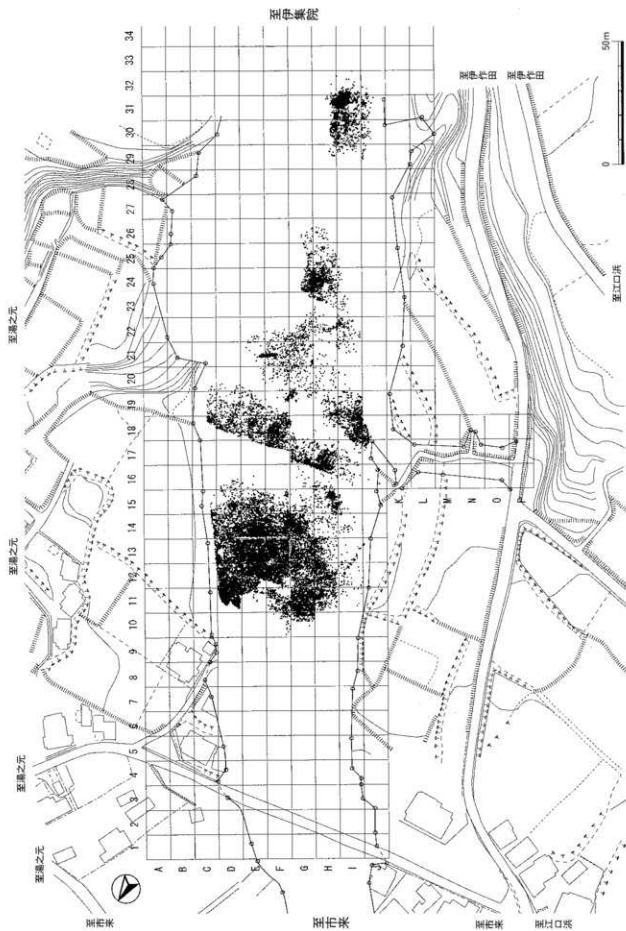




第14図 V層上面コンター図



第15図 III層上面コンター図



第16圖 遺物出土全体圖

### 第3節 発掘調査の成果の概要

確認調査で遺跡の残存範囲が判明した後は、基本的に北側から本調査を開始し、次第に南側へと移っていき、層位的には上層から順次調査を行っていった。以下、成果の概要を時代順に述べる。

旧石器時代ナイフ形石器文化期は、VII層からVI層下部にかけてのブロックが確認された。調査時は1つのブロックとして扱ったが、整理作業を行う段階で分布のまとまりや石材等の種類等から4つのブロックと認定した。出土遺物としては、ナイフ形石器、台形石器、三稜尖頭器、石核がある。

旧石器時代細石器文化期は、VI層からブロックが確認された。1つのブロックとして認定した。出土遺物には、細石刃、細石刃核、剥片、スクレイパー、碎片などがある。

縄文時代早期は、V層及びIV層から、集石6基、落し穴3基が確認され、出土遺物には1～7類土器、磨石、石皿などがある。

前期は、IIIb層から9・10類土器が出土し、中期はIIIb層から11～16類土器が出土、後期はIIIb層から17～24類土器が出土している。

晩期は、IIIb・IIIa層から、土坑3基、打製石斧の集積遺構が1か所確認されたほか、25～37類土器、磨製石斧や多量の打製石斧、石鏃、磨石・敲石、石皿、土製の紡錘車、三角埴形土製品などが出土した。

弥生時代前期は、IIIa層から刻目突帯文土器や磨製の石鏃が出土している。

古墳時代は、IIIa層から成川式土器が大量に出土した。

古代は、II層から土師器・須恵器が出土している。

中世は、I、II層から土師器、陶器、磁器、青磁、染付、滑石製石鍋、土釜などが出土した。

近世は、I、II層から陶器、磁器が出土している。

そのほか、道跡も多く確認された。上下の位置があることから、時期には差異があると考えられるほか、その存続期間についても現在に極めて近い時期まで使用されたことも考えられる。中世～近世・近代を中心とすると思われるが、古代に遡る可能性も考えられる。

## 第4節 旧石器時代の調査

### 1 ナイフ形石器文化期

VIIa層（暗黄褐色火山灰質土）を中心に、VIIb（黄白色火山灰質土）・VIIc層（暗黄色砂質土）およびVIIb層（黒褐色強粘質土）・VIIc層（暗褐色粘質土）から当該期の遺物が出土している。VI層は基本的に細石器文化期の遺物包含層であるが、整理作業の過程で遺物の平面分布や垂直分布、片準石器・剥片・碎片の出土状況、さらに石材別の分布域などを照合し検討した。その結果、F～H-12～G-1-17区にかけてナイフ形石器文化期該当の遺物がVI層からも出土しており、またこの範囲からの細石器文化期の遺物出土は皆無であることが判明した。ナイフ形石器文化期の遺物がVII層を主体とするものの、VI層の下部まで包含されていたことが把握された。このため、最終的に当該期のブロック（遺物集中箇所、以下ブロック）は4か所として判断している（第17図）。VI層から出土した原因として遺物の上下移動など二次的な要因が考えられるほか、出土遺物のうち一部の石器群の出土層がVI層下部であった可能性も否定できないが明確ではない。なお、細石器文化期の遺物分布域はE～H-10～12区にかけての範囲であり、ナイフ形石器文化期の分布域とは明確に区別される（第17図・第40図）。なお、各ブロックの周辺にも散在して若干の遺物分布が認められる状況であるが、石材や接合状況を検討した上で可能な限りブロック範囲の認定を行っている。

石材別の利用状況は、各ブロックともOb 1の出土が最も多いが、各ブロックごとの石材構成には若干の差異が認められる。ブロック1はOb 1を中心にAn 1やSh 2など多様な石材を利用しているが、ブロック2・3はOb 1とSh 1、ブロック4はOb 1が主体となる傾向が窺える（第18・19図）。ブロック2はOb 2、ブロック3はSh 1の分布域によってさらに細分できる可能性も残る。ナイフ形石器文化期における有効資料点数は計993点で、石器の器種別点数は、ナイフ形石器10点（6点図化）、台形石器13点（10点図化）、三稜尖頭器（角錐状石器、以下三稜尖頭器）3点（全点図化）、スクレイパー8点（4点図化）、加工痕のある石器15点（12点図化）、使用痕のある剥片14点（1点図化）、石核12点（4点図化）、敲石2点（全点図化）となっている（第21図）。以下、ブロックごとの出土資料について説明する。なお、個体ごとの石材、計測値については観察表に掲載している（第24・25表）。

#### （1）ブロック1出土石器（第22図 1～9）

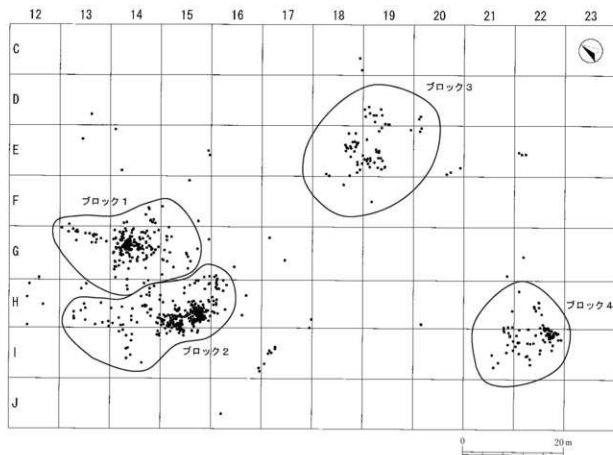
ブロック1はG-14区を中心に分布し、台形石器、加工痕のある石器、石核が出土した。1～2は台形石器である。1は打面を除去した寸詰まりの剥片を横位に利用し、鋭利な一側面を刃部に設定している。左側縁部は折断された後、折断面から背面側のみ平坦剝離が施される。右側縁部の先端は背腹両面から、基部は腹面側からブランディング（刃潰し加工、以下ブランディング）が行われる。基部下端には礫面（自然面、以下礫面）が残存する。2も打面を除去した剥片を横位に利用し、左側縁部は腹面側から、右側縁部は背面側からブランディングが施された台形石器である。素材となる剥片が薄いためあるいは背面の器厚が均等なためか平坦剝離は施されていないが腹面には主要剝離面が残存する。3～7は加工痕のある石器として分類したものである。3は末端部を欠損するため全形が不明であるが、左側縁部は下方からの整形剝離、右側縁部には腹面側からブランディングが行われている。ナイフ形石器の基部などの可能性が残る。4は寸詰まりの剥片を横位に利用したもので、二度の剝離によって打面を除去している。長軸方向の先端部に使用痕がみられる折断剝



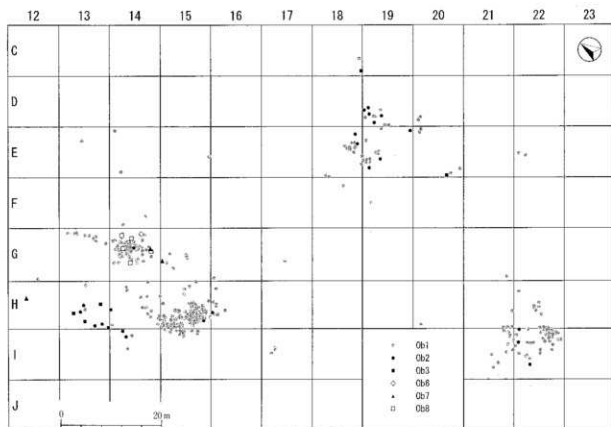
片である。ナイフ形石器の可能性が残る。5は右側縁部に微細な剥離が観察できる。6は腹面側の左側縁部に打点の残る剥離がみられるほか、長軸の先端にも小さな剥離が数回施される。8・9は石核である。8は打面転移が繰り返し行われ、小型で寸詰まりの剥片を剥離したものと思われる。9は小円礫を分割したもので剥片剥離を進めないまま廃棄したものと考えられる。

(2) ブロック2出土石器 (第23図 10~26・第24図 27~38)

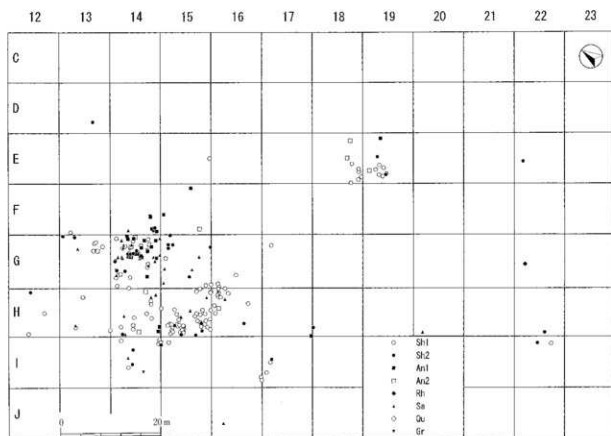
H-15区を中心とする分布域のブロック2からは、ナイフ形石器、台形石器、スクレイパー、加工痕のある石器、石核のほか、接合資料が7点出土した。10~15はナイフ形石器である。10は素材となる剥片の鋭利な側面を刃部に設定し、左側縁部の基部側および右側縁部の刃部側にブランディングが施される。背面の基部から刃部にかけて両側縁方向から平坦剥離およびブランディングが繰り返して行われており、厚みを減じるための意図が窺える。刃部先端には刃こぼれと思われる微細な剥離が認められる。切出形のナイフ形石器である。11は素材となる剥片を縦位に利用し、鋭利な側面を刃部に設定し、左側縁部の刃部の腹面側からブランディングが施される部分加工のナイフ形石器である。12は素材となる剥片を斜位に利用し、鋭利な側面を刃部に設定していると考えられる。左側縁部に腹面側からブランディングが施される側縁加工のナイフ形石器で、刃部を欠損する。13~15は小型のナイフ形石器である。13は素材となる横長剥片を横位に利用し、その後打面を



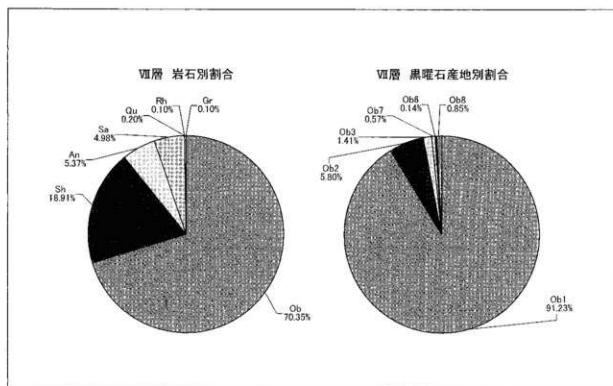
第17図 ナイフ形石器文化期ブロック図



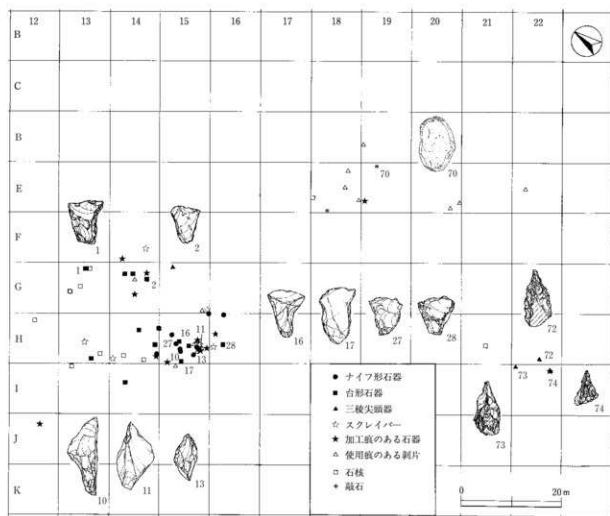
第18図 石材別出土状況図(1) 黒曜石



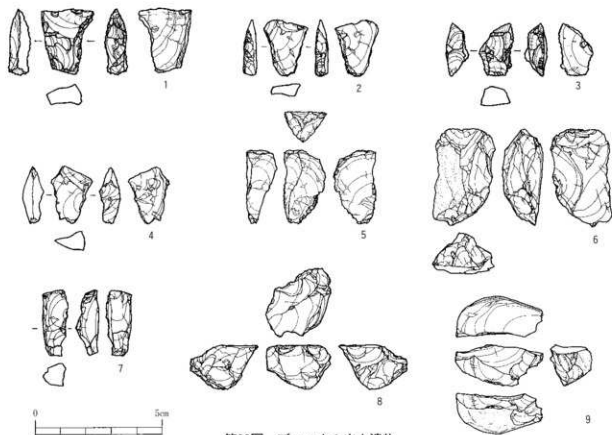
第19図 石材別出土状況図(2) 頁岩・安山岩・その他



第20図 石材別・黒曜石産地別割合



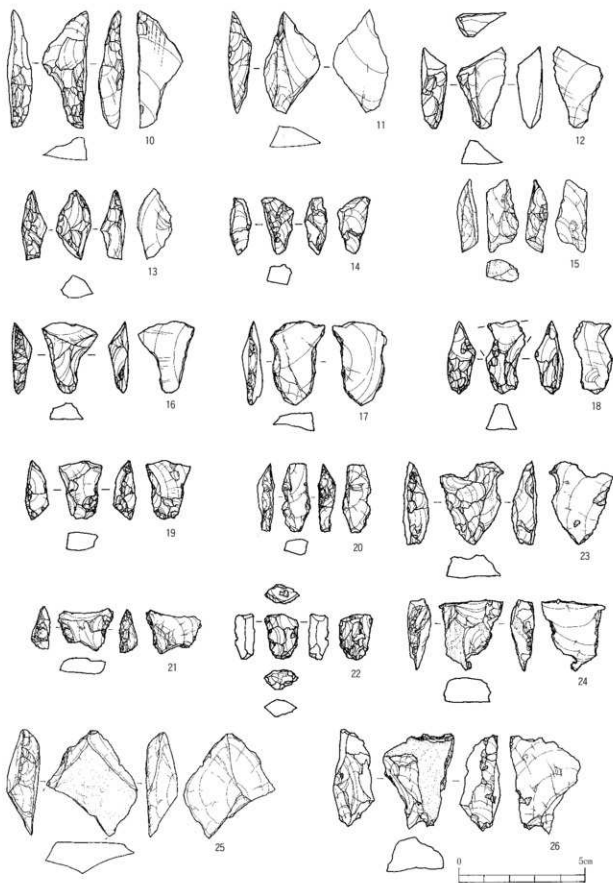
第21図 器種別出土状況図



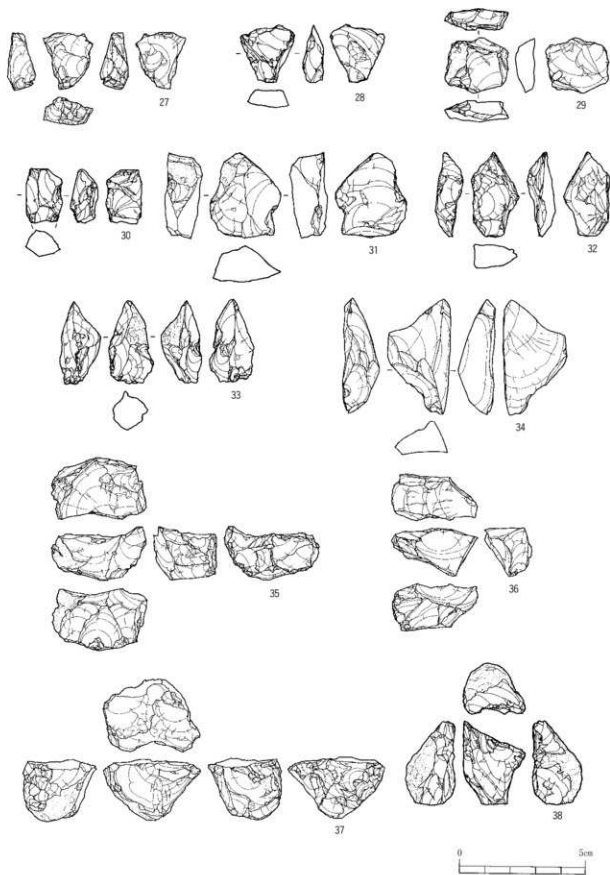
第22図 ブロック1出土遺物

除去している。左側縁部に腹面側から急角度の調整剥離を施し刃部を作出している。右側縁部には腹面側から微細なブランティングが施されるほか、左側縁部の下方から基部加工が行われている。

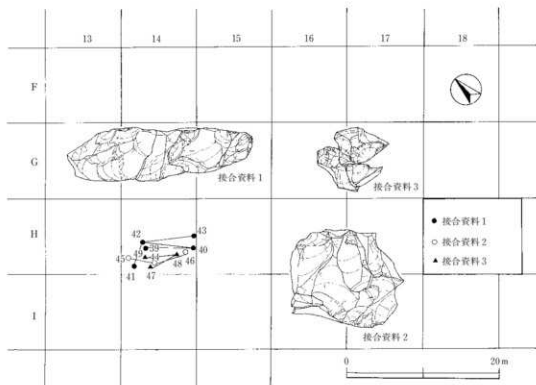
14は素材となる剥片の末端を刃部に設定し左側縁の折断後、折断面側から背面のみ平坦剥離が施される。右側縁部の基部は腹面側から整形され、刃部を欠損する。15は素材となる剥片を縦位に利用し、鋭利な側辺を刃部として設定している。左側縁部は折断後の加工はなされないが、右側縁部に腹面側からブランティングが施されたナイフ形石器である。基部には礫面が残存する。16～20・27～29は台形石器として分類したものである。16は素材となる剥片を横位に利用し、右側縁部にやや粗く、左側縁部には入念なブランティングが腹面側から施される。刃部には刃こぼれと思われる微細な剥離がみられる。17はやや横長の素材剥片を利用し、腹面側からブランティングが施された二側縁加工の台形石器で刃部に微細な剥離が観察される。18は背面に平坦剥離が施され、二側縁ともに腹面側からのブランティングが行われる。左側縁部のブランティングは入念である。刃部の両端を欠損する。19は素材となる剥片を横位に利用し、左側縁部を折断後、腹面側から微細なブランティングが行われる。右側縁部は背面側からのブランティングによって打面部が除去され、その後除去された打面側から背腹面とも平坦剥離が施される。基部は背腹面とも下端から整形されている。20は細身の台形石器である。左側縁部は腹面側から、右側縁部は背面側からブランティングが施される。27は素材となる剥片を横位に利用したものと考えられる。左側縁部が背面側から折断され、右側縁部は背面側からブランティングが施され打面部が除去された後、この打面側から背面方



第23図 ブロック2出土遺物(1)

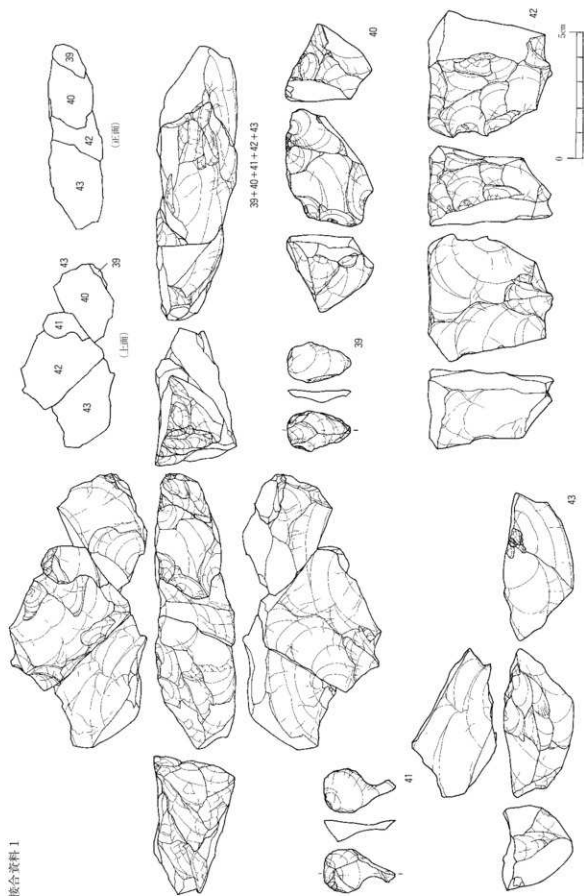


第24図 ブロック2出土遺物(2)



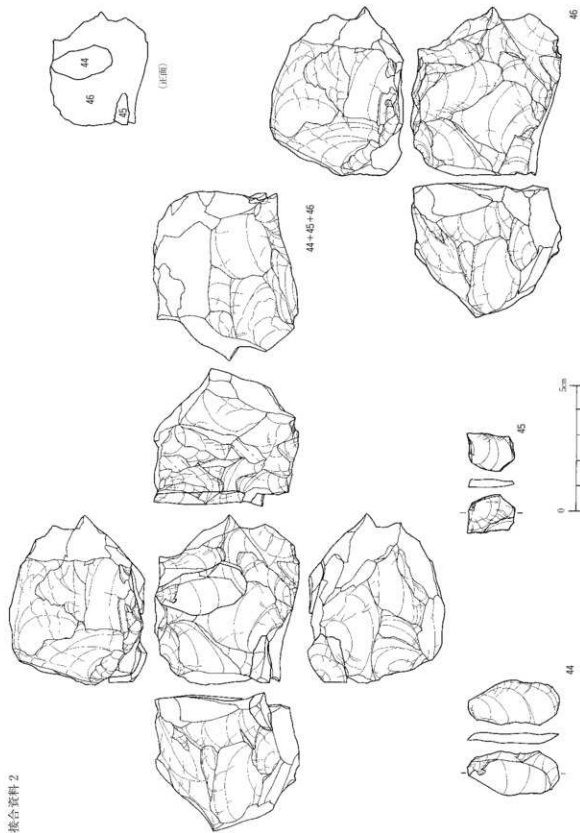
第25図 ブロック2出土接合資料1・2・3出土状況図

向に平坦剥離が行われる。基部は背面側から整形され、一部に礫面が残存する。28は右側縁部が折断され、基部の背面側から左側縁部にかけてプランティングが施される。左側縁部には腹面から背面へかけてプランティング状の微細な剥離が観察される。29は素材となる剥片を縦位に利用し、背面には基部側から平坦剥離が施され、礫面が残存する。右側縁部は腹面側からプランティングが行われる。刃部が欠損している。21は欠損しているため全形が不明であるが、左側縁部が腹面側から右側縁部が背面側からプランティングが施されており台形石器の可能性が残る。22も欠損しており全形が不明であるが、背腹両面とも二側縁部方向から平坦剥離が施されており、ナイフ形石器の基部の可能性はある。23-26はスクレイパーとして分類したものである。23は素材となる剥片を横位に利用し、鋭利な側面にノッチ（抉り、以下ノッチ）状の剥離が認められる。左側縁部の腹面側から施される剥離をプランティング、腹面にみられる剥離を平坦剥離とした場合、台形石器としての可能性が残る石器である。24は素材となる剥片の二側縁部に二次加工の施されたもので、上端は折断された可能性がある。25は礫面の残存する剥片の側面に片面加工で刃部が作出されたスクレイパーである。相対する側面にも刃こぼれ状の微細な剥離が認められる。26は素材となる厚手の剥片の一端に腹面側から二次加工が施され、刃部が作出される。刃部角から搔器の可能性はある。30-34は加工痕のある石器として分類したものである。30は主に右側縁部の背腹両面、31は左側縁部と右側縁部の背腹両面に二次加工が施される。32は素材剥片の左側縁部が折断され、背面には左側縁部方向から平坦剥離状の二次加工が施される。33は二側縁部とも腹面側から二次加工が施されるほか、長軸の下端には下方からの二次加工が認められる。34は左側縁部に腹面側からの二次加工が施される。35-38は石核である。35は角礫を分割したものと思われる。底面の剥離は礫皮面を除去



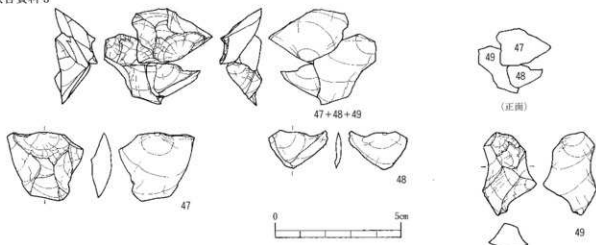
第26図 ブロック2出土接合資料1 遺物実測図





第27図 ブロック2出土集合資料2 遺物実測図

接合資料 3



第28図 ブロック 2 出土接合資料 3 遺物実測図

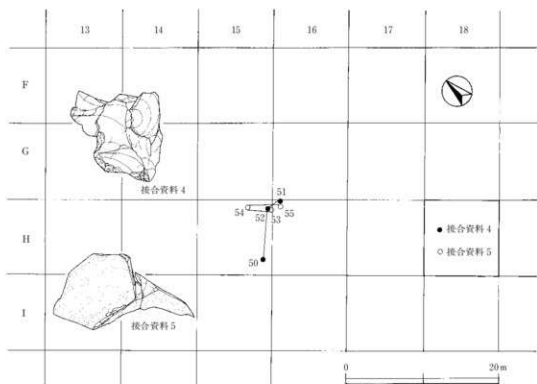
する目的で行われたと思われる、一部に礫面が残存する。剥片剥離は主に平坦な分割面を打面として行われたと考えられる。36は打面転移が少なくとも4回行われたもので、底面からは剥片剥離痕が求心状に観察される。37は亜円礫を分割したものと思われる、一部に礫面が残存する。左側面から裏面にかけて連続した小さい剥離が認められるが、介在物のため剥離作業がうまく進行しなかったものと思われる。38は亜円礫を利用したと考えられ、裏面に礫面が残存する。剥片剥離は一度の剥離で得られた平坦面を打面として行われている。

接合資料の石材はすべて頁岩 (Sh1) である。接合資料 1 は剥片が 5 点接合したものである。接合形状となる前段階までに正面と背面側からの剥片剥離痕が観察できる。39の右側面と40の右側面は剥離面を共有し、さらに40と42は打面および40の正面、42の上面は共有することから、40の正面右側面にみられる打点の残る剥離は40を42から分割後に行われたものと考えられる。41は40を分割後、42から剥出されている。41を剥離後、42からもう一度同方向へ剥片剥離が行われている。接合資料 2 は剥片 2 点と石核 1 点が接合したもので、各面に求心状の剥離痕が認められ、寸詰りの剥片が剥出されている。接合資料 3 は剥片が 3 点接合したものである。接合関係には至らなかったが、接合資料 2 と同一母岩である可能性が高い。接合資料 4 は剥片が 3 点接合したもので、50は52の背面にある右剥離面と接合する剥片から再度剥離されたものである。接合資料 5 は剥片が 3 点接合したもので、55か53の礫面側を打面として剥離されている。接合資料 6 は剥片が 2 点接合したものである。接合資料 7 は剥片が 2 点接合したもので58は59から剥離後、平坦な分割面を打面として石核調整状の細かい剥離が施される。

(3) ブロック 3 出土石器 (第34図・第35図・第36図 60~71)

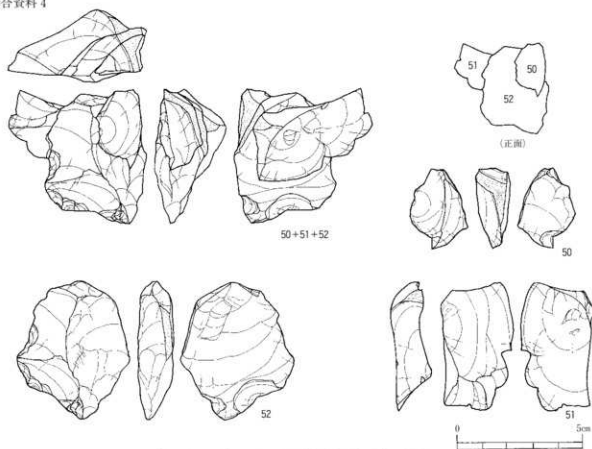
D・E-18・19区を中心とする分布域のブロック 3 からは、ナイフ形石器などの示準石器の出土は認められていないが、接合資料 8 と敲石が 2 点出土している。接合資料 8 は 9 点の剥片と石核 1 点の計 10 点が接合したものである。求心状の剥離が繰り返され、不定形で肉厚な剥片が剥出される。

70・71は敲石である。70は扁平な蛋白石、71が砂岩を利用したものでいずれも長軸の両端に微細な敲打痕が認められる。敲打による潰れが浅いことから使用頻度が低いものと推定される。



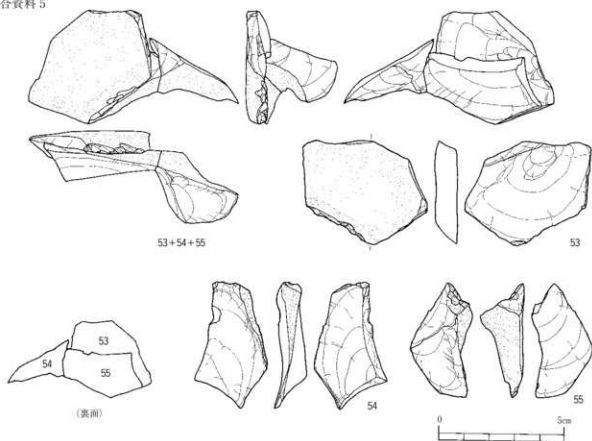
第29図 ブロック2 出土接合資料4・5 出土状況図

接合資料4

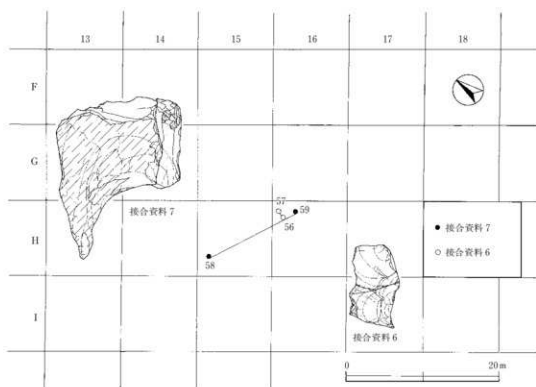


第30図 ブロック2 出土接合資料4 遺物実測図

接合資料 5

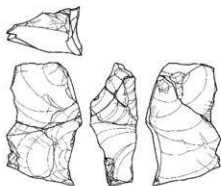


第31図 ブロック 2 出土接合資料 5 遺物実測図



第32図 ブロック 2 出土接合資料 6・7 出土状況図

接合資料 6



56+57

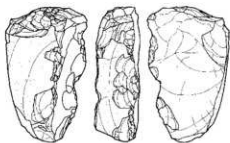


56

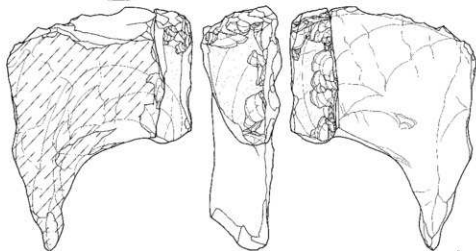


57

接合資料 7



58

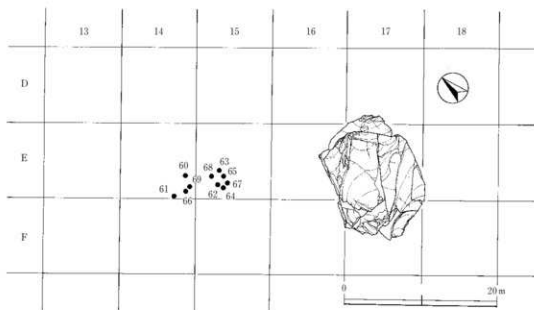


59

58+59

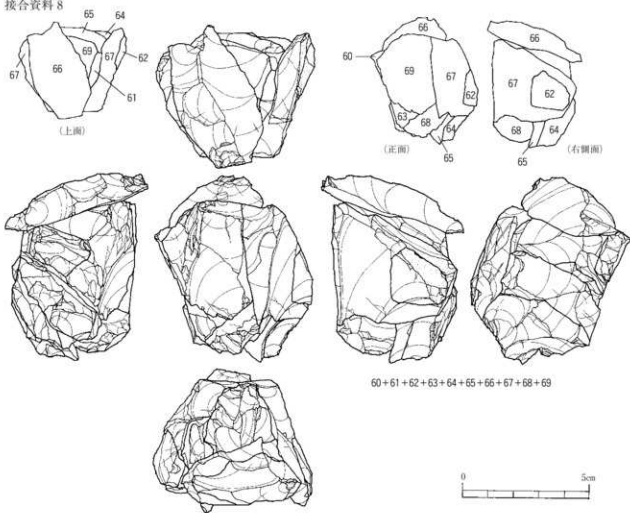


第33図 ブロック2出土接合資料6・7遺物実測図

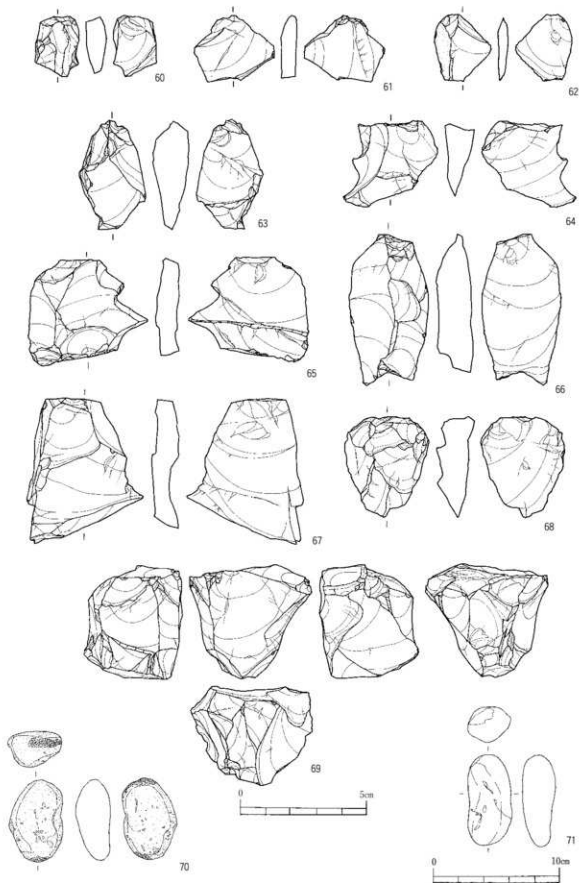


第34図 ブロック3出土接合資料8出土状況図

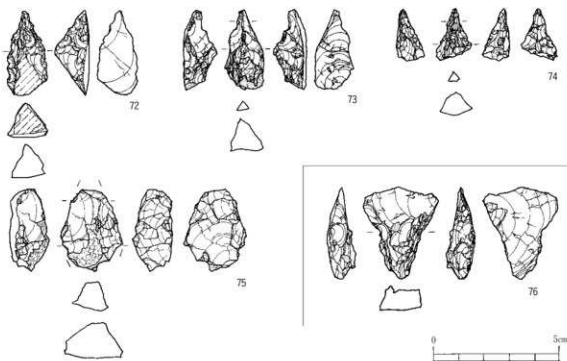
接合資料 8



第35図 ブロック3出土接合資料8



第36図 ブロック3出土接合資料8遺物・敲石実測図



第37図 ブロック4出土遺物実測図ほか

#### (4) ブロック4出土石器ほか (第37図 72~76)

I-21・22区を中心とする分布域のブロック4からは、三稜尖頭器3点、加工痕のある石器1点、石核が出土し、三稜尖頭器、加工痕のある石器を図化した。示準石器は三稜尖頭器のみが出土したブロックである。72~74は三稜尖頭器である。72は裏面（甲板面あるいは主要剥離面、以下裏面）は未加工の二面加工のものである。両側縁部は裏面から急斜な角度の整形剥離が施された後、微細なブランティングが行われる。ブランティングの結果、側縁部が鋸歯状、断面形は三角形を呈する。稜上には両側縁方向にむけて調整剥離と裏面と水平な方向への調整が行われている。基部には節理面が残存する。73も裏面は未加工で二面加工のものである。左側縁部は裏面からの急斜な角度の剥離とブランティングによって調整される。右側縁部は裏面からの整形剥離痕は観察されず、大きな剥離を伴う稜上調整によって整形される。断面形は三角形を呈し、基部には礫面が残存する。74は裏面に平坦剥離による調整が施された三面加工のものである。二側縁部に裏面から急斜な角度の整形剥離とブランティングが施された後、両側縁方向へ稜上調整が行われる。断面形は三角形を呈し、基部を欠損する。75は加工痕のある石器として分類したものである。腹面に平坦剥離状の調整が認められるほか、両側縁部とも裏面側から比較的粗い剥離によって整形が行われている。稜上からは右側縁部方向に微細な調整剥離が施される。両端部は欠損し、下端には礫面が残存する。三稜尖頭器未製品の可能性を残すものである。

76はブロック2の集中域から東へ外れたI-14区で出土したもので、平面形が撥形を呈する大型の台形石器である。素材となる剥片を横位に利用し、二側縁部とも腹面側からブランティングが施される。背面と腹面の一部に平坦剥離が認められ、断面形は方形を呈する。



## 2 細石器文化期

### (1) 遺構

遺構として礫群と落し穴がそれぞれ1基ずつ確認された。

#### ① 礫群

G-11区のVII層上面で検出された。

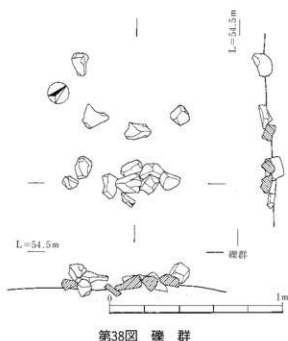
約100cm×85cmの範囲に散在しており、割合に小さくまとまっている印象を受ける。掘り込みは見られない。

13個の礫で構成され、その意味でも小さくまとまっている。石材はすべて安山岩の角礫である。

13個の平均的な大きさは、長さ12.9cm、幅10.1cm、重さは943.4gである。

上下のレベル差は最高19cmである。

礫は東側に7個がまとまり、残りの6個は3方向に2個ずつが組みになるように散らばっている。



第5表 礫群構成礫計測表

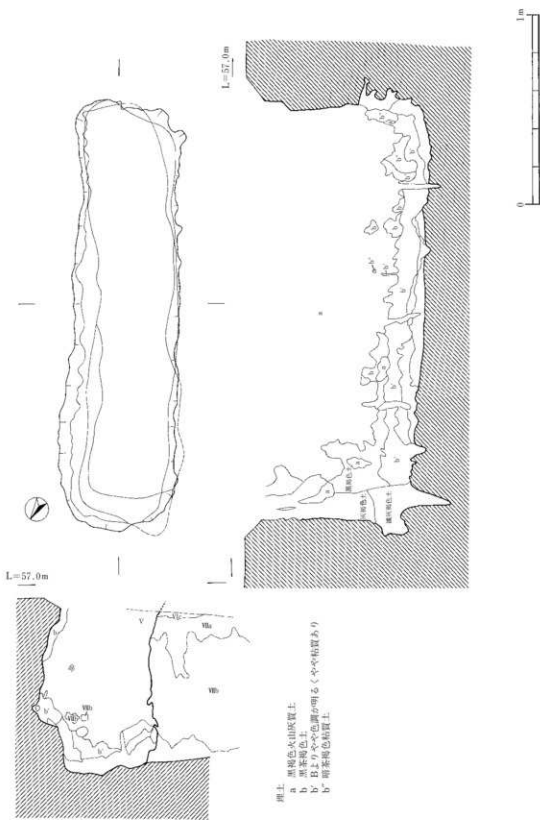
番号	長さcm	幅cm	重さg	種類	石材	火熱
1	12	11	865	角礫	安山岩	○
2	11	8	950	"	"	"
3	15	12	1050	"	"	"
4	10	5	180	"	"	"
5	15	11	550	"	"	"
6	9	6	420	"	"	"
7	15	11	1055	"	"	"
8	11	10	1210	"	"	"
9	13	9	870	"	"	"
10	14	13	1130	"	"	"
11	15	14	1300	"	"	"
12	14	12	1330	"	"	"
13	14	10	1405	"	"	"
計	168	132	12265			
平均	12.9	10.1	943.4			

(○:受けている)

#### ② 落し穴

G-17区で検出された。長さ227cm、幅66cm、残存深さ108cmで、平面形は細長い長方形である。底面に小ピットは見られない。断面図によると北端に小ピットがあるようにも見えるものの、平面図に記載されていないことから逆茂木痕とは判断できない。東側が若干抉れているが、崩落によるものと考えられる。埋土は下部に土塊が小ブロック状に見られ、上部にはV層が厚く堆積している。検出面がIVb層であることから、旧石器時代細石器文化期の遺構と考えられる。

落し穴は縄文時代にも確認されているが、遺構としては通し番号を付すこととして、この落し穴を1号落し穴とし、縄文時代のものを2号～4号落し穴とした。



第39図 1号落し穴

第6表 1号落し穴計測表

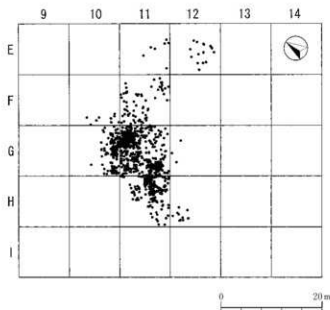
挿図 番号	遺構名	検出区	検出面	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	礎或木頭 の有無	本体埋土	形状
39	1号落し穴	G-17	VIb	227	66	108	無	黒褐色火山灰質土・黒茶褐色土・暗茶褐色粘質土・淡桃白色土・灰褐色土・淡灰褐色土	長方形

## (2) 遺物

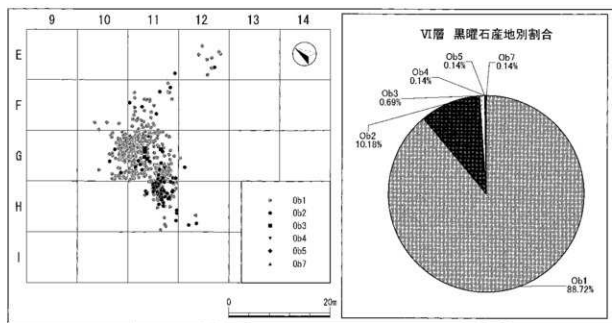
Vla層（黒色粘質土）・Vib層（黒褐色強粘質土）・Vic層（暗褐色粘質土）が当該期の遺物出土層である。なかでもVib層（黒褐色強粘質土）を中心とした出土傾向にある。遺物の分布域については第4節の1でもふれたように、整理作業の過程で遺物の平面分布や垂直分布、示準石器・剥片・砕片の出土状況、さらに石材別の分布域などを照合し検討した。その結果、F～H・12～G～I17区にかけてVib～Vic層から遺物が出土しているが、当範囲の遺物はナイフ形石器文化期に属するものであることが確認されている。そのため、結果的にこの範囲からの細石器文化期の遺物出土は皆無であることが判明した。最終的に細石器文化期の遺物はE～H・10～12区を分布域とすることが把握され、ナイフ形石器文化期、細石器文化期の両文化期における遺物は分布域を明確に異にしていることが理解できる（第17図・第40図）。

細石器文化期における遺物の平面分布状況はF-11区東側からE-11・12区にかけて小さな遺物集中域があるほか、F～H・10～12区を分布域とする大きな遺物集中域が認められる。さらに平面分布状況を細かく俯瞰すると、大きな遺物集中域のうちG-11区中央付近に遺物の集中が弱い部分が認められる。また、石材構成においてもこの区域を境に黒曜石は南側にOb2、頁岩は北側にSh1、南側にSh2が集中する傾向があり（第41図・第42図）、石材利用状況を指標として大きな集中域を2ブロックに区分できる可能性を残している。ただし細石刃核の類型において若干の技術差が認められるものの編年的な位置付けにおいて大きな差異を認めないため、ここではあえて1ブロックとして扱うこととする。

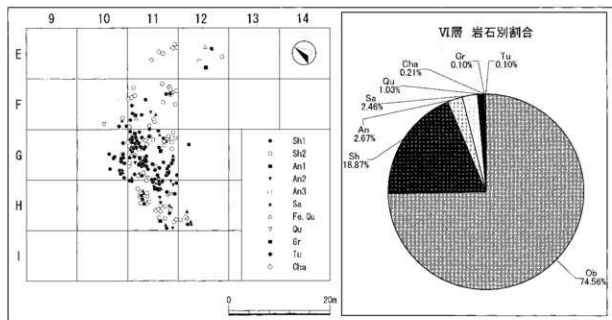
細石器文化期における有効資料点数は計1069点で、石器の器種別点数は、細石刃67点（21点図化）、細石刃核8点（5点図化）、スクレイパー9点（1点図化）、加工痕のある剥片2点、使用痕のある剥片4点、調整剥片5点、打面再生剥片1点、石核4点、敲石1点（図化）である（第43図）。なお、個体ごとの石材、計測値については観察表に掲載している（第25表）。



第40図 細石器文化期ブロック図



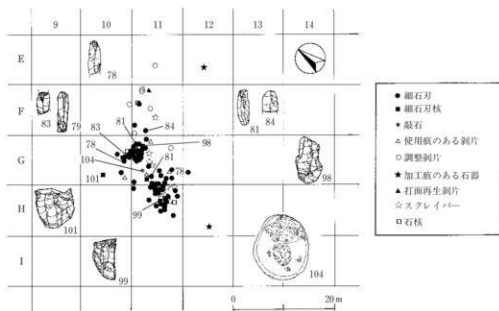
第41図 石材別出土状況図(1) 黒曜石・出土割合



第42図 石材別出土状況図(2) 頁岩ほか・出土割合

77～97は細石刃である。図化した21点のうち残存部位による内訳はⅠ類-完形品(折断されたものを含む)5点, Ⅱ類-頭部～中間部3点, Ⅲ類-頭部3点, Ⅳ類-中間部6点, Ⅴ類-尾部4点である。77は頭部調整と思われる微細な剥離がみられるほか, 下端の腹面に微細な剥離が観察される。尾部は折断された可能性がある。78は頭部に微細な剥離が観察されることから頭部調整が行われているものと考えられる。尾部を欠損する。79は長く厚みのある細石刃で頭部の一部と下端が折り取られている可能性がある。80は頭部の腹面側に微細な剥離が認められるほか, 両側縁部に刃こぼれ状の微細剥離痕が観察できる。81は頭部に微細な剥離が認められる。82は尾部を不純物を含む部分で欠損している。83は頭部に連続する微細な剥離が観察されることから調整が行われているものと考えられる。中間部以下を欠損する。84は右側縁部に微細剥離痕が観察される。接合関係には至らなかったが, 石材や剥離幅などの特徴から101の細石刃核から剥出されたものと考えられる。85は幅が狭い細石刃核で頭部に微細剥離が観察される。86は尾部を欠損する。87は頭部を欠損する。88は尾部を欠損し, 頭部に微細剥離, 左側縁部に刃こぼれ状の剥離が認められる。89は両端を欠損する。頭部側の欠損は新しいものである。90は頭部を破損する。91・92は頭部, 93～95は両端を欠損する。96は中間部以下を欠損する。97は両端を破損する。

98～102は細石刃核である。98は剥片素材を利用したもので, 正面から左側面へかけて細石刃剥離が行われた後, 右側面側から横打ちの打面調整が行われている。石材の質に影響されたためか作業面に階段状の剥離が残存する。細石刃の剥離回数は少なかつものと考えられる。99は円礫を分割した剥片素材を利用したもので, 左側面に礫面, 右側面には剥離面が残存する。打面には作業面方向からと右側面側からの打面調整が行われている。100は剥片素材を利用したもので, 打面には求心状の剥離が観察される。正面から左側面にかけて被剥離面がみられる。打面転移が行われており, 正面には打面からと底面からの剥離面が認められる。101は厚手の剥片素材を利用したもので打面形成



第43図 器種別出土状況図



第44図 出土遺物実測図

後、両側面とも打面側から石核調整が行われる。2面に作業面が観察でき、幅広い細石刃が剥出される。平坦な打面には作業面側から打面調整が施される。背面側での細石刃剥離の後、打面調整を行い、打面を変更せず正面側の作業面から剥離作業を行っている。102は表採資料である。礫素材を利用した小型のもので、平坦な分割面を打面に設定し、両側面とも打面側からの石核調整が施される。103は周縁部から求心状の剥離が行われた円形を呈するスクレイパーである。104は球状の円礫を利用した敲石である。表面の中央に敲打が集中し、凹石状のくぼみがあるほか、表裏面の上半を中心にあばた状の敲打痕の集中が認められる。

## 第5節 縄文時代の調査

縄文時代としては、IV層から早期、IIIb層から前期、中期及び後期、IIIb層及びIIIa層から晩期が、それぞれ出土している。

以下、遺構と遺物に分けて、それぞれ時代順に述べていきたい。

### (1) 遺 構

#### ① 集 石

6基が検出された。

1号集石はC-19区で検出され、70cm×65cmの広がりを持ち、上下の幅は18cmである。28個の礫で構成され、3個以外は火熱を受けている。構成礫の平均値は、最大長で5.6cm、厚さが3.0cm、重量は104.2gである。全体的に、白または灰色を呈している。

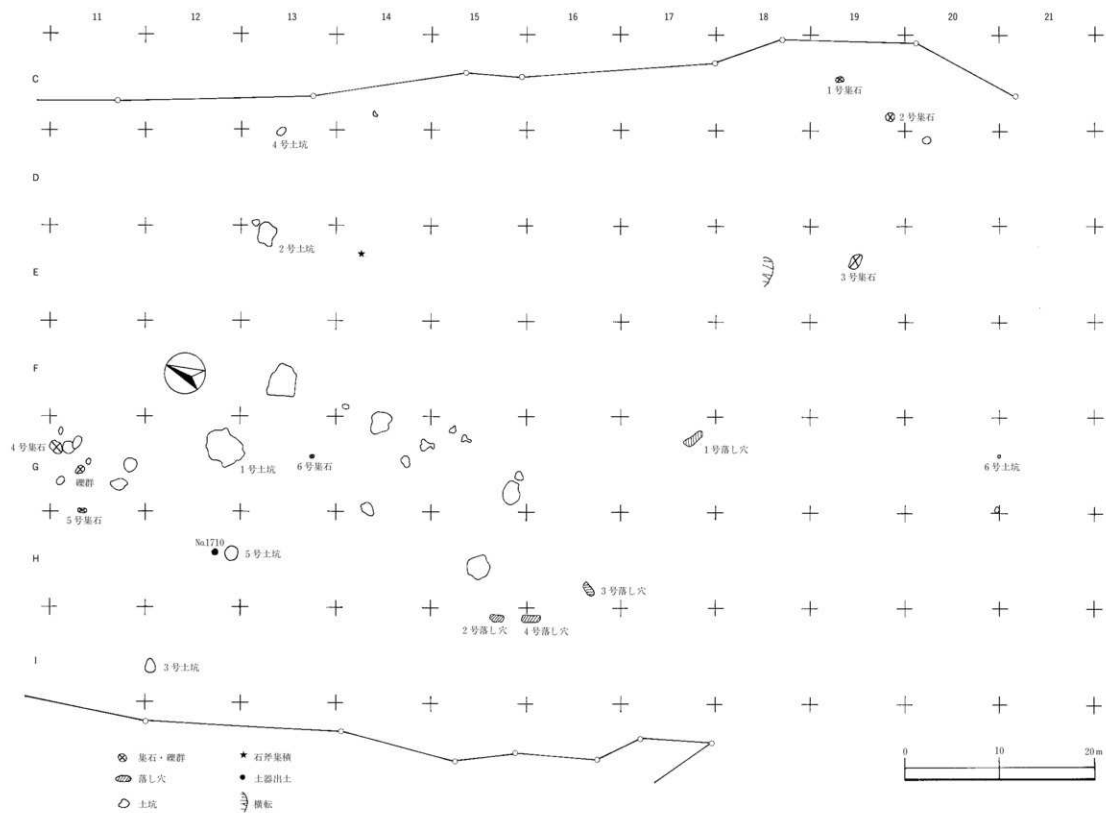
2号集石もC-19区で検出され、95cm×50cmの広がりを持ち、上下幅は16cmである。50個の礫で構成され、すべて火熱を受けている。構成礫の平均値は、最大長で6.1cm、厚さが3.3cm、重量は139.0gである。色調は白を基調としているが、灰色や黒のほか青も見られる。破損が約半数に見られる。1号同様、掘り込みは確認されていない。

3号集石はE-19区で検出され、160cm×80cmの広がりがあり、上下幅は16cmである。27個の礫で構成され、1個以外はすべて火熱を受けており、7個以外は破損が見られる。構成礫の平均値は、最大長で8.8cm、厚さが3.6cm、重量は336.8gである。砂岩と安山岩がほぼ同数であり、灰白色を中心に青灰色から薄赤褐色・黄褐色までとバラエティに富んでいる。掘り込みは確認されなかった。

4号集石はG-11区で検出され、160cm×105cmの広がり、上下の幅は15cmである。42個の礫で構成されており、中には磨石の破損品の転用したものも見られる。一方に55cm×45cm程度の割合にまとまった主として小角礫で構成される部分と、160cm×85cm程度の散在した主として割合に大きめの角礫で構成される部分とに分かれており、それぞれを個別の集石とするには、同一平面にほぼ同一のレベルでまとまっていたことから躊躇せざるをえなかった。これも掘り込みは見られない。

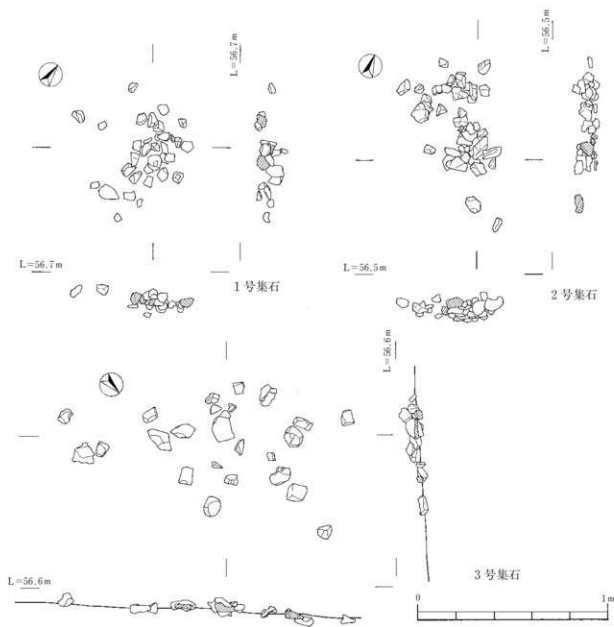
5号集石はG・H-11区で検出され、45cm×20cmの広がりを持ち、上下幅は18cmである。ほぼ南北の方向に一列に並んだ集石である。8個の礫で構成され、すべて安山岩の角礫で、うち1個はひび割れが顕著である。構成礫の平均値は、最大長が11.3cm、厚さが9.1cm、重量は741.4gである。掘り込みは見られない。

6号集石はF-13区で検出され、210cm×90cmの広がりを持ち、上下幅は23cmである。97cm×79cmの二重になる掘り込みを持ち、最深部の深さは検出面から12cmである。土坑部分とは集石の中心部が若干ずれているものの、レベル的に見ると同一のものと考えて支障はないと判断される。構成礫はすべて安山岩で、角礫のほかに円礫も割合多数見られることが特徴と言えそうである。また、石皿や磨石・敲石そのものや破片を転用したものも多く見られる。構成礫の平均値は、最大長が8.2cm、厚さは6.3cm、重量は311.7gである。火熱を受けてひび割れているものが多い。



第45図 遺構全体図(1)

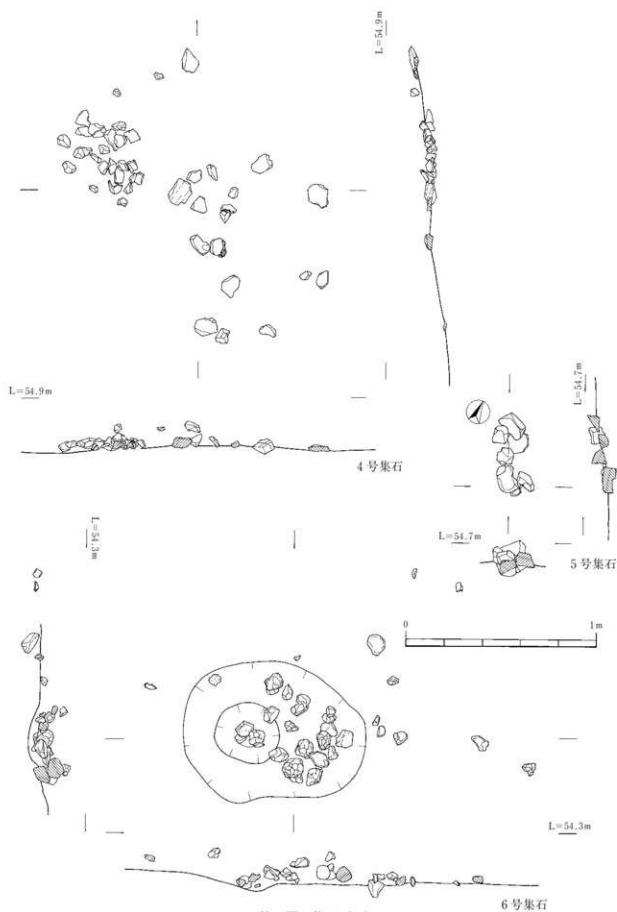




第46図 集石 (1)

第7表 集石計測表

採回 番号	遺構名	検出区	検出面	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	軸方向	掘り込みの 有無及び規模	石 材	礫数 (個)	礫長平均 (cm)	重量平均 (g)	被火熱 個数
46	1号集石	C-19	—	70	65	18	N58W	無	—	38	5.6	104.2	33
	2号集石	C-19	—	95	50	16	N41W	無	—	48	6.3	144.8	48
	3号集石	E-19	—	160	80	16	N46W	無	安山岩3・砂岩24	27	8.8	336.8	—
47	4号集石	G-11	IVc	160	105	15	方位不明	無	安山岩1	42	—	—	—
	5号集石	G・H-11	—	45	20	18	N25W	無	安山岩7	8	11.3	741.1	—
	6号集石	F-13	IV	210	90	23	方位不明	有 96×74×11	安山岩2・石皿片2 磨石9・巖石1?	35	8.2	311.7	4



第47図 集石 (2)

## ② 落し穴

3基の落し穴が検出された。3基とも底面に逆茂木痕と考えられる小ピットを持つもので、2ないし3個の小ピットがある。なお、落し穴は旧石器時代のもも検出されており、その落し穴を1号と呼称した。そのため、縄文時代のもものを2号～4号落し穴として説明を行う。

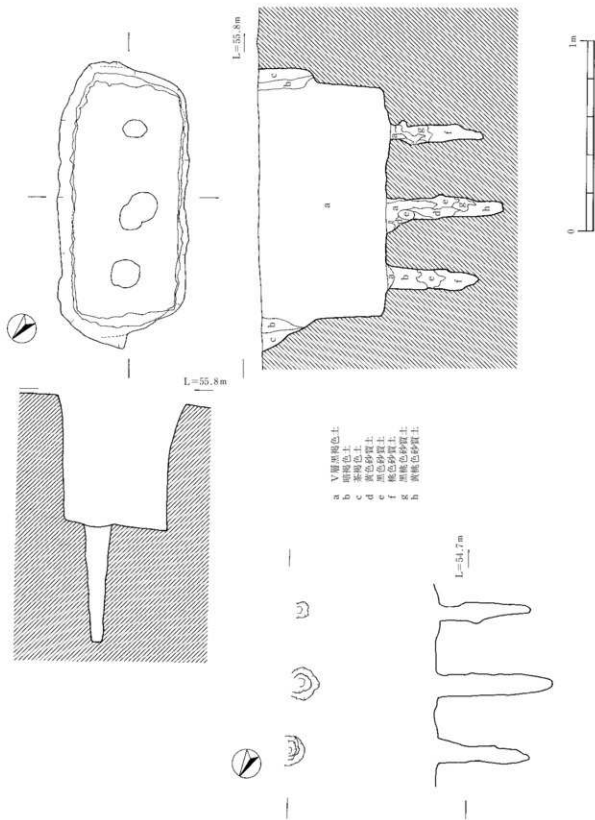
2号はI-15区で検出され、長さ150cm、幅66cm、残存深さ67cmで、平面形は東側が若干広くなった弱い隅丸の長方形である。南北の端は幾分崩れていると考えられる。底面には3個の小ピットがあり、直径は8cm～19cm、深さは48cm～60cmである。先端部は円錐状あるいは鈍い円柱状を呈しているほか、埋土にも鋭い状況を示す部分が見られることから、3号と同様に、小ピットを掘った後でそれよりも小さく先端を尖らせた棒を差し込んでいたことが考えられる。落とし穴全体の埋土の状態は記録に残っていないことから詳細は不明である。ただ、平面の形態が崩れた部分を考慮したとき、本来太目の細長い長方形であった可能性があることや、深さもほぼ同程度であること、また、逆茂木痕と考えられる小ピットが3個であることなどから、3号の時期とそれほど変わらないと考えられ、縄文時代早期頃と見ておきたい。

3号はH-16区で検出され、長さ174cm、幅67cm、残存深さ80cmである。平面形は上面が隅丸で太目の細長い長方形であるのに、底面は南東隅以外は明瞭な角を持つほぼ長方形をしている。底面には2個の小ピットがあり、直径が12cm、深さが52cm～59cmである。断面で見る形状は、1個が円柱状でもう1個が円錐状である。いずれも掘り込みの上面も先端の部分も共にそれほど太くないことから、先端をある程度尖らせた棒を差し込んでいたことが考えられる。落とし穴の検出面がVIb層であるものの、埋土は最下面にIV層が堆積していることから、造られた時期は2号及び3号と同様な時期、すなわち縄文時代早期と考えたい。

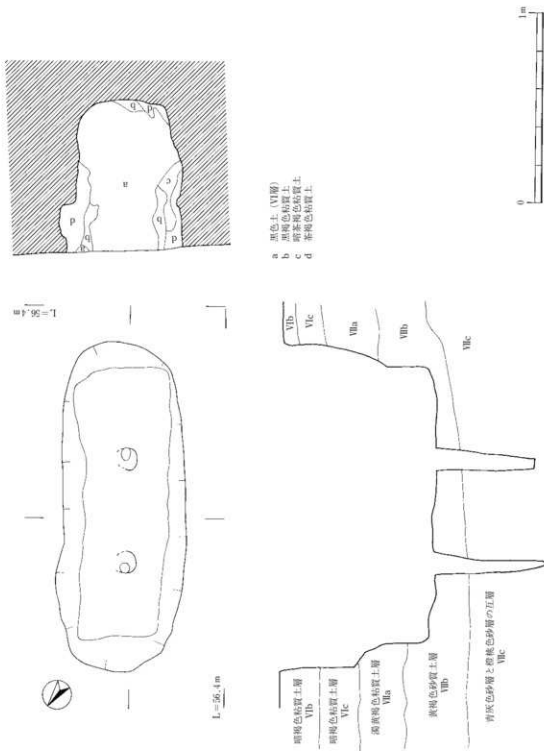
4号はI-16区で検出され、長さ182cm、幅64cmである。遺構としての確認が遅れたため残存深さは24cmに過ぎないが、本来は他のものと同様に70cm程度はあったものと考えられる。形状は、検出した時点で1号よりは若干太目の細長い長方形である。底面に3個の小ピットがあり、直径は11cm～17cm、深さは47cm～61cmである。先端部はやや斜めになった円柱状を呈しており、円錐状とはなっていない。ただし、小ピット内の埋土に鋭い状況を示す部分があることから、小ピットを掘った後にそれよりも小さく先端を尖らせた棒を差し込んでいたことが考えられる。落とし穴全体の埋土の状況は不明であるが、少なくとも下部には薩摩のバミスなどを含む層が小ブロック状となっており、この状況は1号のものと類似していると言える。ただ、薩摩のバミスが埋土となっていることから考えると、遺構の時期は縄文時代早期頃を考えた方がよいように思われる。

第8表 2～4号落し穴計測表

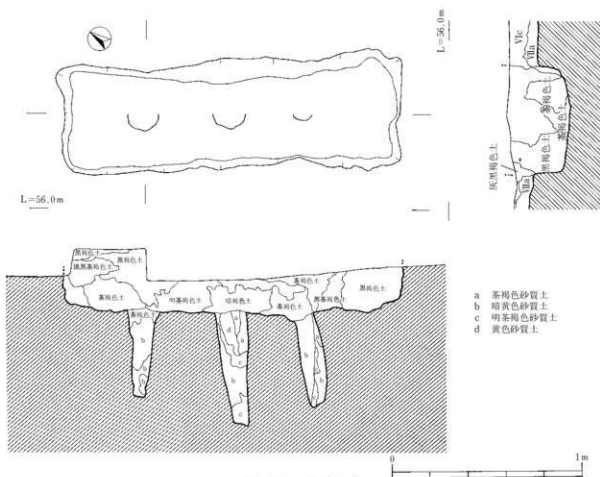
検出 番号	遺構名	検出区	検出面	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	逆茂木 の有無	逆茂木の規模	本体埋土	逆茂木痕埋土	形状	掘り込み層
48	2号落し穴	I-15	VIc	150	66	67	有	①8×48 ②19×60 ③15×49	黒褐色土・白色バミス・黄色バミス・茶褐色土・暗茶褐色土	黒色砂質土・黒褐色砂質土・黄色砂質土・黄褐色砂質土	長方形	—
49	3号落し穴	H-16	VIb	174	67	80	有	①12×52 ②12×59	黒色土・黒褐色粘質土・暗茶褐色粘質土・茶褐色粘質土	—	長方形	VIb-VIc
50	4号落し穴	I-16	VIc	182	64	24	有	①11×49 ②17×61 ③17×47	黒褐色土・黒茶褐色土・茶褐色土・暗茶褐色土・明茶褐色土・淡黒茶褐色土	茶褐色砂質土・明黄色砂質土・黄色砂質土・暗黄色砂質土	長方形	VIc-VIb



第48図 2号落とし穴



第49図 3号落し穴



第50図 4号落し穴

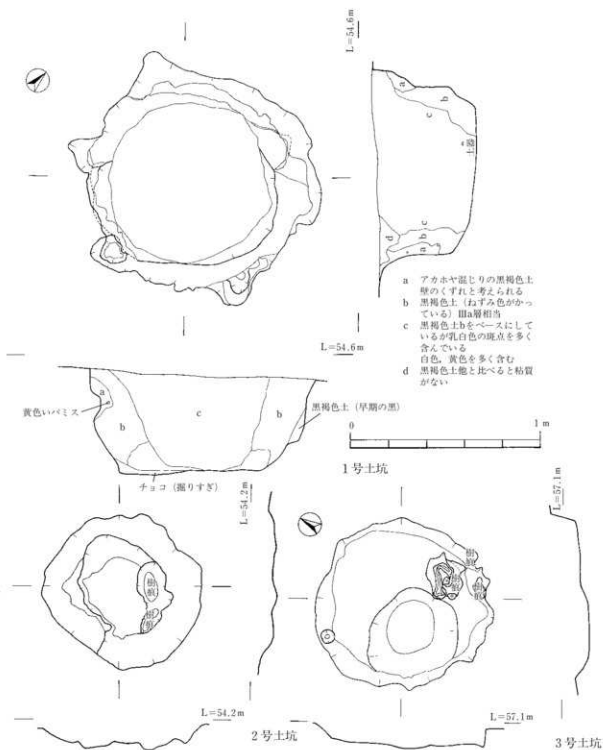
### ③ 土 坑

縄文時代と考えられる土坑は3基確認された。

1号土坑はG-12区で検出され、最大径298cm、最小径243cm、深さは110cmである。平面形は円形に近い楕円形をしており、主軸の方向はN52°Eである。埋土はIIIa層であることから、縄文時代晩期の遺構と考えられる。本遺跡で検出された縄文時代及び古墳時代に比定している6基の土坑中、平面的な広がり、深さ共に最大規模のものである。平面形で見ると、南側及び東側に小ビット状の掘り込みが見られるが、これは本土坑が作られた後に、樹痕などが入り込んだものであろうと思われる。埋土の状況は、周辺部には掘り込み面の方向からの崩土が流入した状況が見られるほか、中央部は同一の埋土が充填している。このことから、本土坑が掘られた状態で放置されていたとは考えられず、割合に短時間の内に一斉に埋められたものと考えの方が自然であろう。

2号土坑はE-13区で検出され、最大径95cm、最小径50cm、深さは16cmである。平面形は幾分角張るものの、基本的には楕円形と言えよう。長軸方向の片側には樹痕によって攪乱された跡が残っている。埋土がIIIa層であることから、1号土坑と同様に縄文時代晩期の遺構と考えている。底面は凹凸が激しく、深さも浅いことから、それほどしっかりしたものとは考えられない。

3号土坑はI-12区で検出され、最大径160cm、最小径80cm、深さは16cmである。平面形は円形に近い楕円形をしており、主軸方向はN19°Wである。南東隅には樹痕によって攪乱された痕跡が残る。底面は割合に安定したカーブを呈しており、部分的に段が見られる。深さはそれほど深くはないが、底面が安定していることから、明確な機能を持っていたものと考えられる。



第51図 縄文時代土坑

第9表 土坑計測表 (1)

採回 番号	遺構名	検出区	検出面	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	軸方向	内部土坑ビット 径×短径×深さ (cm)	本体埋土	内部土坑・ビット埋土	形状
51	1号土坑	G-12	III	298	243	110	N42E	46×37×84	黒褐色土 (アカホヤ)	黒褐色土	円
	2号土坑	E-13	IIIb	95	50	16	方位なし	—	—	—	円
	3号土坑	I-12	IIIa	160	80	16	N19W	—	暗茶褐色土	—	円

#### ④ 石斧集積遺構

E-14区で検出された。明瞭な掘り込みは見られなかった。長さ66cm、幅44cmの範囲に、打製石斧がほぼ一列に4本並べられていた。主軸方向はN19°Wで、ほぼ南北である。

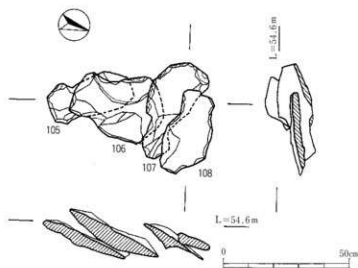
埋められた順序は南側から北側に向けてと考えられ、初めの2本はほぼ南北方向に刃部を北、基部を南に向けて置かれ、残りの2本は主軸とは直交するように置かれる。ただ、その2本は刃部の向きが異なっており、3本目が刃部が西、基部が東に向いているのに対して、4本目は刃部が東、基部が西に向いている。また、置き方としては、東西方向には平置き、南北方向には約27°の傾斜をもって北側に突き刺すように置かれている。

石斧はすべて抉りの入った打製石斧である。遺物番号により置かれた順に概略を説明したい。105は抉りが小さく、刃部が円刃となるもので、裏面には上下の端に擦られた痕跡が残る。長さ15.2cm、幅11.2cm、厚さは3.0cmである。表裏両面には自然面が大きく残っている。

106は4本の中で最大のもので、裏面には自然面が大きく残っている。刃部は打ち欠かれたのみで細かな調整は行われていない。長さは16.1cm、幅10.5cm、厚さは2.3cmである。使用されていない可能性もある。

107は表面上部に自然面が幾分残り、裏面には擦られた痕跡が残る。刃部の一方が若干飛び出す。長さ13.5cm、幅6.5cm、厚さは2.0cmである。

108は4本中最も小さい。表面には自然面が残り、裏面には擦られた跡がある。全体的に細かく調整が施されている。長さ13.5cm、幅7.7cm、厚さは1.5cmである。

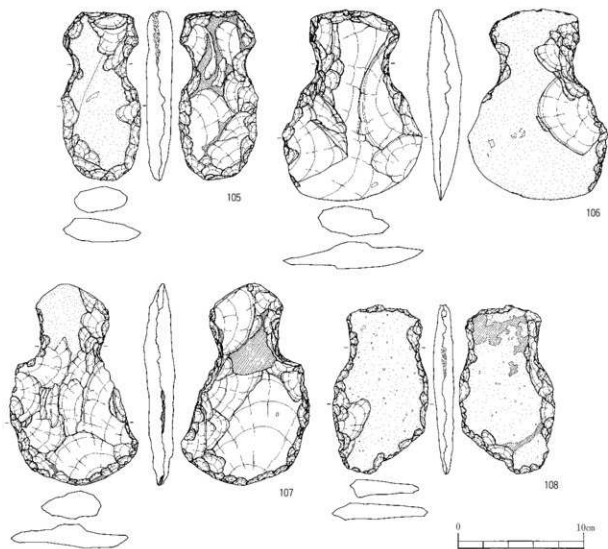


第52図 石斧集積遺構

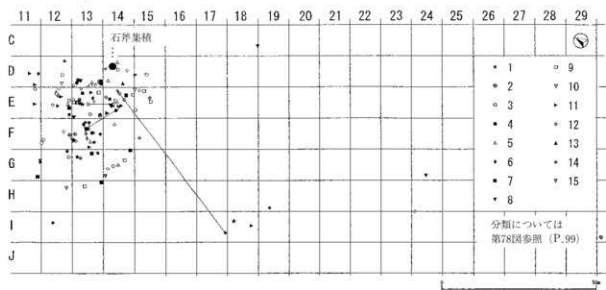
第10表 石斧集積遺構出土石斧観察表

採掘番号	遺物番号	出土区	層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	注記番号
53	105	E-14	-	打製石斧	Sh2	15.2	11.2	3.0	391	デボ3
	106	E-14	-	打製石斧	Sh2	16.1	10.5	2.3	322	デボ2
	107	E-14	-	打製石斧	Sh2	13.5	6.5	2.0	229	デボ4
	108	E-14	-	打製石斧	An1	13.5	7.7	1.5	191	デボ1

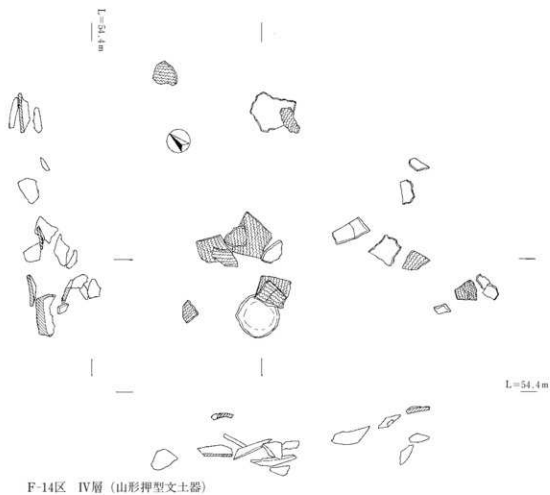




第53図 石斧集積構出土石斧



第54図 打製石斧分類別出土状況図



第55図 土器集中出土状況図



第56図 土器出土状況図(1)

## (2) 土器

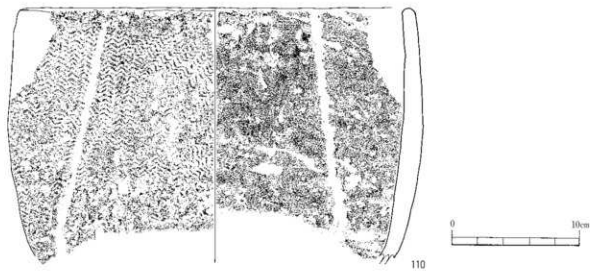
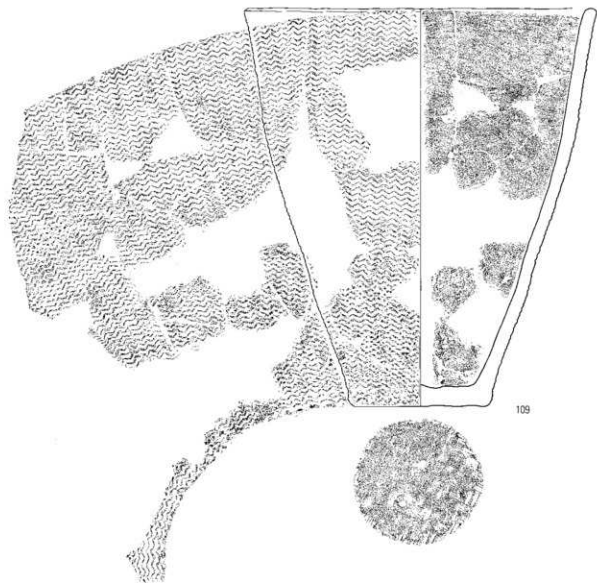
### 1 類土器 (第57・58図, 109~121)

IV層から出土しており、器壁が厚く、外面全体に連続する山形の押型文が付くものである。極めて丁寧で細かな山形の押型文が、口縁部から底部の端部まで器壁全体を覆っている。山形は、基本的には横方向に規則正しく付されているが、中には部分的に斜めや、極端なものになると90度回転させたように上下に付されているものも見られる。口唇部は丸みを持っており、割合になめらかに仕上げられている。刻みなどは施されていない。口縁部全体として平坦となるように作られるのが一般的であるが、中には成形がしっかりとなされておらず、部分的に凹凸の見られるものもある。口縁部からはほぼ直線的に胴部・底部にいたるものが普通であるが、中には口縁部がやや内傾するものもあり、このタイプは胴部が幾分中膨らみとなっている。底部は安定した平底で、端部は若干張り出している。内面は、底部付近は上方向のナデ、胴部及び口縁部はそのまま上方向のナデである場合と、横方向のナデとなる場合とが見られる。底部の外表面は、網代痕がそのまま残る場合と、中心部を主にそれをナデ消している場合とがある。

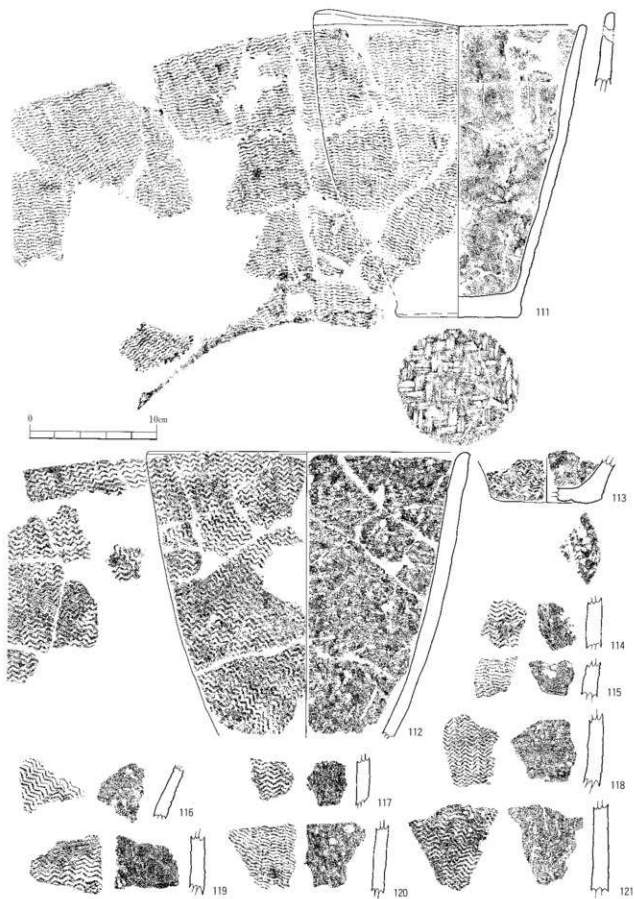
109は完形となるもので、口径は27.0cm、高さ30.5cm、底径は10.0cmである。外面の山形が横方向に極めて整然と、非常に規則正しく付されており、底部の端部に至るまで丁寧に作られている。底部外面は、外周の一部に網代痕が残るものの、それ以外の部分はナデ消している。内面の調整は底部付近から胴部の上部までが上方向のナデ、口縁部付近は横方向のナデである。110は口縁部がやや内傾するもので、胴部は幾分中膨らみとなる。内面調整は、口縁部のごく上部以外は上方向のナデである。111も完形となるものである。口径21.5cm、高さ22.9cm、底径9.5cmと109より若干小型である。基本的に横方向の緻密な山形の施文であるが、部分的には幾分斜めの向きになっているか所も見られる。112は山形の施文の方向が場所場所で大きく異なっており、非常にユニークである。

### 2 類土器 (第59図, 122~126)

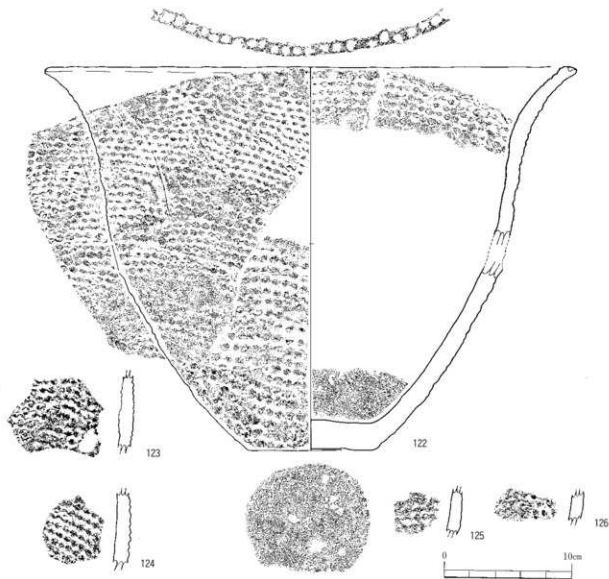
IV層から出土しており、器壁が厚く、外面全体に連続する楕円形の押型文が付くものである。口唇部を平坦に作り、丸い列点を巡らす。外面には楕円形の押型文を口縁部から底部の端部まで全面に施している。基本的には楕円形が縦方向に4列を単位として施文されているが、部分的には若干斜め向きとなっている箇所も見られる。焼成温度の低いせいによるものかと思われるが、器壁の摩耗が激しいことから押型文の不明瞭な部分もいくらか見られる。楕円形の押型文は内面の口縁部にも4段付されている。器形は、口縁部が大きく外反し、緩やかな頸部から胴部に向かってはやや内傾するものの、ほぼまっすぐで安定した形状をしている。その後は急角度で底部へとつながっており、急速にすぼまる形となっている。底部は器壁よりも一段と厚く作っており、安定した平底で、中央部が若干上げ底風となっている。外部への張り出しは見られない。底部の外表面はナデ調整である。内面は全体をナデ調整してある。底部付近はやや斜め方向、それより上部は上あるいは斜め方向のナデ調整で仕上げられている。122は胴部付近を一部欠くものの、完形に復元したものである。口径は41.9cm、高さ30.3cm、底径は10.0cmである。123~126も器壁の摩耗が同様に著しいことから122とは同一の個体の一部分と考えられる。



第57図 1類土器(1)



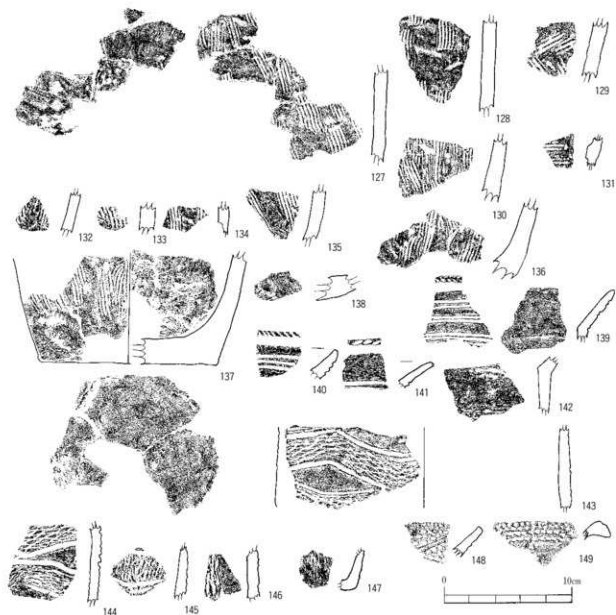
第58图 1類土器 (2)



第59図 2類土器

3類土器 (第60図, 127~138)

IV層から出土しており、器壁が厚く、外面に部分的に縦あるいは斜め方向の貝殻による条痕文が付くものである。口縁部は出土していない。胴部には貝殻腹縁による縦方向を基調とした条痕が見られるが、全体にまんべんなく施されるのではなく、適度に間隔を空けながら局部的に施文されている。胴部は若干外反するものの全体的には直立気味である。底部は安定した平底であり、外部への張り出しは見られない。内面の調整は底部付近は上方向のナデ、胴部も見限りでは同様な上方向のナデ調整である。底部には胴部下部から曲線を描くようにすぼまるものもあるようである。137は底径が13.4cm、残存高さは8.0cmの底部である。外面には間隔を空けながら若干斜めとなる縦方向の条痕が、一部は重なりながら施文されている。ただ、底部でも接地面までは施文されてはならず、底部の厚さよりも上部以上の部分に条痕が見られる。内面には上方向のナデ調整が残る。136も底部付近であるが、137とは異なり、外面が緩やかなカーブを描きながらすぼまっている。貝殻腹縁による施文は極めて短い長さで間隔を取りながら施されている。



第60図 3・4・5類土器

#### 4類土器 (第60図, 139~147)

IV層から出土しており、全体的な形状はバケツ状を呈している。口縁部に横方向の平行沈線が3条ほど巡り、頸部以下の胴部には2本の沈線に囲まれた中に細かな摺糸文が押されている。やや丸みを帯びた口唇端部には斜め方向の短い刻みが施され、口縁部は大きく外反している。口縁部に沈線を持たず、頸部に沈線が巡るものもある。頸部から胴部にかけてはややすばりながら直線的に底部に至る。底部は張り出しを持たず、丸く整えている。若干上げ底となる平底である。内面は丁寧なナデ調整が行われている。



#### 5 類土器 (第60図, 148~149)

IV層から出土している。口縁部だけの出土である。深鉢と壺形の土器と考えられる。深鉢は、口唇端部に縦方向の短い刻みを巡らせ、口縁部外面には斜め方向に沈線と列点が整然と付され、壺形土器の方にも肥厚した口唇部に横方向に列点を巡らせている。そのほかの器面調整はナデによって仕上げられている。

#### 6 類土器 (第61図, 150~175)

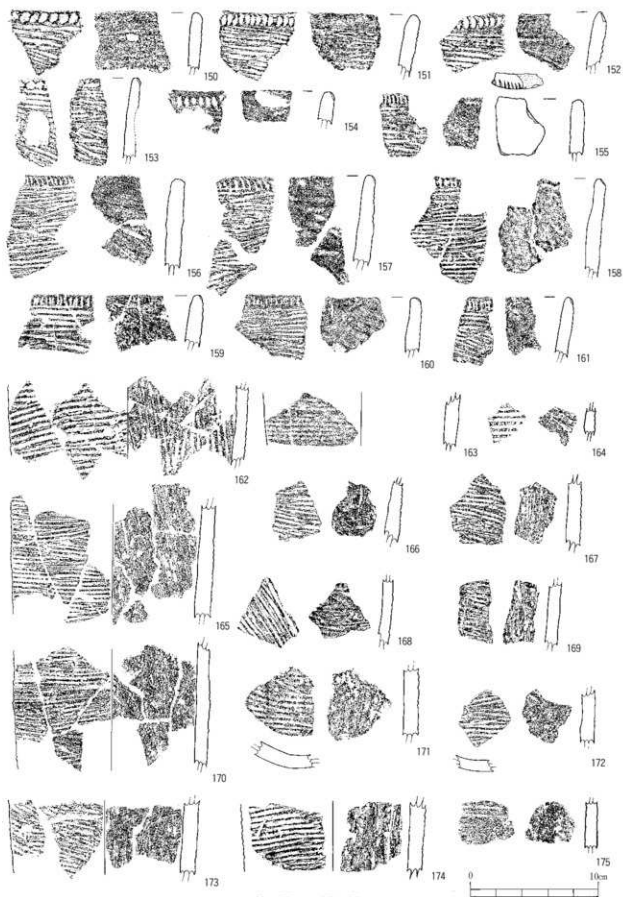
IV層から出土しており、器壁が厚く、外面全体に横方向を主とする貝殻による条痕が施されている。口唇部は丸みを帯びた山形に整えられ、その端部には縦あるいは斜め方向の短い刻みが施されている。刻みの幅や間隔はさまざまである。口縁部から胴部、底部にかけては幾分すばまるもののほぼ直線的であり、全面を貝殻条痕で器面調整がなされている。底部は確認できなかった。内面は、口縁部上面が横方向の、それより下位、胴部から底部近くにかけては斜め方向のナデ調整が行われており、胴部にかけては非常に細かく丁寧なケズリによる調整も観察される。

#### 7 類土器 (第62図, 176~211)

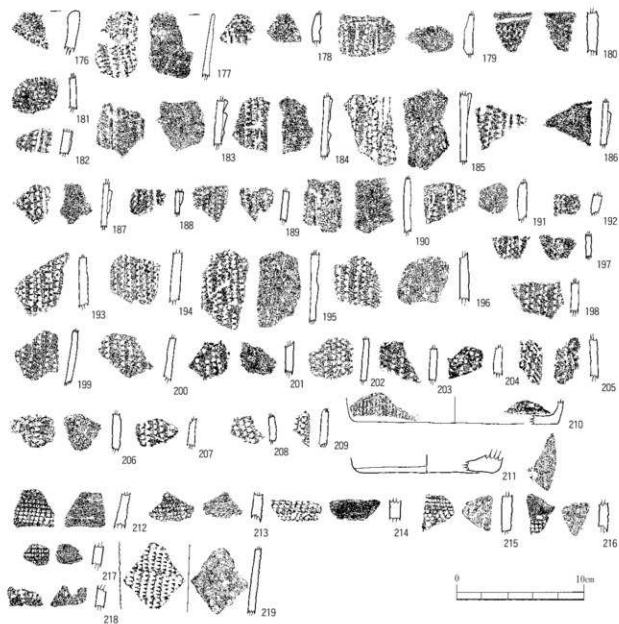
IV層から出土しており、器壁は非常に薄く、外面に主として縦方向の貝殻の押圧による施文があるほか、長さ3cm程度の楔形をした貼り付け突帯が縦方向に1ないし2段に付されるものもある。口唇部はたまたま厚く丸みを持って作られるものもあるが、基本的には非常に薄く平坦に作られ、端部には細やかな縦方向の短い刻みが施されている。口縁部上部には貝殻の肋の部分横方向になるように数段に押圧し、その後、同じく肋を縦あるいは斜め方向になるように押圧する。この場合、楔を貼り付ける際は楔と楔の間に数列押圧するが、楔を貼り付けない時にはほぼ全面に押圧を繰り返す。この貝殻腹縁による押圧も底部の若干上位までで、接地面付近には縦方向の短い沈線を狭い間隔で密に施している。底部は安定した平底であるが、若干上げ底となるものもある。内面の器面調整は全体的に丁寧なナデ調整によって仕上げている。

#### 8 類土器 (第62図, 212~219)

IV層から出土しており、器壁は非常に薄く、外面の上部を中心に横方向の貝殻の押圧と移動を連続して施した、いわゆる押し引き文が見られる。口唇部は薄く平坦に作られ、端部には6類土器と同様な細やかな縦方向の短い刻みが施されている。口縁部上部には非常に微細な列点が横方向に数段にわたって緻密に付されており、それより下位には貝殻の肋を連続的に横方向に押圧と移動を繰り返すことによって付された押し引き文が繰り返し付けられている。内面は横あるいは斜め方向の丁寧なナデ調整である。



第61図 6類土器



第62图 7·8類土器

#### 9 類土器 (第63図, 220~226)

IIIb層から出土しており、器壁は薄く、外面全体に主として斜め方向の短い沈線が交互に付されている。口縁部はさらに薄く外反しており、口唇端部は幾分尖り気味に丸まっている。口縁部の外面には横方向を主とした短い沈線が不規則に何列にもわたって施されており、その短い沈線は内面の口縁部付近にも同様に施されている。沈線の長さは幅の約10倍ほどであるのに対して、深さは幅の約2分の1程度あることから、割合に深く施文されているということが言えよう。頸部でほぼ下向きに向きを変えた後、緩やかに内傾しながら底部に至ると考えられる。頸部から胴部にかけては、口縁部付近よりも長くはなるものの、それほど極端に長くなることのない短い沈線が、横方向に左下がりと右下がりを繰り返しながら連続して施文される。内面は横方向の間隔の密な条痕によって調整されている。

#### 10 類土器 (第63図, 227~250)

IIIb層から出土しており、器壁は薄く、外面全体には横あるいは縦方向の貝殻による条痕が付され、口縁部から胴部上位にかけてはその上に縦あるいは横方向の極めて細い突帯を付している。口唇端部は幾分尖り気味に丸まっており、縦方向の細い突帯はそこから貼り付け始められており、口縁部外面の上部までで終わっている。突帯貼り付けの間隔はある程度規則的であるが、細かく観察すると狭まったり広がったりしているところや、方向も真下を向くものから幾分斜めになっているもの、途中で切れているもの、口唇端部にまで至っていないものなどさまざまである。口縁部から胴部へはほぼまっすぐに下がっていき、胴部の下部で内傾しつつ緩やかに傾斜しつつ底部に至るものと考えられる。胴部最大径付近にも極めて細い突帯が横方向に数条付されているものも見られる。この際には、一般的には等間隔でほぼ平行に貼り付けられるが、ものによっては間隔が不揃いであったり、向きが一部で上下に振れていたりする部分も見られる。また、破片の部位にもよる可能性はあるが、突帯が見られず貝殻腹縁による横方向を主とした条痕のみのものも見られる。内面の器面調整も横方向を主とする貝殻条痕で行われている。

#### 11 類土器 (第64図, 251~253)

IIIb層から出土しており、器壁はやや厚く、外面全体は主として縦方向の、内面全体は主として横方向の貝殻による条痕が施されている。口縁部は欠いており、形状は不明であるが、幾分外反しているものと考えられる。若干締まった頸部から再び幾分膨らんだ後に、大きくすぼまりながら底部へと向かっている。底部は、器形の大きさに比べると極端に小さいと思えるほどの規模の小さな平底であり、極めて不安定な底部と言える。器面の調整に施される条痕は、外面では口縁部から頸部、底部に至るまで縦方向のみであるが、それ以前に頸部付近を中心としたある幅については、横方向のある程度丁寧なナデ調整が行われている。また、底部外面にも同様なナデ調整の痕跡が残る。内面は、内底付近は上方向の条痕で調整が行われた後、すぐに横方向の条痕での調整が行われている。しかし、それより上位ではきめ細かな横方向のナデ調整が施されている。ただ、それ以後は再び横あるいは斜め方向の条痕によって調整が行われ、頸部から口縁部にまで至っている。252も同様であるが、器面の調整にやや違いが見られる。それは、外面の胴部上位に縦方向の条痕調整以前に、横



第63图 9·10類土器

方向のナデ調整が施されていることである。また、内面の胴部下位にも同様な横方向のナデ調整が横方向の条痕調整に先んじて施されていることが、251とは若干異なる点と言えよう。前ページの後2点(249, 250)も胴部から底部にかけての破片であるが、突帯が見られず、器壁も厚く、条痕の調整方向がこの類と同様であることから、これの仲間に入るものではないかと考えられる。253は小さな平底となる底部である。

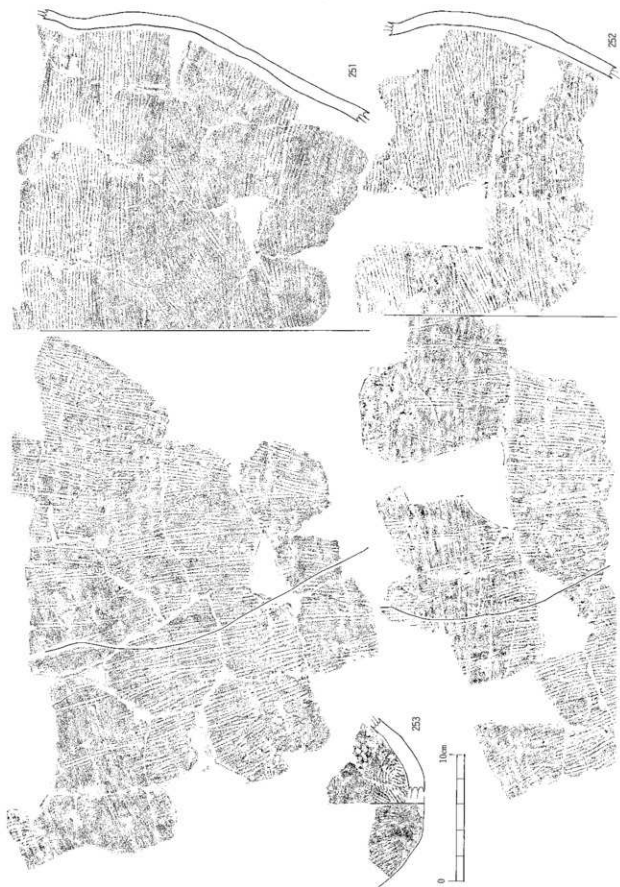
#### 12類土器 (第65図, 254~273)

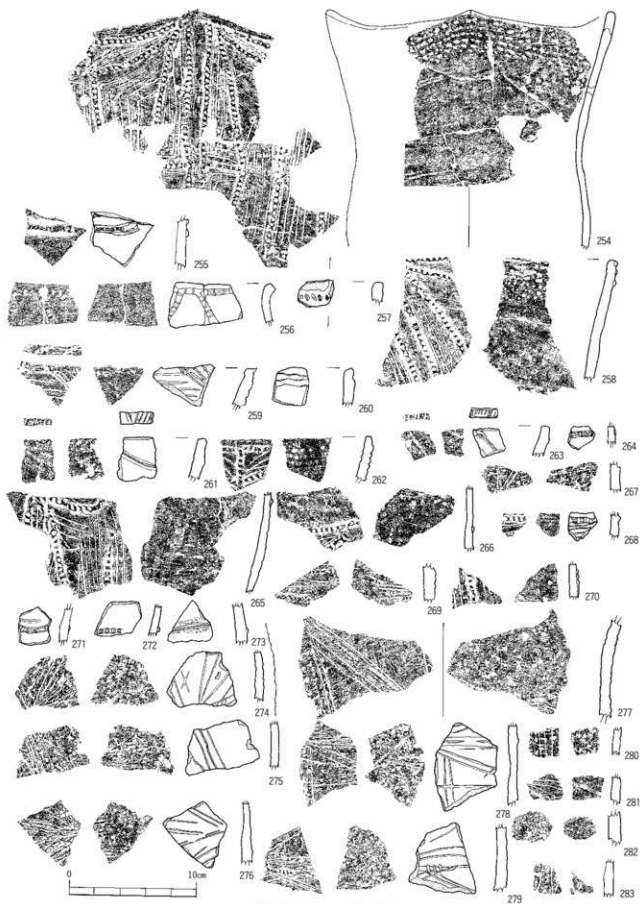
IIIb層から出土しており、器壁は非常に薄く、外面には口縁部から胴部全体にかけて口縁部にはそれに沿うように、それより下位には縦方向に細い突帯を付し、細やかな列点を刻んでいる。突帯の間にはその方向に沿うように細い数本の沈線が付されている。口唇端部はやや丸みを帯びた山形をしており、口縁部全体としては波状を呈している。間隔から考えると、4個の頂部を持つものと思われる。突帯は極めて細いにもかかわらず、その幅全体を使うように細やかな列点を突帯の長さ全体に付している。それは、突帯の向きとは無関係であることから、突帯自体には列点があるものという意識があったものと考えられる。突帯間の細い沈線は突帯と突帯の間隔に応じて、その間隙を埋めるように施文されていることから、間隔が広い場合には多数の線が引かれ、狭い場合にはごく少数の線が引かれている。その引かれる方向も突帯の方向に規制されるようであり、上下の場合にはほぼ上下に、波状を呈する場合にはそれに沿うように引かれている。ただ、突帯で上下と斜めが隣り合う場合には、上下から斜めへと漸次向きを変えていくことで突帯との向きによる違和感を感じさせないように考えた施文が行われている。口縁部は極めて高く外反して作られており、若干締まった頸部から胴部へは再び幾分膨らんだ後に緩やかにすばまって底部へと向かっている。口縁部には端部が外に小さく開くものがあるほか、口唇部に刻みをもつものもある。口縁部の内面には横方向に細かな列点が数列にわたって付されている。内面の器面調整は口縁部から胴部上部にかけては横方向の丁寧なナデ調整が行われ、胴部下位以下は斜め方向の同様な丁寧なナデ調整によって仕上げられている。

#### 13類土器 (第65・67図, 274~283・335~345)

IIIb層から出土しており、器壁は非常に薄く、外面には細い沈線が数本付されている。11類に類似するが、破片の部位による可能性も考えられるが、突帯を持たないことから類別を異にした。外面の器面調整は観察できる箇所では横あるいは斜め方向の丁寧なナデである。その上に、縦、横、斜めなどの細い沈線を何条か引いた後に、一部にその線上や線に沿うように長く、あるいは極めて短く列点を付している。内面は丁寧なナデによって器面調整がなされている。

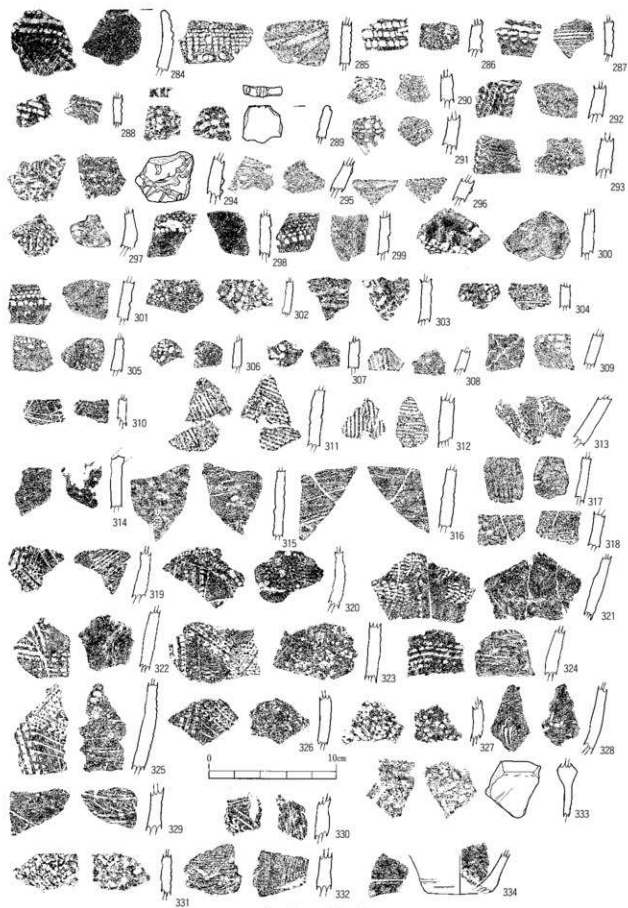
第64图 11 類土器





第65图 12·13類土器





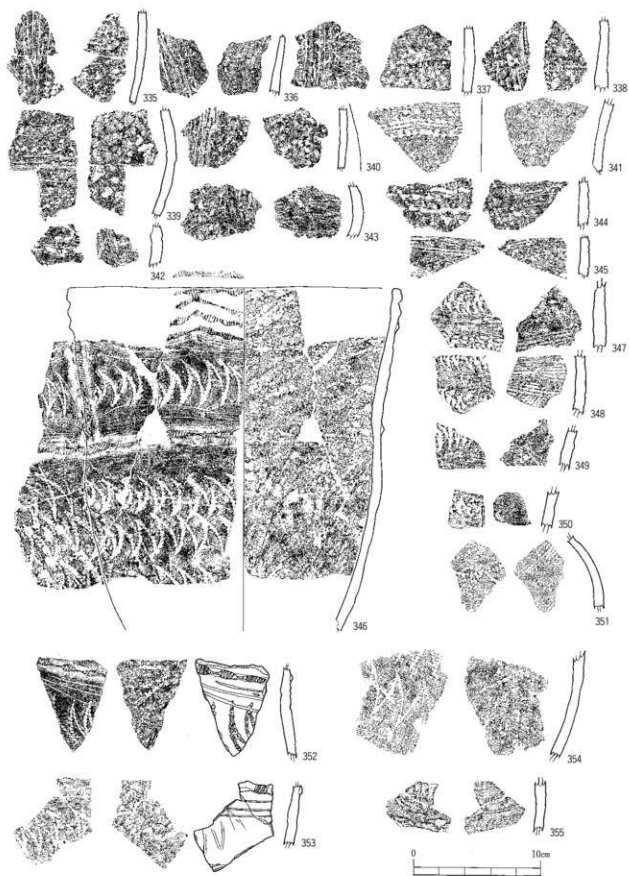
第66图 14類土器

#### 14類土器（第66図，284～334）

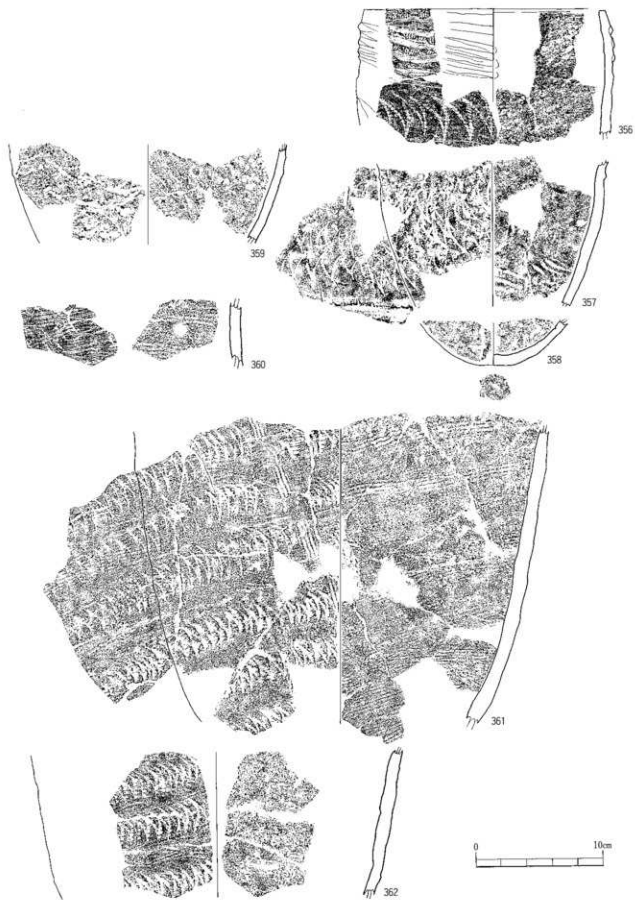
IIIb層から出土しており、器壁は薄く、外面には口縁部付近に列点が横方向に付されるほか、胴部にも沈線や列点が縦及び斜めに施される。口唇部は丸まった山形に作られ、縦方向に極めて短い刻みが付されているところもある。口縁部は幾分外反するものと内湾するものが見られる。口縁部外面には横方向にやや斜めを向いた列点が数列施されており、それより下位には極めて細い沈線が斜めに数本引かれ、それに沿うように列点が付されている。列点は大きさに違いがあるものと同程度の極めて細かいものが連続するものが見られるが、これが土器自体の個体の差異であるのか、同一個体の部位による差異であるのかについては、接合できなかったことから何とも言えない。また、列点の種類の中にはU字状をした、貝殻の肋を押圧したようなものも見られる。これについては、類別を異にする必要があるかも知れないが、ただ、施文の方法として細い沈線と列点という共通な要素によって成り立っていることから同一の類とした。内面の器面調整は主として横方向の丁寧なナデ調整である。個体によるのか、部分的に小さく円形に剝離した痕跡の見られるものもある。底部は不安定な、丸みを帯びた平底である。

#### 15類土器（第67～68図，346～362）

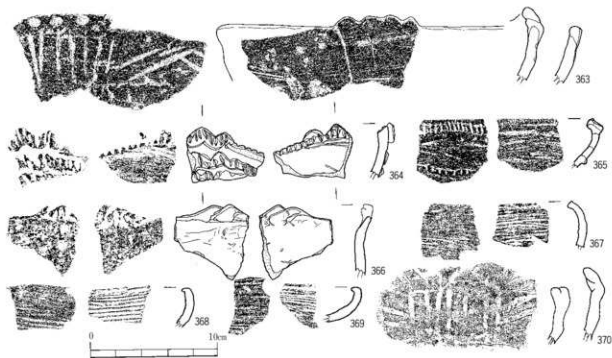
IIIb層から出土しており、器壁はやや厚く、外面には口縁部に3条の波状の貼り付け突帯を巡らし、部分的に押さえて平坦にした部分を作り出し、そこにやや斜めとなる細かな刻みを施す。その下位には細い沈線を横方向に突帯に合わせてやや波状に付け、その下には貝殻の腹縁によると考えられる押圧を波状に繰り返している。さらにその下位には沈線と突帯、貝殻腹縁による波状の押圧を繰り返す。胴部全体に貝殻腹縁による押圧を何段にもわたって繰り返すタイプのものは、一部に貝殻条痕が胴部上位から下位にかけて1条やや斜めに付されている。口唇端部は平坦に仕上げ、縦方向の刻みを口唇幅いっぱいから半分程度まで繰り返しながらリズムカルに付す。口縁部外面には細かな刻みを持つ3条の突帯が貼り付けられており、全体的にやや外反気味である。長い口縁部からはほぼ直線的に頸部に至るが、そこには1条の突帯が口縁部下位と同様に貼り付けられている。頸部からしばらくはまっすぐに下がった後、内傾して底部へと向かう。底部は一見丸底に見えるものの、実際には極めて小さく不安定な平底である。施文以前の器面調整は全体的に横方向のナデであるが、それほど丁寧なものではない。底部付近には貝殻の押圧はなく、荒いナデ調整が横方向に行われている。ただし、接地面については丁寧なナデ調整である。内面は、底部が上方向のナデ調整、胴部は斜め方向のナデ調整のものと貝殻腹縁による斜め方向の条痕で調整されたもの、斜め方向のケズリによる調整とが見られる。これは個体による調整の違いを表しているのかもしれない。また、外面の調整や施文とも連動している可能性が考えられる。口縁部付近は斜め方向の丁寧なナデ調整である。



第67图 13・15類土器



第68図 15類土器



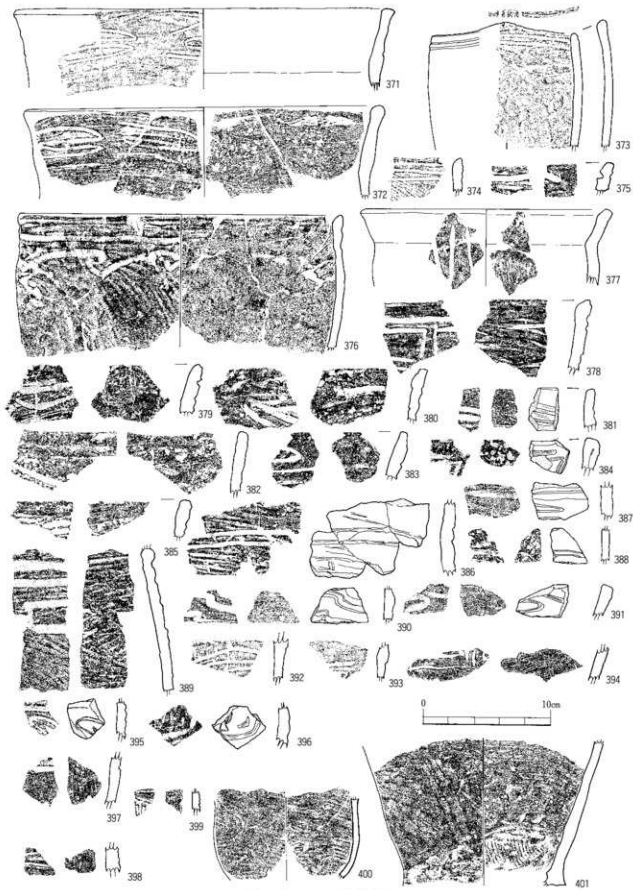
第69図 16類土器

16類土器（第69図，363～370）

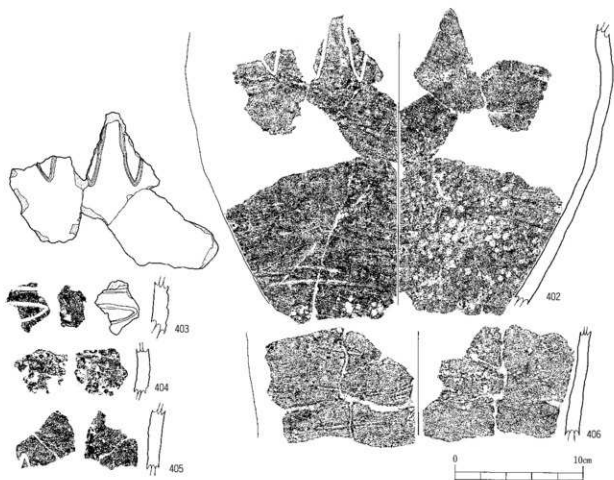
IIIb層から出土しており，器壁はやや厚く，口縁部は大きく弧状に内傾しており，キャリバー状を呈している。口縁部は基本的には丸みを帯びた山形であるが，何か所か突起部を設けるためにその部分だけ粘土を2～3段に積み上げた際，平たくなったり丸くなったり尖ったりと変化している。突起部の作りも，単に粘土を積み上げたものと粘土をねじって立体的に交差させたものがある。また，突起部への施文も突起部を押さえることで窪みを造り出したものや，縦方向の短い刻みを連続的に入れたもの，突起の造り出し以外には文様を付けないものなどさまざまである。突起部には口縁部にさらに突帯を貼り付けるなどした後，短い縦方向の刻みを連続的に付す場合や，短めの沈線を縦に7本程度，斜めに2本程度を連続的に付しているものも見られる。器面調整は，外面・内面共に貝殻の腹縁による横方向の条痕調整である。

#### 17類土器（第70～71図，371～406）

IIIa層から出土しており，器壁はやや厚く，口縁部に横方向あるいは長靴形，鉤状の幅のある沈線を繰り返して施している。口唇端部は三角形，山形あるいは平坦であるが，丸みを持って作られており，ほぼ直立するものを基準として，若干外反するものや内傾するものも見られる。沈線は口縁部外面に施されており，横方向に巡らせた2条の沈線だけのほか，その下位に連続する鉤形を横方向に施文するもの，長靴形の文様をつなぐに簡略化して並べたもの，同様な文様を縦に向きを変えて横に並べたもの，矩形を明確に意識した長靴形の文様などがある。口縁部は波状を呈するものもあるが，これの頂部には器壁の厚さ分の長さを持つ縦方向の刻みを4本入れている。口縁部が外反するものは，頸部はそれほど明瞭ではなく，胴部も大きく膨らむことなく緩やかに張り，その後は底部へ向かっては急速に直線的にすばまっていく。底部は安定した平底で，外へ大きく張り出す。胴部下部が膨らんだ状態のものもある。器面調整は，外面は口縁部付近は横方向のナデ調整であり，頸部から胴部にかけては主として斜め方向のナデあるいは貝殻腹縁によるケズリ調整である。ケズリ調整は，極めて粗雑なものや非常に細やかで丁寧なものとの双方がある。底部付近も同様であるが，底部自体は横方向のナデ調整である。内面は，口縁部が横方向のナデ，胴部の上部は縦方向のナデ，下部は横方向のナデ，そして底部は貝殻腹縁によるケズリ調整である。



第70图 17類土器 (1)

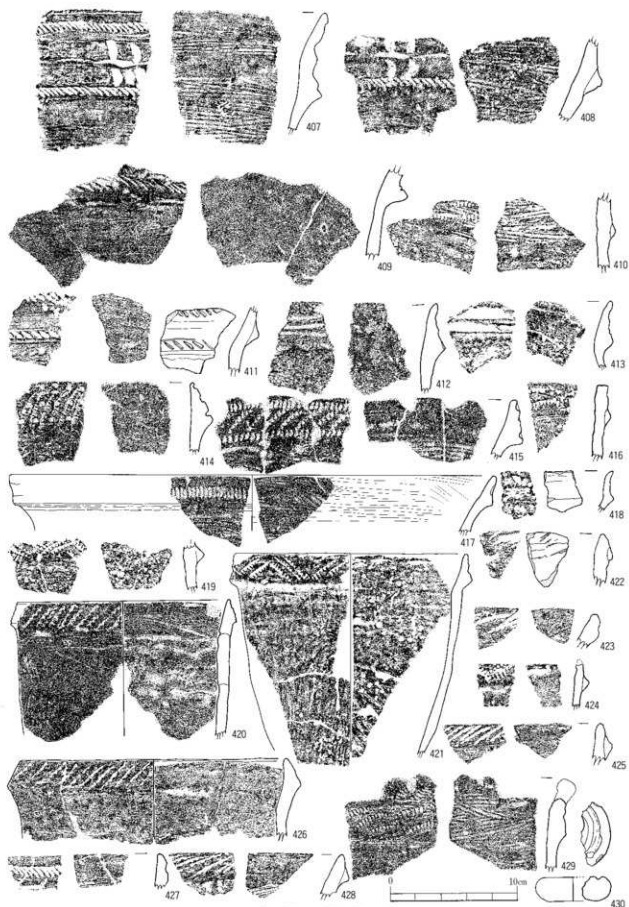


第71図 17類土器(2)

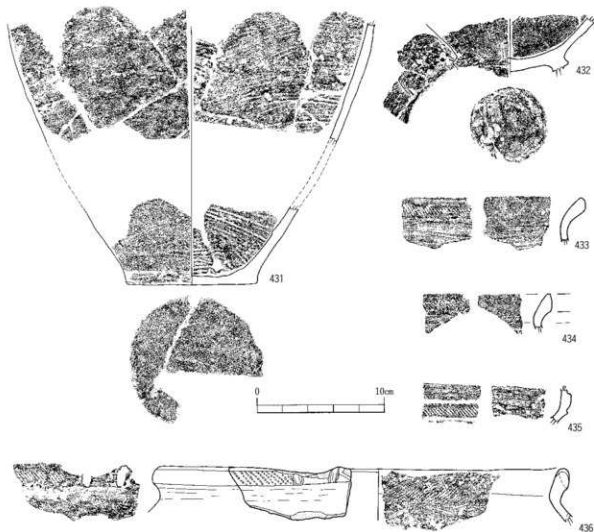
18類土器(第72~73図, 407~432)

IIIa層から出土しており、器壁はやや厚く、口縁部は長さにある程度の幅はあるが、全体的には三角形をしている。口唇端部は先端部を丸めた三角形をしており、口縁部の三角形の形状もさまざまである。407は口縁部が長いために端部の角度が小さく、鋭角となっている。口縁部外面は口唇端部下位および口縁部下方の稜の上方に斜め方向の短い刻みを密に付しており、それに扶まれたところに部分的に三日月形の刻みを2列に2個並べて施している。408も同様な施文である。409~411も口縁部下方の稜の上方に斜め方向の短い刻みが密に付される。412と413は口唇端部と口縁部下方の稜の上方との間に2~3条の沈線が巡っており、414と415には同様な部分に貝殻腹縁による押圧が斜めに連続して付されている。414と415に類似した施文は口縁部が短く、口唇端部の角度が大ききものに多く見られる傾向がある。口縁部下位からの胴部は緩やかにすぼまり、胴部下位からは割合に急速にすぼまって底部に至っている。底部は安定した平底で、外に若干張っている。器面調整は、外面が口縁部から胴部上部にかけては横方向の貝殻腹縁による条痕調整または丁寧なナデ調整、胴部下部は縦方向または横方向の丁寧なナデ調整である。底部付近は横方向のナデ調整、外底も丁寧にナデで仕上げている。内面は全体的に横あるいは斜め方向のナデあるいは貝殻腹縁による条痕調整である。





第72图 18類土器



第73図 18・19類土器

19類土器（第73図，433～436）

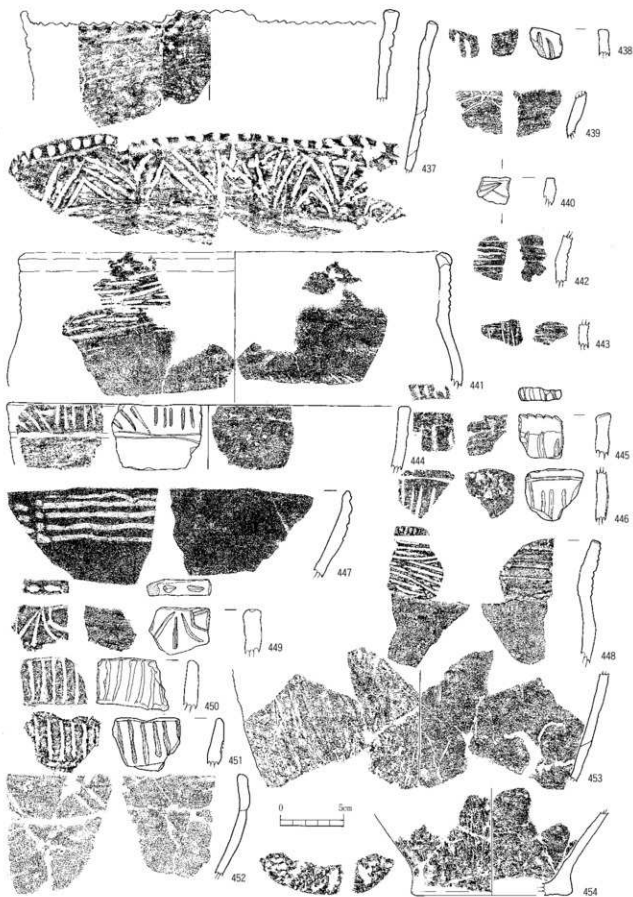
IIIa層から出土しており、口縁部だけしか確認していないが、やや肥厚した口唇部に細かな縄文を斜めに転がして施文している。口唇端部は三角形あるいは山形を丸めたような形状をしており、平口縁である。縄文は範囲を明示せずそのまま付される場合と、2条の沈線に囲まれた部分に付される場合の2通りがある。口縁部には、縄文のほかに向き合った斜めの短く幅のある沈線が付されている部分もある。口縁部は短く外反しており、頸部はやや縮まり、すぐに胴部が大きく膨らむ。口縁部から頸部付近のみについてはあるが、器面調整は、外面内面共に横方向の丁寧なナデによって仕上げてある。

#### 20類土器（第74図，437～454）

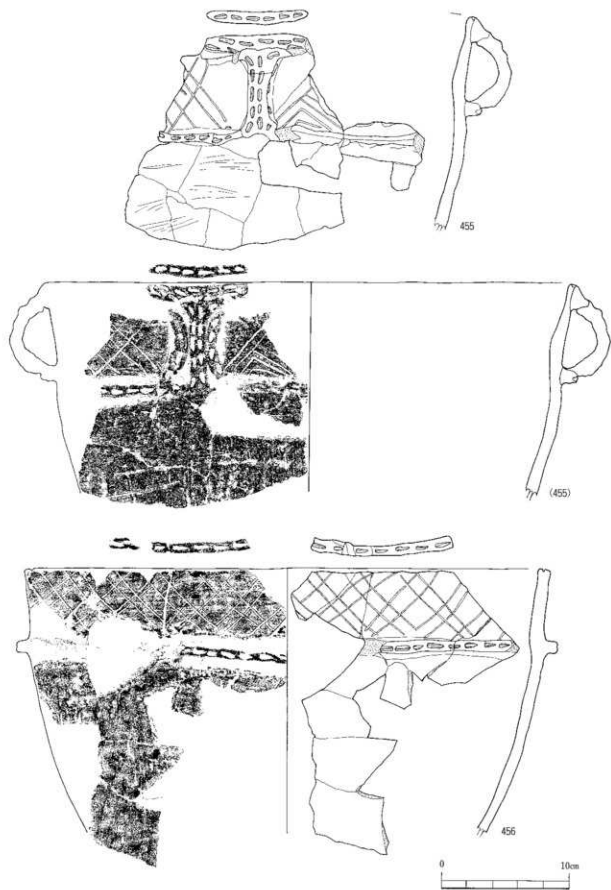
IIIa層から出土しており，器壁はやや厚く，口縁部は胴部より幾分肥厚しており，そこに縦・横・斜めの沈線のほか，沈線の幅と同程度の列点が施される場合もある。437は，口唇部は基本的には平口縁であるが，一部に台状に突起部を設けている。端部は全体に器壁幅の深く大きな刻みが付されていることから凹凸ができて見えるように見える。口縁部外面には2本および3本を基本とする斜め，場所によっては縦方向の沈線が付されていることから，全体的に鋸歯状の文様のように見える。器面調整は，内外面共に横方向のナデ調整である。441は，幾分肥厚させた口縁部の外面に，横方向を基調とする短めの沈線を，一見したところでは極めてランダムに付している。この土器については，ほぼ直立した口縁部の内側には明瞭な稜が見られ，外面は幾分不明瞭な頸部を持つ。ここからは胴部が張っていくようである。器面調整は，外面は口縁部付近が横方向の，胴部が縦方向の丁寧なナデ調整であり，内面は全体として横方向の丁寧なナデ調整である。なお，内面の胴部下部には貝殻腹縁による条痕が見られることから，条痕による調整の箇所もある可能性がある。444は肥厚した口縁部の外面に縦および斜めの短めの沈線を数本を単位として付している。施文帯は明瞭な段によって区切られている。447は口縁部の外面のみを肥厚させ，そこに横方向の沈線を巡らす，連続させるわけではなく，沈線の切れ目には沈線の高さの位置に丸い点を施すことでアクセントとしている。452は肥厚した口縁部に2本の斜めの沈線を間隔を置いて付している。施文帯には段を付けて明瞭にし，そこからは急激にすばまって底部へと向かっている。453は胴部の下部，454は底部である。器面調整は外面を縦方向に粗いナデで仕上げられており，内面は横方向の丁寧なナデによって仕上げる。外底は凹凸が激しく，丁寧な調整とは言えない。

#### 21類土器（第75～76図，455～459）

IIIa層から出土しており，器壁はやや厚く，口唇部には短い横方向の沈線が巡るほか，口縁部にも同様な沈線と，細くある程度の長さを持つ2本を単位とすると考えられる沈線が斜め方向に交互に施されることから斜格子状に見える。横方向の四角い突帯が巡るものや，把手の付くものも見られる。口唇部は基本的に平口縁に作られ，端部には横方向の短い沈線を連続して施す。口縁部はやや外反し，内面には口縁部下部に不明瞭な稜を持つ。それより下位，口縁部との距離と同程度のところまでまっすぐに降り，その下は割合に急角度で底部へとすばまる。口縁部に施文された沈線は，基本的には2本を単位として斜めに付すことで斜格子状となるが，場所によっては2本を単位とする斜線を交差させずに一方の沈線上で止めることで鋸歯状の文様または三角形の文様を作り出している。把手は，口唇部に接するように貼り付けた粘土紐を大きく弧を描かせながら，下方の沈線が終わる部分にまで貼り付ける。把手の厚さは器壁と同程度であるが，把手部を若干平らに広げている。器面には口唇部に付されたのと同様な短い沈線が刻まれている。把手の下部の付け根には，器壁と同程度の厚さを持つ突帯が横方向に1条巡っている。その端部にも，口唇部や把手に付されているような短い沈線が連続して付されている。器面の調整は，外面が口縁部から突帯下部にかけては横方向の丁寧なナデ，それより下位は縦方向の丁寧なナデ調整である。内面は基本的に横方向の丁寧なナデで仕上げられている。



第74図 20類土器



第75图 21類土器

#### 22類土器（第76図，460～462）

IIIa層から出土しており、口縁部に横方向や円形に近い文様のほか、長靴形の沈線の内部に巻き貝によると考えられる押圧の文様が細かに施される。口唇部を平らに作り、巻き貝によると考えられる細かな押圧が巡っている。口縁部には、口唇端部の下に横方向の沈線を巡らせ、その下位には取束せずに開かれた状態の楕円形に近い、先端を尖らせた形の沈線を向きを変えつつ施している。その下位には指宿式土器に普遍的に見られるような、沈線によって描かれた長靴形の文様の中に細かな押圧が施される。口縁部の内面にはやや明瞭な稜を持ち、そこから胴部にかけては若干膨らんでいる。器面調整は、両面共に横方向の丁寧なナデ調整である。

#### 23類土器（第76図，463～475）

IIIa層から出土しており、口唇部から口縁部を幅広く使って施文帯とし、そこに列点や捺糸文を施している。口唇部は平坦または山形であるが、端部を丸めて仕上げている。基本的にやや外反する口縁部の外面には、数段にわたる列点または斜め方向を主とする短い沈線が規則的あるいはランダムに繰り返して付されている。中には口唇部に突帯を貼り付け、その上に短い沈線を不規則に施しているものも見られる。器面調整は、基本的に両面共に横方向のナデ調整である。

#### 24類土器（第79図，476～490）

IIIa層から出土しており、幅の狭い口縁部には横方向の2条の沈線が巡っている。口縁部のすぐ下は大きく内傾した後に再び外反し、明確な稜を持って三度内傾して底部にいたる。口唇部は端部がやや尖り、内面のそのすぐ下位は若干窪んだようになる。2条の沈線は明瞭な線として口縁部外面を巡っている。2条の沈線のすぐ下位には稜があるため、断面の形状は押しつぶされたような三角形を呈している。その稜からは直線的に急速に内側へとすばまっており、頸部が非常に長い器形といえる。器面は内外共に丁寧なヘラミガキが横方向になされている。



第76图 21·22·23類土器

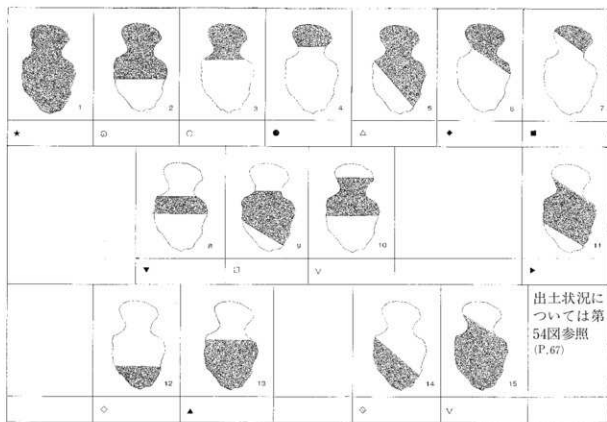


第77图 土器出土状况图(2)

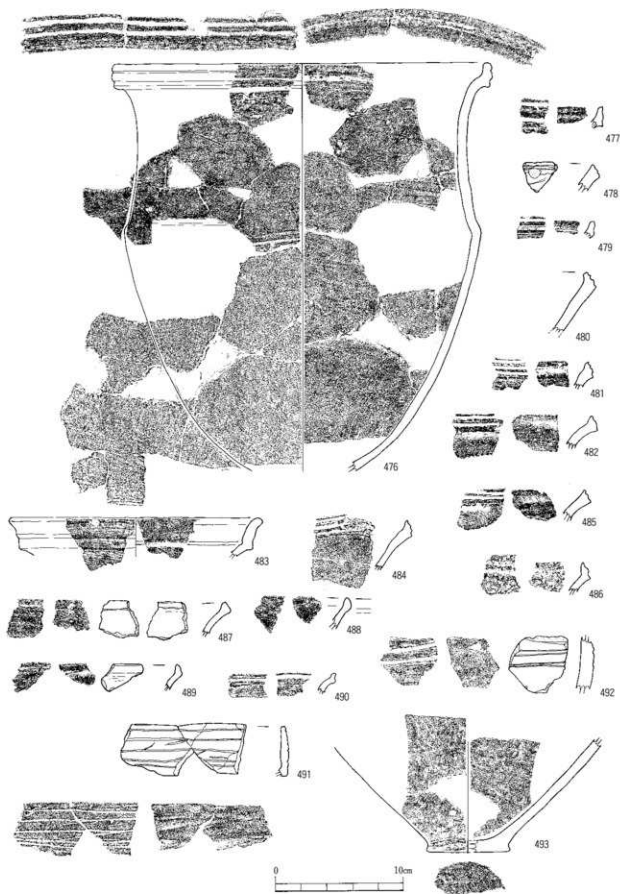


25類土器（第79図，491～493）

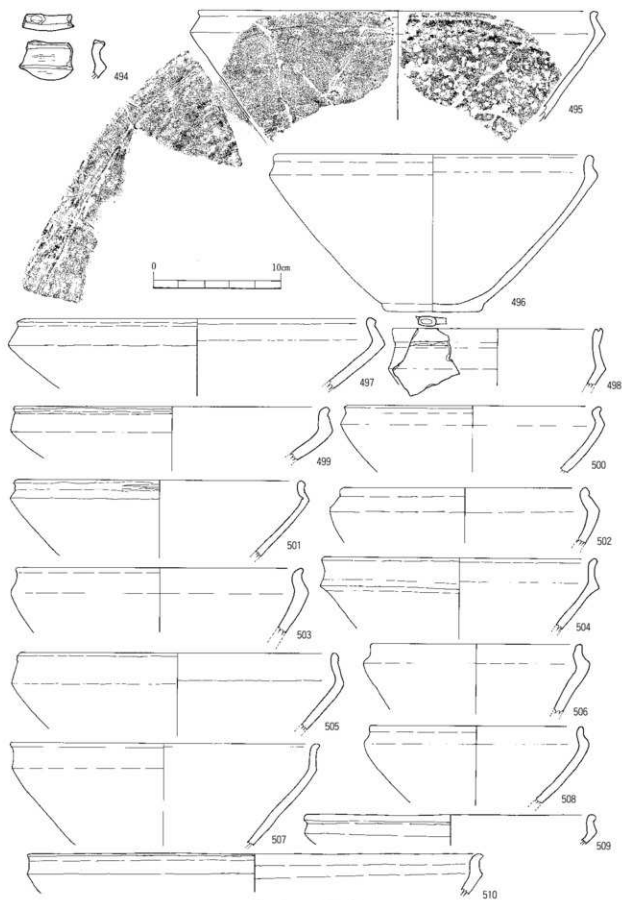
IIIa層から出土しており、幅の広い口縁部には横方向の沈線が巡っている。口唇部は丸みを帯びた山形であり、口縁部はほぼまっすぐかやや外反し、そこを施文帯として横方向の沈線が数条巡っている。口唇部の内面は一旦内側に入り込み、その後緩やかなカーブを描き、そのまましばらく下がった後に、再度外側に張り出した後、急速に直線的に底部へと向かう。ただ、そのまま底部につながるのではなく、丸まりながら取束していく。底部は安定した平底であり、外部に大きく張り出す。器面の調整は、口縁部から胴部の稜の部分までは横方向の、稜から胴部の下部までは縦方向、底部付近は斜めのそれぞれ丁寧なナデによって調整が行われている。外底も丁寧なナデによって仕上げられている。また、内面は基本的に横方向の丁寧なナデ調整である。口縁部の形状にはほぼまっすぐに立ち、その幅の広いものもある。そこには極めて細い5条の沈線がある程度ランダムに付されている。



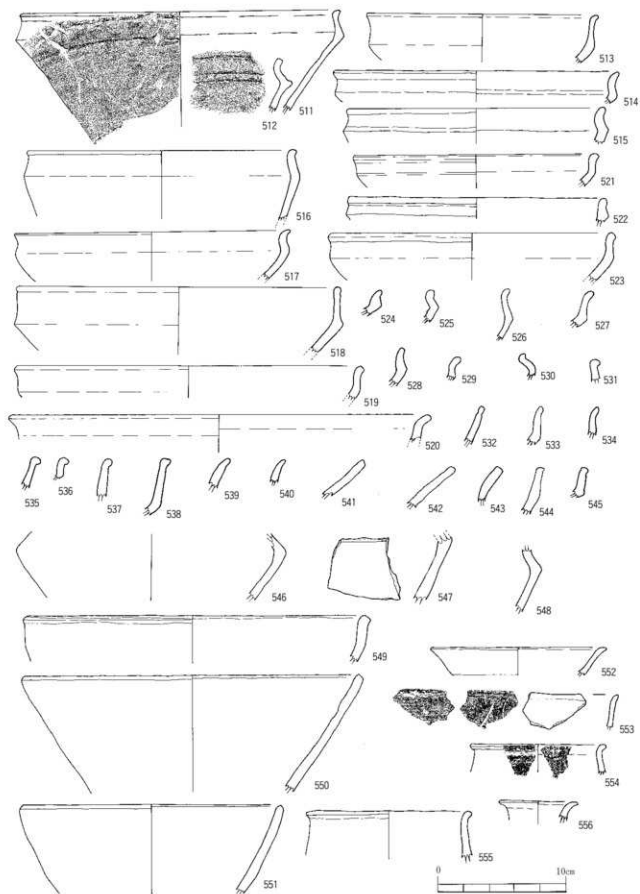
第78図 打製石斧分類模式図



第79図 24・25類土器



第80图 26類土器



第81图 26·27類土器

## 26類土器（第80～81図，494～512）

IIIa層から出土しており，器壁は薄く，玉縁となる口縁部の下位はすぐに外反し，明確な稜を持つてほぼ直線的に底部に向かう。口縁部は平口縁で，口唇部に器壁の厚さの楕円形の貼り付けを持つものもある。口縁部の内面には明確ではないものの稜を持ち，その稜から外に向かって広がった後，今度は窪みながら大きく内傾して底部へと一直線につながる。底部は安定した平底で，外に向かってやや張り出している。底部と胴部の境には段が付く形となっている。外面の口縁部下方の稜から口縁部にかけての立ち上がり方はいくつかのパターンがあるようである。495は口縁部が大きく内傾しており，稜や玉縁状の口唇端部が明瞭なものである。器壁が他のものに比べて薄いことによるのかも知れない。496は495よりも器壁が厚く，口縁部の立ち上がりがほぼ真上で，端部の玉縁と稜は明瞭ではない。498は稜からの立ち上がりが内傾しながらほぼ真上に高く上がるもので，楕円形状の貼り付けを口唇部に持つ。501は器壁が薄く，口縁部が短くほぼ真上に立ち上がり，玉縁は明瞭でない。502は器壁が全体的に厚く，稜は不明瞭で口唇端部はやや尖る。506も器壁が厚く，稜の周辺は外面で大きく張っており，端部は小さく丸まっている。507は薄い器壁がほぼまっすぐに立ち上がり，端部が若干外に開く。そのほかにも口縁部の形状はさまざまである。端部も玉縁状となるものから，山形状で丸まるもの，四角形に角張るもの，鋭利に尖るものなどであるが，そのすべてがこの類の範疇に入るものであるかどうかは小片のため不明である。細分する必要があるかも知れない。器面調整は，外面が全体的に横方向の丁寧なナデで仕上げられており，内面は口縁部付近は横方向の，内面の稜より下位は縦あるいは斜め方向の，それぞれ丁寧なナデ調整およびヘラミガキによって仕上げられている。

## 27類土器（第81図，513～556）

IIIa層から出土しており，器壁はある程度厚く，やや細くなる口唇部からそのままほぼ直線的に底部に至る。器形全体が大きく外反して鉢状となるものである。口唇端部が若干山形となっている。このため，内外両面にある程度明瞭な稜が見られる。516は復元口径が21.3cm，口縁部から残存する高さは5.4cmである。517は復元口径が21.8cm，残存高さは3.7cmである。

## 28類土器（第82～83図，557～572）

主にII層から出土しており，器壁は厚く，口唇部下位には横方向の刻みを有する突帯が巡っており，大きく内傾した口縁部の下位にも同様な突帯が巡り，そこを胴部の最大径として再度大きく内側に屈曲して底部へと向かっている。口唇端部は全体的に丸まっており，大きく内傾した口縁部はそのままか上端で幾分外反している。外面には，口唇端部から少しだけ下がったところに突帯を巡らせているが，それに付される刻み目にはいろいろなバリエーションが見られる。また，口縁部より下部の張り出した部分にも同様な突帯が巡っており，刻み目も付されている。557は右側から斜め方向に切り込んで左手前に引き抜くことで，右側を頂点とする三角形のように見えるものである。ただ，引き抜きが瞬間的かつ鋭角的でなく，ゆっくりと手前に回すような動きであったことから，やや丸みを帯びたラインとなっている。刻みの規模には大小があり，統一性は見られない。2段目の突帯への刻み目も1段目とほぼ同様な方法で刻みが付されている。558は端部がやや外反してお

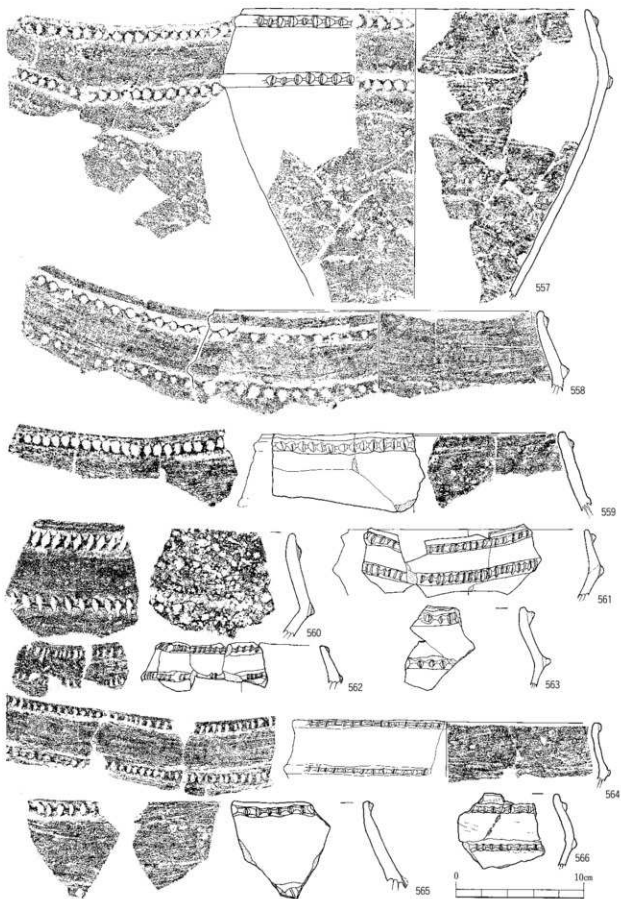
り、突帯の高さが557より高い。刻み目は刻む方法は557と類似するが、規模が若干小さいこと、刻みの間隔がやや広く、割合に揃っていることなどが557との相違点と言える。2段目の突帯に付された刻み目は大ききもやや不揃いで、位置も統一性が崩れているものの、間隔はほぼ一定で広い。559は2段目の突帯がほとんど欠損しているため刻み目の状況は不明であるが、1段目で見ると、刻み目は左側から低く入り、深く切り込んで一旦止め、次に右側に向きを変えてゆったりと引き抜いている様子が伺え、全体的な形状が円形に近い、中央部を中心とした対称的な形をしている。560は突帯の高さが低い割に、刻みが深く刻まれているために、全体的な形状が菱形を呈している。しかも、1段目と2段目とで向きが異なっている。これは、意図的に刻む向きを変えたからに他ならないと考えられる。562～566は刻み目の幅が1段目も2段目も同様に極めて小さなものである。器面の調整は、基本的に内外面共に横方向の丁寧なナデである。

#### 29類土器（第83図、573～586）

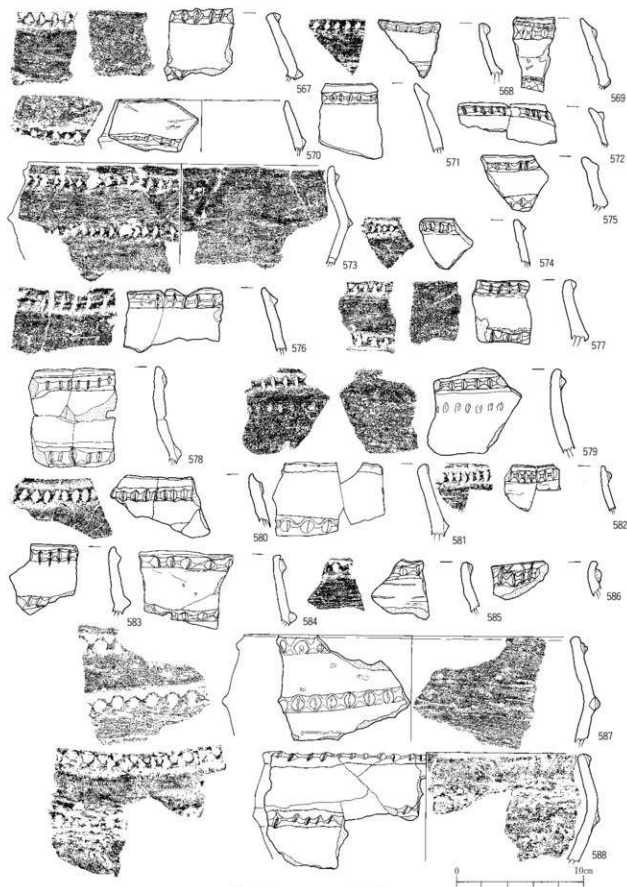
Ⅱ層から出土しており、形状は28類土器と同様であるものの、口縁部の内傾の度合いはそれよりやや緩い。口唇端部の形状は、やや尖り気味である。口唇部より少し下位と、外面の口縁部から離れた下位の膨らんだ部分に刻み目を持つ突帯が2条巡るのも28類と同様であるが、口縁部がやや立ち気味に内傾しているところが差異である。その意味では、内傾する口縁部の上部が反外気味に立ち上がっていることと、膨らんだ部分から口唇部への角度が立ち気味に開くこと、膨らんだ部分の張りが幾分小さくなること、などが類別のポイントと言える。573は口縁部の上部が立ち気味となっており、2条の突帯に付された刻み目は左下がりに深く小さく刻まれ、極めて細長い菱形が崩れたような形となっている。この類は、全般的に刻み目が小さい印象を受ける。579は口唇部やや下位の刻み目突帯の下方に、突帯を持たずにそれほど明瞭でない刻み目が刻まれており、類例のないものとして印象的である。577は口唇部の外側にそのまま突帯を貼り付け、その手前上端に極めて浅く小さな刻みを施しており、点状に見える。突帯自体も一直線に丁寧に貼り付けられたものではなく、あまり整えられていない。583と586は刻みの幅が非常に狭く、深く刻まれているために鋭い線状に見える。殊に586は突帯ばかりでなく体部にまで刻みが及んでいる。585、586の口唇端部は外に小さく張り出している。器面調整は、内外両面とも横方向の丁寧なナデである。

#### 30類土器（第83～84図、587～601）

Ⅱ層から出土しており、形状は28・29類土器と同様であるが、口縁部の内傾の度合いはさらに緩くなる。口唇部は丸まった山形のものも多く、尖り気味のもの、角張って平坦なものなどのバリエーションもある。587は膨らんだ部分から口縁部に向かって幾分内傾しながらほぼ直線的に立ち上がる。口唇部は丸みを持った山形である。膨らんだ部分の外面に貼り付けられた突帯は横一直線よりも幾分上がり気味となっている。刻み目も最も深く刻まれた中央の部分が縦一直線に明瞭に残っている。また、強い力で刻まれた結果、刻みの中央部は若干上下方向に押されて飛び出している様子が観察される。膨らんだ部分の内面側はU字状に大きく抉れたような形になっている。588は突帯を口唇部からそのままの高さで外面に貼り付ける。刻み目は外面手前側の角に斜めに押しつけて刻んでいるほか、口唇端部にも一部刻みが見られる。刻みの大きさや間隔、向きなどに統一性が薄いこ

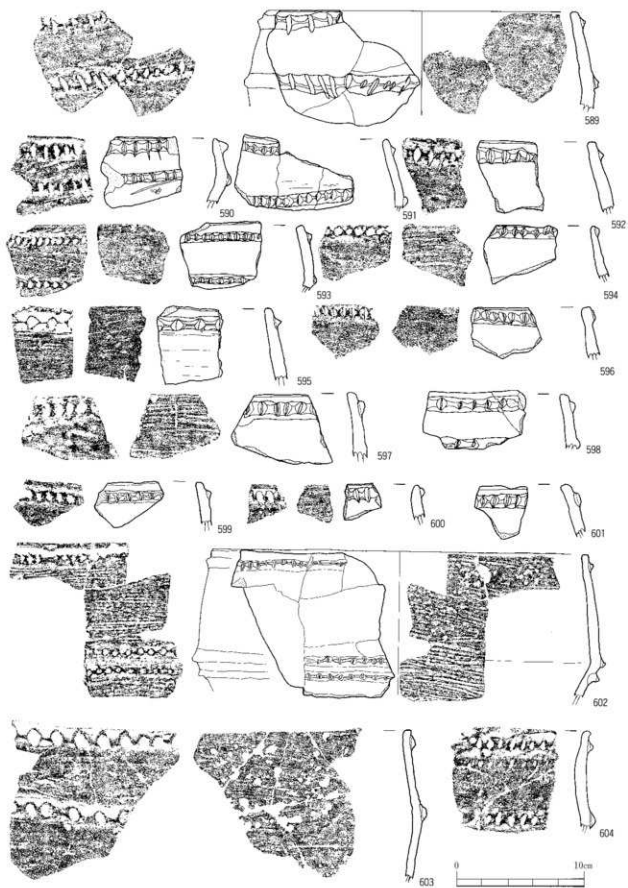


第82图 28類土器

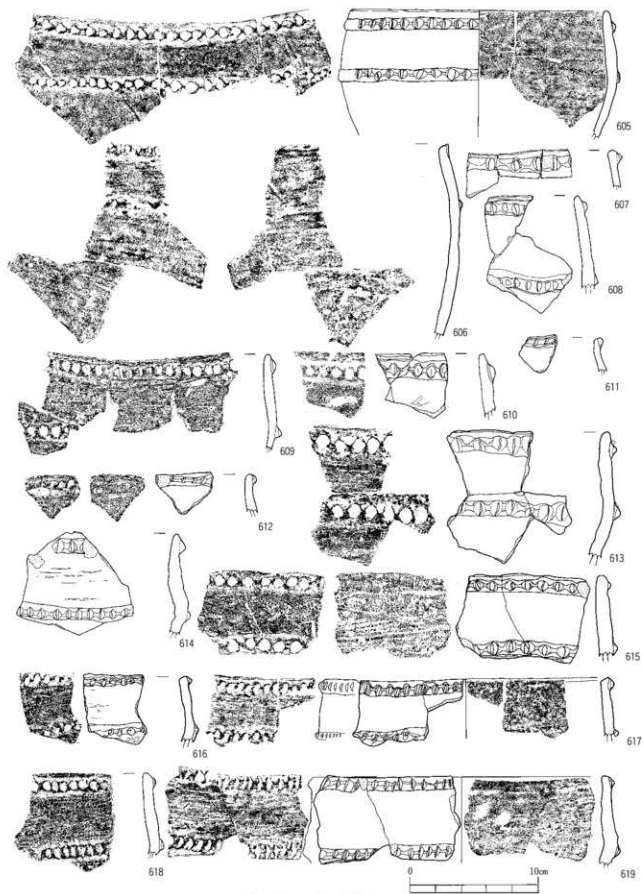


第83图 28·29·30類土器





第84图 30·31類土器



第85図 31類土器 (1)

とから、極めて粗雑な印象を受ける。膨らんだ部分の内面側は、U字状に大きく抉れたようになって  
いる。589は上段と下段の突帯の刻みの方向が、いくらかのまとまり毎に向きを変えており、全体的  
には逆ハの字状となっている。これも刻みの大きさや間隔、向きなどに統一性が見られないことから  
雑然とした印象を受ける。器面調整は全体として横方向のナデ調整であるが、597は一部に刻みの  
向きに合わせるように斜め方向のナデも見られる。

### 31類土器（第84～86図，602～641）

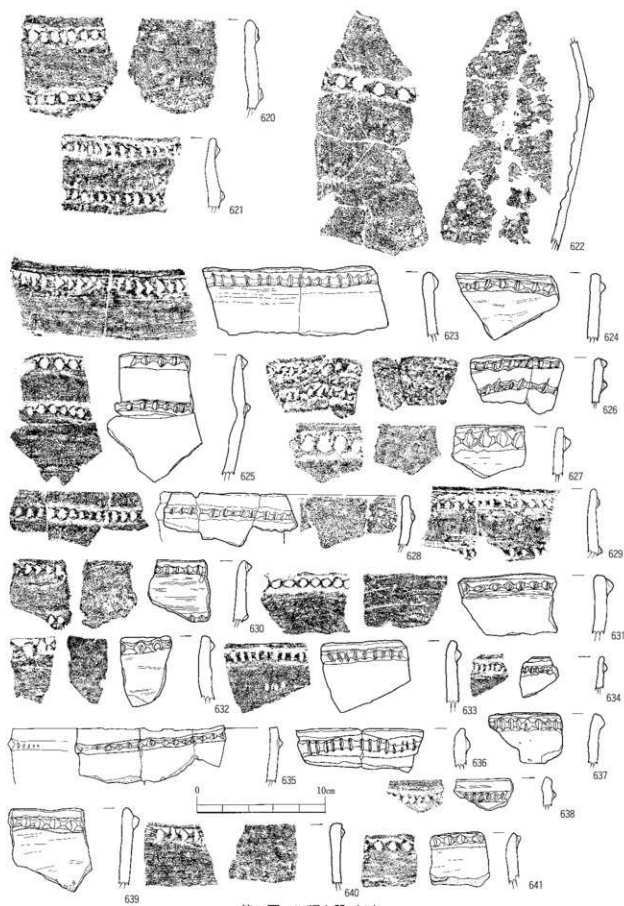
Ⅱ層から出土しており、形状は28～30類土器と同様であるものの、口縁部の内傾の度合いは極め  
て緩くなり、ほぼ直立した状況となる。口唇部は平坦あるいは丸まった山形を呈している。602は口  
唇部の少し下位に1条の突帯を巡らすことは一般のものと同様であるが、膨らんだ部分に巡らせて  
いる突帯が2条であることが異なっている。下方の2条に刻まれる刻みはそれぞれ個別に付されて  
いることが、上下で刻みが揃っていないことからわかる。2条目の突帯は膨らんだ部分よりも下位  
に、下向きに付いている。これについては、器面調整が両面とも貝殻腹縁による条痕によって調整  
されており、際だった特徴となっている。603は幾分直立気味に外反しており、604は口縁部の中程  
から小さく外反する。604は口唇部より少し下位に巡らせた突帯の下方にも刻み目が見られるが、こ  
れは突帯に刻み目を施す際に、下まで引いて刻んだ結果として付いたものと考えられる。器面調整  
は、内外両面共に602以外は丁寧な横方向のナデで仕上げている。

### 32類土器（第87～88図，642～665）

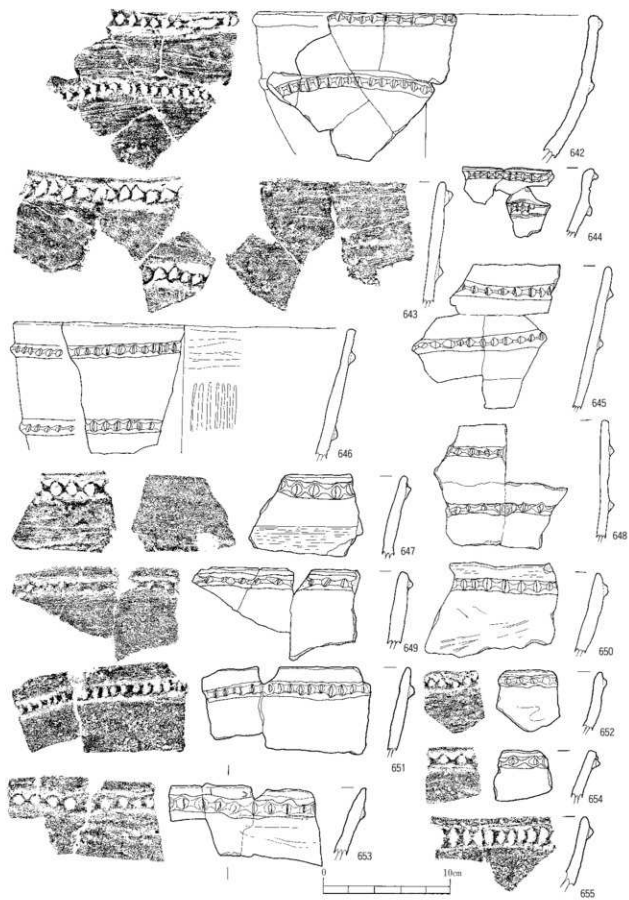
Ⅱ層から出土しており、形状は28～31類土器と同様であるが、口縁部は外反している。642は口唇  
部のすぐ横に突帯を貼り付けると共に、それより下方にも離れた部分にうねるように突帯を貼り付  
けている。刻み目は細かく刻まれており、規模や間隔などは割合に揃っている。2段目の突帯より  
下位は急カーブで内湾している。643は口縁部がほぼ直線的に広がっており、2段目の突帯は642と  
同様に若干うねっている。刻み目は規模が大きく、明瞭に刻まれている。644～645は2段目の突帯  
は見られないが、これは口唇部からそれほど離れていないか所までの破片のためであると考えられ  
る。口唇部は丸まった山形よりも、割合に尖ったようなもので先を丸めたようなものの方が多いと  
言える。

### 33類土器（第88図，666～679）

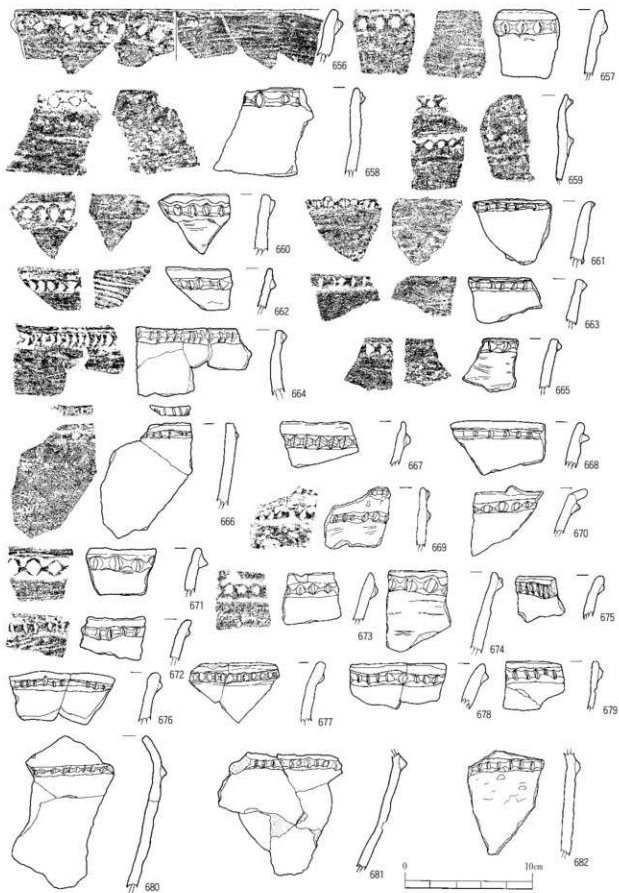
Ⅱ層から出土しており、形状は28～32類土器と同様であるが、口唇部のすぐ下位ではなく若干離  
れた場所に突帯が巡るところが大きく異なっている。669は口唇部から一般的なものよりもはるか下  
方に1条目の突帯がやや下向きの弧状に貼り付けられ、2条目は上向き気味に貼り付けられてい  
る。670は1段目がやや上向きに、2段目はほぼ水平に貼り付けられているようである。この2本の  
突帯の間隔はほかのものに比べると非常に広いと言えよう。674は貼り付ける方向などが669に類似  
している。そのほかに、2条目の突帯が見られない破片もあるが、これも上部のみの破片であるた  
めであろう。これらは全体的に器面調整は内外面とも横方向のナデ調整である。



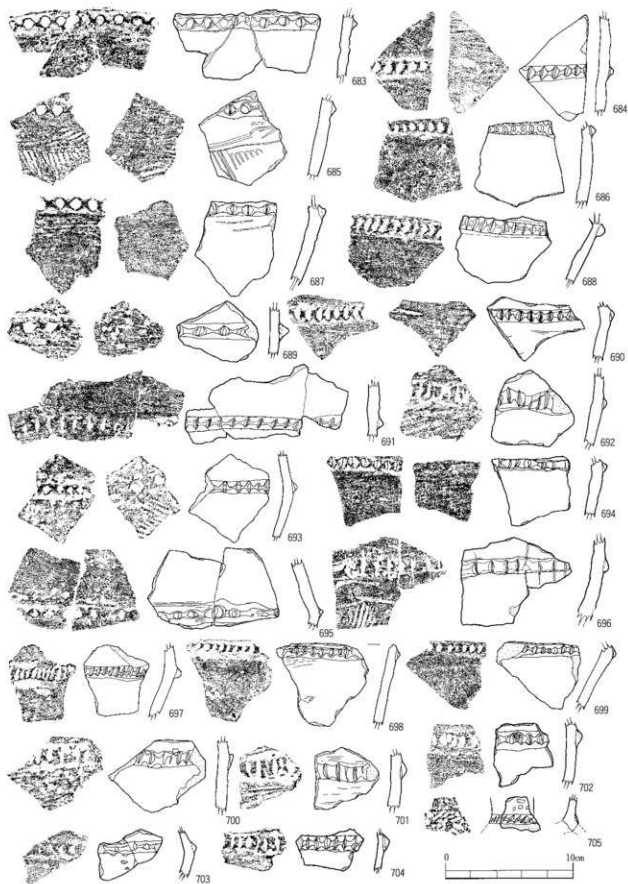
第86図 31類土器(2)



第87图 32類土器



第88图 32·33類土器・突帯



第89图 突带

突帯（第88～89図，680～705）

34類土器（第90図，706～721）

II層から出土しており，器壁は厚く，口縁部はほぼ直立しており，内外には突帯は付されず，一般的にやや粗いナデ調整が横方向に施されている。器形としては浅鉢であろう。口唇部は割合にゆったりと丸まっており，不明瞭ながら内面あるいは外面の端部近くに稜の入るものも見られる。706は復元口径が35.0cm，残存高さは8.4cmである。直立した口縁部は高いが，それより下位は内側に大きくカーブを描いてすぼまる。器面調整は内外面共に割合に丁寧な横方向のナデである。707は復元口径が28.5cm，残存高さは7.6cmである。外面の口唇部の下位がやや窪んでいるため，稜が入るように見える。器面調整は外面上部が横方向のナデ，下部は縦方向のナデであるが全般的にやや粗い。内面は全体として横方向の丁寧なナデである。708は復元口径が22.0cmとやや小振りである。口縁部がやや外反し，胴部は幾分膨らみ気味であるが，それより下位は急速に内側にすぼまっていく。709の口縁部も端部がやや外反しており，若干玉縁状にも見える。710も708と同様に小振りの浅鉢である。内面は幾分凹凸があるものの，胴部から底部に向かってはほぼ直線的にすぼまっていく。711～717は口縁部を集めたものである。716は部分的に口唇部の上部に貼り付けを行って山形を作り出しており，かさ上げた部分の器壁が若干膨らみ，ある意味で玉縁状となっている。721は口唇端部の外面方向を窪ませ，内面側の突起状に見える部分に細かく短い刻みを連続的に施している。若干外反する器形と言えよう。

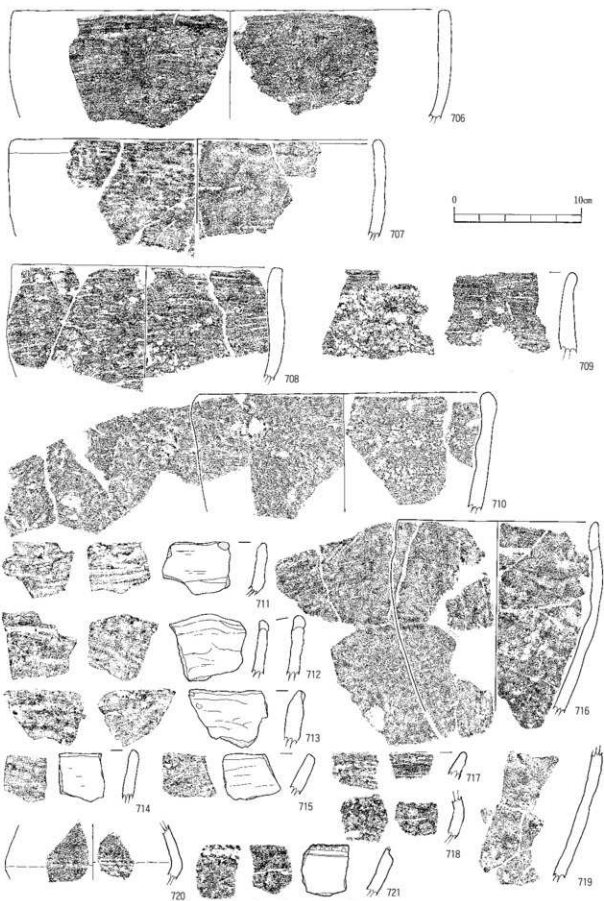
35類土器（第91～92図，722～739）

II層から出土しており，器壁は厚く，底部を緩やかなU字状に作り，組織の痕跡が残っている。口唇部は基本的には山形を丸めたような形であろうが，部分的に内面側に張り出したような玉縁状に作っているところも見られる。全体的な形状は内湾するマリ型と考えられ，口縁部下位の胴部もさほど張らずに浅く，底部にかけてはすぐに丸まり，底部は広く安定した平底であると思われる。胴部より上位の器面は内外面共に横方向を中心とした，割合に粗雑なナデ調整である。ただ，外底には植物の組織などの痕跡が付いている。極めて細い筋状のものが並べられた上に粘土塊を乗せて広げて製作したと考えられる。その様子は，739の底部でよくわかる。植物由来と考えられる組織の上で平たい楕円形に底部を板状に作り，その後，上方に粘土を継ぎ足して胴部から口縁部へと作り上げて行くような製作過程が考えられるのである。内面は丁寧なナデ調整によって仕上げられているが，内底には加熱によって円形に弾けた痕跡が多数残っている。

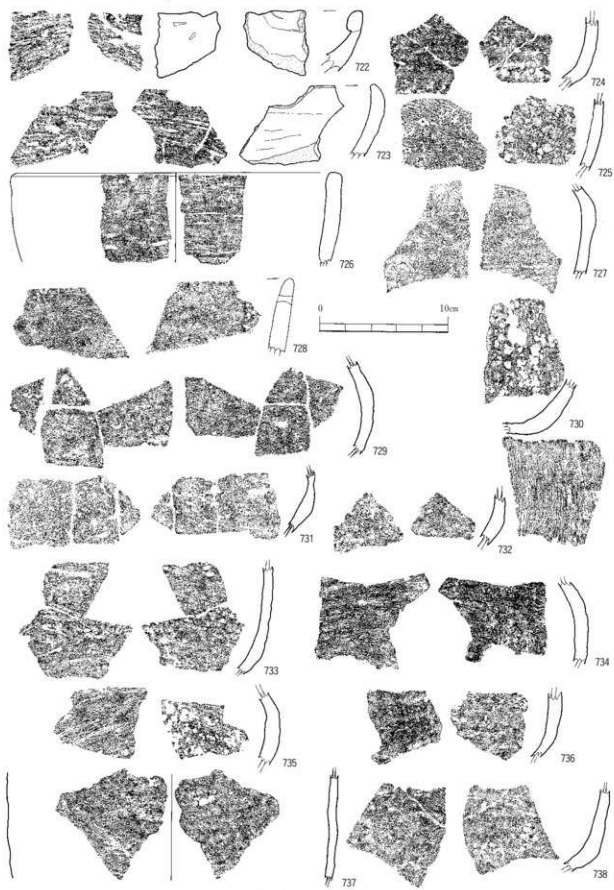
36類土器（第92図，740～748）

II層から出土しており，器壁は厚く，底部外面に筵目の痕跡が残るものである。筵目の横糸は極めて細いものであるが，間隔がそれほど密でないことから目の詰んだ状態であるとは言い難い。縦糸の間隔には広いものと狭いものがある。基本的に器面の凹凸が激しく，器壁の厚さは場所によって薄く厚いが極端に分かれる。極めて整然とした織りが見られる反面，粗い織りのものも多く見られる。なお，内面の調整は割合に丁寧なナデによって仕上げられているようである。内底には加熱によると考えられる。円形に弾けた痕跡のあるものも見られる。

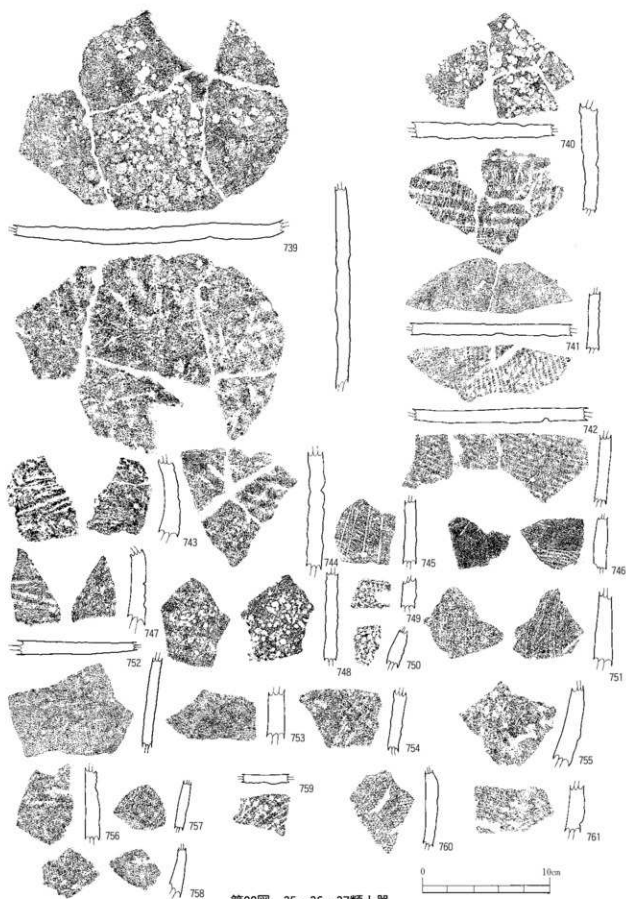




第90图 34類土器



第91图 35類土器



第92图 35·36·37類土器

### 37類土器（第92図，749～761）

II層から出土しており、器壁は厚く、底部外面に布目の圧痕が残っている。筵目よりは格段に目が詰んでおり、丁寧に織られた様子が伺える。筵目圧痕の土器よりも器壁の凹凸は少なく、全体として均一な印象を受ける。

### 底部（第93～95図，762～859）

底部である。基本的に縄文時代晩期のもと考えられるが、うまく接合できなかったことから1つの類としたが、本来はいずれかの類に属するものである。形態から大きく3つに分けられる。

### 平底（第93～94図，762～826）

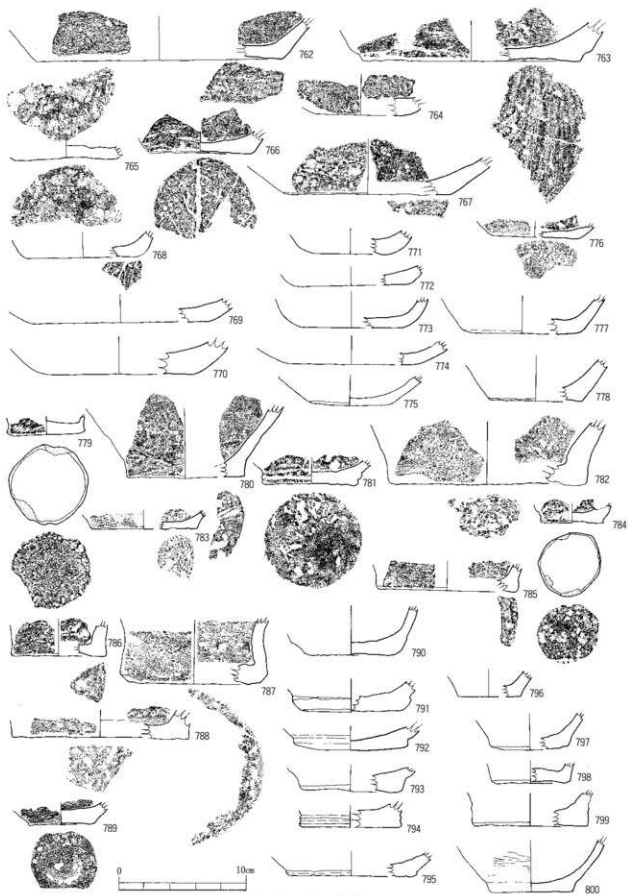
細かく分けると、胴部からはほぼ一直線に底部につながるもの（762～767）、胴部からのラインが角がなく丸まりながら底部につながるもの（768～778）、底部の上端がストーンと真下に落ちるもの（779・800）、接地面の端部が外側に張り出すもの（801～826）などがある。762は復元底径が19.4 cmとなるもので、器面の調整はすべてナデ調整が行われている。763は接地面の上方には凹凸が見られる。外底は一方方向の強く粗いナデの後で外周付近を同様なナデで調整している。底部に角がなく丸みを持ったものには、胴部回りの器壁と同程度の厚みのものと、それよりも厚いものが見られる。底部の上端がストーンと真下に落ちるものは内面のカーブが割合に緩やかな印象を受ける。接地面の端部が外側に張り出すものは、器壁よりも厚い底部となるものがほとんどで、また、この時期の底部としては圧倒的な数になっている。

### 上げ底（第95図，827～856）

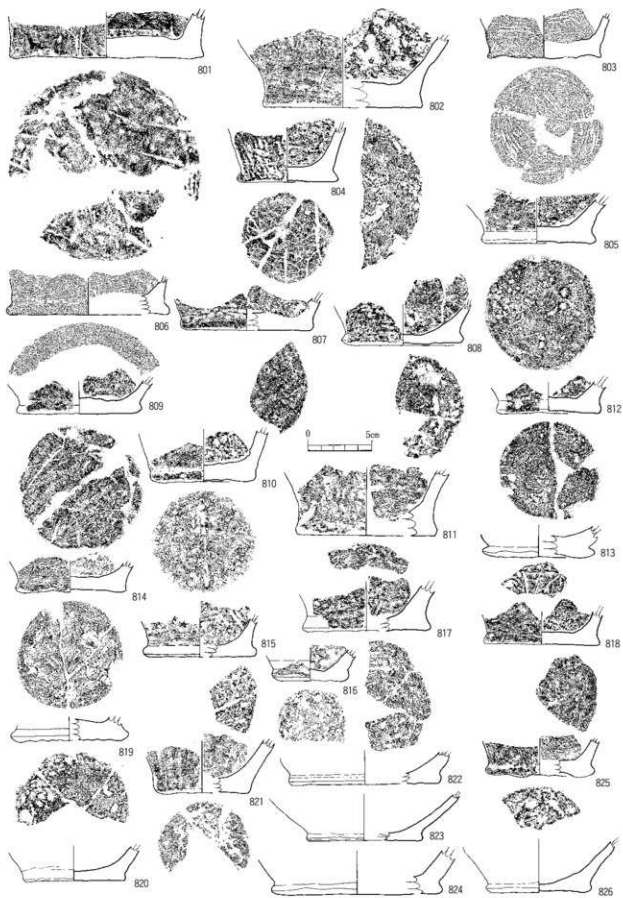
破片では上げ底になるのかそうでないのかの区別はつけにくいですが、ここでは破片が大きく確実に上げ底であるものを掲載した。細かく分けると、胴部からはほぼ一直線に底部につながるもの（827・828）、胴部からのラインが角がなく丸まりながら底部につながるもの（829・830）、底部の上端がストーンと真下に落ちるもの（831～834）、接地面の端部が外側に張り出すもの（835～853）、脚が付いて高い上げ底となるもの（854～856）などがある。一般的に、器壁と同程度かそれよりも若干薄いものがよく見受けられるように感じる。底部が完全なものかそれに近いものを詳しく観察すると、上げ底となる窪んだ部分は1方向の直線的なナデ調整が行われるのに対して、外周部分は円周上をナデによって回して調整されているように見受けられる。中には、834のように木の葉の痕跡の残るものも見られる。また、脚の付くものは、底部に粘土紐を外周に貼り付け、または脚部として継ぎ足している。これらであっても、底部外面の調整方法はほかの上げ底のものと同変わらず、1方向にナデ調整が行われている。

### 丸底（第95図，857～859）

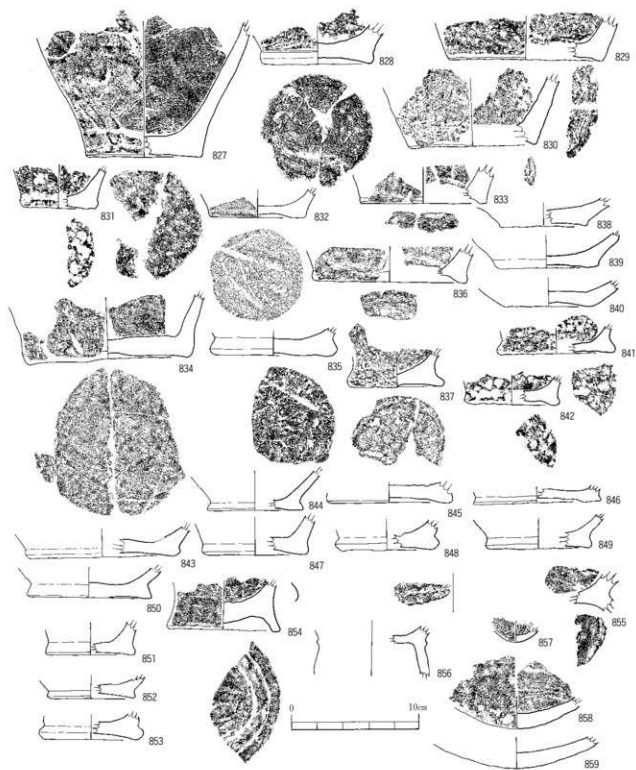
割合に広がった丸底である。（857～859）



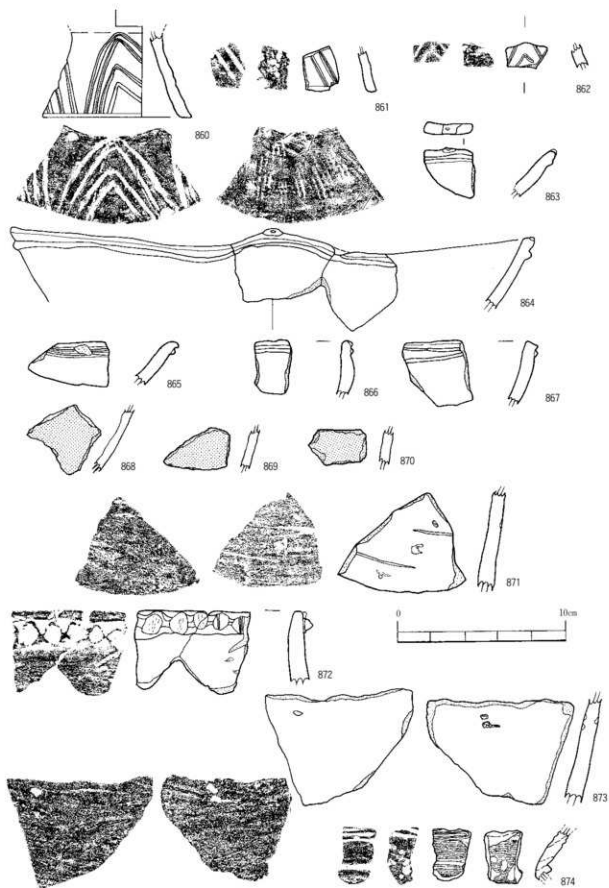
第93图 底部 (1)



第94图 底部 (2)



第95図 底部 (3)



第96图 特殊土器



特殊土器（第96図、860～874）

基本的に縄文時代晩期と考えられるものの中で、特殊なものである。

860～862の3点は底部の外面に鋸歯文が施されたものの底部で、台付皿型土器の脚部であろう。色調は全体的に黄白色を呈している。2本の沈線を目単位として描かれており、右上がりの線を若干膨らみ気味に描き、右下がりの線はほぼ直線的に描いている。器面調整は外面が横方向のナデ調整、内面は縦方向にハケ目調整を行った後に横方向のナデ調整が行われている。脚部の端部は外面へは鋭角に仕上げ、内面へは幾分丸めてなめらかに仕上げている。

863～867の5点は26類に分類したものと同様なものと考えられ、口縁部が波状を呈するものである。波状の頂部となる口唇端部には、中空となる楕円形状の貼り付けを付している。口唇部下位には1条の細い突帯を巡らせており、口唇部との間に1条の沈線が巡っているように見える。

868～870の3点は外面に丹が塗られたものである。器面調整が非常に丁寧なヘラミガキであることから、精製の浅鉢に丹が塗布されたものと考えられる。

871～873の3点のうち871と872は外面に、873は内外両面に榎跡と思われる痕跡が残るものである。顕微鏡による精密な観察によると、これらすべての窪んだ部分に明瞭な線が見られることから、これが榎が割れる際に分かれる部分と考えられることから、榎の榎と考えて間違いないとの分析結果を得た。（当センター 南の縄文調査室 精密分析担当職員の分析および考察の結果による。）

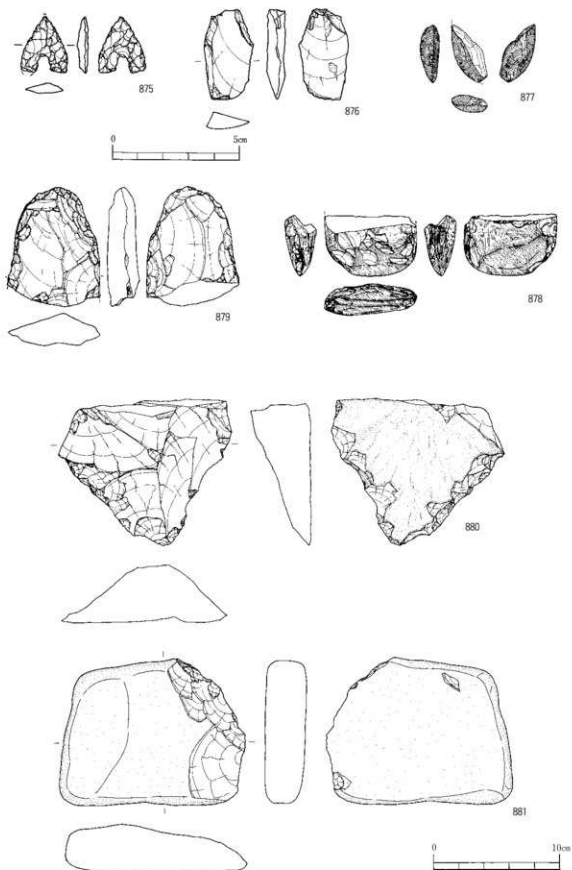
最後の1点、874は工字文を持つ土器で、割れ口断面に丹と考えられる赤い顔料が塗布されたものである。胎土や文様、細部の調整など本地域には見られないものである。東北から関東地方に見られる大洞式系統の土器の可能性が考えられる。

### （3）石器

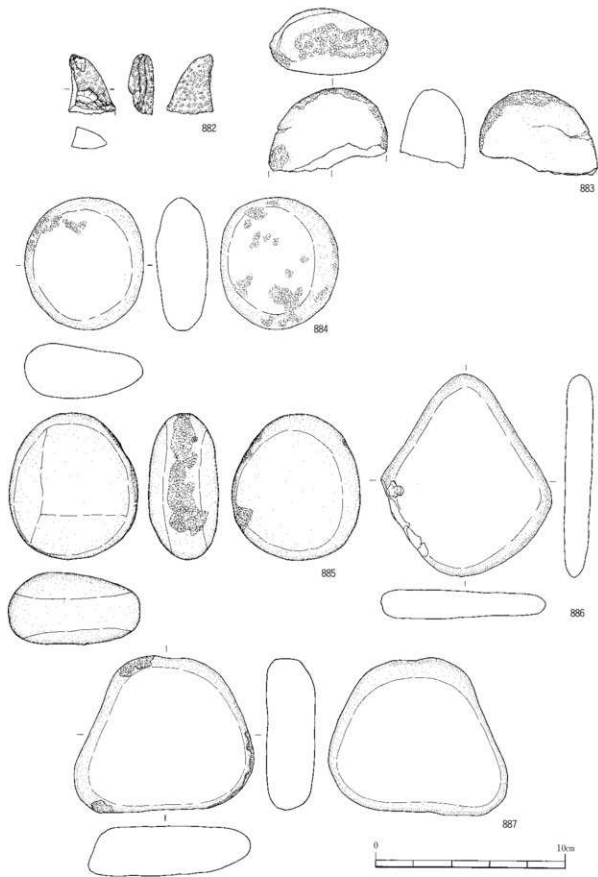
#### ① IV層出土石器（第97図 875～881・第98図 882～887）

IV層（青灰色土）は縄文時代早期の遺物包含層である。当層から出土した石器は、当該期の土器に伴う可能性が考えられる。土器の出土量に比べ石器の出土は散在的で少量にとどまっている。器種ごとの分類はIIIa層に準じて行っている。なお、各個体ごとの分類、石材、計測値については観察表に掲載した（第25表）。

打製石鏃は出土した3点のうち1点を図化した。875は基部に半円形の深い抉りが入る二等辺三角形の凹基鏃である。876は縦長剥片を素材とする使用痕のある剥片である。腹面の左側縁から下端にかけて微細な使用痕が観察される。877・878は磨製石斧の刃部片で、878は表裏面および側縁部に整形剝離痕が残存する。879は打製石斧の基部である。880・881は礫器として分類したもので、880は板状の素材を利用しており、正面の一縁辺と裏面の二縁辺に刃部形成のための剝離が施される。881は扁平礫を利用したもので、礫面の一縁辺の末端に片面加工を行い刃部を作出している。磨石は2点出土したうちの1点を図化した。882は扁平な礫を利用しているものと思われる。883は磨礫石である。側面に敲打痕、両面には磨面が認められる。884・885は敲石である。884は表裏面にあばた状の敲打痕、885は側面に敲打痕がみられる。石皿は5点のうち、2点を図化した。いずれも扁平な板状の素材を利用しており、886は1面、887は2面を使用している。887は側面の一部に敲打痕が観察される。



第97图 IV層出土石器(1)



第98图 IV層出土石器(2)

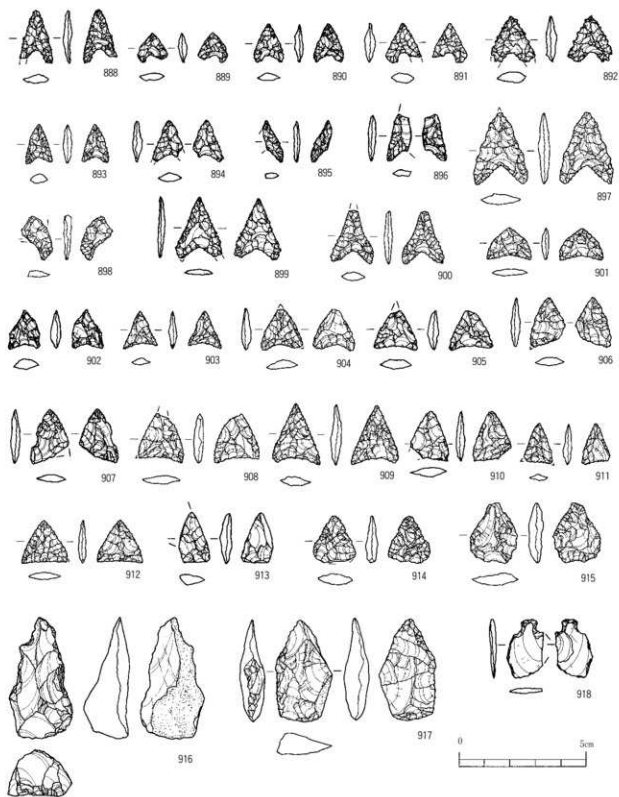
② IIIb層出土石器 (第100図 888～第109図 992)

IIIb層(茶褐色土)は、縄文時代前期～晩期の土器が出土する遺物包含層である。なかでも縄文時代前期から中期を中心とする。当層から出土した石器群はこれらの土器に伴う可能性が考えられるが、石器組成によって土器との共伴関係を示すことは難しい。よってここでは出土層位による区分によって器種ごとに説明する。IIIb層から出土した石器は、打製石鏃、打製石鏃未製品、尖頭状石器、石匙、石錐、楔形石器、スクレイパー、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、石核、磨製石斧、打製石斧、磨石、磨敲石、敲石、石皿である。なお、器種ごとの分類は当遺跡で最も良好な資料が出土したIIIa層に準じており、個体ごとの石材や計測値、分類については観察表に掲載している。(第25表～27表)

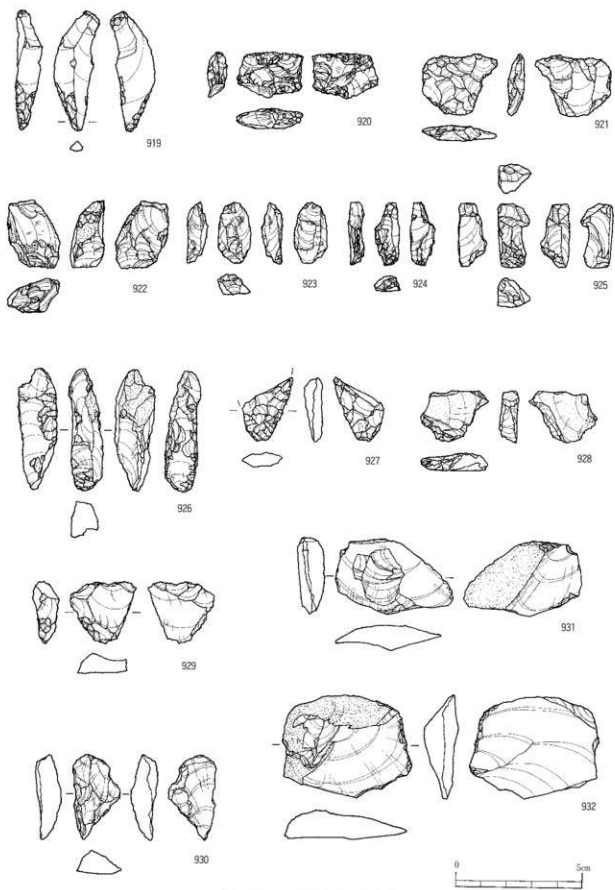
打製石鏃は出土した36点のうち20点を図化した。888は基部に半円形の深い抉りが施され、脚部端が平坦となるものである(Ia類)。892は基部中央部に半円形の深い抉りが入り、側縁部は鋸歯状を呈するものである。913は基部に深い抉りがあるものと思われるが欠損しているため全形は不明である(Ic類)。893・896は基部全体に円形の深い抉りが入り、逆刺は鋭く側縁部がやや外湾する(Id類)。形状は二等辺三角形を呈する。889～891は基部に略半円形の深い抉りが入り、逆刺がやや丸みを帯び側縁部が外湾するもので最大幅が胴部下方にある(Ie類)。894・895は形状が略三角形を呈するやや浅い抉りが施されるもので逆刺はやや丸みを帯び、側縁部が外湾する(If類)。897は基部に二等辺三角形の抉りが入り、側縁部がやや外湾するものである(Ig類)。898・899は基部の中央部に円形の深い抉りが入り、逆刺が鋭く側縁部は外湾する。側縁部の途中で明確な段を有するものである(Ih類)。900は抉りの形状がやや「八」の字状に裾広がりとなる三角形を呈し、側縁部が内湾・外湾の折衷形を呈する(Ii類)。901・903～905、908～910は基部がごく浅い凹基状を呈し、基本的に側縁部が外湾するものである(Ij類)。三角形と二等辺三角形のものがある。911・912は平基で三角形を呈するものである(IIb類)。906・907は平基状を呈し、基部端の長さが左右で違うものである(IIc類)。914・915は打製石鏃の未製品である(IV類)。916・917は尖頭状石器として分類したものである。916は礫面の残存する厚手の剥片を礫面側を打面として二側縁に整形が行われる。917は薄手の剥片を利用し、腹面側は両側縁から平坦剥離状の整形が行われた後、先端と下端に微細な剥離が施される。背面側は両側縁から整形後、左側縁に腹面側からのブランディング状の剥離が施される。918は横長の剥片を利用した小型の石匙である。縦型で刃部はやや斜刃形となる。整形はつまみ部と側辺の一部にとどまっておき、薄手である(Ib類)。919は石錐である。縦長の剥片を利用したもので、鋭利な剥片の一边に両面から二次加工が施され錐部が作出されている(IIb類)。920～925は楔形石器である。両極打法や使用時の加撃によって生じた階段状の剥離が見受けられる。920・921は横長の楔形石器で縦断面形は凸レンズ状を呈する(II類)。縦長の楔形石器に比較して薄手である。922～925は縦長のもので横長のものに比べやや厚手であり、縦断面形は方形や五角形状を呈する(I類)。スクレイパーは5点のうち4点を図化した。926・927は縦長のもので主に側縁部に二次加工が施される。928・929は横長で短軸の一端に刃部が作出される。二次加工のある剥片は5点のうち1点を図化した。930は側縁部に二次加工のあるものである。使用痕のある剥片は9点のうち2点を図化した。931・932は鋭利な一辺に使用痕のある横長のものである。石核は25点のうち22点を図化した。934・935・937・940・941・943は打面転移が繰り返された結果、求心状の剥離面



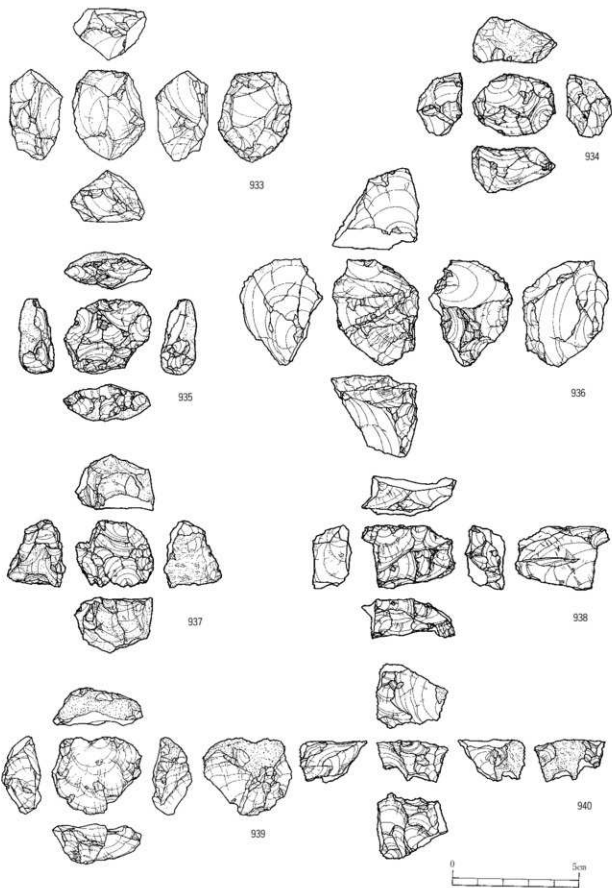
第99図 Ⅱb層石器出土状況図



第100圖 ■b層出土石器(1)

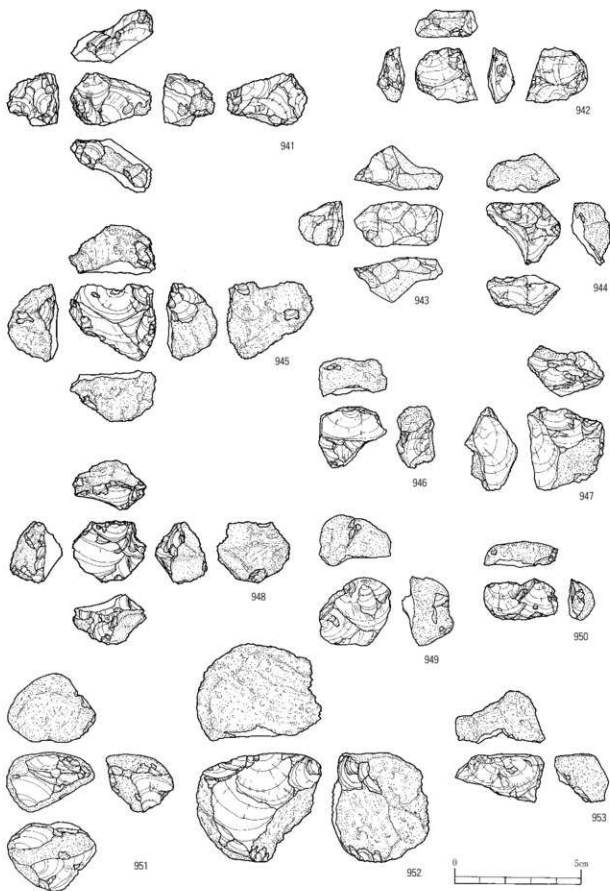


第101圖 ■b層出土石器(2)

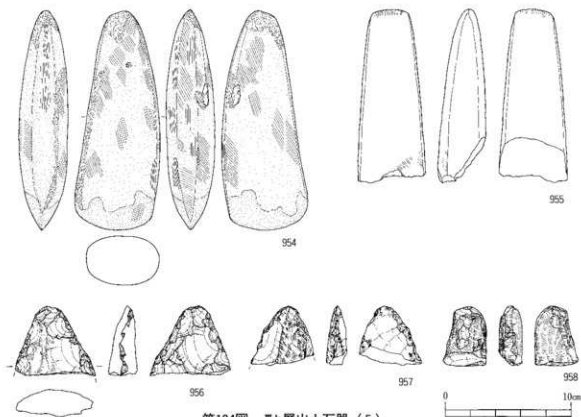


第102图 ■b層出土石器(3)





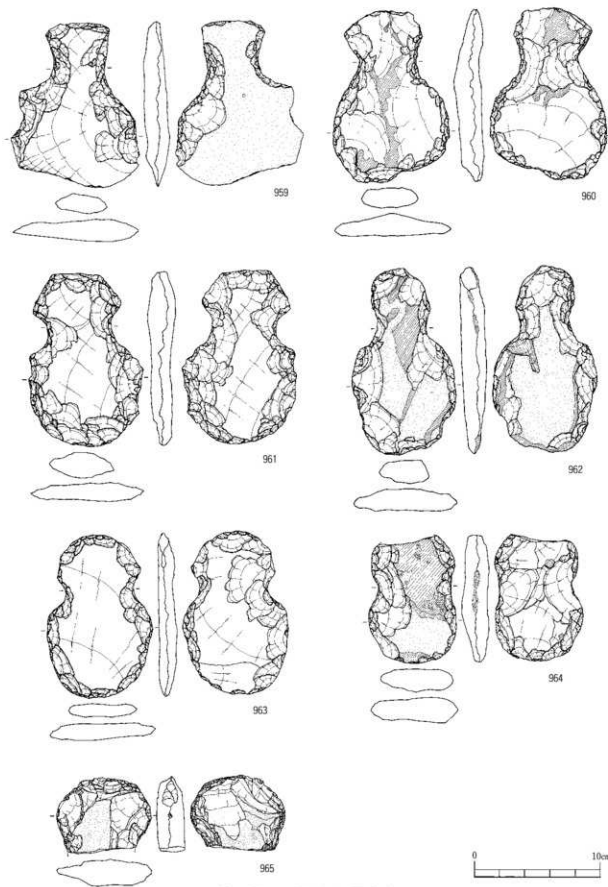
第103圖 ■b層出土石器(4)



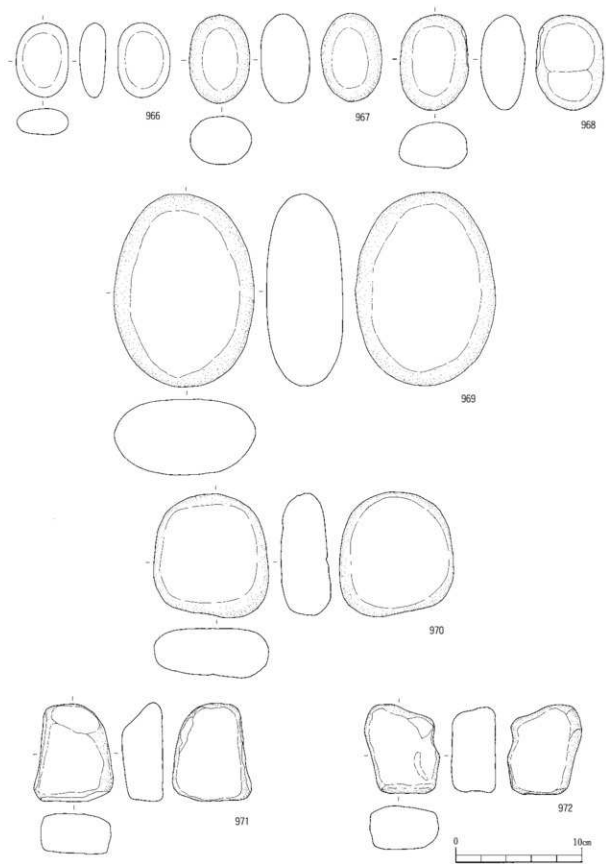
第104図 IIIb層出土石器(5)

が認められるものである。一部に礫面が残存する。(Ia類)。933・936・938は残存形態はIa類と同様であるが礫面が残存しないものである(Ib類)。946～953は基本的に単設打面から剥片剥離が行われたと考えられ、礫面が残存するものである(IVa類)。磨製石斧は5点をすべて図化した。954は乳棒状の磨製石斧で側面に稜が観察される。側面や基部に敲打痕、胴部には研磨痕が認められる(I類)。955はいわゆる定角式磨製石斧で刃部を欠損している。956～958は磨製石斧の基部である。整形剥離痕や研磨痕がみられる。打製石斧は11点出土しており7点を図化した。959～962は基部幅に対して刃部幅が広いもので、いわゆるラケット形を呈するものである(I類)。960は使用によって刃部が斜刃状に片減りしているものと思われる。962・964は両側縁部に結束のための括れ部が整形された後、括れ部に刃潰し状の敲打痕が施されている。963・964は基部幅と刃部幅の差が小さいいわゆる分銅形に類するものである(II類)。ラケット形に比べて括れ(固定)部がやや中央部よりとなる。

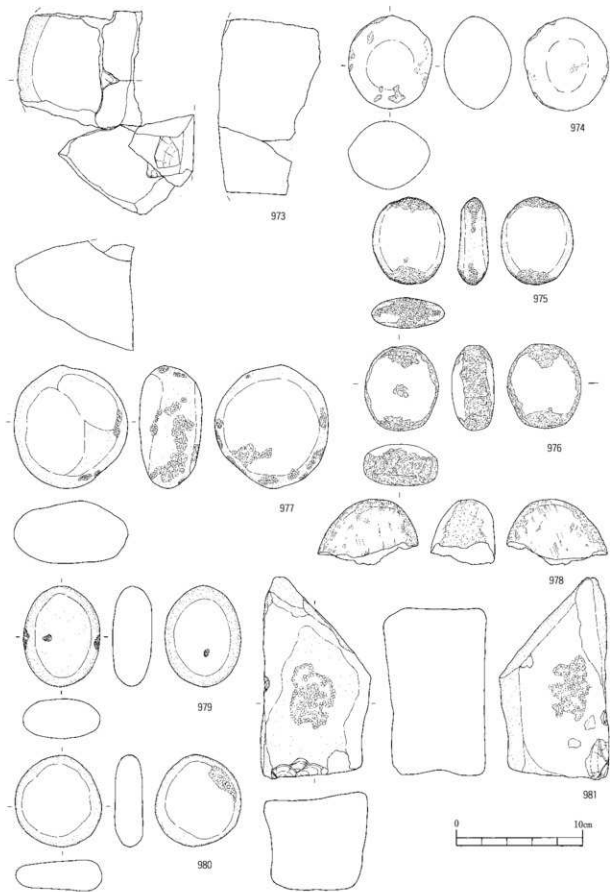
磨石は44点のうち7点を図化した。966～968は扁平な亜円礫を利用した小型のものである。両面に使用による磨面が形成されている(Va類)。969は扁平な亜円礫を利用したもので両面とも使用されている(IIa類)。970～972はやや扁平な方形(台形)の礫を利用したもので両面とも磨面が観察される。973は破損してはいるものの、かなり大型のものである。磨石として分類したが石皿などの可能性を残す資料である。磨敲石は11点のうち8点を図化した。974・975・977・978・980は扁平な亜円礫を利用したもので両面に磨面、側面に敲打痕が認められる(IIa類)。975は側面から長軸の両端にかけて敲打痕が密に残存している。974・977の敲打痕はあばた状を呈する。976・979は両面の中央部と側面に敲打痕がある(IIc類)。977は短軸方向の両端に敲打痕が集中する。981は台形状を



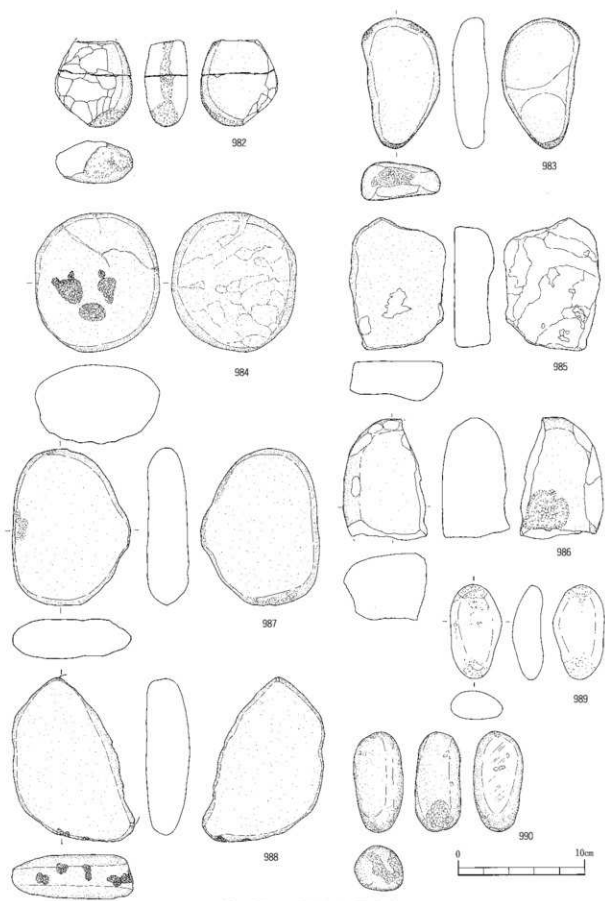
第105図 IIIb層出土石器(6)



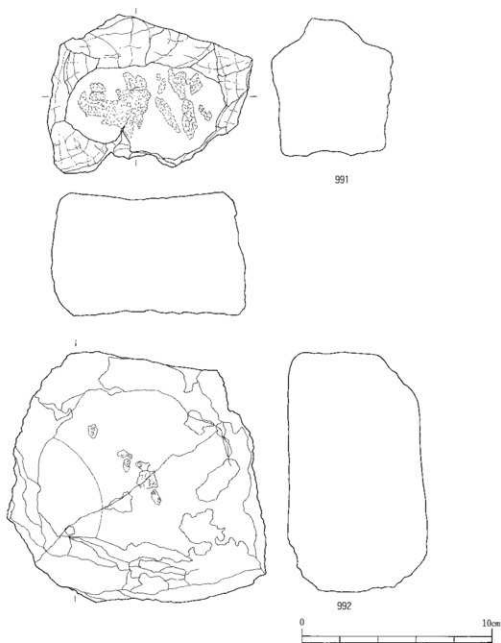
第106図 ■b層出土石器(7)



第107图 IIIb層出土石器(8)



第108图 ■b層出土石器(9)



第109図 ■b層出土石器 (10)

呈する厚手の礫を利用しており、両面の周縁付近の磨面と中央に集中する敲打痕が認められる (III e類)。台石の可能性も考えられる。敲打痕は11点のうち9点を図化した。982・987・988は側面に敲打痕が観察されるものである (II a類)。987は側縁の全周、988は側縁の一部にあばた状の敲打痕が残存する。984・985・986は敲打痕が中央部に集中するものである (II c類, III c類)。

989・990は棒状の礫を利用したもので長軸の両端に敲打痕が認められる (V e類)。石皿は5点を確認し2点を図化した。991・992は片面のみが使用され、使用面は明瞭な凹面は形成せず平坦である。991は磨面や擦痕に比べ敲打痕が明瞭なことから台石としての性格が強いものと考えられる。

### ③ IIIa層出土石器 (第111図 993~第145図 1394)

IIIa層(暗茶褐色土)は縄文時代後期から古墳時代の土器が出土する遺物包含層である。なかでも縄文時代晩期の土器を主体としている。当層から出土した石器は当該期の土器に伴う可能性が高いものと考えられる。ただしIIIb層上位から出土した石器のなかに打製石斧などの一部の器種において同様な形態や特徴のあるものが出土しており、石器組成によって土器との伴同関係を確実に区分することが困難な様相も含んでいる。このような理由からここでは層位区分に従って当層から出土した石器を器種別に説明することとしたい。本遺跡の遺物包含層のなかで最も出土量が多く、かつ良好な資料が出土しており、出土した器種は打製石鏃、打製石鏃未製品、石匙、スクレイパー、石錐、楔形石器、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、石核、磨製石斧、打製石斧、石錘、礫器、磨石、磨敲石、敲石、石皿、砥石・垂飾である。なお、個体ごとの石材、計測値、分類については観察表に掲載した。(第27表~第34表)

打製石鏃は、計102点出土しており、82点を図化した。石鏃の形状・形態は多様であり、大分類として基部に抉りのあるものをI類、基部に抉りのないものをII類、主要剥離面の残存する剥片鏃をIII類、未製品をIV類とし、さらに側縁部や抉り、基部(逆刺)の形状、整形の違いによってI類をIa~Ii類、II類をIIa~IIc類として細分した。Ia類-基部の中央部に半円形の深い抉りが入り、逆刺の端部は平坦で側縁部が直線的なもの(993・997・998)。Ib類-基部の中央部に半円形の深い抉りが入り、逆刺の端部がやや丸みを帯び、側縁部がやや外湾するもの(995)。Ic類-Ia・Ib類の範疇に含まれると思われるが、欠損しているために類別が困難なもの(994・996・999・1000・1002・1003)。Id類-基部の全体にわたって略半円形の深い抉りが入り、逆刺が鋭く側縁部がやや外湾するもの(1001)。Ie類-基部に略半円形の深い抉りが入り、逆刺は丸みを帯び側縁部が外湾するもの。最大幅が胴部下方にある(1004~1006・1010)。If類-Ie類に比してやや抉りが浅く、その形状は略三角形を呈し、逆刺がやや丸みを帯び側縁部が外湾するもの(1007~1009)。Ig類-基部に二等辺三角形の深い抉りが入り、側縁部がやや外湾するもの(1011)。Ih類-基部の中央に円形の深い抉りが入り、逆刺は鋭く側縁部が外湾するもの。側縁部から基部の境に明瞭な屈曲部を有するものである(IIIb層出土の898・899)。Ii類-抉りの形状が「八」の字状に裾広がりとなる三角形を呈し、側縁部が外湾するもの(1014~1021)。1015・1017・1020のように側縁部が基部側から先端部にかけて内湾した後、外湾しながら先端部へ収束する形状のものがあり、これらはI類とも共通する。Ij類-基部が浅い凹基状を呈し、基本的に側縁部は外湾するもの(1022~1042)。逆刺が鋭いものとやや丸みを帯びるものがある。Ik類-側縁部の形状が基部側から内湾した後、外湾しながら先端部へ収束するもの。(1043~1053)。I1類-基部にやや浅い半円形の抉りがある五角形鏃と考えられるもの(1056・1057)。

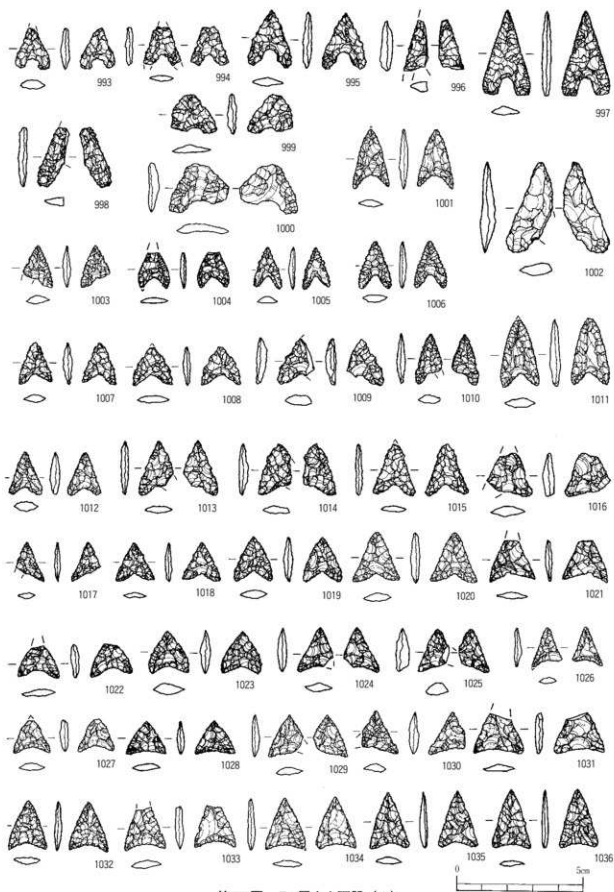
IIa類-平基で側縁部に明瞭な段を有するため五角形を呈するもの(1059)、IIb類-平基で三角形を呈するもの(1058・1060~1065)。IIc類-平基状で基部端の長さが左右で違うもの(1054・1055)である。

III類-素材となる剥片の主要剥離面が残存する剥片鏃である(1066~1072)。1066・1072は片面の全面にわたって押し剥離による整形が行われているがこの類に含めた。1067・1069・1070の基部は浅い凹基状となる。IV類-石鏃未製品は8点出土しており、すべてを図化した(1073~1080)。

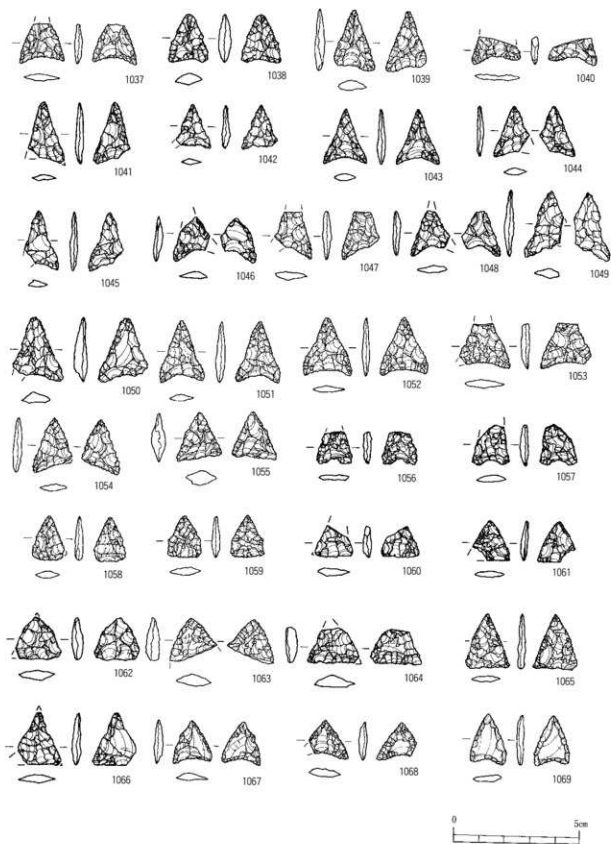




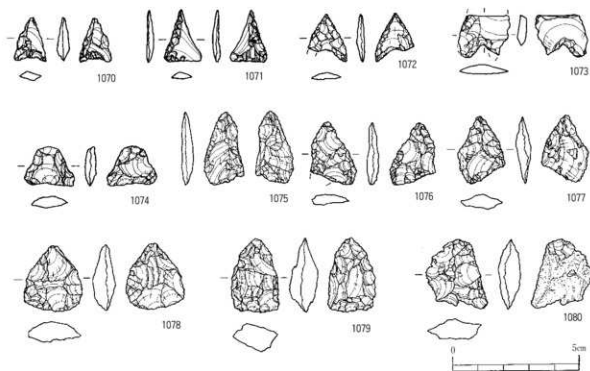
第110図 III a磨石器出土状況図



第111圖 IIIa層出土石器(1)



第112图 IIIa层出土石器(2)



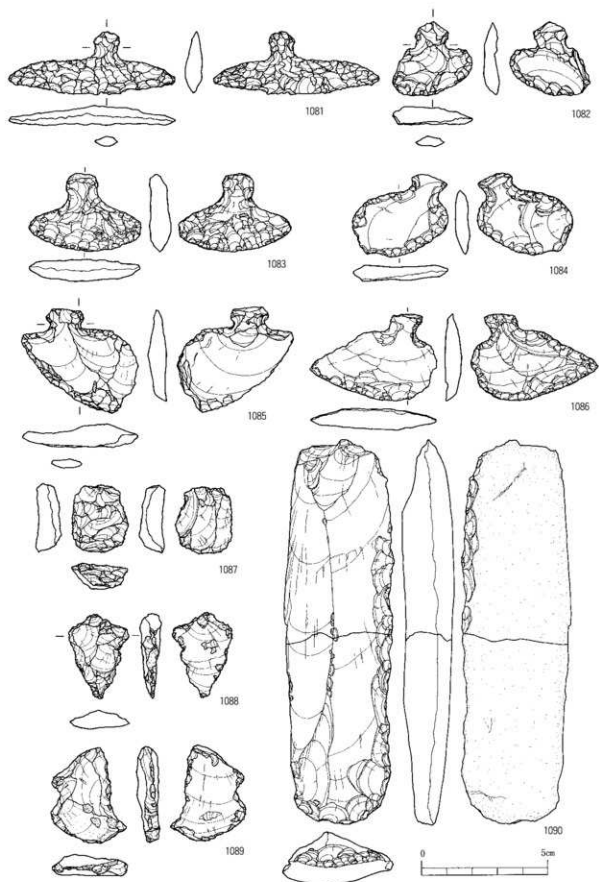
第113図 IIIa層出土石器(3)

石匙は出土した8点のうち6点を図化した。形状はいずれも横型で刃部が外湾するものである。IIIa層以外の包含層から出土したものを分類する必要から縦型のものをI類、横型のものをII類とし、さらに整形の違いによって以下のように細分する。a類-表裏面全体に整形剥離が施されるもの(1081・1083)。b類-つまみ部と刃部周辺の整形のみとどまり、主要剥離面が残存するもの(1082・1084~1086)。1084・1085は刃部が斜刃となるものである。

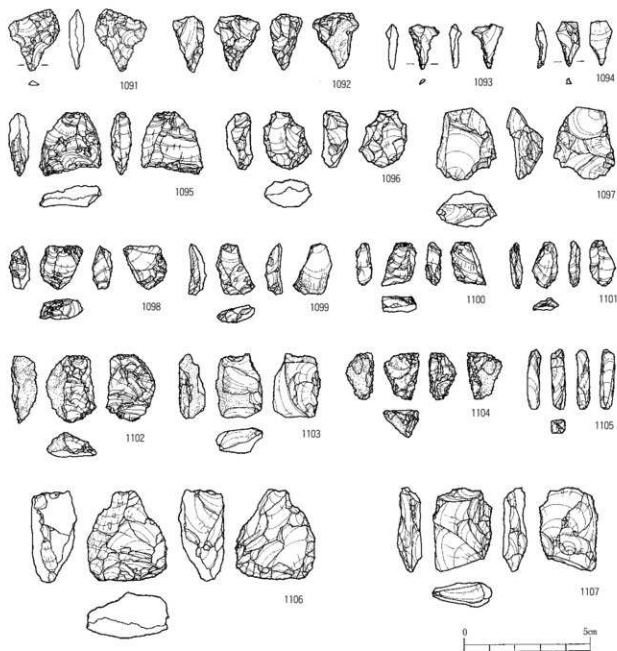
石錐は4点を図化した。錐部とつまみ部の境を指標にして、I類-錐部とつまみ部の境が明瞭なもの(1091・1092)、II類-錐部とつまみ部の境が不明瞭なもの(1093・1094)、さらに片面加工のものをa類、両面加工のものをb類として細分した。1092は片面加工、1091・1093・1094は両面加工の石錐である。

スクレイパーは11点が出土し、5点を図化した。刃部の角度を指標としてI類-搔器(1087)、II類-削器(1088~90・1108)に分類できる。1087は刃部が舌状を呈する搔器である。1088は直刃の削器である。1089は刃部が内湾する削器である。1090はVI層とIIIa層から出土した資料が接合したもので、IIIa層出土石器として扱った。縦長剥片の側縁部両面に二次加工が施され刃部が作出されている。1108は台形を呈する剥片の一側縁の両面に二次加工が施され、刃部が作出されている。素材となる剥片末端の両面にも刃こぼれ状の微細な剥離が認められる。

楔形石器は14点が出土し、13点を図化した(1095~1107)。形状によってI類-縦長のもの、II類-横長のものに分類した。平行する二側縁(両端)の表裏面に両極打法或使用時の加撃によって生じたと思われる階段状の剥離が観察される。1095は横長の楔形石器で縦断面形は凸レンズ状を呈する。縦長の石錐に比較してやや薄手である。1096・1097・1102・1103・1106は縦長のもの、横長のもの



第114图 ■a層出土石器(4)



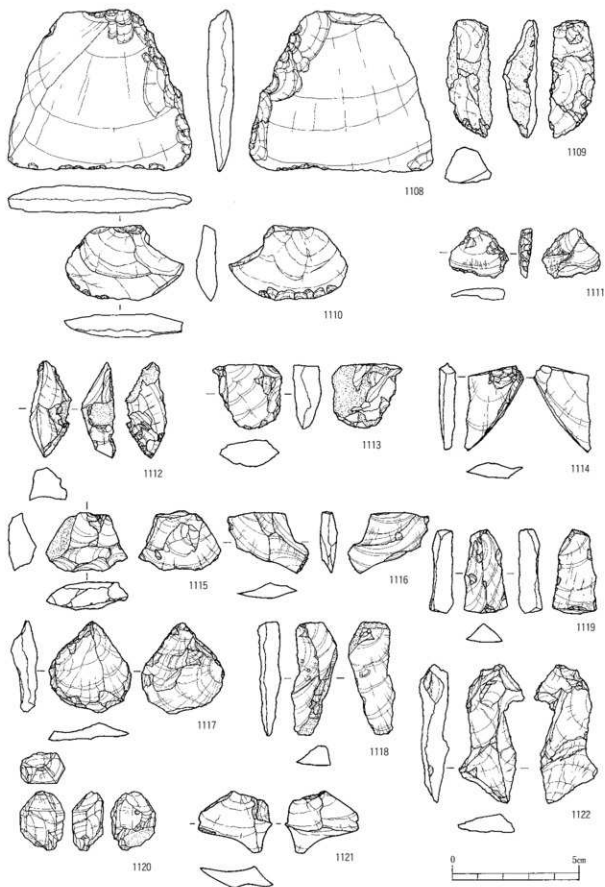
第115図 IIIa層出土石器(5)

のに比べやや厚手であり、縦断面形は方形や台形状を呈する。

二次加工のある剥片は13点を確認し、5点を図化した。1109・1112は横長の剥片を縦位に利用し、鋭利な一側縁の一端に二次加工を施すものである。1109は背面、1112は腹面側に剝離痕がある。1110は横長剥片の末端に二次加工が行われている。形状の違いは使用頻度、大きさの違いは被対象物の違いを示すものと考えられる。

使用痕のある剥片は14点を確認し、7点を図化した(1115～1120)。1121・1122は剥片として分類した。

石核は85点を確認したうち、66点を図化した。ここでいう石核には、石核と残核の両者を含んで



第116图 IIIa層出石器(6)

いる。本遺跡から出土した石核には礫面の残存するものや分割礫の形状を残すものがかなり見受けられることから、遺跡へ持ち込まれた原石は5～10cm前後のものであったと推定される。また、これらの石核から打製石鎌やスクレイパー、楔形石器など剥片石器類の素材が剥出されたものと考えられる。打面調整などを行わず、礫面や平坦な分割面から剥片剥離が行われる非調整石核と微細な石核調整が行われるものが認められる。ここでは、観察される打面や剥離面数および剥片を剥離する方向などを指標にして次のように分類する。

I類-剥離面を変更せず打面転移が繰り返された結果、被剥離面が求心状に観察されるものである。礫面が残存するものをIa類(1123・1124・1127～1134・1136・1138～1141・1143・1145・1157・1167)、礫面が残存しないものをIb類(1125・1126・1137)とする。IIa類-剥離面は変更せず、打面が180°変更され、相対する2方向に剥離痕が観察されるものである(1144・1148・1149・1154・1156・1159・1160・1168・1176)。IIb類-剥離面は変更されないが、打面が90°変更されるものである(1153・1155～1158)。すべてにおいて礫面が残存する。IIIa類-剥離面と打面が変更され、被剥離面が複数認められるもの。礫面が残存するもの(1142・1146・1147・1189)。IIIb類-IIIa類と同様で礫面が残存しないものである(1150・1177・1182)。IVa類-単設打面で一方方向のみ剥離が行われたと考えられ、礫面が残存するものである(1135・1151・1161・1164・1165・1171～1175・1178～1181・1183～1188・1190)。IVb類-単設打面で一方方向のみ剥離が行われたと考えられ、礫面が残存しないものである(1162)。

I類には1124・1130・1133のように剥離面と背面方向の器厚が肉厚なものと、1127・1128・1134・1136・1141のように剥片剥離が進行し、器厚が薄いものが認められる。I類とIII類において礫面が残存しないものが多く認められる傾向にある。

IIa類では、1144・1148・1154・1156・1159のように比較的平坦な礫面を打面として剥離が行われるものと、1149・1160・1168のように平坦な剥離面や打面調整を行っているものがある。

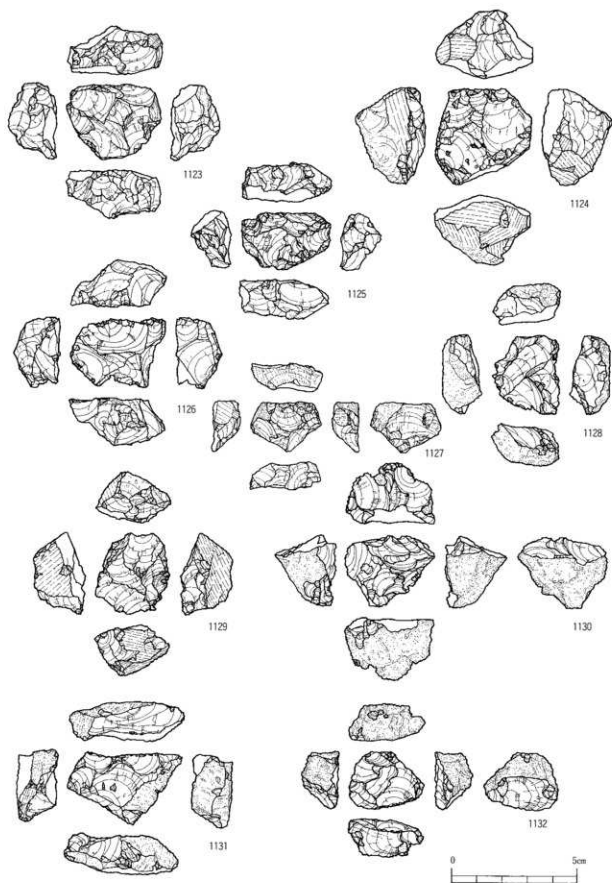
IIb類は1153が平坦な剥離面を打面として設定しているほか、1155～1158は礫面から直接剥片剥離が行われている。

IIIa類では、1142が礫面を打面として剥離が行われ、1146・1147・1189は平坦な剥離面を打面として剥片が剥出されている。

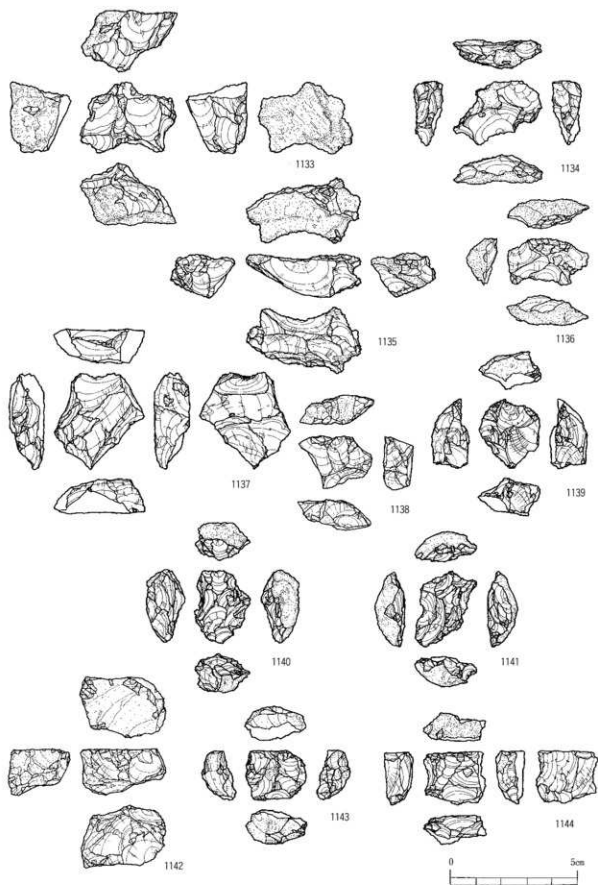
IIIb類はすべて剥離面を打面としている。

IVa類は、1135・1161・1164・1165・1171・1172・1174・1175・1178～1180・1183～1188が平坦な礫面を打面として剥片が剥離されており、1151・1173・1181は平坦な剥離面を打面としている。1173・1188は石刃状の縦長の剥片が剥出されている。IVb類は平坦な剥離面を打面として剥片が剥出されるものである。

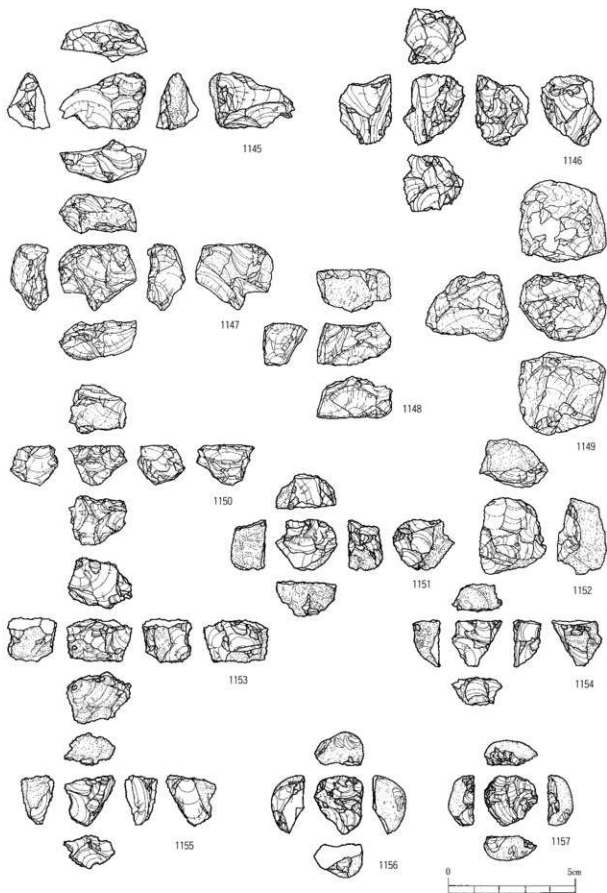




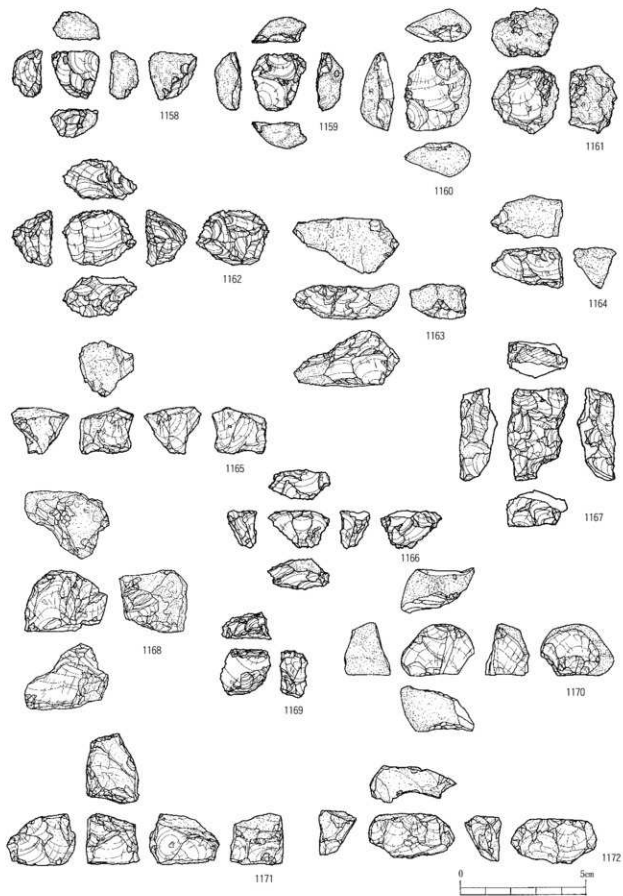
第117図 IIIa層出土石器(7)



第118図 IIIa層出土石器(8)



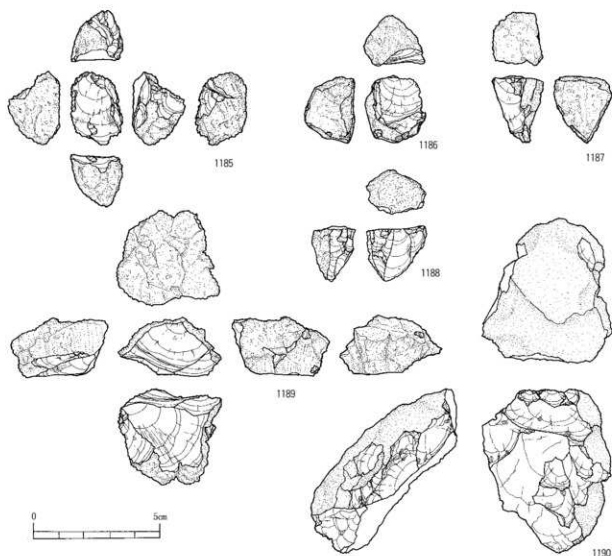
第119図 ■a層出土石器(9)



第120图 ■a層出土石器 (10)

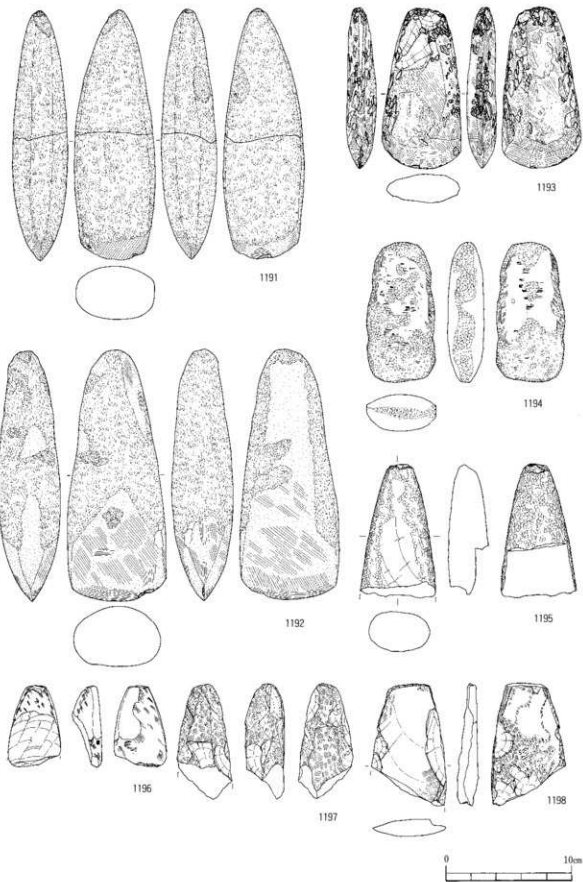


第121図 IIIa層出土石器 (11)

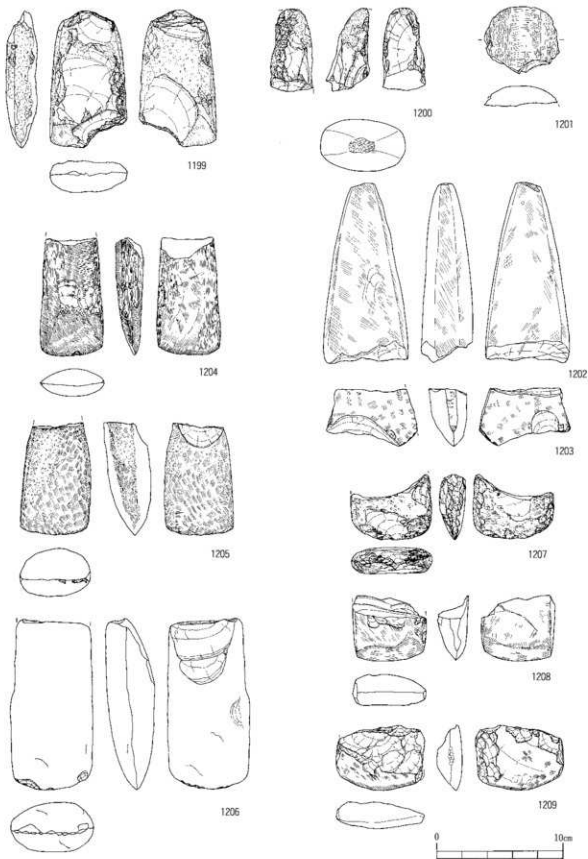


第122図 ■ a層出石器 (12)

磨製石斧は出土した20点のうち19点を図化した。刃部の形状はすべて両刃で円刃形を呈するものである。形状や整形法の違いによって以下のように分類する。I類-敲打や剥離による整形痕が残存するもの (1191~1202・1204・1205・1207)、II類-全体に入念な研磨が施されたもの (1203・1208・1209)。1191は敲打による整形が行われ、刃部にのみ研磨痕が観察される。刃部と基部の中間で破損している。1192は敲打による整形が行われ、胴部下半から刃部にかけて研磨されている。左側縁部中央に内湾する凹みがあり、着柄部と考えられる。角閃石を多く含む安山岩製で異質なものである。1193は両側縁部からの剥離によって整形され、敲打、研磨の工程で仕上げられる。1194は敲打整形が行われているが、刃部作出されておらず磨製石斧の未製品と考えられる。1195は両側縁部から入念な敲打整形が行われている。1196~1198・1200は基部片である。整形剥離痕や敲打痕が観察されるほか、欠損時に刃部方向から加わった力によって生じた剥離が観察される。1199は残存長が短いことから再加工の後、利用されたものと思われる。刃部に使用時に生じたと思われる大きな剥離が



第123图 IIIa層石器 (13)



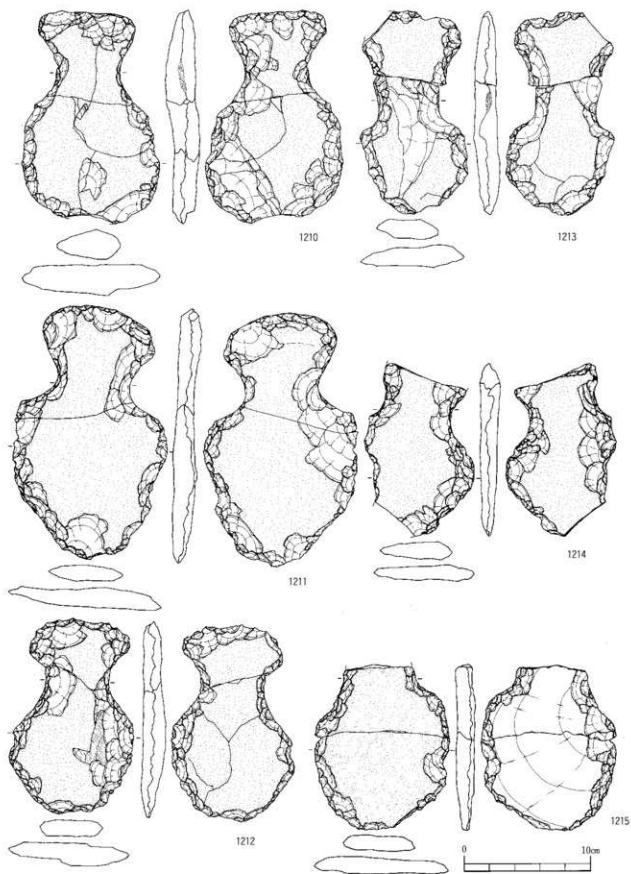
第124図 III a層出土石器 (14)



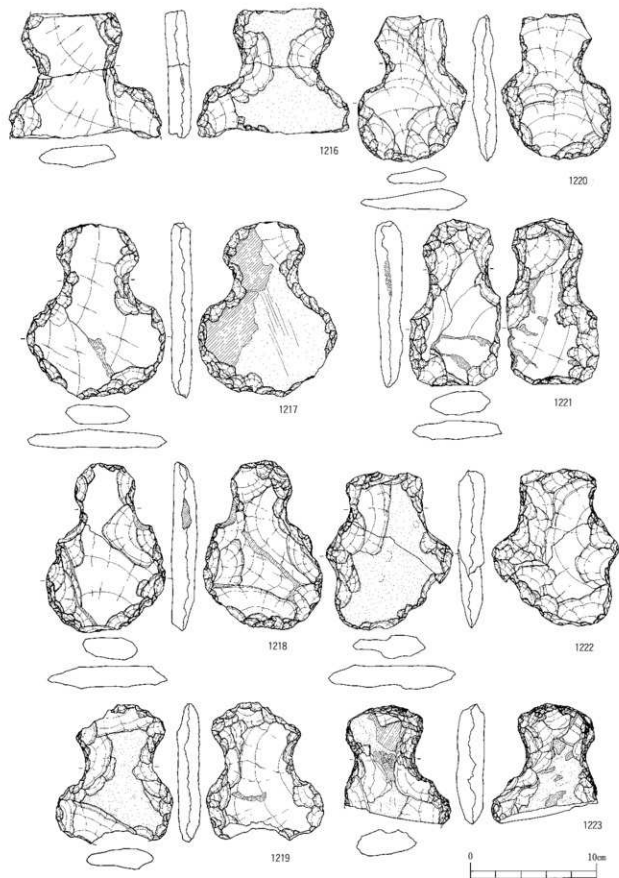
残存する。1203・1204は全体に入念な研磨が施され、両面と側面の境に明瞭な稜が観察できる。1206は風化が進んでおり、明瞭な整形痕が観察できない。1207～1209は刃部片である。1207は刃先に大きな剝離を生じており、使用時の破損と考えられる。

打製石斧は破片を含め124点が出土し、26点において接合関係が認められている。このうち92点を図化した。本遺跡から出土した打製石斧の特徴として節理の発達した安山岩(An2)を利用したものが多く、形状はいわゆる有肩石斧やラケット形とよばれるものが主体を占め、短冊形、撥形ものは少量であることが挙げられる。また、打製石斧の素材となる剥片(礫)に主要剝離面や節理面、礫面が残存した資料が多く見受けられ、整形や刃部加工のための剝離は括り部(括れ部、以下括れ部)や刃部を中心に素材の周縁付近にのみ施されていることが指摘できる。また、完成品が少なく、折損したものが多くみられるのが特徴である。折損部位による分類を第78図に示している。ここでは便宜的に形状の違いによる分類を行い、若干の考察を第V章の発掘調査のまとめの項で加えることとする。なお、レイアウト上はできる限り着柄部と考えられる括れ部を中心に配置している。形状による分類は、I類-基部幅に比して刃部幅が広く、二側縁に明瞭な段を有し、平面形がいわゆるラケット形を呈するもの(1210～1232)、II類-二側縁の中央部に括れ部があり、いわゆる分銅形に類するもの(IIIb層出土の963・964)、III類-刃部幅に比して基部幅が広く、全体形としては細身のもの(1233～1247)、IV類-平面形が撥形を呈するもの(1293～1295)、V類-平面形が短冊形のもの(1296)の5分類である。1210は4点が接合したものである。刃部には刃こぼれが認められるほか、正面には破損時の衝撃によって刃部方向からの剝離を生じている。1213は括れ部で破損した後、再加工が施されて使用され続けたものと考えられる。側面方向からの刃部幅の減少が看取される。1210・1213・1216・1221・1226の括れ部には柄との固定性を高めるため敲打による刃潰し加工が施されている。1221は両側面から、1222は刃部から一側縁にかけて斜刃状の使い減りと考えられる変形が認められる。1233・1235・1236・1238は括れ部に敲打による刃潰し加工が施される。1233は括れ部、1238は刃部が破損した時点で使用できなくなったものと思われる。

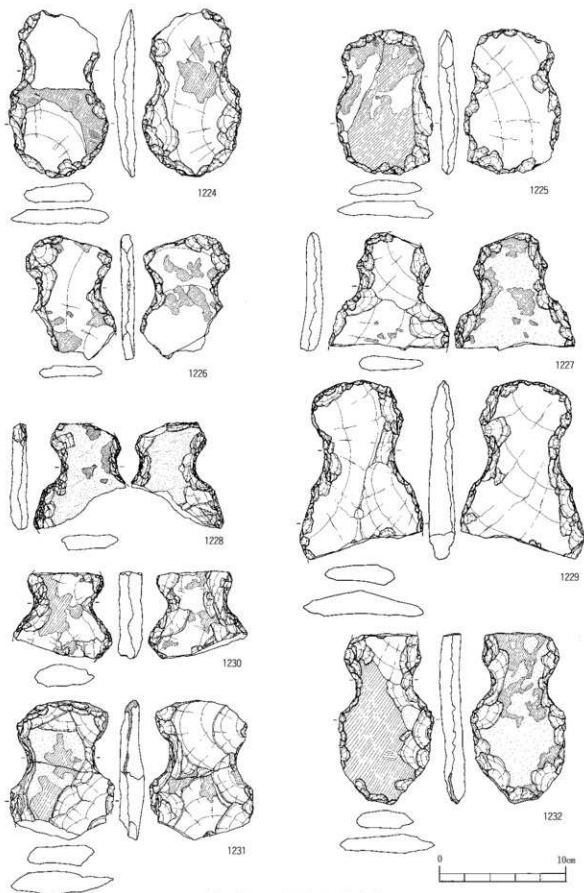
基部は、A類-基部先端が三角形を呈するもの(1247～1249)、B類-丸みを帯びるもの(1250～1261・1265・1266)、C類-平坦なもの(1262～1264・1267～1269)、D類-両側縁から基部にかけて収束するもの(1270)に分けられる。完成品や残存状態が良好な資料と比較するとB類はI類～III類、C類はI類～V類の基部形状と対応する。A類については側縁部の形状からIII類に対応する可能性が高い。1241～1246は基部から胴部付近の破片である。いずれもIII類に該当するものと考えられる。刃部は形状によって、a類-先端が三角形に尖るもの(1277～1285)、b類-先端が円形のもの(1286・1287・1290・1291)、c類-先端が平坦なもの(1271～1276)、d類-先端が斜刃状のもの(1288・1289・1292)の4分類とした。完成品や残存状況の良好な資料から判断するとa類はIII類、b類はI～V類、c類はI類、d類がI類とIII類に対応する。1297～1301は打製石斧の一部あるいは未製品と思われるものである。石錐は1点を図化した。1302は板状の扁平な礫を利用しており、短軸の一側縁から表裏面とも大きな剝離を伴う二次加工が施されている。その後、二次加工によって得られた鋭利な一辺と両側縁部に小さい剝離を施す。礫器は3点を図化した。片面加工のものをI類、両面加工のものをII類として分類する。1303・1304は板状の礫の側縁の一端に両面加工によって刃部を作出している。1305は周縁部に二次加工が施される。



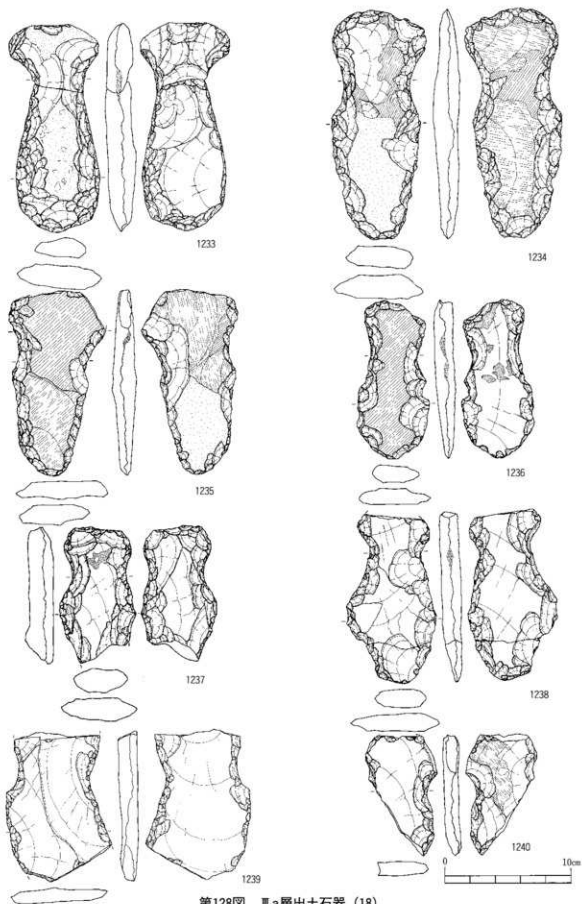
第125図 IIIa層出土石器 (15)



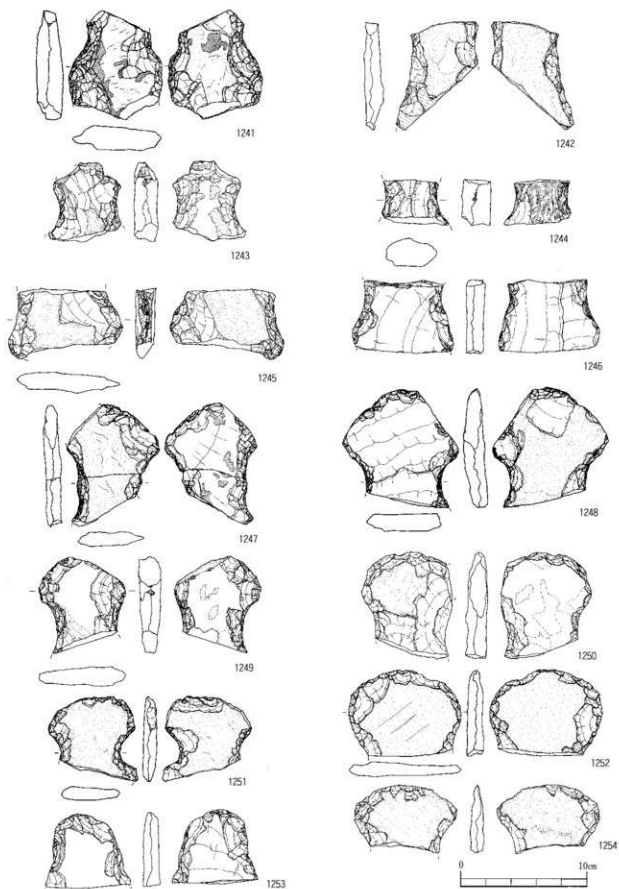
第126図 ■a層出土石器 (16)



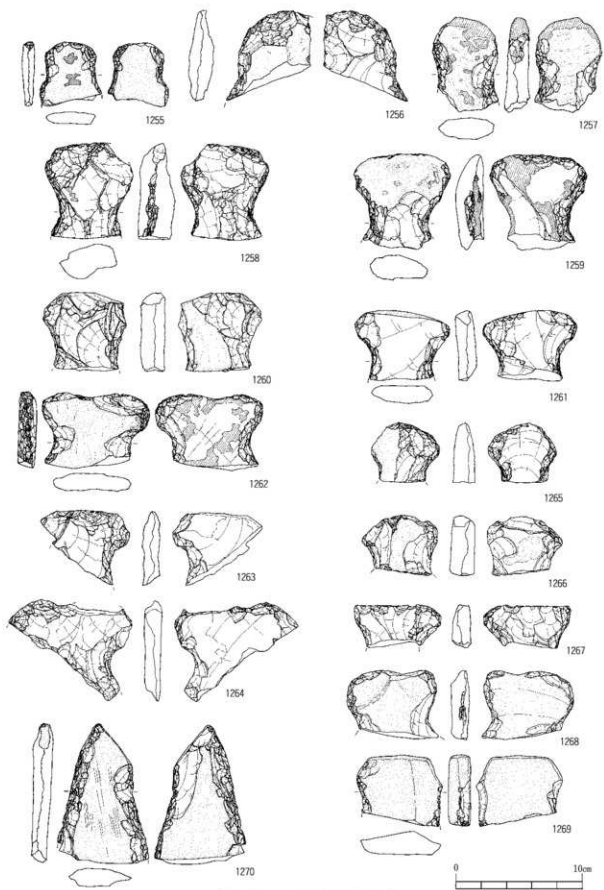
第127図 IIIa層出土石器 (17)



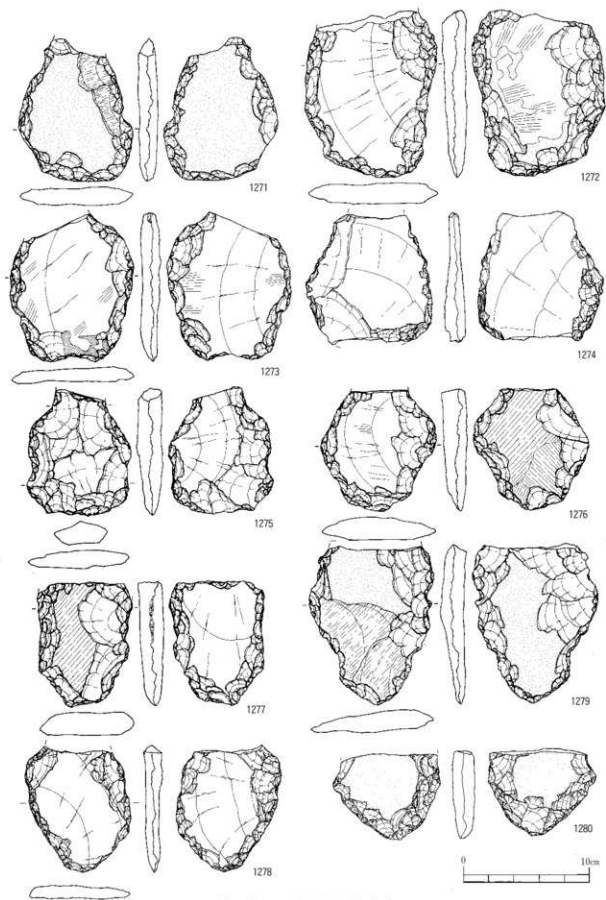
第128図 IIIa層出土石器 (18)



第129図 ■a層出土石器 (19)

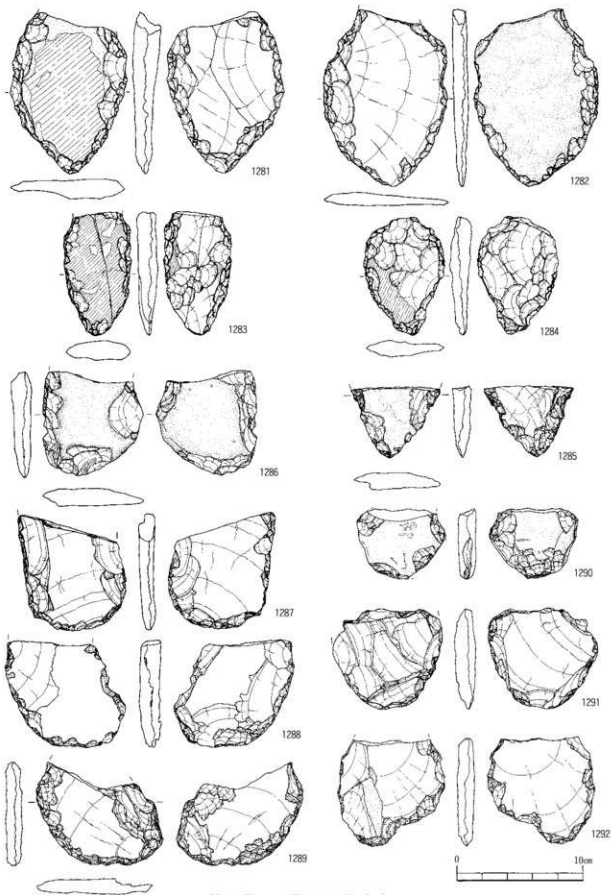


第130图 IIIa層出土石器 (20)

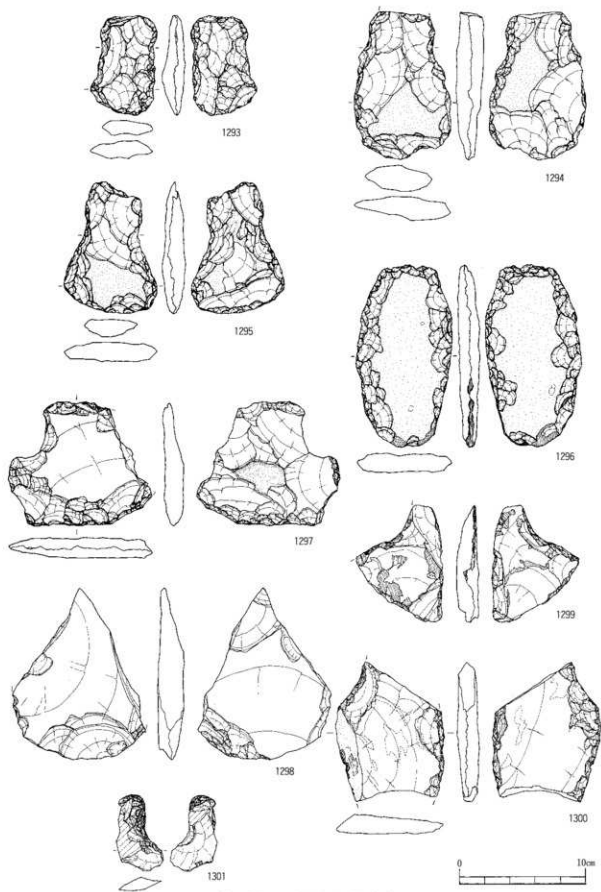


第131圖 III a層出土石器 (21)

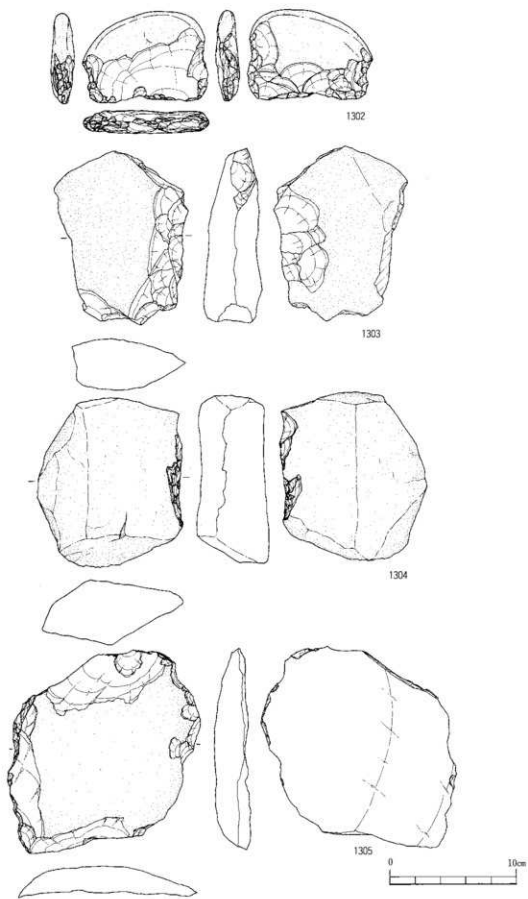




第132图 IIIa層出土石器 (22)



第133图 III a層出土石器 (23)



第134图 III a層出土石器 (24)

磨石・磨敲石・敲石の分類基準については凡例に示したとおりである。ここでは利用されている礫の形状、使用部位によってそれぞれ分類することとする。

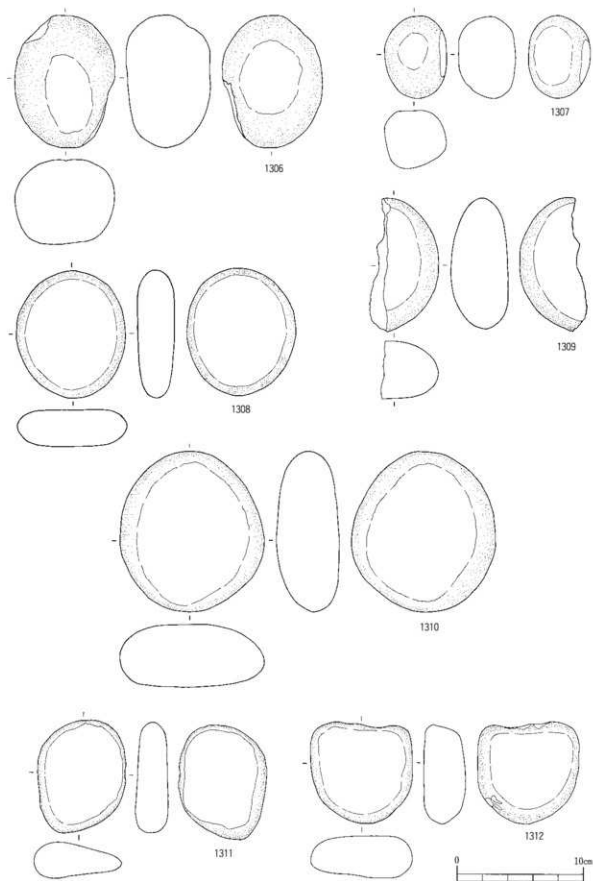
磨石は128点の出土を確認し、そのうち特徴的なものを22点図化した。形状によって、Ⅰ類-球状の礫を利用したもの、Ⅱ類-扁平な亜円礫を利用したもの、Ⅲ類-方形の礫を利用したもの、Ⅳ類-楕円形の礫を利用したもの、Ⅴ類-径5～6cm前後の円礫、亜円礫あるいは棒状の礫などを利用した小型のものに分類し、さらに使用面数によってa類-両面に使用による磨面、または擦痕が認められるもの、b類-片面にのみ認められるものに細分した。

1306・1307は球状の礫を利用したものである。1307は磨面が平坦面を形成するまでよく使用されている。1308～1310は扁平な亜円礫を利用したものである。1310は磨面が平坦面を形成するまで使用されている。1311・1312・1315～1317は方形の礫を利用したものである。1312は磨面が平坦面をもつほど使用されている。1313・1314は楕円形の礫を利用したものである。1306～1316は両面に磨面が認められるものである。1318～1326は小型の磨石である。1318～1324は扁平な亜円礫、1325・1326は棒状の礫を利用したもので、いずれも両面が使用されている。

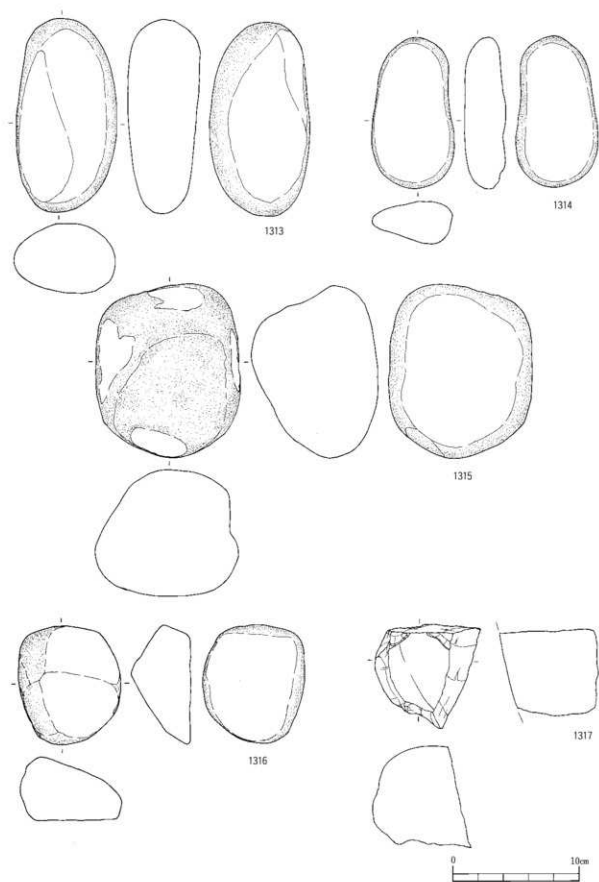
磨敲石は59点を確認し、51点を図化した。形状によってⅠ類-球状を呈するもの(Ⅲb層出土974のみ)、Ⅱ類-扁平な亜円礫を利用したもの、Ⅲ類-方形や台形を呈する礫を利用したもの、Ⅳ類-小型の礫を利用したものに分類し、さらに使用部位によって以下のように細分した。a類-両面に磨面があり、主に側面にのみ敲打痕がみられるもの(1327～1330・1334・1345～1347)、b類-両面に磨面があり、側面と片面の中央部に敲打痕が認められるもの(1331・1333・1348)、c類-両面に磨面があり、側面と両面の中央部に敲打痕の認められるもの(1335・1336・1338～1341・1344)、d類-両面に磨面があり、器面の全体にわたってあばた状の敲打痕が認められるもの(1332・1349)、e類-両面に磨面があり、中央部に集中する敲打痕の認められるもの(1342)、f類-片面に複数の磨面とあばた状の敲打痕がみられるもの(1337)、g類-両面に磨面があり、長軸の両端あるいは一端にのみに敲打痕が認められるもの(1350～1352)。

1327・1328・1330は両面に磨面があり、側面の全周にわたって敲打痕が観察される。1329・1331は側面の敲打痕が長軸方向に集中して認められる。1333は側面の敲打痕が短軸に集中するものである。1335は側面下端に加撃によって剝離が生じている。1336は側面部の敲打痕が長軸および短軸方向の中央部に集中しており、さらに長軸方向のものは表裏面まで及んでいる。1339～1341は両面の中央部に敲打痕が集中して認められるもので、凹面形成は顕著ではないものの凹石としても利用されたことも考えられる。1344は棒状の礫を利用したもので、表裏面と長軸の両端、および側面に敲打痕が認められる。1345～1349は小型の磨敲石である。長軸の端部に敲打痕の残るものが多く認められる。1350～1352は棒状を呈するもので長軸の端部に敲打痕が認められる。

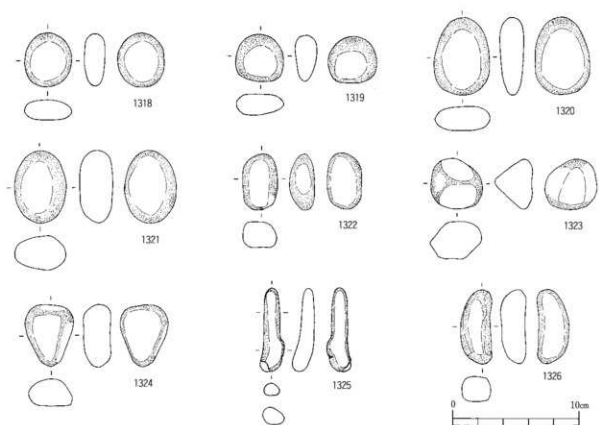
敲石は28点を確認し、25点を図化した。形状によってⅠ類-球状のもの、Ⅱ類-扁平な亜円礫を利用したもの、Ⅲ類-方形(台形)の礫を利用したもの、Ⅳ類-径5～6cm前後の小型のもの、Ⅴ類-棒状の礫を利用したものに分類し、さらに使用部位によって以下のように細分する。a類-側面にのみ敲打痕があるもの(1353・1354・1372・1373)、b類-側面と表(裏)面に敲打痕が認められるもの(1355～1360・1362・1369・1370)、c類-表裏面の主に中央部にのみ敲打痕がみられるもの(1361・1363・1364～1368)、d類-表面全体にあばた状の敲打痕がみられるもの(1371)、e類-長軸の両端あ



第135図 ■a層出土石器 (25)



第136圖 ■a層出土石器 (26)



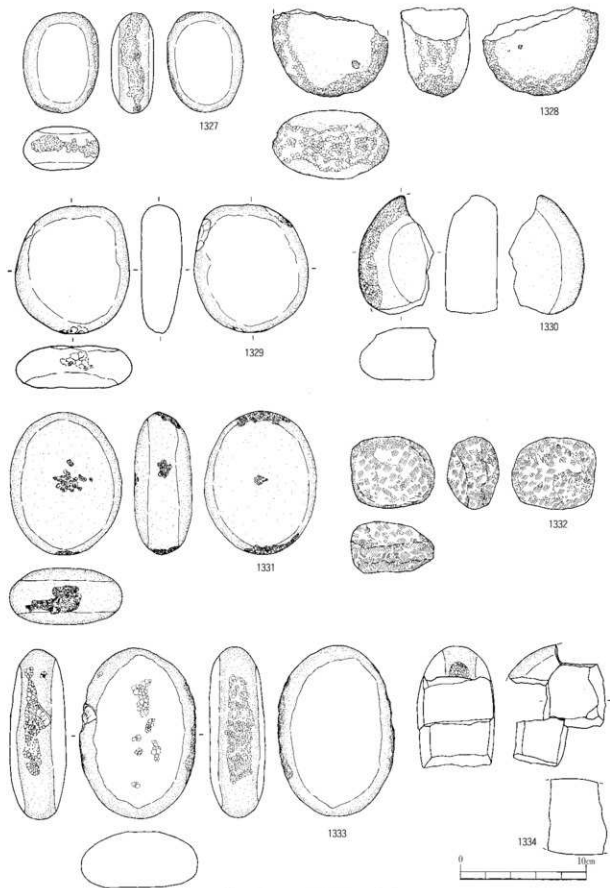
第137図 ■a層出土石器 (27)

るいは一端に敲打痕が認められるもの (1374~1377)。

1353・1354は扁平な亜円磔を利用したもので、側面の全体にわたって敲打痕が観察される。1355・1356は半分ほどを欠損するが、扁平な亜円磔を利用したものである。1355は側面と表表面、1356は側面と片面の中央に敲打痕が認められる。1357・1358・1362は扁平な亜円磔を利用し、側面と表裏面の中央に集中する敲打痕がみられる。1359は側面に部分的に集中する敲打痕と片面の中央に敲打痕がある。1360は楕円形の磔を利用しており、側面の全体と一面の2か所に集中する敲打痕が認められる。1361・1363~1367は扁平な磔を利用し、片面あるいは両面の中央部に集中する敲打痕がみられるものである。1361・1363~1367・1368は凹面の形成が顕著ではないかいわゆる凹石としての用途が考えられる。

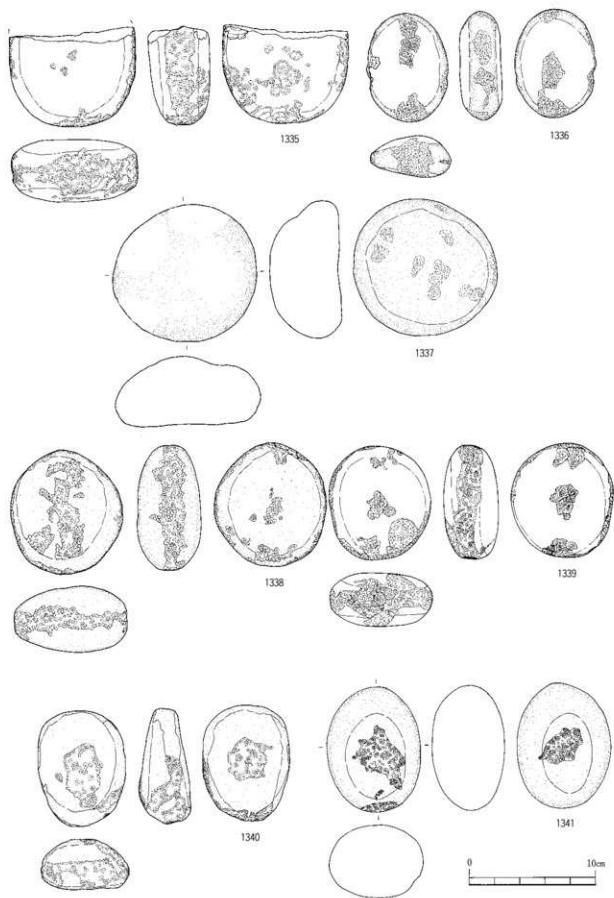
1370は楕円形の磔を利用したもので、長軸両端と表裏面の中央部に敲打痕が認められる。1371~1377は小型の敲石である。1371は球状の磔を利用しており、全体にあばた状の敲打痕が観察される。1372は扁平磔を利用し、長軸の両端と短軸の両端に敲打痕が集中している。1374は側面から長軸方向の表表面にかけて集中する敲打痕が認められる。1374は楕円形の磔を利用したもので、長軸の両端に敲打痕が残存する。1375~1377は棒状の磔を利用しており、長軸の両端あるいは一端に敲打痕が認められる。いわゆる棒状敲石である。

石皿は25点出土したうち11点を図化した。本遺跡から出土した石皿の特徴として、板状の磔を素材とし、側面に剝離痕が残存するものが多いことが挙げられる。石皿の整形、使用や廃棄によって生じた破損、あるいは被熱破砕や二次的な利用によって生じたものなど様々な原因が考えられる。

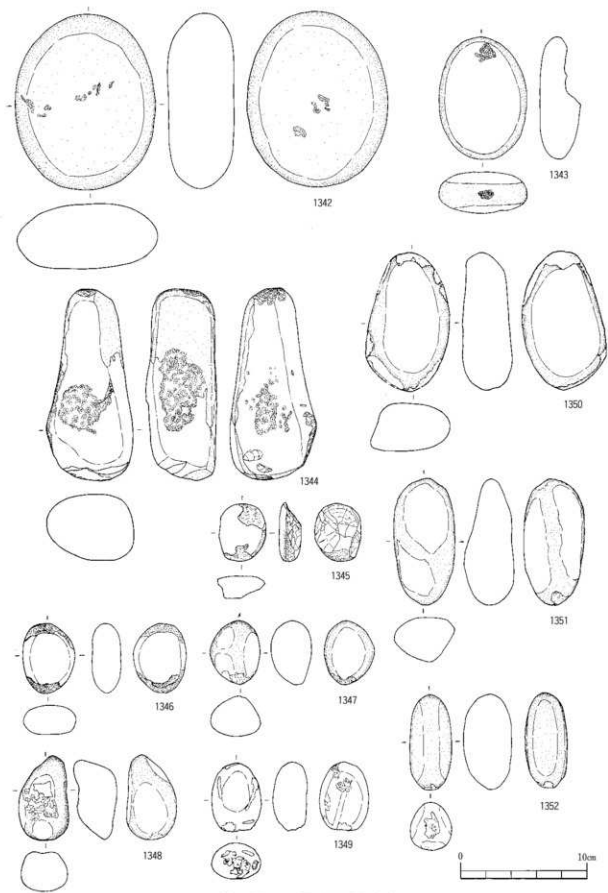


第138图 IIIa層出土石器 (28)

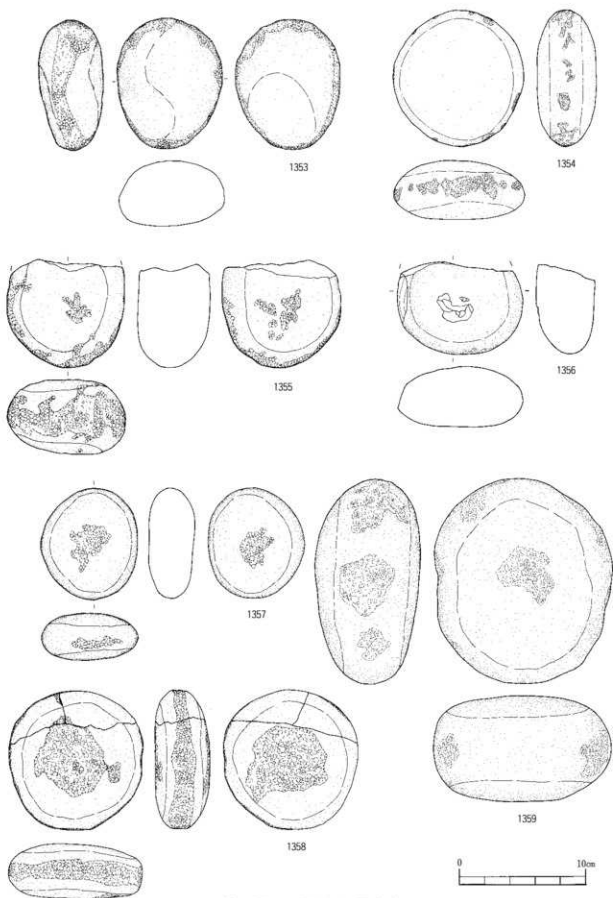




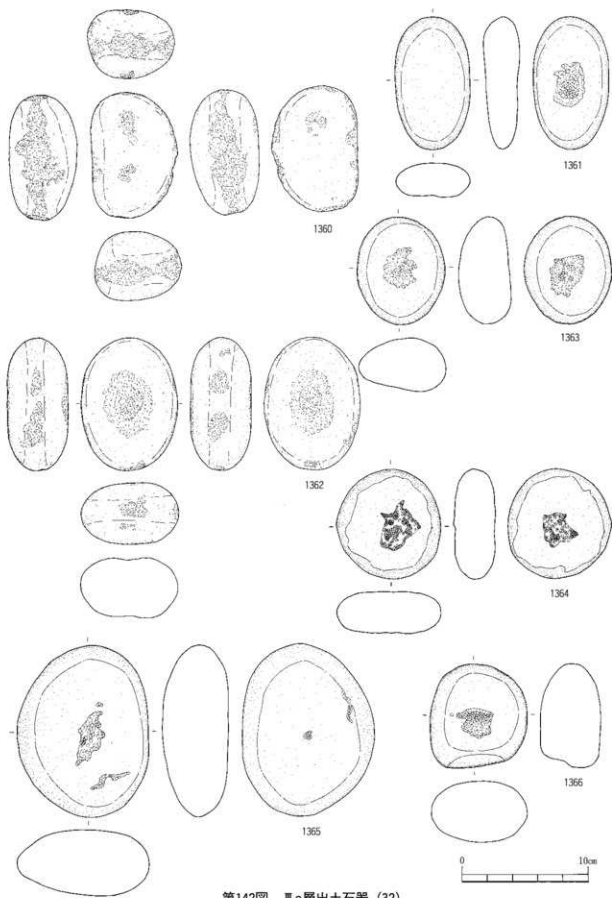
第139图 IIIa層出土石器 (29)



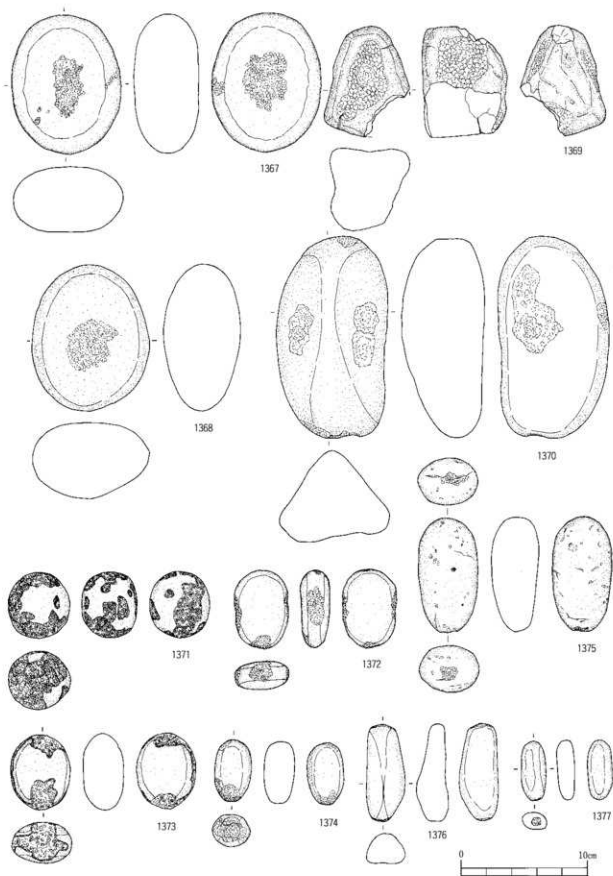
第140图 IIIa層出土石器 (30)



第141圖 III a層出土石器 (31)



第142图 III a層出土石器 (32)



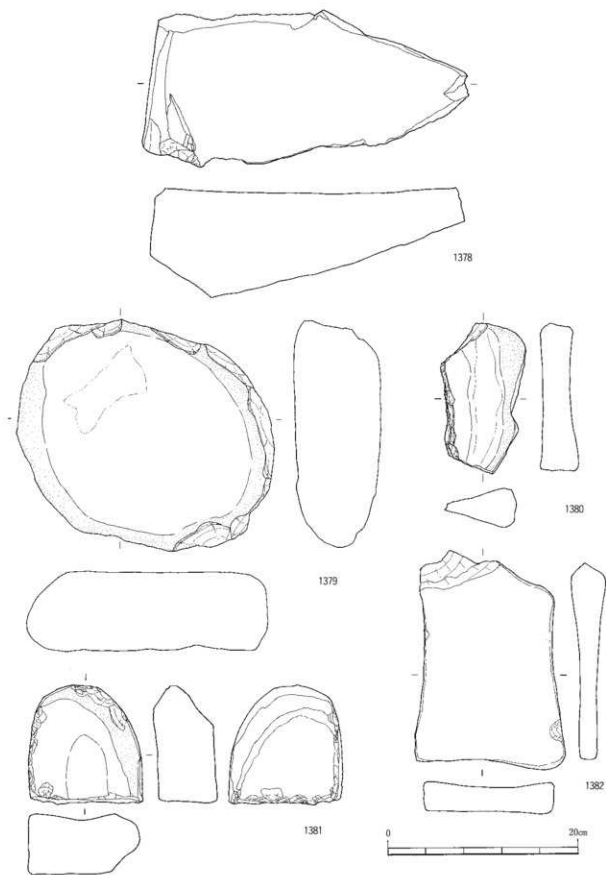
第143图 IIIa層出土石器 (33)

ここでは、使用面数とその形状によって分類し、その後、各個体について説明する。使用面数の分類として、Ⅰ類-使用面が片面にのみ認められるもの、Ⅱ類-使用面が両面に認められるもの、Ⅲ類-使用面が2面以上認められるものとし、使用面の形状によってa類-使用面が凹面を形成するもの、b類-使用面が平坦なものに細分する。

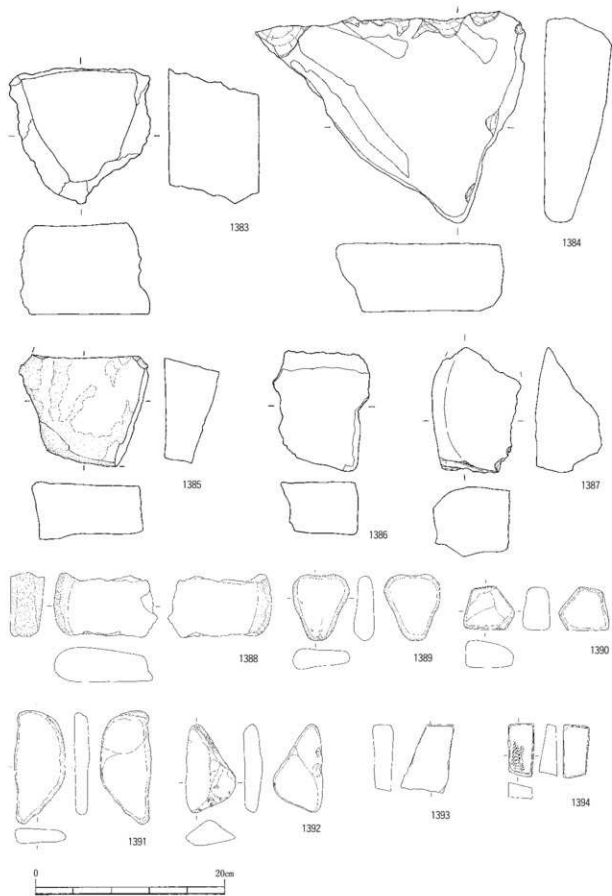
1378は板状の礫を利用したものである。一面に磨面が認められる。使用面の形状は平坦である。1379は平面形が亜円で板状の礫を利用したものである。側面にみられる剥離痕は石皿を整形するためのものと思われる。片面のみが使用された石皿で使用面は平坦である。磨面の形成が弱いことから、使用度は低いものと考えられる。被熱を受けたと思われ、色調は赤褐色を呈する。1380は板状の礫を利用したものと思われる。かなりきめの細かい砂岩である。図化されていないが両面を使用しており、使用面は凹面となるものである。両面の凹面形成によって器厚が薄くなった部分で破損している。1382は板状の礫を利用したもので、石材は1379と同様である。図化されていないが表裏両面と図上の上端を除く3側面も使用されており、各使用面は凹面を形成する。右側面は磨面形成前に敲打が行われた痕跡が認められる。1380・1382は砥石としての利用も考えられる資料である。1381は楕円形を呈する板状の礫を利用したものと考えられる。原形の半分ほどの部分で破損している。片面のみ使用され、使用面は凹面を形成している。両面の側縁部に細かい剥離痕が残存する。破損後に施されたものと思われる。1383は板状の礫を利用したもので、片面が使用されている。使用面はやや弱い凹面を形成する。光沢をもつほど平滑な磨面となっている。残存部位から類推すると原形はかなりの大型品であったものと思われる。1384は板状の礫を利用したもので片面使用のものである。使用面は平坦である。側縁の一端に複数の剥離痕が残存する。1385は板状の礫を利用しており、片面使用である。使用面は平坦である。1385～1387は板状の礫の片面のみを使用しており、使用面は平坦である。いずれも磨面形成が弱いことから使用度は低いものと思われる。1388は扁平な亜円礫を利用したものと考えられる。両面に凹面を形成する使用面が認められる。

1389～1394は砥石として分類したものである。利用されている石材の形状によってⅠ類-方形や楕円形など礫の原形をとどめるもの、Ⅱ類-分割された板状の礫を利用したものに分類した。Ⅰ・Ⅱ類とも使用面は平坦となり、磨面形成においてはⅠ類が弱く、Ⅱ類において顕著な傾向が認められる。

1389は扁平礫を利用しており、両面に磨面が認められる。1390は五角形の礫を利用したもので、表裏面のほか、各面において磨面が形成されている。1391は扁平な楕円礫を利用し、両面が使用されている。1392は扁平な三角形の礫を利用したもので、各面において磨面が認められる。表裏面に敲打痕が認められることから磨敲石に分類される可能性を残す。1393は板状の礫を利用しており、光沢のある磨面が認められる。1394は板状の礫を利用したもので明瞭な擦痕が残存している。



第144図 IIIa層出土石器 (34)



第145図 III a層出土石器 (35)



#### ④ II層出土石器(第146図 1395~第147図 1417)

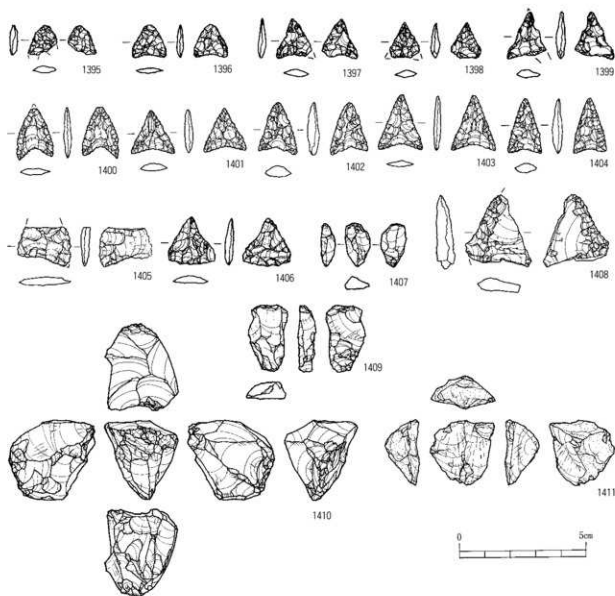
II層(灰黒色土)は、基本的に古代から中世の土器が出土する遺物包含層である。ただし一部においてII層下位のIIIa層上部と同様の縄文時代晩期から古墳時代にかけての遺物を包含しているため、IIIa層出土石器群と明確に区分することが困難な状況がある。ここでは層位区分によって器種ごとに説明する。II層から出土した石器は打製石鏃、石鏃未製品、楔形石器、石核、打製石斧、磨石、敲石である。なお、器種ごとの分類は当遺跡で最も良好な資料が出土したIIIa層に準じて行っており、個体ごとの石材や計測値、分類については観察表に掲載している。(第34表)

打製石鏃は12点出土しており、すべてを図化した。1395は基部の中央部に半円形の深い抉りが入るものである。欠損しているために基部の形状による類別が困難である(Ic類)。1400は基部の全体にわたって略半円形の深い抉りが入り、逆刺が鋭く側縁部が外湾するものである(Id類)。1396~1399, 1401~1404は基部が浅い凹基状を呈し、基本的に側縁部は外湾するもの(Ij類)。逆刺が鋭いものとやや丸みを帯びるものがある。1405は平基状であるが基部端の長さが左右で違うもの(IIc類)である。1406は石鏃未製品と考えられる。楔形石器は2点出土しており、すべてを図化した。1407・1409はいずれも縦長で(I類)、小型のものである。平行する二側縁辺(両端)の表裏面に両極打法や使用時の加撃によって生じたと思われる階段状の剥離が観察される。1408はスクレイパーとして分類したもので、一縁辺の両面に二次加工によって刃部が作出されている(II類)。石核は4点出土したうち2点を図化した。1410は打面に求心状の剥離が認められ、縦長の石刃状の剥片剥離が行われる(III類)。1411は単設打面から剥片剥離が行われているものと思われ、礫面が残存する(IVa類)。打製石斧は3点出土したうち2点を図化した。1412・1413は基部幅に比して刃部幅が広く、二側縁に明瞭な段を有するもので、いわゆるラケット形を呈するものである(I類)。1412は基部と刃部を欠損し、1413は括れ部のみ破片である。磨石は6点のうち1点を図化した。1414は扁平な亜円礫を利用したもので、両面に使用による磨面がある(Ia類)。1416は磨敲石である。扁平な亜円礫を利用しており、両面に磨面、長軸の両端に敲打痕、片面の中央部に集中する敲打痕が認められる(IIb類)。敲石は2点のうち1点を図化した。1415は扁平な亜円礫を利用したもので、側面と片面の中央部に集中する敲打痕が認められる(IIb類)。軽石製品は1点を図化した。1417は凹部が形成されているものである。

#### ⑤ I層出土石器ほか(第148図 1418~第155図 1501)

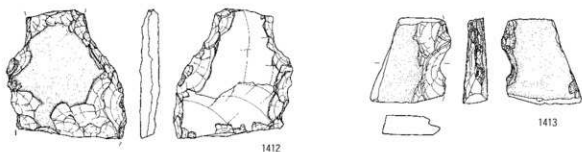
II層以下の各遺物包含層から出土した資料のほかにI層出土遺物や一括遺物、表採遺物として取り上げられた遺物の中に良好な資料が多く含まれていたため、ここでまとめて紹介する。器種は、打製石鏃、石鏃未製品、石匙、石錐、楔形石器、スクレイパー、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、石核、磨製石斧、打製石斧、磨石、磨敲石、敲石、石皿、軽石製品である。なお、個体ごとの石材、計測値、分類については観察表に掲載している。(第34表・第35表)

1418~1437は打製石鏃である。1418・1419・1421・1422・1432は抉りの形状が三角形を呈し、側縁部が外湾する(Ii類)。1420・1424・1426は基部に略半円形の深い抉りが入り、逆刺は丸みを帯び側縁部が外湾するものである(Ie類)。1425は基部の中央部に半円形深い抉りが入り、側縁部が外湾するものである(Ic類)。1423は二等辺三角形の深い抉りが入るものである(Ig類)。



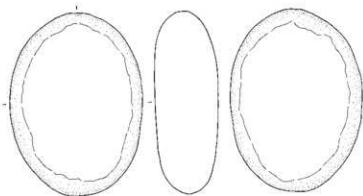
第146図 I層出土石器(1)

1428~1431・1433は基部が浅い凹基状を呈し、側縁部が外反する(Ij類)。1435~1437は平基錐で三角形を呈するものである(IIb類)。1434は平基状であるが基部端の長さが左右で違うものである(IIc類)。1438~1440は石錐未製品である。1441~1443は石匙である。1441が横型(IIb類)、1442・1443は縦型(Ib類)のものである。1444は両面加工の石錐である(IIb類)。1445・1446は楔形石器である。表裏面に両極打法や使用時の加撃によって生じたと思われる階段状の剥離が観察されるものである。1445は横長の楔形石器で縦断面形は方形を呈し下端が破損している。1447~1451・1453はスクレイパーである(II類)。1447は片面加工のもので刃部は直刃となる。1449は縦長の剥片を利用したもので、一側縁の両面に二次加工が施され刃部が形成されている。1450は縦長剥片を縦位に利用し、一側縁の両面に二次加工が施される。1451は縦長の剥片の一側縁に両面から二次加工が施され、刃部が作出される。1453は素材剥片を縦位に利用し、一側縁に片面のみ二次加工が施されるもので

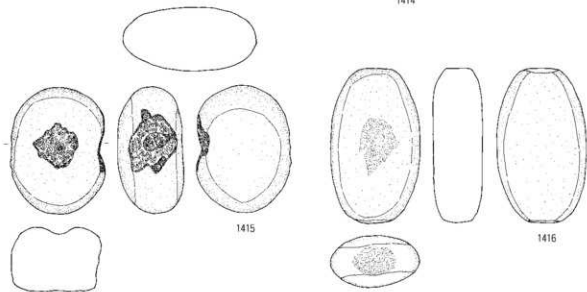


1412

1413

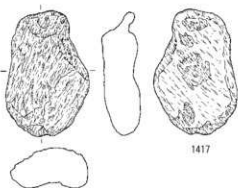


1414



1415

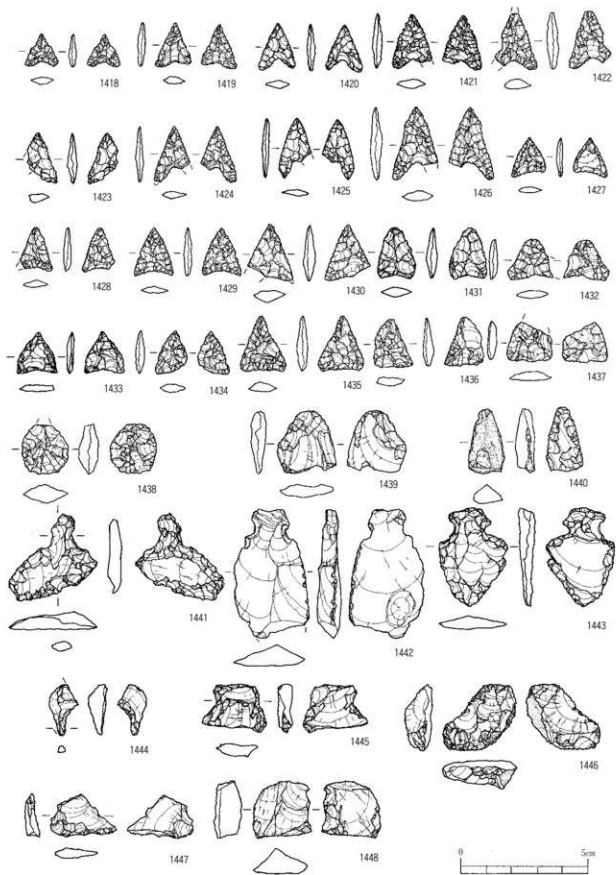
1416



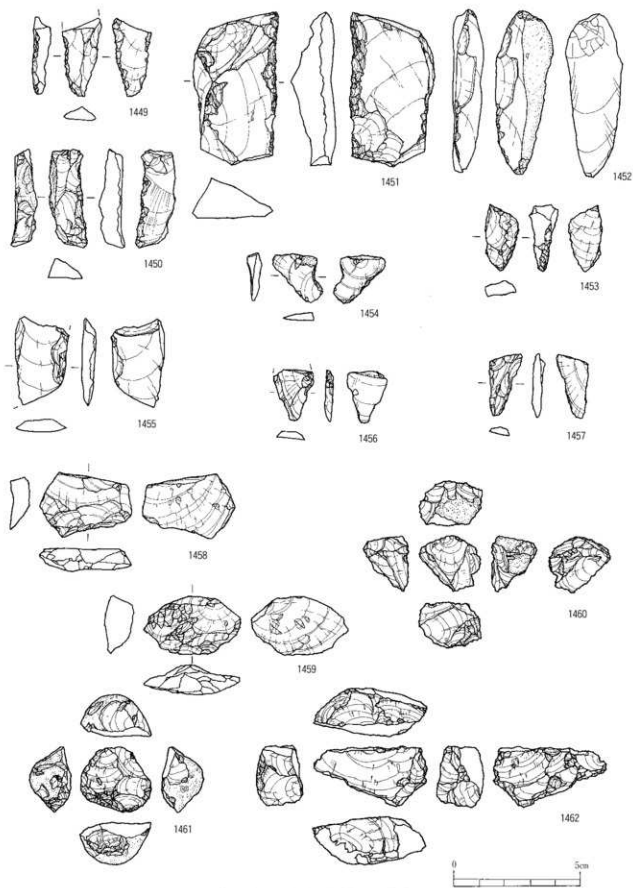
1417



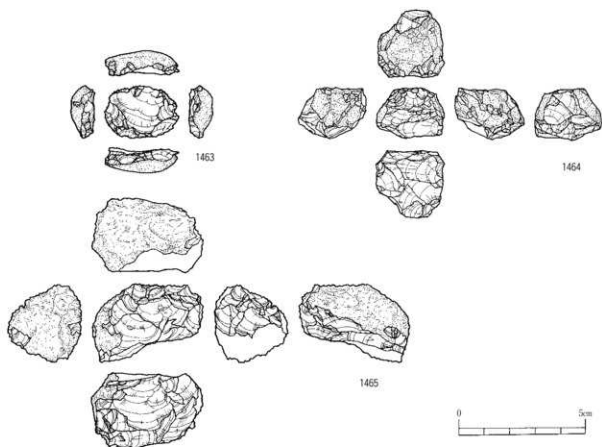
第147图 I層出土石器(2)



第148図 I層出土石器ほか(1)

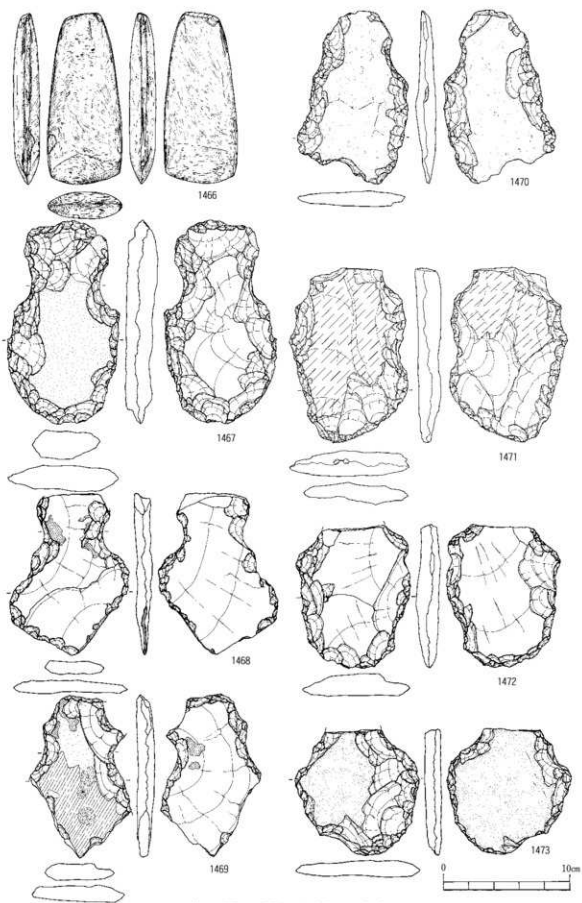


第149図 I層出土石器ほか(2)

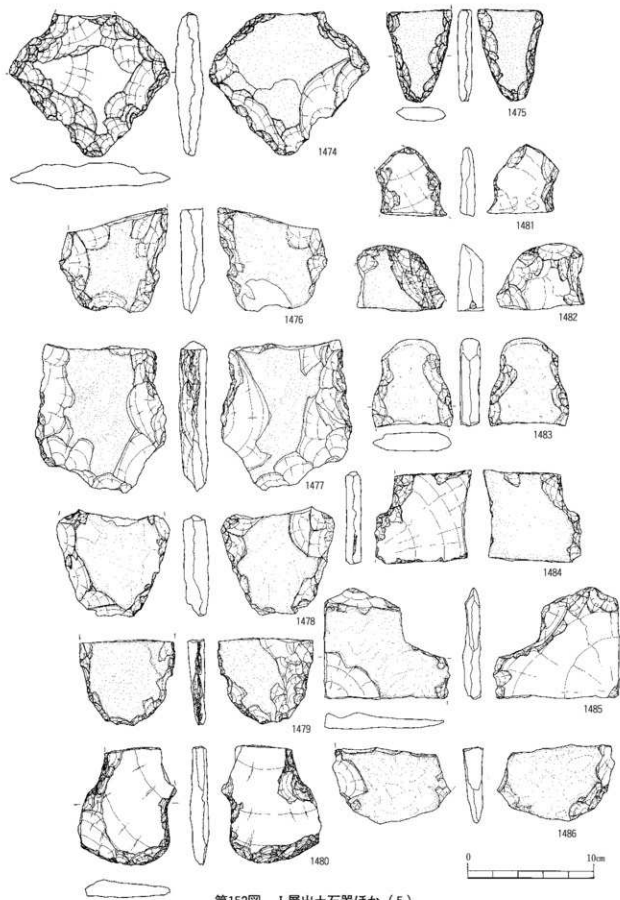


第150図 I層出土石器ほか(3)

ある。1452・1454～1457は二次加工のある剥片である。1452は縦長剥片の鋭利な一側縁に微細な剥離が施される。1454は不定型な剥片の背腹両面に微細な剥離が認められる。1455は素材剥片を縦位に利用し、鋭利な一側縁に二次加工が施される。1456は背面の一側縁の一部に二次加工が認められる。1457は素材となる剥片の末端に片面のみ二次加工が行われている。1458・1459は横長を呈する剥片の末端に使用痕のみられる剥片である。1460～1465は石核である。1460は角状の礫を素材としたもので、正面・背面・底面に比較的大きな剥離面が認められるが、剥離された剥片はいずれも小型のものである(IIIa類)。1461は円礫を素材としたもので、打面転移が行われ求心状の剥離が観察される(Ia類)。1462は打面転移が行われ、被剥離面が複数観察される(IIIb類)。1463は単設打面で一方にのみ剥離が行われたものである(IVa類)。1464は剥離面は変更されず打面が90°変更されたと考えられるものである(IIb類)。1466は磨製石斧の完形品である。整形痕、調整剥離痕は観察されず、全体に入念な研磨が施されている(II類)。1467～1486は打製石斧である。1467～1473は基部幅に比して刃部幅が広く、二側縁に明瞭な段を有するもの、平面形がいわゆるラケット形を呈するものと思われる(I類)。1468・1469は刃部先端が三角形を呈し、括れ部付近に固定痕と考えられる摩滅痕がある。1474～1480は刃部片である。1474・1475・1478は三角形(a類)、1476・1477は平坦(c類)、1479・1480が円刃(b類)を呈する。1481～1483は基部片である。基部先端が円形を呈する(B類)。1485・1486は未製品の可能性がある。1487・1488・1490・1491は磨石である。1487は球

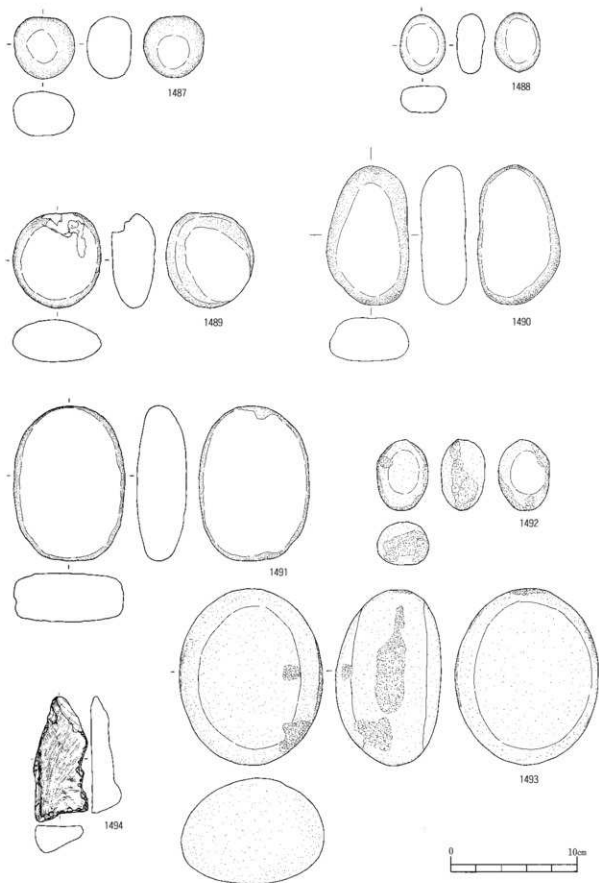


第151図 I層出土石器ほか(4)

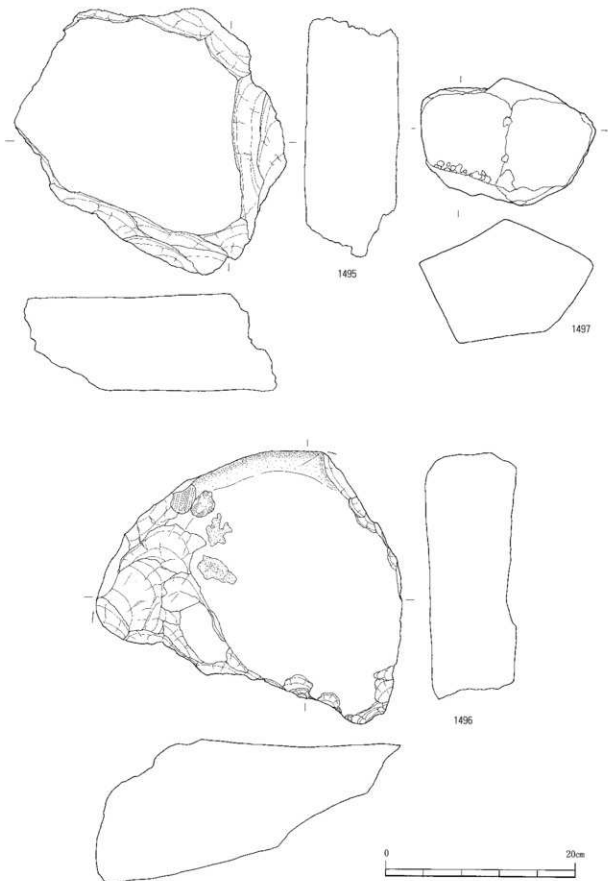


第152図 I層出土石器ほか(5)

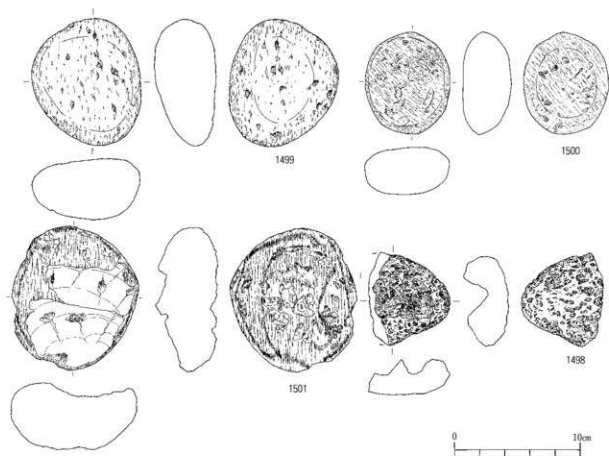




第153図 I層出土石器ほか(6)



第154図 I層出土石器ほか(7)



第155図 I層出土石器ほか(8)

状の礫を利用したもので、両面に使用面が認められる (I a類)。平坦面が形成されるほどよく使用されている。1488・1490・1491は扁平な亜円礫を利用したもので、両面とも使用されている。1489は楕円形の礫を利用したものである (IV a類)。1489は磨敲石である (II g類)。両面の磨面と長軸の一端に加撃によって生じた剥離が観察される。1492・1493は扁平な亜円礫を利用した敲石で側面の全周に敲打痕が認められる (II a類)。1494は磨面のみられる礫である。磨面が形成されるにあたって左側縁端にわずかな段が作り出されていることから、人力による加工とは考えにくい。墓石などに施される機械的な加工による所産と考えられる。1495～1497は石皿である。いずれも片面のみに使用による磨面が形成され、使用面は平坦である (I b類)。1495は側面のすべて、1496は側面と使用面の一部に剥離痕が残存する。1498～1501は軽石製品である。1498は一面に凹部が形成されている。1499・1500は両面にわずかな面取りが行われている。1501は大きな剥離とあばた状の敲打痕が認められる。

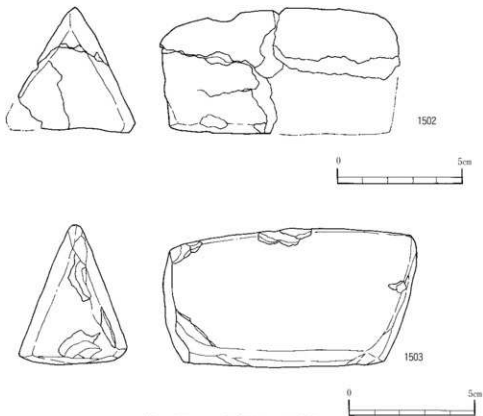
### ◎特殊遺物

#### 三角埴形土・石製品 (第156図 1502・1503)

土器や石器など一般的な出土遺物のほかに、形状が類似した土製品及び石製品が出土している。何れも三角柱状をしており、北陸地方で縄文時代後期から晩期にかけて見られる三角埴形土製品及び三角埴形石製品の可能性があるものと考えられる。

土製品は長さが上部で9.6cm、下部では推定で8.9cmである。幅は残存長が4.7cmであるが、破損を考慮した推定長で5.2cmである。高さは5.0cmである。3点が接合したものであるが、不足する部分もある。柱状を形成する四角形は上部が若干広く、下部で7mmほど狭いことから正確に表現するならば台形ということになる。すべての面は、表面が割合に滑らかに調整されている。柱の両端の面は割合に整った正三角形を呈しており、ほぼ平面で滑らかに調整が施されている。色調は全体的に明るい茶褐色であり、胎土に石英や長石、角閃石のほか砂粒も含んでいることから、当地ないしはその近辺で作られた可能性もあるが、詳細は不明である。(1502)

石製品は長さが上部で10.0cm、下部で8.1cmであり、土製品よりも若干いびつな印象を受ける。幅は4.3cm、高さは5.6cmである。青緑色を呈する割合に軟質な砂岩製で、完形品である。柱状を形成する四角形は土製品よりも極端な台形状をしているが、面自体は平滑である。柱の両端の面は鋭角な二等辺三角形をしており、一方は平坦であるが、もう一方は凸状となっている。何か所かに剝離した痕跡が残っているが、敲打を目的として製作されたものとは考えにくい。それは、全体的な製作あるいは仕上げを研磨によっていることから、もし、敲打が目的であれば、そのように研磨することが必要とは思われないからである。(1503)



第156図 三角埴形土・石製品

## 第6節 弥生時代の調査

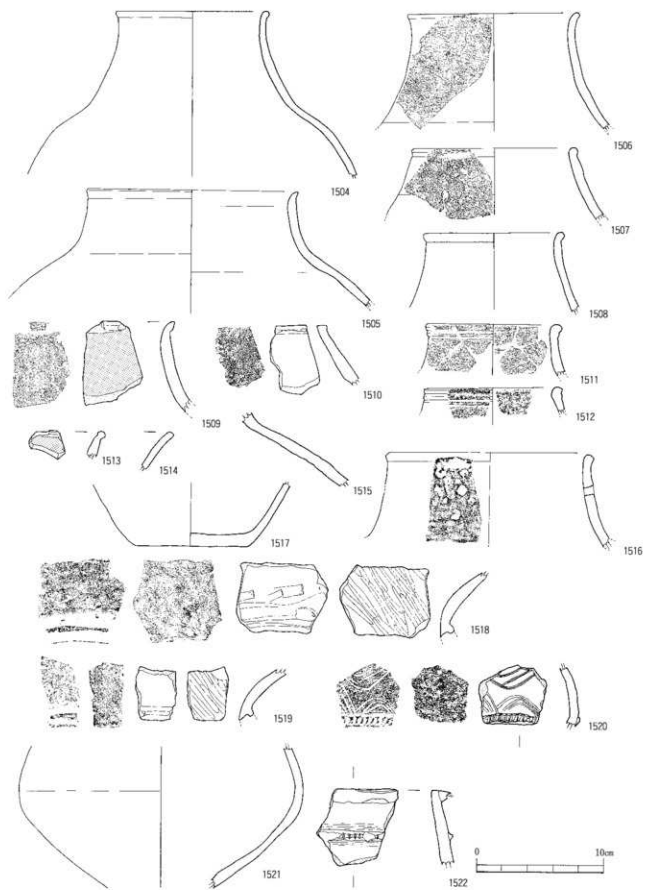
遺構は検出されていないが土器が出土している。ただ、この時期の土器は、縄文時代晩期の遺物包含層と同じ層から出土することに加えて、刻目突帯文土器自体が縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて見られること、同じ土器でも縄文時代晩期、弥生時代前期というように、やや混沌とした時代の遺物と言えなくもない。本書では先にも述べたように、板付Ⅱ式以降を弥生時代前期、また壺形土器の出現をもって弥生時代と呼ぶことにするという考えを踏襲している。このため、この時代・時期に該当する土器は壺形土器がほとんどで、甕形土器が極めて少ないということになる。このような土器の組成はあり得ないわけであるが、刻目突帯文土器の器形による時期区分ができなかった以上、やむをえないことと考える。後考を待ちたい。

壺形土器は口唇端部が小さく丸まって玉縁状となっていることから、若干外反しているような形状である。また、玉縁状となっているために口唇部のすぐ下には段が付くように見える。口唇端部が三角形状を呈しているものもある。口縁部より下位の頸部が長く、徐々に広がりながら胴部に向かうが、頸部と胴部の境界には明確な段を有している。頸部の外面はやや直線的であるのに対して、内面は若干内側にカーブしていることから、中央部では器壁が中膨らみとなる。頸部の長さには極めて長いものとそれほど長いと感じられないものが見られる。明瞭な段から下部の胴部は大きく膨らむ。外面が丁寧に磨かれて残存状態が良好なのに対して、内面は剥落が見られるか所があるなど割合に荒れている状況である。胴部最大径から下位の胴部は、ほぼ直線的に安定した平底となる底部へとつながる。底部は胴部付近よりも器壁が厚く作られており、接地面の端部の外への張り出しはなく、丸みを帯びている。器面調整は、外面が丁寧なヘラミガキである。内面は横方向を主とするナデ調整である。

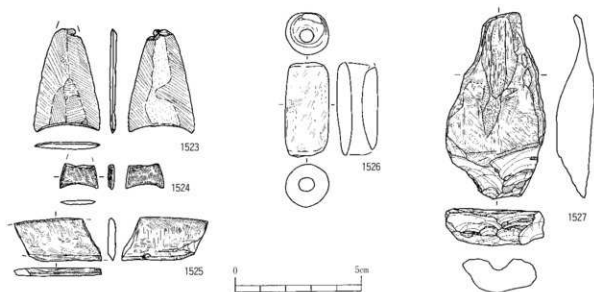
中には丹の塗られたものも見られるが、大まかな形状は他のものと違いはない。

そのほかに、胴部に刻みを有する突帯が巡り、その上には弧状の沈線が上下に向かい合って施されているものもある。

甕形土器は口唇部のすぐ下位に割合に大きめの刻みが施される突帯が巡っており、口縁部全体として外反するものと、口縁部が内傾しており、口唇部と同じ高さのところとそれよりやや下方の離れたところの2か所に、合わせて2条の突帯が巡り、そこに極めて小さく浅い刻み目が付されているものがある。



第157図 弥生時代の土器



第158図 その他の石器

その他の石器（第158図 1523～1527）

II層（灰黒色土）およびIIIa層（暗黄褐色土）から出土した磨製石鏃、垂飾、管玉、有溝砥石をまとめて掲載した。磨製石鏃2点、垂飾1点、管玉1点、有溝砥石1点出土しており、すべてを同化した。1523・1524は頁岩製の磨製石鏃である。いずれも先端部を欠損している。大きさに差があるものの、残存部位から判断しておそらく同形状を呈するものと思われる。基部はやや凹基状となり、側縁部が外湾する二等辺三角形のものである。両面とも明瞭な擦痕が観察される。弥生時代に属するものと考えられる。

1525は垂飾として分類したものである。蛇紋岩製で欠損していると考えられる。残存長3.5cm、幅2.0cm、重さ2.5gである。表裏面の全体にわたって擦痕が認められる。短軸の両端に擦り切り状の磨面が観察される。珠状耳飾の欠損品などを転用した可能性があるものである。

1526は大型の管玉である。石材は光沢のあるウグイス色を呈するものであるが明確ではない。長さ3.7cm、幅1.9cm、重さ16.24gを測る。穿孔は上下両方向から行われたものと思われる。表面には擦痕が残存する。縄文時代晩期に属する可能性が高い。

1527は有溝砥石として分類したものである。

## 第7節 古墳時代の調査

Ⅱ層を包含層として古墳時代の遺物が出土したほか、Ⅲ層を掘り方の上面とする土坑が3基確認された。

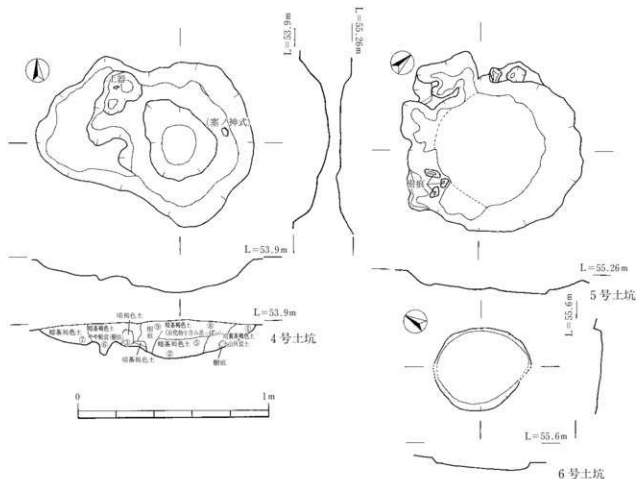
### (1) 土坑

土坑については、縄文時代晩期の土坑からの通し番号として、4号土坑から6号土坑までとした。

4号土坑はD-13区で検出され、長径229cm、短径172cm、深さは39cmである。全体的な形状は東側が膨らむ楕円形で、主軸方向はN88°Wである。西側は浅く、中央部寄りの北側には2個の小ビットが並ぶ。東側は比較的深く、外見上は2段になっている。埋土の状況は西側と、東側の下部が埋まった後に、東側の上部が堆積していると考えられる。

5号土坑はH-12区で検出され、長径187cm、短径183cm、深さは23cmである。西側を中心に樹痕によって攪乱を受けていることを除けば、全体的な形状はほぼ円形と言っていいだろう。非常に浅い土坑であり、埋土はⅡ層の均一層である。

6号土坑はG-20区で検出され、長径103cm、短径87cm、深さは12cmである。円形に近い楕円形をしており、主軸方向はN30°Wである。非常に浅いが、掘り方は明瞭である。埋土は5号土坑と同様にⅡ層の均一層である。

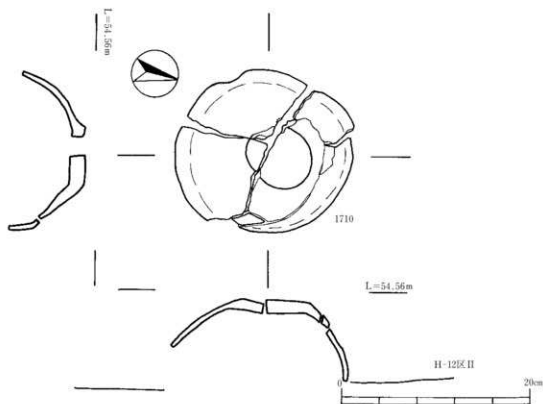


第159図 古墳時代土坑



第11表 土坑計測表（2）

検出番号	遺構名	検出区	検出面	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	軸方向	内部土坑ビット 1径×短 径×深さ(cm)	内部土坑ビット 2径×短 径×深さ(cm)	本体埋土	形状
159	4号土坑	D-13	IIIa	229	172	39	N88W	92×70	36×30×14	暗茶褐色土・ 暗黄茶褐色火 山灰質土	楕円
	5号土坑	H-12	—	187	183	23	N37E	—	—	黒褐色土	円
	6号土坑	G-20	—	103	87	12	N30W	—	—	暗黒褐色土	円



第160図 鉢形土器出土状況

## （2）鉢形土器出土状況

H-12区から鉢形土器（No.1710）の完形品が出土した。

II層からの出土であり、ほかにこの層からは多くの古墳時代の土器が出土していることから、在地的な性格の強い成川式土器と考えられる。

厚みのある安定した平底で、底径は6.0cmである。底部からの立ち上がりは弧状に大きく広がっており、その後はほぼまっすぐに口縁部に至る。器高は8.1cm、口径は16.6cmである。完形品ではあるが、口縁部が傾いており、均整がとれていないと言え難いものである。



第161图 土器出土状況图(3)

### (3) 土器

土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏、手捏ね土器が出土している。

#### ① 甕形土器（第162～168図，1528～1650）

##### 外反く字（第162～163図，1528～1551）

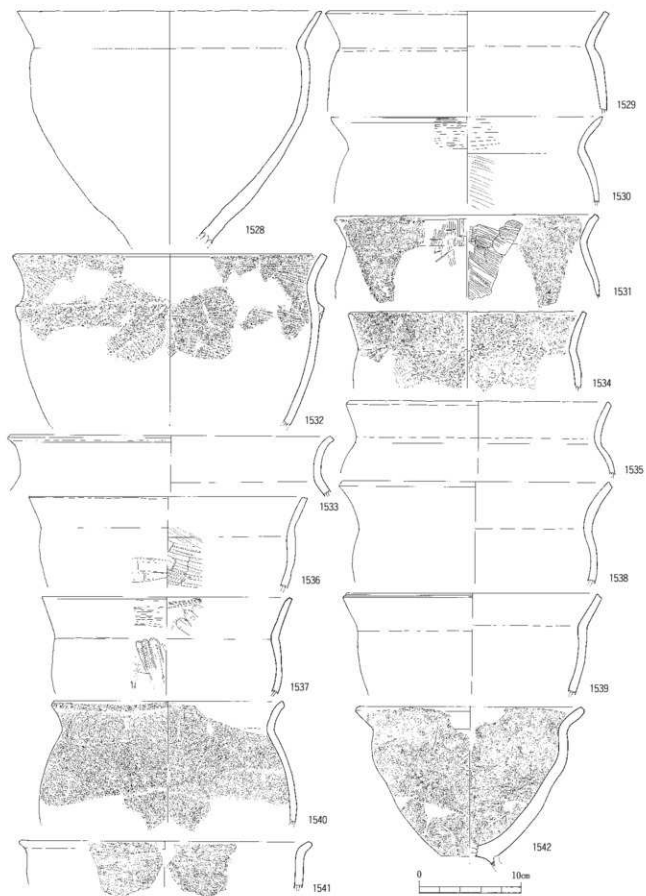
口唇端部は角張ったものから丸まった山形や三角形のものなどいろいろであるが、数量的には角張ったものが割合的には多いようである。口縁部が大きく明瞭に外反していることから、内面に明確な稜を持つものも多く見られる。ただ、緩やかにカーブして稜の不明瞭なもの、胴部まで含めるとS字状に見えるものもある。また、外反の程度にも、極めて大きなものから若干不明瞭なものまで各種見られる。大きく外反するものは外面に段を有するように見える。これは、多分に頸部から口唇端部方向にハケ目によって掻き上げた結果によるものの可能性が大きい。この場合、口唇端部を横方向にナデ回して凹凸を整える傾向が伺える。外面の段の下方は幾分器壁が厚く作られるものがあるなどで、胴部がひときわ張るように感じられる。それでも口縁部の端ほど張るものはそれほど多くはなく、割合に早くすばまってはほぼ直線的に底部へと向かっている。1540は胴部が口縁部の端部よりも張っているもので、相対的に頸部が締まっているように感じられる。1542は口唇端部が丸みを帯びており、器形が若干小振りであり、器壁は全体的に厚い。このため、一般的な甕よりも分厚い印象をより一層強く与える。内面の稜や頸部のカーブが緩やかで、胴部が一旦真下に下りた後に、急速に内傾してすばまっていく。底部は脚台の付く上げ底である。器面調整は、一般的なものは、外面が頸部から口縁部にかけてハケ目による掻き上げ、頸部から下位、胴部上部までは斜め方向を主とするハケ目、胴部下位から底部に向かっては縦方向を主とするハケ目調整である。また、内面は口縁部が横方向のハケ目、頸部から下位は斜め方向あるいは縦方向のハケ目あるいはナデ調整、底部付近の胴部下位は斜め方向のハケ目調整が行われている。頸部付近に斜めの刻み目を付す突帯が巡らせてあるものもある。1532は刻みにハケ様の施文具を用いて刻んでおり、1536は鋭いヘラ様の施文具で刻んである。

1543は頸部が締まり、胴部が大きく膨らむもので、一見すると壺形土器と見間違えるが、内面の稜より下位がヘラケズリによって調整、仕上げてあることから甕形土器と判明する。1544も同様な器形であるが、頸部内面に割合に明確な稜を持つ点が若干1543と異なっている。内面の器面調整は、頸部以下がヘラケズリである。

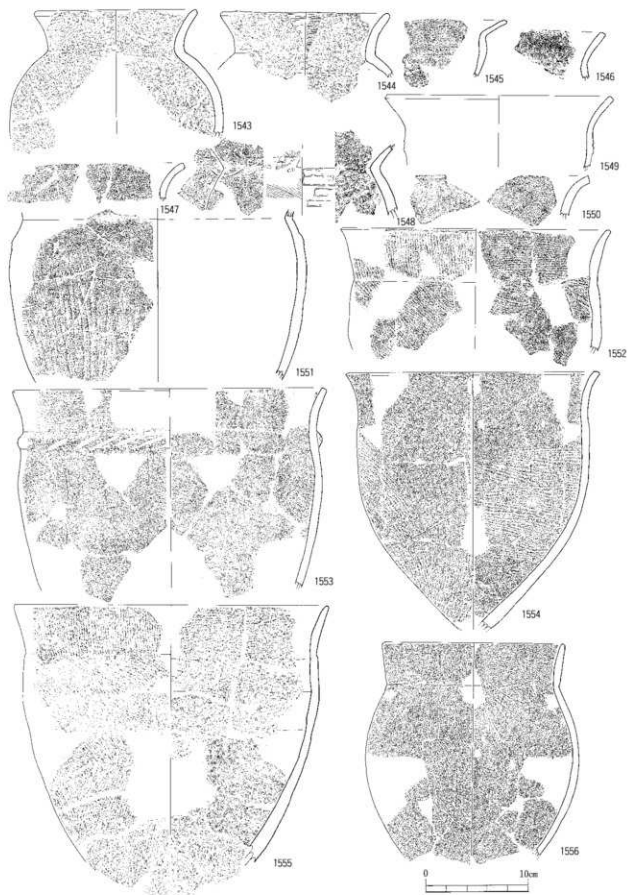
##### 弱外反く字（第163～164図，1552～1581）

上記の一群よりも口縁部の外反の程度が弱いものである。口唇部は丸まった三角形のものを中心に丸まった山形、角張るものなど様々な形態が見られる。外面は、口縁部下位の頸部から口唇部に向かっては上記の群と同様なハケ目による上方への掻き上げが見られる。器面調整は、外面は全体としてハケ目調整、内面は口縁部から頸部とその下位付近はハケ目、それ以下はヘラケズリである。

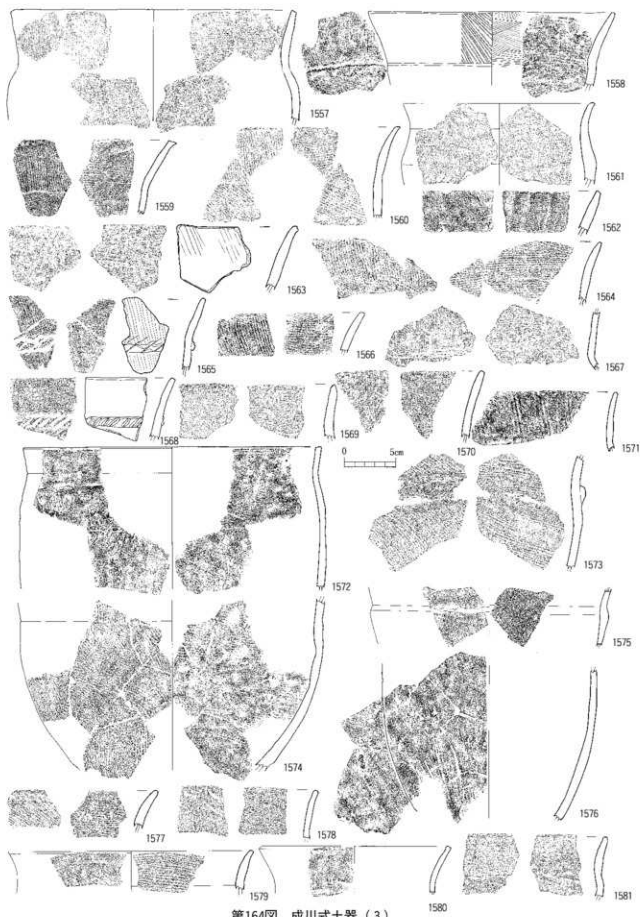
1556も形態的に壺形土器に類似するが、口縁部の外反の程度が弱く、若干立ち気味となっている。また、胴部の膨らみも頸部の締まりが弱いことからそれほど目立たない。1551は外面に粗いハケナデ調整が見られる。1555は口縁部の外反の程度が若干弱いもので、頸部から口縁部にかけての掻き上げはヘラによるようである。1576はヘラケズリと考えられる。



第162図 成川式土器(1)



第163図 成川式土器（2）



第164図 成川式土器 (3)

#### 直立（第165図，1582～1594）

口縁部が、胴部からの立ち上がり方向とはほぼ同じ向きとなるもので、器形全体としては直口気味となるものである。口唇部が丸まった三角形を基調として、角張るものなども見られる。それほど明瞭でない、幾分縮まった頸部の外面には突帯が巡らされることが多く、それにはへらやハケ目などによって斜め方向の刻み目が施されるものも多く見られる。外反したタイプに見られたような頸部から口唇部へ向けてのハケ目による掻き上げは、この部分に突帯が巡らされるものが多いことから不明瞭である。ただ、ハケ目調整が上方に向けて行われるものもあることから、本来的には掻き上げの技法は残っているのではないかと考えられる。

1582は突帯が、弱い凹みの頸部に上下にうねりながら貼り付けられ、斜め方向の鋭いへら様の施文具によって極めて粗く付されている。突帯よりもやや上方から刻みを付す部分が多いため、整った刻み目には見えにくい。これに比べて1583は突帯の貼り付け方も横方向にほぼ一直線に貼り付けられているほか、刻み目もハケ様の施文具でほぼ等間隔に、突帯の幅に合わせて丁寧に付されていることから、整然として見える。1591は頸部が明瞭でなく、突帯も幾分張り出した部分に上下にややうねるように貼り付けられている。刻み目を持たず、指頭により挟んでつまむように貼り付けられており、断面も三角形や円形をするなど不揃いである。1593もやや張り出した部分に突帯を貼り付けている。こちらは貼り付けた後に、頂部を押さえることで断面が台状を呈している。

#### 内湾（第166図，1595～1600）

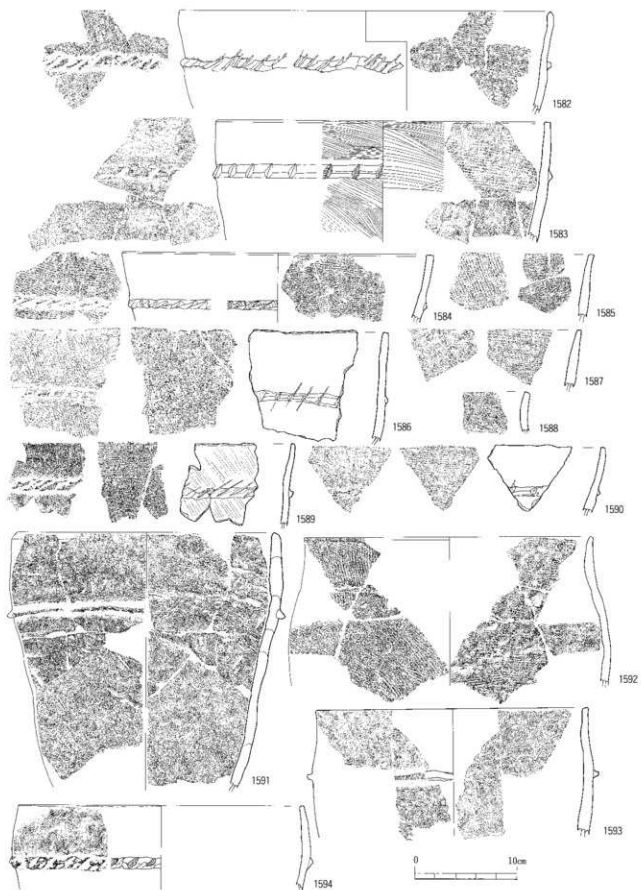
胴部から立ち上がった口縁部が、幾分内側に傾いているものである。口縁部の下位には縮まったところは見られず、頸部を完全に失ったタイプと言える。口唇部は角張るか丸まった山形を呈している。口唇端部からやや離れた下方に突帯を巡らせており、斜め方向の刻みが付されるものもある。1598は突帯が端部で完全に合わさっておらず、一方の端部は下向きに貼り付けられている。器面調整は、内外面共にハケ目調整である。

#### 突帯（第166～167図，1601～1628）

突帯の形状にも様々なものが見られる。

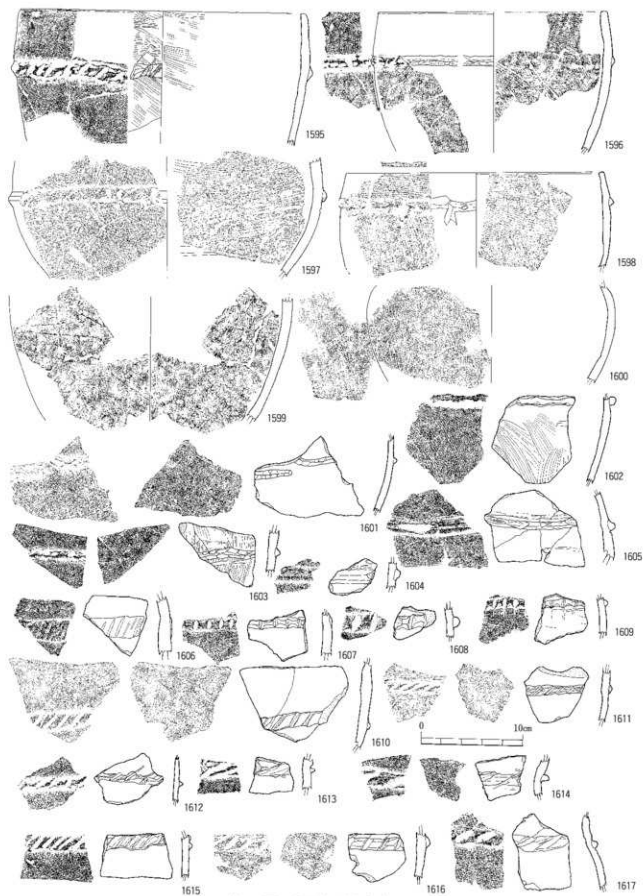
1601は刻み目を付さず、指頭によりつまんで貼り付けを行ったもので、端部が合わさっておらず、一部の端部が上方向きに貼り付けられている。みみず腫れ状を呈する。1602と1603も刻み目は付されていない。いずれも断面の形状が台形となっている部分がほとんどであることから、貼り付けた後に上端を押さえて平坦にしたものと考えられる。

刻み目を付すものにも、向きや間隔、長さそれに施文具などいろいろなバリエーションが見られる。幅はほとんど一様であるが、中には押しつぶして広げたようなものもある。また、突帯の巡らされる位置にもいろいろなタイプが見られ、屈曲のない平らな場所に貼り付けられるものや頸部に付されるものなどさまざまである。

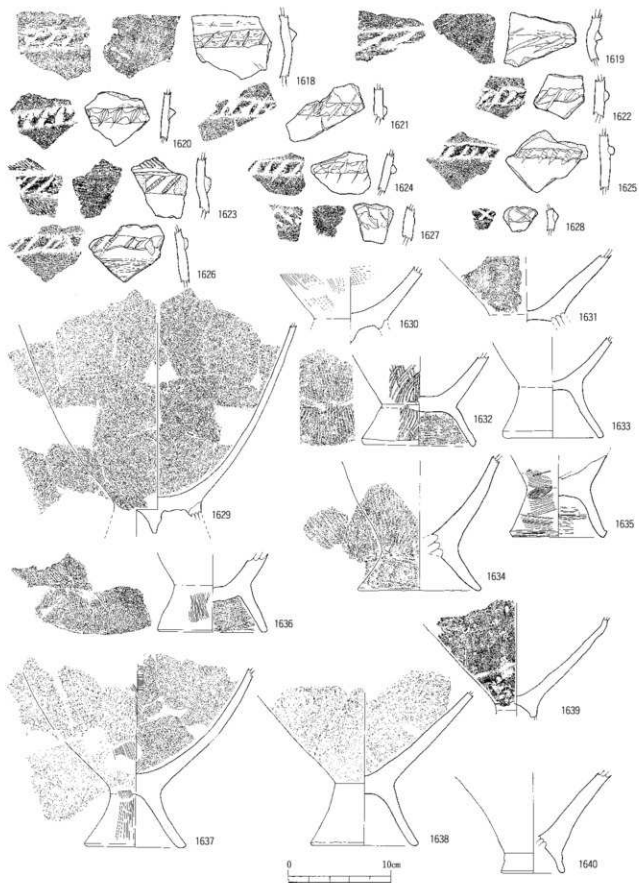


第165図 成川式土器（4）

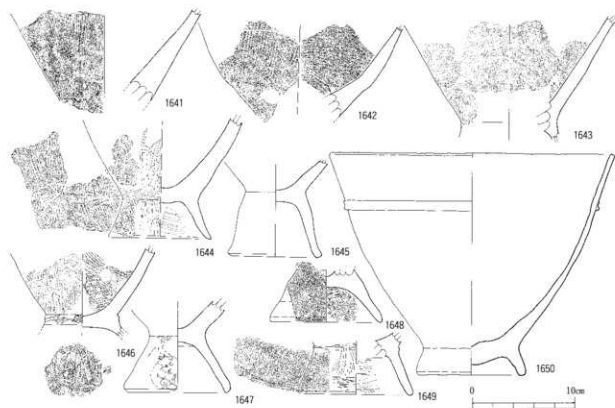




第166図 成川式土器（5）



第167图 成川式土器(6)



第168図 成川式土器（7）

底部（第167～168図，1629～1650）

全体的に脚が付き、上げ底となる。その大きさや高さ、端部の形状などに差異が見られる。また、甕本体の底部の形状にもさまざまである。

1629と1630は甕本体の底部下端に円錐状の突起が付くものである。本体底部の器壁の厚みと同程度かそれより厚い断面をしている。これらのタイプは内底がU字状を呈しており、ゆったりした印象を抱かせる。

脚部の高さが高いものには、内底がV字状に近いものや、大きく広いものがあるほか、一旦真下方向に下りた後に開くものと、逆により一層狭まるものもある。低いものには、内底が接地面に向けて下がっているものが多く、脚部全体の断面形状は台形を呈している。中でも1650は内底が接地面近くまで下がっており、脚部全体の断面形状がM字状に近い形に見える。

脚部の形状は、脚の延びる方向そのままに直線的なものと、一旦内向きに下りた後に裾広がりとなるものの両方の型がある。

接地面の端部も、丸みを持った山形や接地面に合わせて平らに仕上げるもの、丸まった三角形状に外向きに広げるもの、逆に外側を上向きに仕上げることで接地面を小さくしたものと様々である。

## ② 壺形土器 (第169～172図, 1651～1709)

### 一般的なもの (第169図, 1655～1659)

口唇端部は角張るかやや丸みを持った山形である。頸部が締まり、口縁部が大きく外反するもので、胴部は大きく膨らみ、底部は小さくそれほど安定しない平底である。1651は口唇端部が角張っており、口縁部は割合に長い。頸部はよく締まり、内面には割合に明瞭な稜ができています。外面の大きく屈曲した部分も稜が明瞭である。頸部から胴部へは大きく屈曲して広がり、明確なく字状を呈している。大きく膨らんだ胴部の径の最大部分には突帯が巡らされており、間隔の広い斜め方向の刻み目が付されている。胴部最大径から下位へは割合に大きく直線的にすばまっている。器面調整は内外面共にハケ目調整が行われているが、内面は剥落が著しい。1652は口唇端部が外に向かって下がっており、頸部の付け根部分より器壁が薄くなっていることから、ある意味で鋭く感じる。頸部からの立ち上がりが最初は真上方向に長めに立ち、その後は急速に外開きとなることから、全体の形状はラッパ形を呈している。1653は器壁が全体的に均一で厚く、頸部の締まりも緩やかで内外面への稜も不鮮明である。口縁部は立ち上がり気味で外反の程度はやや弱い。口径に比べて胴部の膨らみは小さい。1654は口唇端部を縦方向にナデ回して中央部を窪ませているため、沈線が巡っているように見える。

### 長胴のもの (第170図, 1660・1661)

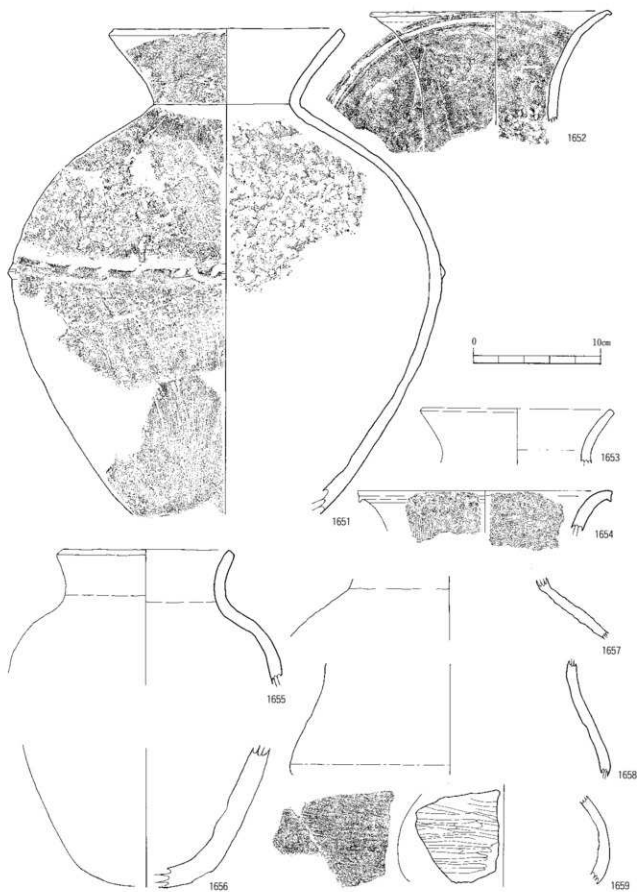
胴部の膨らみが小さく、胴部の径が最大となる部分が上部の肩付近にあり、極めて胴の長さが長いものである。口唇端部は、残存するもので見ると丸みを持った三角形をしている。口縁部は長く、外反している。頸部は割合に締まっているが、内外面にはそれほど明瞭な稜は持たない。頸部から胴部へは大きく屈曲しており、く字状を呈する。外面は、屈曲した部分からすぐに向きを内側に向けて肩部を作り、すぐにまたは直線的に底部へと向かっている。肩部から底部までの長さが長いといえる。底部は丸みを持った平底で、それほど安定性がいいとは言えない。器面調整は内外面共にナデ調整である。

### 丹塗りのもの (第171～172図, 1681～1693)

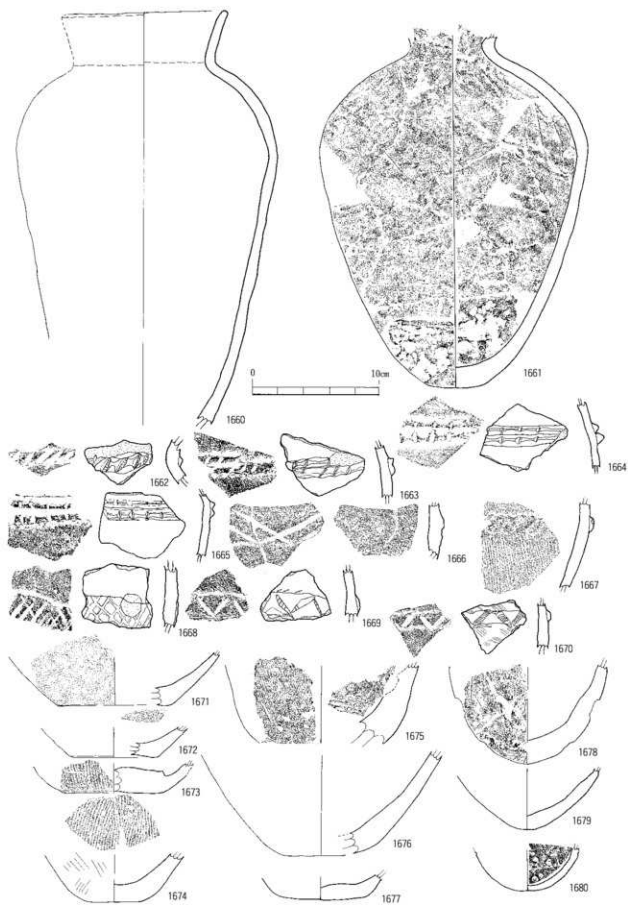
口縁部は不明であるが、胴部が大きく膨らむ器形のようなものである。内面はナデ調整が行われているが、剥落が著しい。胴部に突帯を波状に貼り付け、間に沈線を付すことで2本の細い突帯を貼り付けたように見える。また、小型の丸底壺(埴)も見られる。

### 埴 (第172図, 1694～1709)

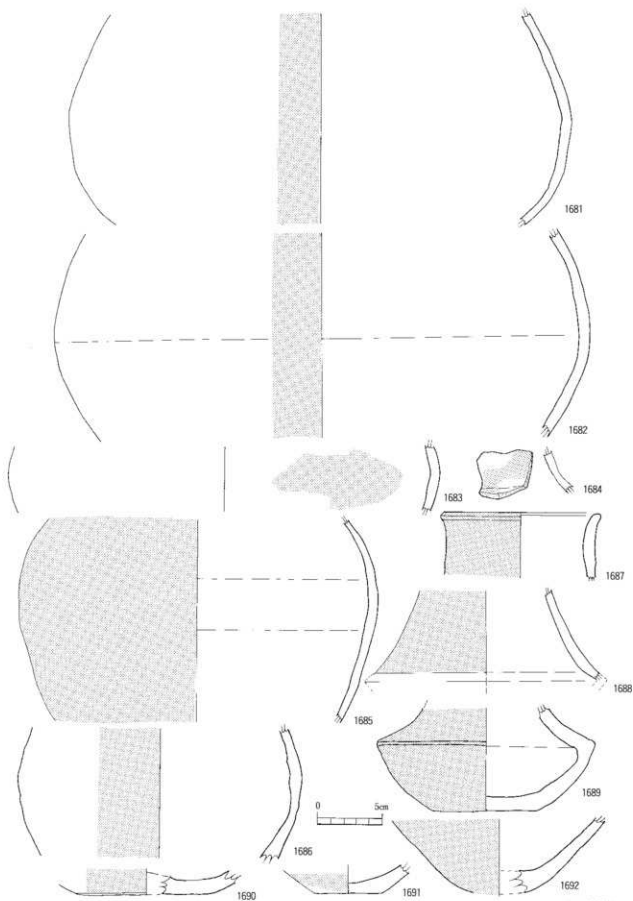
外面に丹の塗られたものとそうでないものの両方が見られる。丹の塗られたもののうち、1688と1689は胴部に明瞭な稜を持ち、それより上方は内側に急速にすばまり頸部が長く、稜の下方は大きく屈曲して内向きとなり、すぐに安定した平底となるものである。また、丹の塗られないもののうち、1695と1696は頸部から口縁部が外反気味に大きく立ち上がり、明瞭な稜の下方は大きく膨らむものの極めて小型となるもので、1700は口縁部が頸部からほぼ真上方向に短く立ち上がり、胴部は横に膨らみながらも高さの低いものと考えられる。



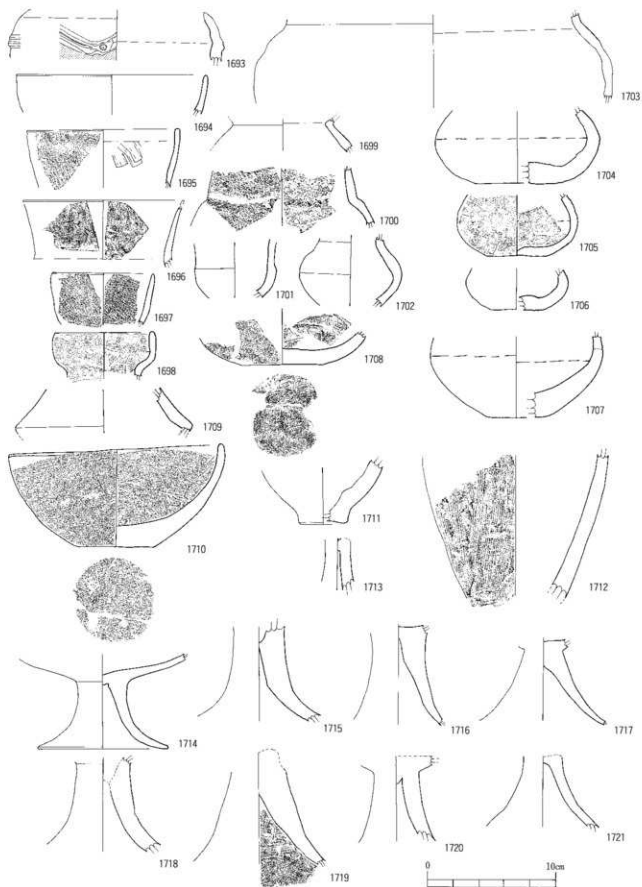
第169図 成川式土器(8)



第170図 成川式土器（9）



第171図 成川式土器 (10)



第172図 成川式土器 (11)



### ③ 高坏 (第172~174図, 1713~1760)

高坏の坏部は、口唇端部が丸まった三角形状であり、器壁自体が割合に薄く作られている。胴部下部から底部にかけての境界付近には明瞭な段を有する。坏部の底部には内底を平坦気味に作って段から急角度で立ち上がるもの(1722)、内底は判然としないが段から上部は、段より下部が急角度であるそのままに直線的に外に向かってひろがるもの(1726)、内底の中央付近のみ平坦に作り、その周囲からは緩やかなカーブを描きながらゆったりと立ち上がり、口唇端部を上方に向けて容積を大きく作るもの(1723)、形状は1723と似るものの段からの立ち上がりが早く、大きいことからさらに容積を大きく作ったもの(1727)、坏部の下部から急角度で内傾させ、その後そのまま立ち上がらせることで断面の形状が横幅の広い五角形に見えるようなもの(1747)などさまざまな器形が見られる。脚部も上部は全体的にそれほど端部の接地面方向に対して開かずにはぼまっすぐに下り、その後急激に裾広がりととなるものと、上部から大きく広がりながら端部の接地面へと向かうものなどがある。

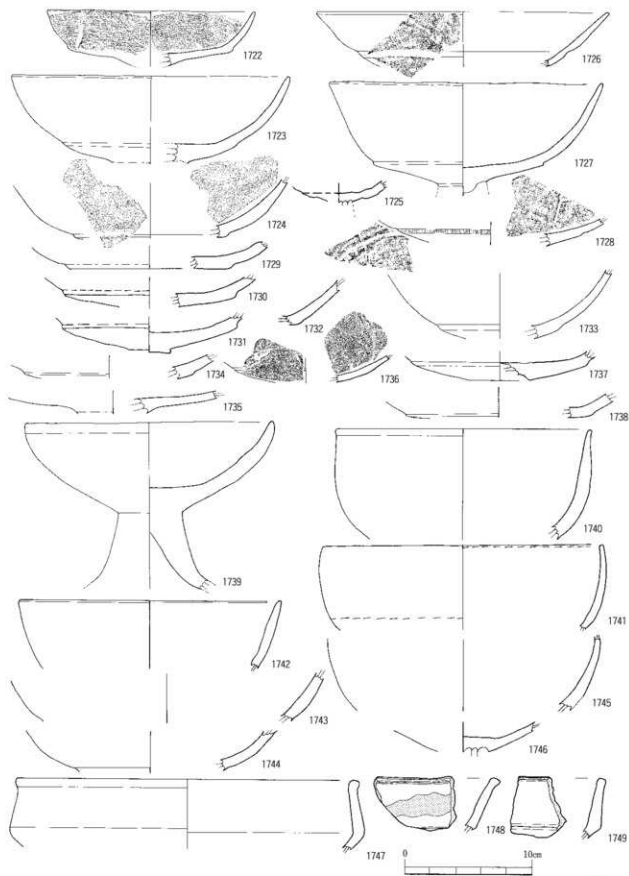
### ④ 鉢 (第172~174図, 1710~1712, 1761~1773)

脚台が付いて上げ底となり、内底は断面の形状が三角形を呈するようにすばまっており、外向きに大きく直線的に開き、その後、口縁部が上方に立ち上がるもの(1761)や、口縁部からほぼまっすぐにやや内側に向かいながら深いもの(1762)などのほか、底部が安定した平底で、器高はそれほど高くなり底部から口縁部に緩やかなカーブを描きながら立ち上がり、口唇部が三角形気味で端部を丸めるもの(1768, 1769)などがある。1768や1769についてはマリとして分類するのがぶさわしいかも知れない。

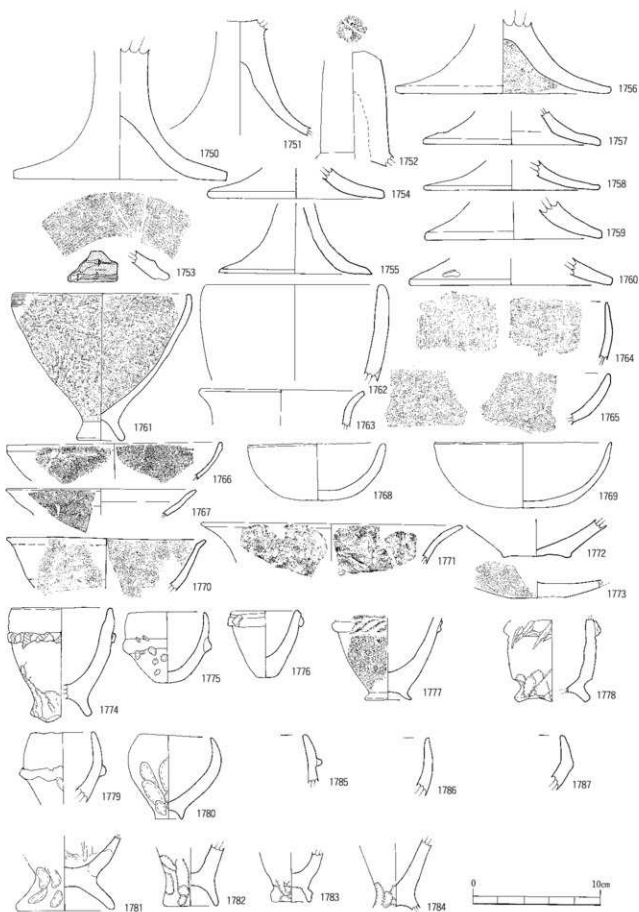
### ⑤ 手捏ね土器 (第174図, 1774~1787)

甕形土器や鉢形土器を模したものが多く見受けられる。

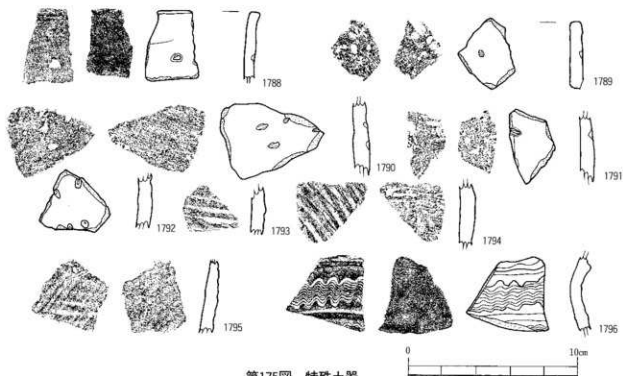
1774は口径が8.0cm、器高が8.5cm、底径が4.8cmの甕形土器を模したもので、底部は脚が付いて上げ底となっており、底部からはほぼ直線的に小さく広がりながら口縁部へと向かっている。口唇部の下位には突帯が貼り付けられており、刻み目もしっかり入れている。極めて写実的なものと言える。1775も甕形土器を模したものである。上げ底となる脚を持たないものであり、口唇部の下位に突帯が貼り付けられているものの、1774に比べて若干抽象的なものとなっている。突帯の位置が若干下がっている。1776も甕形土器の模倣である。平底のおちよこのようなデフォルメされた器形に、口唇部に接するように突帯が貼り付けられている。1777は1774に似る写実的なもので、甕形土器の模倣であろう。上げ底となる脚は非常に低く作られており、突帯にはしっかりと丁寧に刻み目が密に施されている。器面調整にもハケを用いるなど、写実性は非常に高いと言える。ただ、逆に、指頭圧痕がほとんど見られないことから、手捏ね土器と呼んでよいのか、若干疑問が残る。1780は口縁部が大きく内湾した甕形土器を表現している。指頭の圧痕が顕著に残るものの、作りは非常に精緻である。1785~1787は口縁部から胴部の上部にかけて、1781~1784は底部であるが、いずれも甕形土器の模倣である。これほど甕形土器が多く作られた理由は不明である。



第173図 成川式土器 (12)



第174图 成川式土器 (13)



第175図 特殊土器

⑥ 特殊土器 (第175図, 1788~1796)

1788~1791は器壁に靫跡の痕跡が残るものである。いずれも成川式土器の甕形土器の外面に靫の痕跡が残っている。1788は甕形土器の口縁部の外面に靫痕が残存している。口縁部は口唇端部が角張り、口縁部が全体的に外反するものである。口唇端部から大きく離れた頸部に近い部分に、ほぼ横方向に残っている。長軸6.0mm、短軸3.0mmで、長軸長を短軸長で割った値は2.0である。顕微鏡で観察すると、靫の表面の微細な凹凸が明瞭である。1789は甕形土器の胴部の一部、おそらく胴部の上部と考えられるが、外面にやや縦方向に残る。長軸3.5mm、短軸2.5mmで、長軸長を短軸長で割った値は1.4である。顕微鏡観察では、靫の表面の微細な凹凸が明瞭である。1790も甕形土器の外表面、傾きから考えると胴部の上部に、横方向に2個の靫の痕跡が残っている。上の方は長軸5.5mm、短軸3.0mmで、長軸長を短軸長で割った値は1.83、下の方は長軸5.5mm、短軸3.0mmで、長軸長を短軸長で割った値は1.83である。1791も甕形土器の外表面、胴部の上部と考えられるところに残る靫痕で、長軸長は6.0mm、短軸長は3.0mmで、長軸長を短軸長で割った値は2.0である。これら4点の土器が同一個体であるかどうかは接合しなかったことから不明としか言いようはないが、一般的には別個体と考えるのが自然であろう。しかし、それにしても1遺跡からこれほど多くの靫痕土器が出土する例はあまり知らない。極めて珍しいと考えられる。

1792は甕形土器の外表面に残るへら様の施文具で刺突されたもので、5か所に刺突痕が残るものである。成川式土器の甕形土器の胴部上部付近と考えられるが、このような器形の土器にこのような施文が行われるものは一般的にはないようであることから、文様として付されたのではなく、故意にそれほどの意味もなく付したと考えられる。

1793~1795は外表面に叩き目の見られるものである。叩き目は平行叩きである。おそらく甕形土器の外表面であろうが、色調などが成川式土器のものとは若干異なっているようであることから、流入品の可能性が考えられる。いずれも外表面に平行叩きを横あるいは斜め方向に行っている。

## 第8節 古代の調査

古代の遺構として考えられるのは道跡があるが、どれがこの時期に該当するかの検討が極めて困難であることから、後の時代でまとめて述べることにしたい。遺物としては、土師器が主に出土しているほか、須恵器や紡錘車、それにスサの入った土製品などが見られる。

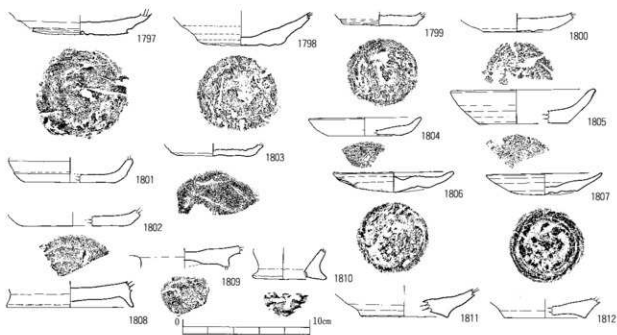
土師器（篋切り底）（第176図、1797～1812）

器形としては碗、坏、皿がある。

1797～1805は坏である。口縁部は器壁が厚く、底部からほぼ直線的に開き、端部は割合に厚く丸まる。外底は篋切り底で、凹凸が激しく、丁寧に整えている形跡は見られない。細かく観察すると、外底のほぼ中央部付近は篋によって大きく円を描くように切り離した痕跡が見られるが、外周付近は外縁に沿っていくらかの幅で切り離された粘土塊がある程度平らになだめられている以外には、全体が均一に平らになるように丁寧に整えられてはいない。このことは、特に、底部の体部への立ち上がりの部分に粘土塊が張り付くように押しつけられていることからもある程度は理解できよう。その主な例が1797と1798である。内面の調整も大まかで、器壁の厚みも一様ではない。1798は底部の中央部付近で器壁が相当に薄くなっている。体部には、一部に不明瞭ながらも段が見られる場合もある。1799～1805は底部から体部への立ち上がりの部分を丁寧に整えている。

1806～1807は皿である。基本的には平底であろうが、篋による切り離しのために凹凸が激しいために不安定なものとなっている。器壁の厚みも不規則である。深さは極めて浅い。

1808～1812は碗である。底部の外面に浅く細い脚を貼り付ける。外底の器面調整は丁寧に整えていない。ただ、脚部の調整は割合に丁寧に施されている。



第176図 古代の土器（1）

土師器（甕）（第177図，1813～1816）

1813と1814は甕の口縁部である。口唇端部は丸まっではいるもののやや鋭く、大きく外側に開いている。頸部は締まり、そこからは1813がやや開きながら、1814がそれほど開かずそれぞれ胴部へとつながっていく。器面調整は、双方とも外面がハケ目調整、内面は口縁部付近はハケ目調整、それより下位はヘラケズリである。小破片であるが、復元口径はいずれもほとんど変わらない。

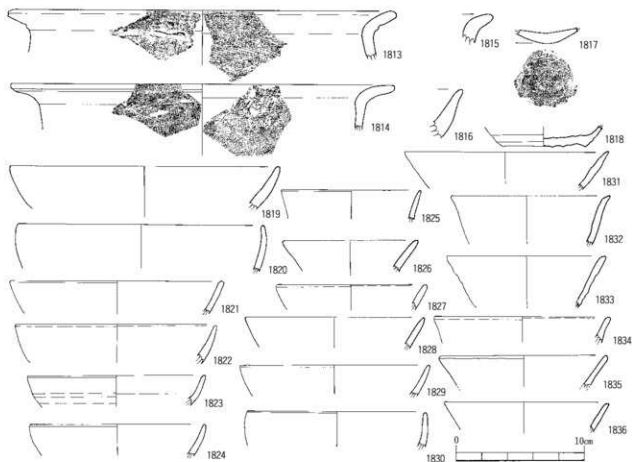
土師器（口縁部）（第177図，1819～1836）

いずれも口縁部である。壺、杯、皿のものであるが、いずれがどの器形のものであるかは、判然としないため、形状により並べてある。

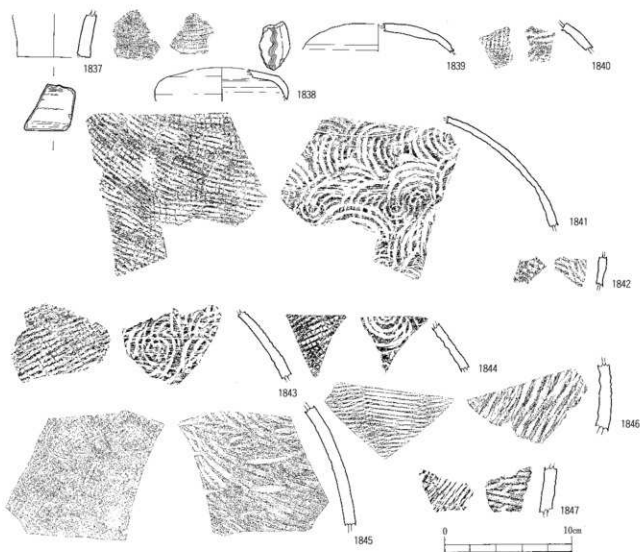
1819～1824は口縁部が内傾するものである。口唇端部は薄く丸まっている。全体的に器壁が相当に薄く、下位は幾分厚みを持っている。

1825～1829は口縁部が直線的に外に向かうものである。口唇端部は薄く丸まっているが、上記のものより丸まり方が大きいように感じられる。

1830～1836は口縁部が直線的に外に向かうとともに、口唇端部が鋭く外に開くものである。全部ではないであろうが、一般的にこの類は高さが高いようである。



第177図 古代の土器（2）



第178図 古代の土器（3）須恵器

須恵器（第178図，1837～1847）

1837は小型の壺の底部付近と考えられる。平底と考えられる底部からは外に開きながらほぼまっすぐに立ち上がっている。復元底径は6.0cm，残存高さは3.4cmである。外面には黒色の部分があるが，これは自然釉と考えられる。

1838は蓋である。外面には櫛描波状文が見られる。器高は高く，外面および内面には轆轤の痕跡と考えられる稜線が部分的に見られる。

1839も蓋である。器高はかなり低い。体部から端部への角度が緩やかである。

1840～1847は甕の肩部から胴部にかけてである。肩部及び胴部の上部付近には内面に同心円状の叩き目が見られる。外面は格子状の叩き目である。胴部の下部付近は外面・内面の両面に平行叩き目が見られる。

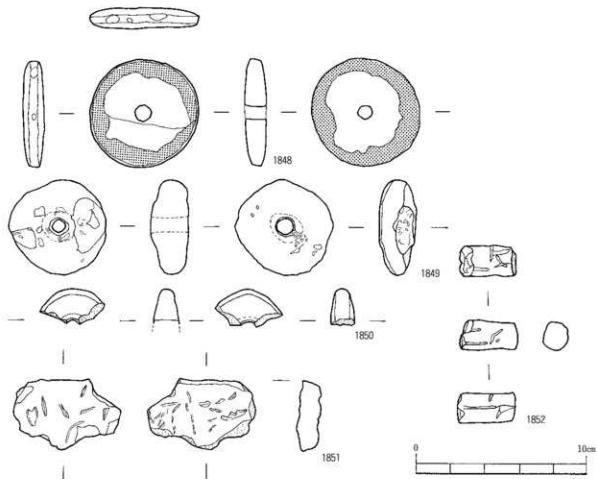
紡錘車 (第179図, 1848~1850)

1848と1849は紡錘車の完形品である。1848は径が6.3cm、厚さが1.3cmで、中央には直径6mmの穿孔が見られる。器面の外周に沿った部分は丁寧に磨かれている。周縁は割合に整えられているが、部分的に剝離したか所も見られる。中央部の穿孔は器面に対して垂直ではなく、若干斜めとなっている。1849は全体的に厚く作られており、特に中央部は周縁部の約1.5倍ほどである。径は5.3cm、厚さは中央部で2.2cm、周縁部では1.1cmである。中央には直径6mmの穿孔がある。器面に対してはほぼ垂直となっている。周縁は正円とはなっておらず、若干凹凸が見られる。器面にも剝離痕が随所に見られ、一部破損している。1850は全体の約4分の1の破片である。1849と類似するが、作りはやや良さそうである。復元径は6.2cm、厚さは1.0cm、中央部の穿孔は復元すると6mm程度となる。スサ入り土製品 (第179図, 1851)

1851はスサの入った痕跡のある土製品である。全体的に厚さが一様であるため、何らかの容器の可能性はあるが、そのようなものを製作するのにわざわざスサのようなものを混ぜ込むか疑問が残る。壁か竈などの一部かとも考えられる。

土師器 (把手) (第179図, 1852)

1852は把手である。恐らく把手付きの甕の把手の部分と考えられる。



第179図 古代の遺物



## 第9節 中世の調査

中世及びそれと前後する時代の遺構として多くの道跡が検出されている。本来は、それぞれの道跡について埋土や出土遺物などから時代・時期を確定あるいは推定し、それによって各時代毎に掲載すべきであるが、埋土の状況については、検出された場所が旧地形では調査区域中で最も低平なところであったことから、土砂の流入と流水による浸食が著しく、層の比定が極めて困難であった。また、伴遺物については、上記の理由で出土する遺物が果たして使用されていた時期を明確に表すものと言えるかどうかについて、多くの疑義があった。そのために、その遺構の想定時期として考えられる新しい時期のものとして取り扱う方が良いのではないかと考えるに至ったのである。もちろん、検出された道跡は使用の最終段階、つまりは遺棄あるいは埋没段階として確認に至ったものであることから、当然その使用または設定が開始された時代・時期はそれを遡るであろうし、場合によっては相当以前から継続してあるいは断続的に使用されていた可能性も考えられるのである。

また、遺物として青磁や白磁、染付、陶器などが出土している。

### (1) 遺構一遺跡

本調査区域の北東部から南西部にかけて、調査区域を斜めに横切るように多数の道跡が検出されている。区域でいえばC-12区からI-32区にかけてであり、途中で途切れている部分も結構あるものの、検出された両端の距離は約280mにも及んでいる。途中途切れた部分を差し引いた、それぞれの区域での最も長く検出された道跡をつないだ距離でさえも、約125mになる。もちろん、この道跡は形成された時期や使用された年代が全く同じであるということとはできないことから、一概に総延長した距離とすることができないのは当然である。しかし、それにしても南西部から北東方向というほぼ同一の方向に向かって延びる道であることから、大まかには総延長として計量することも意味のないことではなからう。

次に、検出された道跡を、大まかなブロックごとに見ていくことにする。

C-12区～E-15区のブロックは、平面的な広がり少なく、垂直方向の重なりが多く見られる地域である。下部のまとまった道跡が1号から10号、上部の細く散在しているものが11号から18号とした。下部の道跡は南側から北側にかけて低くなっており、比高差は約50cm程度となっており、比高差の大きな道跡と言える。また、西側が比較的高く、東側に向けて漸次低くなっていることは本調査区域の全体的な傾斜の方向と合致している。調査中は、道跡全体として窪んだ状態となっており、降雨の後には必ずといっていいほど水溜まりができていたことから、地形的な制約を受けていたために、ほぼ同一の場所に道が形成された、もしくは同一の場所にしか道が形成される余地がなかったということを示しているように思われる。道の走行方向にしても、それと直交する方向にしても傾斜が急であったことから流水による被害を受けることが多かったために、同一か所で幾重にも重なった道跡が形成されていったと考えられる。

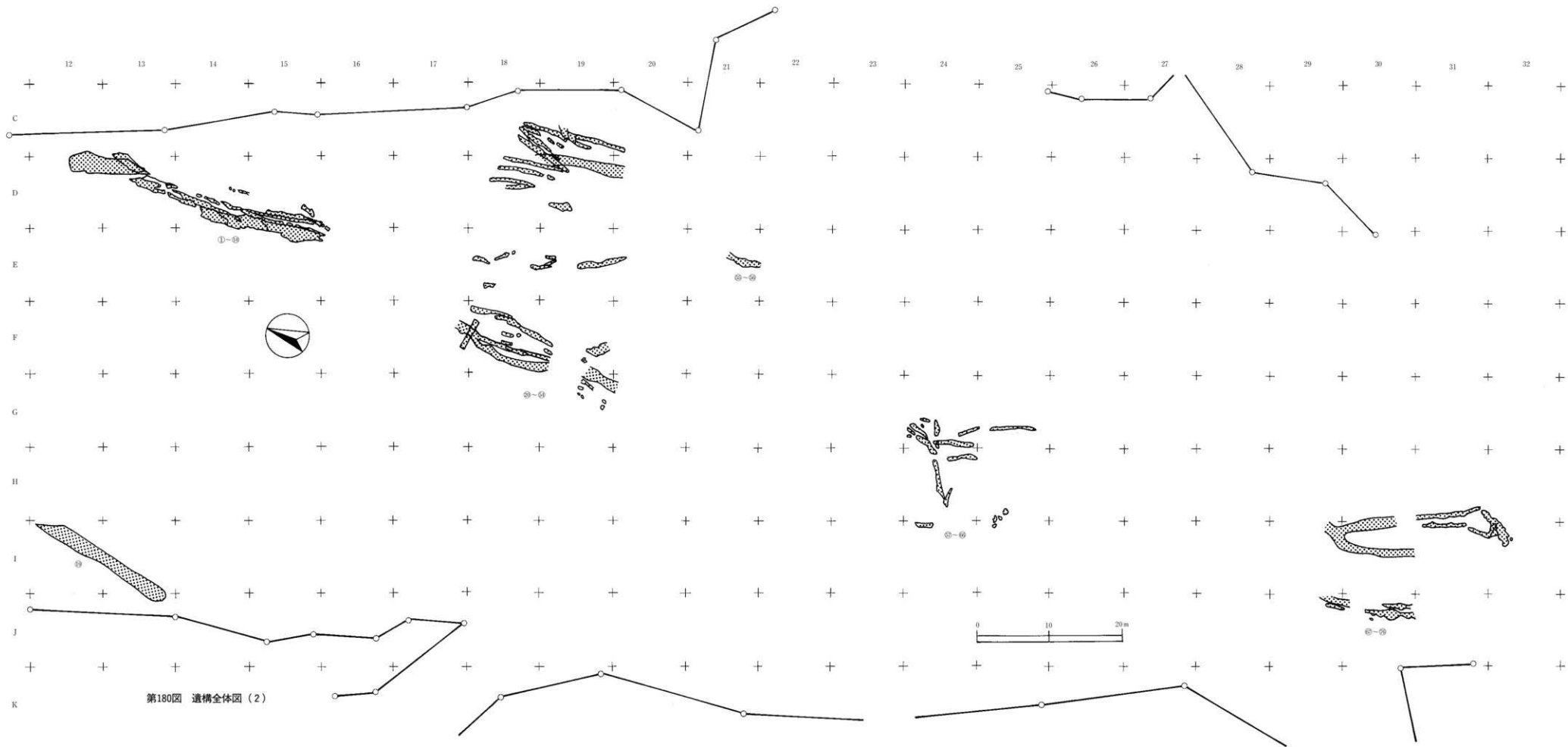
それに対して上部の道は、1本1本は幅が狭く、細い道と言わざるをえないものの、東西方向の広がり割合に大きいと言えよう。それは、下部の道が周囲よりも若干低いにしても、道幅がある程度広がったためにそれほど幅が振れることなく同様な所を道として使用していたと考えられるのに対して、上部の道はある程度時間が経過した後であり、道の量もやや上がっていたと考えられることから、水溜まりなどの不快な要因から回避して東西方向に振れて形成されたと思われる。

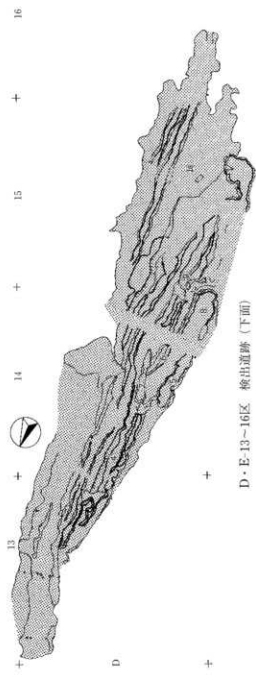
C-17区～G-20区, E-21区のプロックは、垂直方向の重なりはほとんど見られず、平面的な広がりか最も顕著な地域である。重複はそれほどないものの、方向を異にするものが若干見られる。主軸方向は、東側の大部分がN9°Wであるのに対して、西側のほとんどはほぼ真北の方向を主軸に採っていると考えられる。ただ、東側の一群にもほぼ真北方向を向いているものが見られることから、本地域の道の進行方向としては、真北とそれよりやや西側を向いた2本の系統があったことが知られるのである。C-12区～N-15区の一群が全体として略北方向を向いていること、本地域のものがやや西向きのもの上部に略北方向の道が形成されていること、地形的に東側より西側が標高が高く、徐々に高い方へと移ってきていると考えられること、現道付近をほぼ踏襲していると考えられる薩摩街道の出水筋が本調査区域内では確認されず、調査区域よりもさらに西側を通っていることと推定されること、現道は明確に調査区域の西側を通っていることなどから、西側を向いていた道が、徐々に地形的に安定していたと考えられる標高の高い西側に移って行ったと推定される。また、N69°Wを示すような本地域を斜めに横切るような道跡も若干確認される。これは、比較的標高の高い傾斜地において、低い低地と高い台地とを結ぶ細い道であった可能性がある。さらに、E-16区からF-18区にかけて、及びF-16区からG-18区にかけての南西部から北東に向けて大きくカーブしている道跡は、その東側にカーブせざるを得ないような何らかの要因があったものと考えられる。それは、周辺の地形図で見ると、本地域の南東部が同様なカーブを描く窪んだ地形となっており、その北東部が安定した広い台地となっていることから、この広い台地の先端方向に向かう道として形成されたと思われる。一方、ほぼ真北を向いた道は、広大な市ノ原の台地の中央部へと向かう道であったと考えられるのである。

G-24区～I-25区のプロックは、重複がほとんど見られず、平面的にも大きく2方向の道筋が見られる、こじんまりとした地域である。1つの方向はほぼ南北に向いたものである。ほぼ真北を向いた北東部の1群と、N48°W及びN54°Wという東と西に分かれた1群と捉えることが可能と考えられる。2つ目の方向は、1つ目のものと若干直交気味に見られる道筋である。北側の割合に長いものがN57°E、それと接するような短いものと南西部にまとまっている小規模なものがN23°Wである。あるいは、本地域の北東部で交差していたものであるかも知れない。

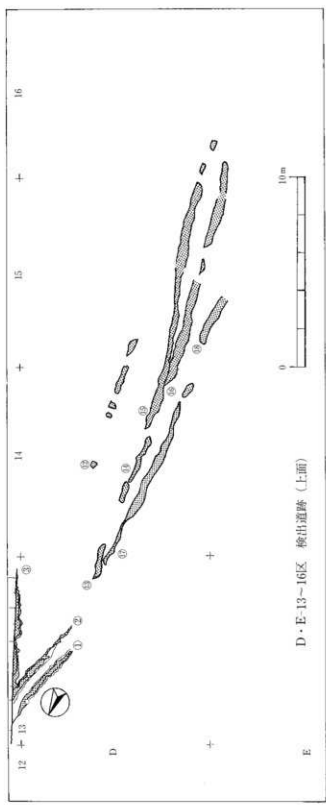
H-29区～J-32区のプロックも重複はほとんどなく、かつ、ほぼ同一の方向を道筋とするものである。南東部にほぼ真北を向いた道跡が1本見られるものの、全体としてはN28°Wを向いたものと言える。ただ、北東部で2本の道が重なったものと、北西部の道は北側でほぼ真北を向くように道筋を変えている。これについては、周辺地形図で見ると、調査区域の南西部には大きな迫が入っていることから、この地点で北西部に向けて東側の台地中央部に向かって道筋を変えていることが考えられる。また、その道の上部にほぼ真北方向の道が形成されているが、これも南西部の迫を意識して作られたと考えられる。北側で東に向きを変えらる道筋よりも後に形成されたことから、当初、迫から若干離れたところを通り、向きを変えていた道が、後には迫のすぐ近くを通してそのまま北に向かうことになったようである。

第192図は道跡の断面図である。横方向の断面図では周囲から相当に下がったか所を道が通っていた様子が観察される。また、縦断面では、道跡が複数の時期にわたって作られ、使用された様子を窺うことができる。



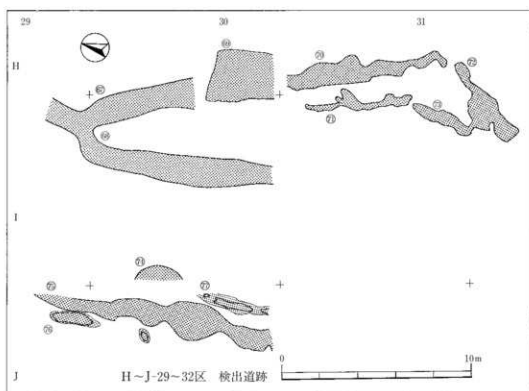
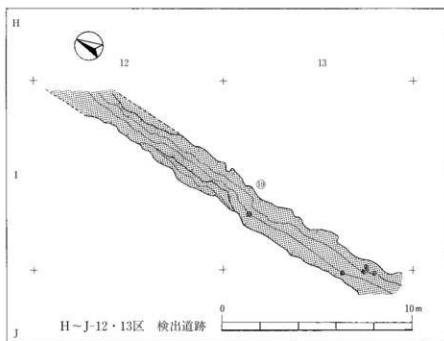


D·E-13-16区 検出道跡 (下面)

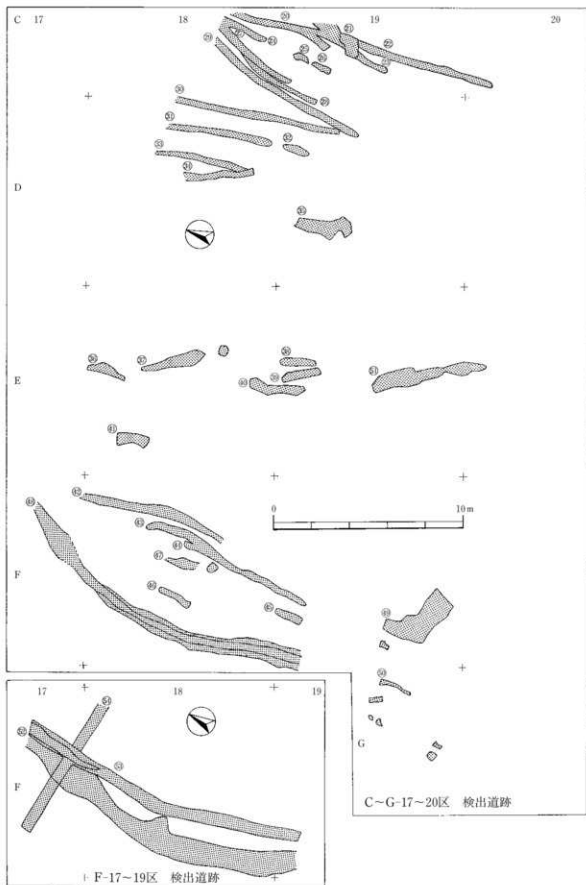


D·E-13-16区 検出道跡 (上面)

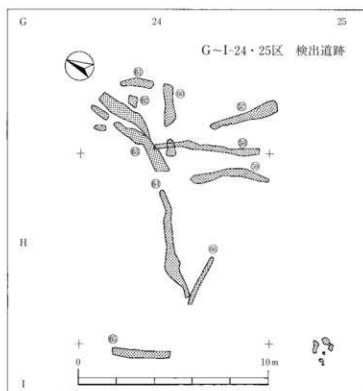
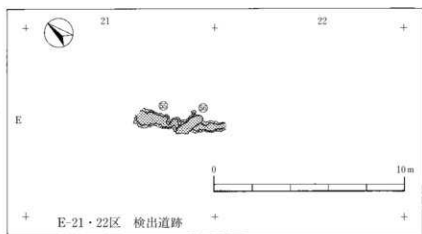
第181図 道跡位置図 (1)



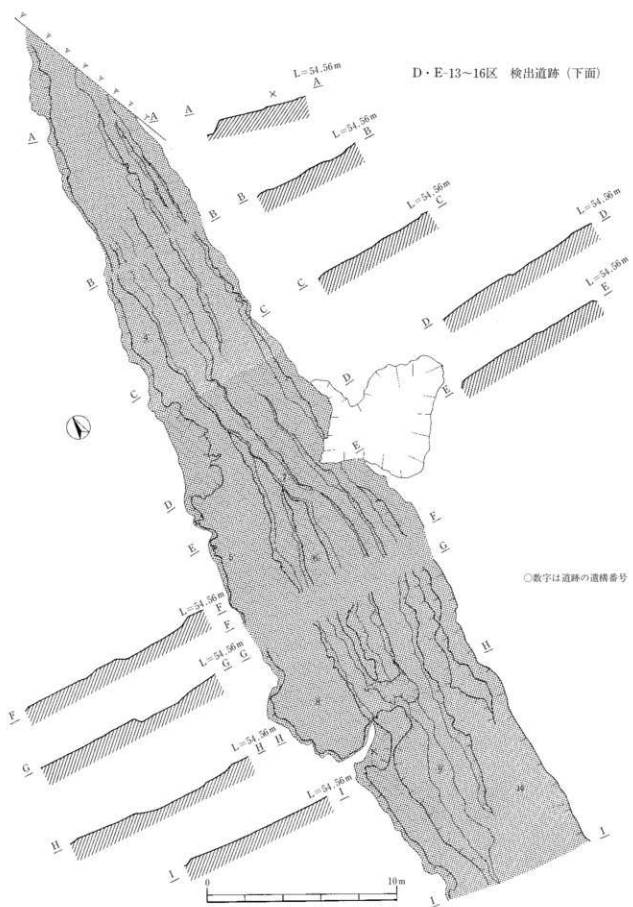
第182図 道跡位置図(2)



第183図 道跡位置図(3)

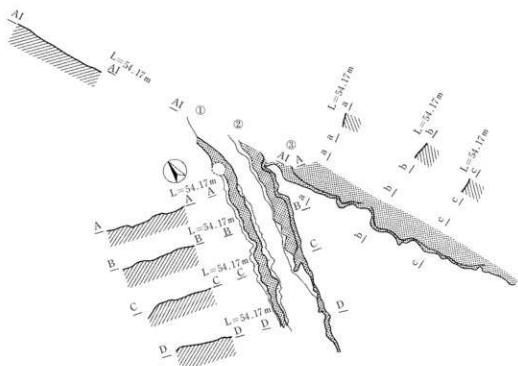


第184図 道跡位置図(4)

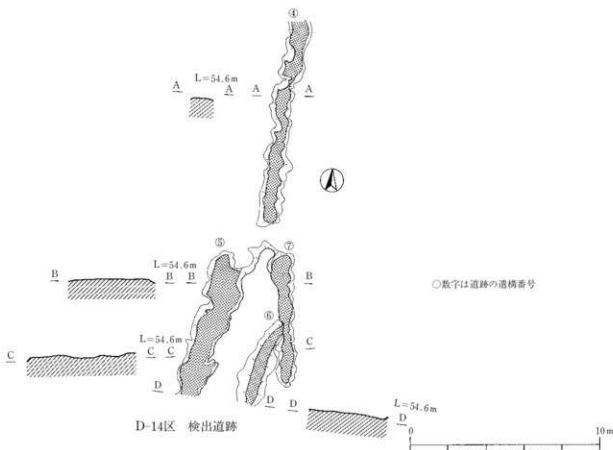


第185図 道跡実測図(1)





C・D-13区 III層上面検出道跡



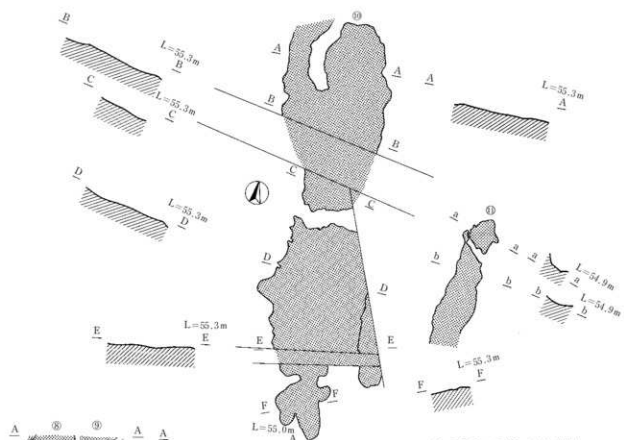
D-14区 検出道跡

○数字は道跡の遺構番号

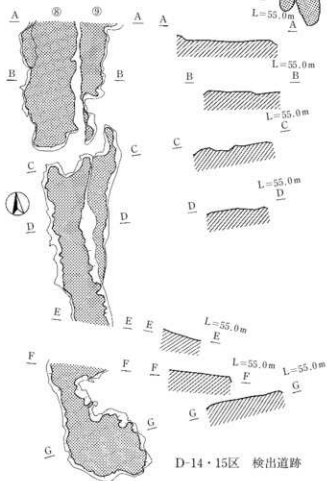


第186図 道跡実測図(2)





D・E-15・16区 検出道跡

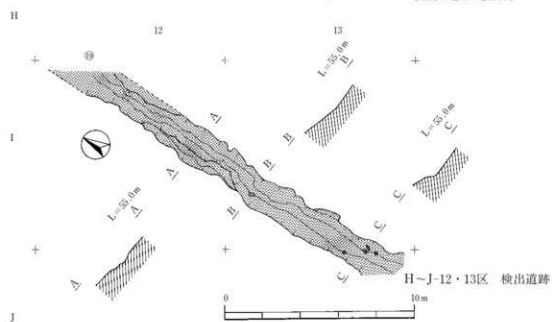
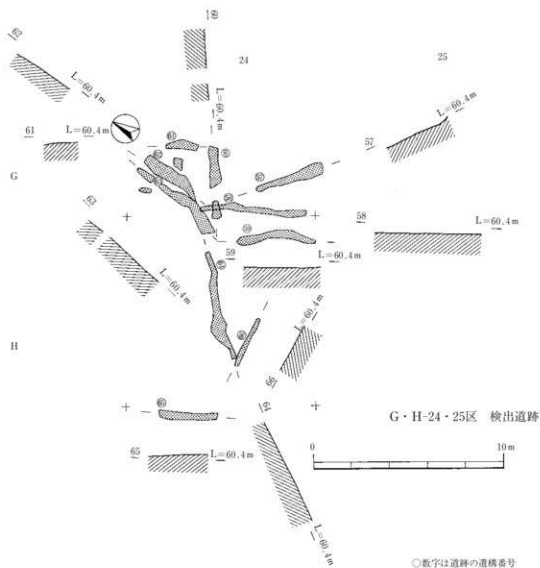


D-14・15区 検出道跡

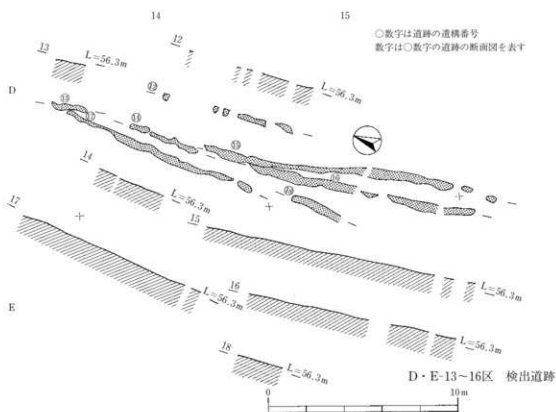
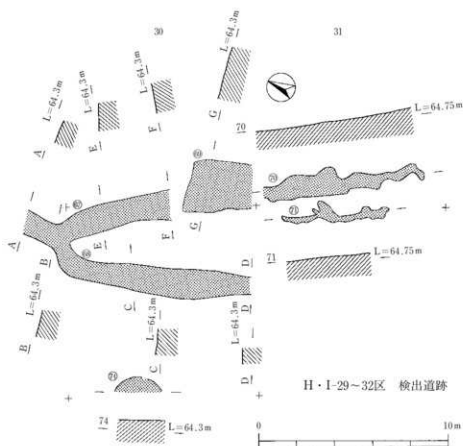


E-21区 検出道跡

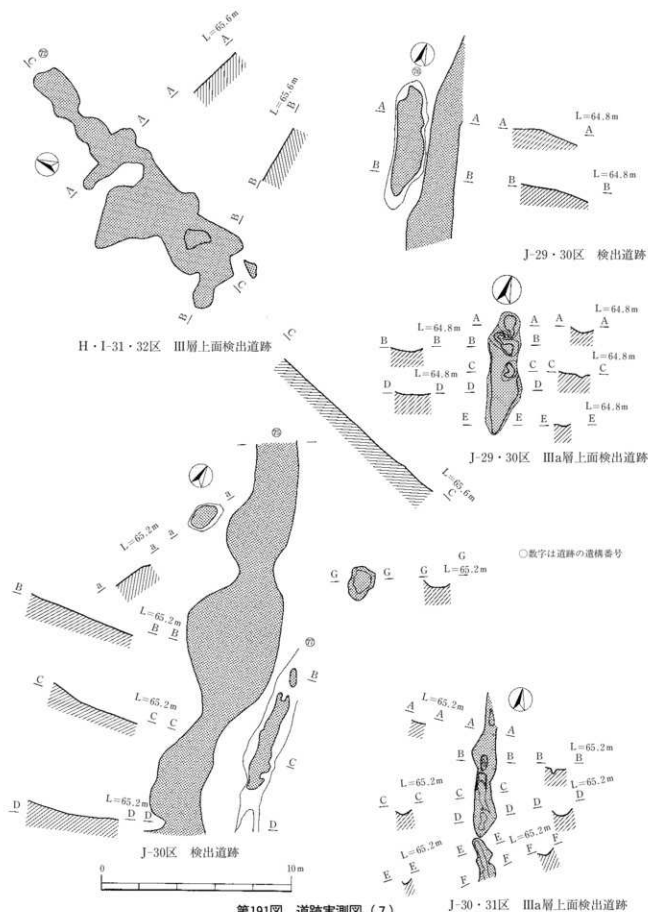
第188図 道跡実測図(4)

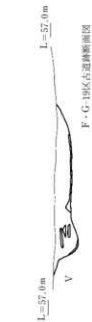


第189図 道跡実測図(5)

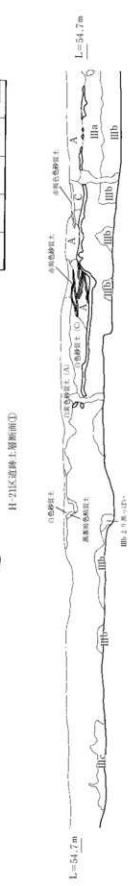
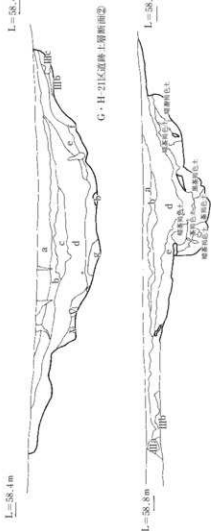


第190図 道跡実測図(6)





- L=58.4m
- a. 黒褐色土で山面に似ている他の層土に比べるとしまっている炭を含んでいる。  
 b. 黒褐色土でより厚いしまりがなくふかふかかふかふかしている粒子がある。  
 c. 黒褐色土でほとんど同一だと思われるが炭を多量に含んでいる粒子がある。  
 d. 黒褐色土でふかふかしている粒子がある。  
 e. 明茶褐色土、赤っぽい色をしている。  
 f. 明茶褐色土、赤質があり、粒子が上位に比べ細かい。  
 g. 暗茶褐色土、粘質がある。  
 h. 灰褐色砂質土、粘くしまっている。  
 i. 灰褐色肥化層



第192図 道断面図

第12表 道跡計測表

跡図 番号	遺構名	検出区	検出面	最小幅 (cm)	最大幅 (cm)	長さ (cm)	北高差 (cm)	溝の有無	跡図 番号	遺構名	検出区	検出面	最小幅 (cm)	最大幅 (cm)	長さ (cm)	北高差 (cm)	溝の有無
186	道跡1号	C-D-13	皿上	70	260	4500	12.5	有	187	道跡39号	C-F-17-20		40	50	210	8	
	道跡2号	C-D-13	皿上	130	320	4800	13	有		道跡40号	C-F-17-20		40	55	300	6.5	
	道跡3号	C-D-13	皿上	100	300	6000	10.5	有		道跡41号	C-F-17-20		50	60	170		
	道跡4号	D-14	皿下	20	330	4300	0.3	有		道跡42号	C-F-17-20		24	58	800	33.5	
	道跡5号	D-14	皿下	340	650	3100	13.8	有		道跡43号	C-F-17-20		40	50	400	22	
185	道跡6号	D-14	皿下	100	250	1800	6.4	有	道跡44号	C-F-17-20		20	34	720	17.5		
	道跡7号	D-14	皿下	100	400	2670	10.7	有	道跡45号	F-18-19		36	40	148	7		
	道跡8号	D-14-15	皿下	280	1450	9700	41.9	有	道跡46号	F-18-19		26	40	185	7		
	道跡9号	D-14-15	皿下	30	520	5500	20.8	有	道跡47号	F-18-19		20	50	280	7		
	道跡10号	D-15 E-15-16	皿下	350	2280	8900	29.1		道跡48号	F-18-19		25	110	1700	8.5		
190	道跡11号	D-15 E-15-16		450	730	2700	26		道跡49号	F-19		60	150	420	1.5		
	道跡12号	D-13-16		20	30	710	11.5		道跡50号	F-18-19		10	25	170	9		
	道跡13号	D-13-16		20	30	190	4.5		道跡51号	F-18-19		20	100	610	16		
	道跡14号	D-13-16		10	30	380	6.5		道跡52号	F-17-19		60	190	1600			
	道跡15号	D-13-16		20	54	1550	31		道跡53号	F-17-19		40	75	1560			
189	道跡16号	D-13-16		20	50	1160	27		道跡54号	F-17-19		55	60	870			
	道跡17号	D-13-16		8	40	1050	24.5		道跡55号	E-21-22		10	70	470	2	有	
	道跡18号	D-13-16		38	46	270	12		道跡56号	E-21-22		50	60	130			
	道跡19号	H-J-12-13		20	80	1950	44.4	有	道跡57号	G-H-24-25		30	60	370	12.5		
	道跡20号	C-F-17-20		35	40	574	26		道跡58号	G-H-24-25		20	40	570	18		
187	道跡21号	C-F-17-20		70	100	115			道跡59号	G-H-24-25		20	50	420	10.5		
	道跡22号	C-F-17-20		30	40	740	25		道跡60号	G-H-24-25		40	60	230	1		
	道跡23号	C-F-17-20		25	35	175	5		道跡61号	G-H-24-25		20	40	170	11		
	道跡24号	C-F-17-20		25	35	250	8.5	有	道跡62号	G-H-24-25		20	70	350	24.5		
	道跡25号	C-F-17-20		20	30	80	8.5		道跡63号	G-H-24-25		30	70	380	20		
	道跡26号	C-F-17-20		20	30	105	7		道跡64号	G-H-24-25		15	70	590	43		
	道跡27号	C-F-17-20		25	40	480	22.5		道跡65号	G-H-24-25		30	40	310	20.5		
	道跡28号	C-F-17-20		20	30	320	19.5		道跡66号	G-H-24-25		20	25	280	8		
	道跡29号	C-F-17-20		25	135	900	42.5		道跡67号	H-29-32 179-30		100	150	600	29		
	道跡30号	C-F-17-20		30	45	880	37		道跡68号	H-29-32 179-30		80	160	1280	89.5		
190	道跡31号	C-F-17-20		20	40	550	24.5		道跡69号	H-29-32 179-30		240	370	340	22.5		
	道跡32号	C-F-17-20		25	40	140	8.5		道跡70号	H-29-32 179-30		30	150	880	44		
	道跡33号	C-F-17-20		15	40	450	17.5		道跡71号	H-29-32 179-30		20	70	550	26.5		
	道跡34号	C-F-17-20		30	40	360	10		道跡72号	H-29-32 179-30		30	180	500	1		
	道跡35号	C-F-17-20		55	95	290	16		道跡73号	H-29-32 179-30		20	70	420	16.5		
191	道跡36号	C-F-17-20		20	50	200	5		道跡74号	H-29-32 179-30		20	70	230	13.5		
	道跡37号	C-F-17-20		20	80	340	113		道跡75号	H-29-32 179-30		20	50	280	11	有	
	道跡38号	C-F-17-20		30	40	190	8.5		道跡76号	H-29-32 179-30		20	40	360	14.5	有	
									道跡77号	H-29-32 179-30		20	30	360	14		

## (2) 遺物

この時代の遺物として、土師器、内黒土師器、赤色土器、青磁、白磁のほか、石鍋や甕の羽口が出土している。

土師器（糸切り底）（第193図，1853～1914）

壺，坏，皿である。ただ，底部に脚台が付く壺については図化できるものがなかったため掲載していない。

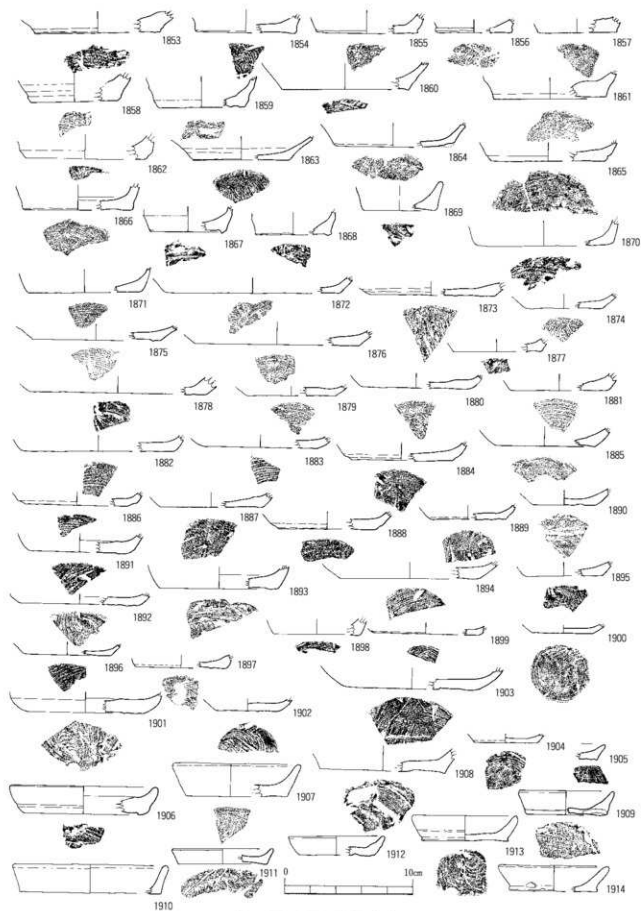
坏には，底部が厚く，体部への立ち上がりか緩やかで外へ大きく開くものと，底部はやや薄く，体部へは急角度で立ち上がるものとの2つのタイプに大きく分けられる。1つ目のタイプは，底部の外側に張り出すものや，立ち上がり部分が丁寧に整えられていないものも多い。また，立ち上がりが急角度になるものも若干見られる。2つ目のタイプは，底部の立ち上がり部分を丁寧に内側に整えるものが多い。

皿は，底部の厚さには様々なものがあるものの，体部にかけての立ち上がりは急角度であり，器高も一般的に低いものである。底部の体部への立ち上がり部分が外に張り出すものも多く見られる。

内黒土師器（第194図，1915～1943）

壺が主であるが，中には坏も若干見られる。





第193図 中世の遺物 (1)

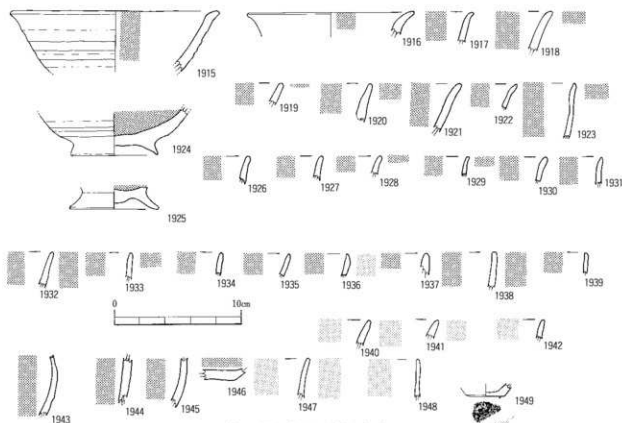
壺は口唇端部がやや反り気味になっており、内面に稜の付くものもある。体部の内外面には轆轤痕の残るものもある。底部内面は緩やかで深い。底部は厚く、中央部が外底側に膨らみながら垂れているものと、ほぼ均一であるものがある。脚部は断面形が三角形で小さく外に開くものと、外側に大きく踏ん張るように開くものが見られる。1915は復元口径が16.0cm、残存高さが4.7cmあり、内外面共に轆轤痕が残っている。器壁は全体が厚く作られており、口唇端部は端反りとなっている。1924と1925は底部付近である。脚部の外側への開きが1924は小さく、1925は非常に大きい。1916は復元口径が13.0cmであり、口縁部が全体的に外側へ大きく開いている。そのほか、口縁部の形状にもいろいろなバリエーションが見られる。1949は環の底部である。

#### 赤色土器（第194図，1944～1949）

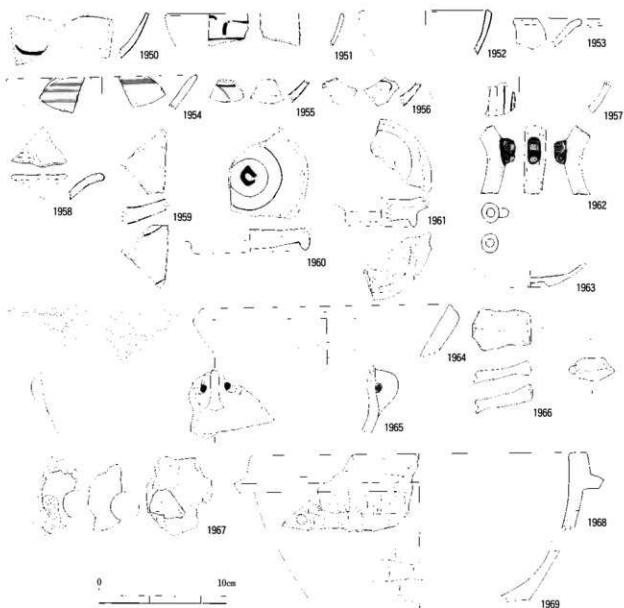
1944と1947は内外面共に赤色が塗られており、1945が外面のみ、1946と1948、1949は内面に赤色が塗布されている。口縁部の形状や傾きなどからほとんどが壺と見られるが、中には1949のように環も見られる。

#### 青磁（第195図，1950～1962）

青磁の主な器形としては碗があるが、中には水注または花生の把手と見られるものもある。1950～1961は碗である。1950は外面が蓮弁状であるものの縦方向ではなく、横向きのものである。内底には界線が引かれている。1951は復元口径が14.0cm、残存高さが2.5cmある。外面には四角をモ



第194図 中世の遺物（2）



第195図 中世の遺物（3）

チーフとしたような文様が描かれている。1956は復元口径が10.0cm、残存高さが3.5cmあるもので、残存している部分には文様は見られない。1951と1952は何れも口縁部がやや内傾するものであるが、器壁の厚さが相当に異なっている。1953は口縁部が外反するものである。1954は復元口径が15.0cm、残存高さは3.1cmで、口縁部は直線的に開いている。1955～1957は碗の胴部から底部付近にかけての破片である。何れも外面には縦や横の線が描かれており、1955と1956には内面にも横あるいは円弧状の線が描かれている。1957は鎗蓮弁の文様を密に描いたものの一部であろう。1959～1961は底部である。1963は外面に、1960と1961は内底見込みに線が描かれる。1958は稜花皿である。内面に3本の短い線が描かれる。1962は水注または花生と考えられるものの把手の部分である。管状で半円形のもので、さらに渦状の文様を2個縦に並べている。

白磁（第195図，1963）

1963は白磁の碗の底部である。筈筒底となっている。復元底径は2.9cm、残存高さは1.8cmである。

本遺跡で唯一図化できた白磁である。ただ、青磁と比べて出土数は格段に少ない。

#### 土師器（第195図，1964～1966）

甕や壺、坏、皿以外の土師器の系統の土器である。1964は捏ね鉢と考えられる。復元口径は15.5cm、残存高さは4.1cmである。口唇端部は内面がやや鋭く高くなっており、外面は斜めに整えられている。口唇部の外面には整形時にできたと考えられる小さな窪みが巡っている。器面調整は、内面および外面の口唇部とその下位付近は横方向のナデ調整が行われており、それより下部は粗いケズリである。内面に縦方向の明確なハケ目が見られないことや色調が若干灰色を呈していることから、瓦器質と考えられる。1965は土製の鍋と考えられるものの把手または耳の部分であろう。鍋自体の大きさは、胴部の最も張っている部分の復元径で25.5cmである。把手または耳は、全体を円盤状に作り、その中央部には半月形の貼り付けを設け、本体寄りに直径8mmの穿孔を行っている。その部分には鉄製の円柱状のやや太い線が残っている。このことから、この部分が円管状の把手となるか所か、それにさらにこの鍋の直径ほどの長さの棒または弧状をした板などを渡して鍋全体の把手としていた可能性が考えられる。1966は全体的な形状が平たい板状をしていることから、焙烙の把手の部分と考えられる。

#### 輪羽口（第195図，1967）

1967は土製品であるが、本破片の端部に弧状をした部分があり、それがある程度の長さを持つものであることから、輪の羽口と考えられる。羽口部分の復元口径は2.1cm程度と考えられるほか、全体の口径は復元すると7.4cm程度になりそうである。

#### 石鍋（第195図，1968～1969）

1968と1969は滑石製の石鍋である。1968は口縁部である。復元口径が26.5cm、残存高さが5.9cmである。口唇端部は四角くなっているが角は丸められている。口縁部全体としては胴部からほぼ直に立ち上がっている。口唇部の下位には鈎が巡っている。全体的な形状は四角形であるが、下げやすいように下向きにややカーブを描いて作られている。本体の胴部は口縁部の約半分の厚さである。破片の一部には穿孔が見られ、補修孔と考えられる。器面には縦方向に削り出した痕跡が明瞭に残っている。1969は胴部の下部から底部付近にかけての破片である。外面全体に煤が付着しており、頻繁に使用されたことを物語っている。器面には、外面、内面の両面に横方向の削り出した痕跡が残っている。

### 第10節 近世以降の調査

近世以降では、中世の項にまとめてあるように道跡が検出された以外には遺構は検出されていない。遺物は陶器や磁器が出土している。殊に、同市に所在する美山の窯で生産されたと考えられる薩摩焼が大量に出土していることは、特筆に値しよう。

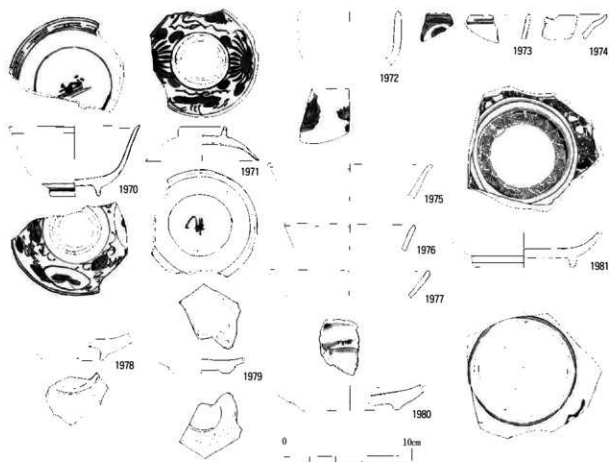
#### 染付（第196図，1970～1974）

碗および蓋、皿が出土している。1970は端反りの碗である。口径10.2cm、底径4.0cm、器高は5.5

cmである。外面には、上下2本の界線の間に、円文を等間隔に描き、その中に花かと思われる大きな文様が描かれ、その周囲には葉と蔓を表していると思われる文様をあしらっている。脚部の付け根の部分にも2本の線を巡らせている。内面には口縁部下位に2本の界線を1cm間隔で巡らし、その中に梯子のような文様とその下にはある程度の長さを持つ線を繰り返す。内底にも界線が引かれ、見込みには湖水と木を表したような文様が描かれる。19世紀の在り地製のものと考えられる。1971は蓋で、口径8.8cm、器高は2.7cmである。外面には菊花様と松の木の文様がそれぞれ対峙するように2組描かれる。その間は曲がりくねったような線で埋められている。内面には口縁部近くに並んだ2本の界線が巡らされるとともに、見込みにも線が巡り、その中には文字様の文様が描かれている。1972は小振りな筒型の湯飲み碗であろう。外面には輪状の牡丹かと思われる花と松の葉様の文様が並んで描かれる。1973も湯飲み碗と考えられ、外面には太い円形の文様が描かれる。1974は桜花皿と思われる。

#### 陶器（薩摩焼以外）（第196図、1975～1981）

1975～1977は口縁部である。1975は端反りの碗で釉薬は灰色、1976は碗で釉薬は茶味を帯びた灰色で光沢がある。1977は皿と考えられ、釉薬は黄色で光沢がある。1978～1980は碗の底部である。1978は釉薬が灰色で光沢があり、1979は釉薬が黄色、1980は薄い灰色で光沢がある。1981は明治以



第196図 近世の遺物（1）

降のいわゆるプリントの染付である。内面には見込みに鋸歯文が巡り、その中には松竹梅の吉祥文が描かれる。内面の露胎部上部にも同様な文様が描かれている。外面にも底部に界線、体部にも何らかの文様が見られる。

#### 陶器（薩摩焼）（第197～198図、1982～2016）

1982～1997は甕または鉢である。口縁部の形状も逆L字状のものからS字状となるもの、T字状となるものなどさまざまである。逆L字状となるものでも内面に稜ができるものと、なめらかで丸みを持つものがある。また、S字状となるものにもカーブが緩やかなものと胴部側に大きく張り出す急カーブなものがあり、T字状となるものにも胴部が立ち気味なものと相当な傾きをもって倒れ気味となるものなどがある。1982はS字状となるもので、口唇部には貝目が見られる。1985は注口を持つもので、内面には横方向のハケ目と共に縦方向の粗いハケ目が切られていることから、播鉢であると考えられる。1987は口縁部が大きく下がるタイプの逆L字状のものである。1988はT字状を呈するもので、残存高さが13.8cmあることから甕であろう。1989～1991は幾分小型であり、内面に縦方向のハケ目が切られていることから播鉢と考えられる。1992も小型で内面にハケ目が切られていることから播鉢であろう。1992～1997は底部である。底径の大きなものほとんどは甕、小さなものは鉢の類であろう。1993は内面に縦方向のハケ目が隙間なく切られていることから、新しいタイプの播鉢と考えられる。1996、1997は捏ね鉢であろう。

1998～2003は蓋である。1998は復元口径が22.8cm、残存高さが5.8cmあり、ほかのものも口縁部から体部への立ち上がりと同様な傾斜を持っていることから、器高の高い蓋であると考えられる。2000には口唇部に貝目が残る。2003は割合に径の大きな蓋である。2009・2010は茶家の蓋であることから、これはそれよりも大きな瓶か甕などの蓋と考えた方が良さそうである。2004は短頸壺か鉢であろう。2006～2007は甕の口縁部であるが、相当に新しいタイプと考えられる。2008は短頸壺か徳利かの口縁であろう。2011・2012は茶家である。2011の胴部の膨らみは算盤玉状に近い形状である。2012の底部外面には煤が付着しており、直接火にかけて使用されたことを物語っている。

#### 陶器製メンコ（第198図、2013～2017）

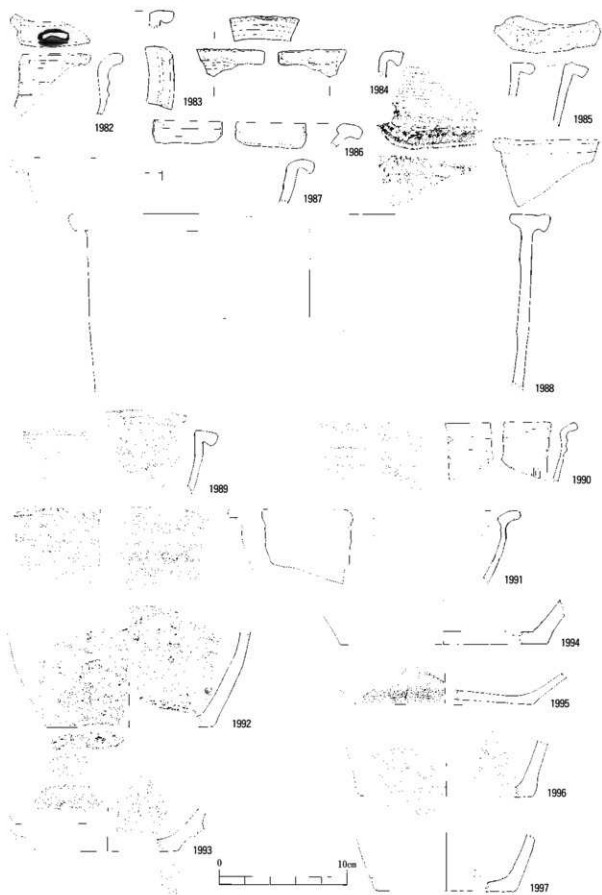
大小様々で、使用された本来の器形や使用部位もいろいろである。

#### 土鉢（第198図、2018～2020）

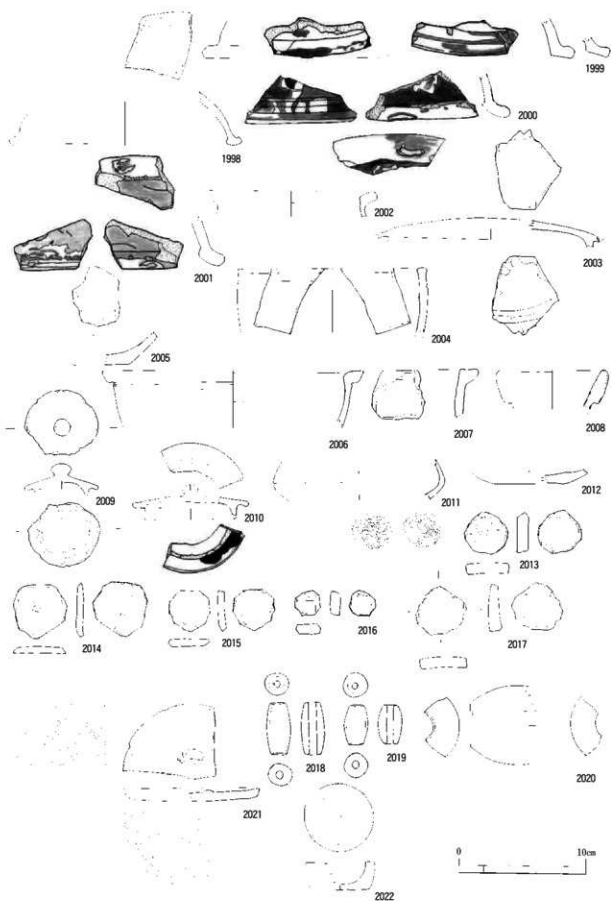
大小様々である。2018と2019は黒色をしており、一般的な大きさと言えるが、2020は若干赤褐色をしており、極めて大きなものである。

#### 窯道具（第198図、2021～2022）

窯道具と考える以外に使用目的がないと思われるものである。2021は平べったい皿のような形状をしたもので、轆轤により製作されている。外周方向がやや上がっており、水平ではない。2022は口径5.6cm、底径4.4cm、器高が2.2cmの完形のもので、一見すると埴場のようにも見えるものである。轆轤で製作されており、胎土には荒い砂粒のようなものが多く含まれている。



第197図 近世の遺物(2)



第198図 近世の遺物（3）







第15表 土器観察表(3)

観測番号	西X区	層	形状	器種	部位	記号	焼成	外面色	内面色	外面調	内面調	胎土	観測番号	西X区	層	形状	器種	部位	記号	焼成	外面色	内面色	外面調	内面調	胎土
343	F77	Ba	1350	深鉢	胴部	26791	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤-赤土	409	H22	Ba	1850	深鉢	胴部	11445	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
350	H17	Ba	1350	深鉢	胴部	18086	良好	赤褐色	灰褐色	滑らか	滑らか	赤土	410	F13	Ba	1850	深鉢	胴部	4601	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
351	K24	Ba	1350	深鉢	胴部	36886	良好	赤褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土	411	E15	Ba	1850	深鉢	胴部	3246	良好	赤褐色	灰褐色	滑らか	滑らか	赤土
352	G24	Ba	1350	深鉢	胴部	35261	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土	412	F12	Ba	1850	深鉢	胴部	15319	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
353	G24-G24	Ba	1350	深鉢	胴部	35427	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土	413	H24	Ba	1850	深鉢	胴部	3622	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
354	G24	Ba	1350	深鉢	胴部	35352	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土	414	D12	Ba	1850	深鉢	胴部	16096	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
355	H13	Ba	1350	深鉢	胴部	9925	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土	415	D12	Ba	1850	深鉢	胴部	10317	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
356	G24	Ba	1350	深鉢	胴部	35344	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土	416	F12	Ba	1850	深鉢	胴部	2813	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
357	D18	Ba	1350	深鉢	胴部	11893	良好	赤褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土	417	F28-G28	Ba	1850	深鉢	胴部	14933	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
358	G24	Ba	1350	深鉢	胴部	34709	良好	赤褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土	418	E13	Ba	1850	深鉢	胴部	2186	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
359	G24	Ba	1350	深鉢	胴部	35344	良好	赤褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土	419	G24	Ba	1850	深鉢	胴部	34837	良好	赤褐色	灰褐色	滑らか	滑らか	赤土
360	H17	Ba	1350	深鉢	胴部	9924	良好	暗褐色	褐色	滑らか	滑らか	赤土	420	G24	Ba	1850	深鉢	胴部	34937	良好	暗褐色	灰褐色	滑らか	滑らか	赤土
361	H13	Ba	1350	深鉢	胴部	11203	良好	暗褐色	褐色	滑らか	滑らか	赤土	421	G24	Ba	1850	深鉢	胴部	35077	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
362	G17	Ba	1350	深鉢	胴部	11533	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土	422	G17	Ba	1850	深鉢	胴部	21174	良好	赤褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
363	G18	Ba	1600	深鉢	胴部	12960	良好	褐色	灰褐色	滑らか	滑らか	赤土	423	G18	Ba	1850	深鉢	胴部	21279	良好	赤褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
364	-	遺	1800	深鉢	胴部	1183	良好	褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土	424	G24	Ba	1850	深鉢	胴部	35112	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
365	G22	Ba	1600	深鉢	胴部	1332	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土	425	G18	Ba	1850	深鉢	胴部	2137	良好	赤褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
366	-	遺	1800	深鉢	胴部	1183	良好	褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土	426	E9-H9	Ba	1850	深鉢	胴部	21728	良好	赤褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
367	H28	Ba	1600	深鉢	胴部	15174	良好	褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土	427	G24	Ba	1850	深鉢	胴部	34908	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
368	G-H28	Ba	1600	深鉢	胴部	-	良好	褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土	428	G18	Ba	1850	深鉢	胴部	21274	良好	赤褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
369	H28	Ba	1600	深鉢	胴部	16293	良好	褐色	褐色	滑らか	滑らか	赤土	429	F13	Ba	1850	深鉢	胴部	4268	良好	赤褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
370	G18	Ba	1600	深鉢	胴部	11624	良好	褐色	暗褐色	大沈	滑らか	赤土	430	F28	Ba	1850	深鉢	胴部	3107	良好	褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
371	D12	Ba	1700	深鉢	胴部	19354	良好	赤褐色	赤褐色	沈	滑らか	赤土	431	F15-F15	Ba	1850	深鉢	胴部	3489	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
372	D12	Ba	1700	深鉢	胴部	17617	良好	赤褐色	赤褐色	沈	滑らか	赤土	432	G13	Ba	1850	深鉢	胴部	1481	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
373	F14	Ba	1700	深鉢	胴部	28298	良好	暗褐色	赤褐色	沈	滑らか	赤土	433	H19	Ba	1850	深鉢	胴部	19545	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
374	F14	Ba	1700	深鉢	胴部	872	良好	暗褐色	赤褐色	沈	滑らか	赤土	434	H24	Ba	1850	深鉢	胴部	32221	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
375	G14	Ic	1700	深鉢	胴部	1181	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土	435	G22	Ba	1850	深鉢	胴部	35248	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
376	H24	Ba	1700	深鉢	胴部	35109	良好	褐色	褐色	大沈	滑らか	赤土	436	H23	Ba	1900	深鉢	胴部	35545	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
377	D15	Ba	1700	深鉢	胴部	8664	良好	灰褐色	褐色	沈	滑らか	赤土	437	F12-F12	Ba	2000	深鉢	胴部	4548	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
378	H1	Ba	1700	深鉢	胴部	1181	良好	赤褐色	赤褐色	大沈	滑らか	赤土	438	H24	Ba	2000	深鉢	胴部	35367	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
379	D14	Ba	1700	深鉢	胴部	47476	良好	赤褐色	赤褐色	沈	滑らか	赤土	439	F14	Ba	2000	深鉢	胴部	8229	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
380	H13	Ba	1700	深鉢	胴部	7010	良好	赤褐色	褐色	大沈	滑らか	赤土	440	H24	Ba	2000	深鉢	胴部	34956	良好	赤褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
381	H24	Ba	1700	深鉢	胴部	34945	良好	灰褐色	暗褐色	沈	滑らか	赤土	441	E12	Ba	2000	深鉢	胴部	9519	良好	褐色	褐色	滑らか	滑らか	赤土
382	D15	Ba	1700	深鉢	胴部	7600	良好	灰褐色	赤褐色	沈	滑らか	赤土	442	I28	Ba	2000	深鉢	胴部	21252	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
383	E4	Ba	1700	深鉢	胴部	3035	良好	褐色	褐色	沈	滑らか	赤土	443	J30	Ba	2000	深鉢	胴部	21844	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
384	F15	Ba	1700	深鉢	胴部	3300	良好	赤褐色	赤褐色	沈	滑らか	赤土	444	G14	Ba	2000	深鉢	胴部	8782	良好	赤褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
385	D13	Ba	1700	深鉢	胴部	19135	良好	赤褐色	赤褐色	大沈	滑らか	赤土	445	I30	Ba	2000	深鉢	胴部	21215	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
386	G24-G24	Ba	1700	深鉢	胴部	18086	良好	赤褐色	赤褐色	大沈	滑らか	赤土	446	F14	Ba	2000	深鉢	胴部	8828	良好	灰褐色	灰褐色	滑らか	滑らか	赤土
387	D13	Ba	1700	深鉢	胴部	18896	良好	赤褐色	赤褐色	大沈	滑らか	赤土	447	H17	Ba	2000	深鉢	胴部	11494	良好	赤褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
388	D12	Ba	1700	深鉢	胴部	8779	良好	褐色	灰褐色	大沈	滑らか	赤土	448	I28	Ba	2000	深鉢	胴部	21224	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
389	E25	Ba	1700	深鉢	胴部	81298	良好	褐色	灰褐色	大沈	滑らか	赤土	449	H24	Ba	2000	深鉢	胴部	35408	良好	褐色	褐色	滑らか	滑らか	赤土
390	G16	Ba	1700	深鉢	胴部	13110	良好	暗褐色	暗褐色	大沈	滑らか	赤土	450	G27	Ba	2000	深鉢	胴部	13508	良好	褐色	褐色	滑らか	滑らか	赤土
391	D13	Ba	1700	深鉢	胴部	7988	良好	褐色	褐色	大沈	滑らか	赤土	451	G28	Ba	2000	深鉢	胴部	3511	良好	褐色	褐色	滑らか	滑らか	赤土
392	D13	Ba	1700	深鉢	胴部	10017	良好	暗褐色	暗褐色	沈	滑らか	赤土	452	H29	Ba	2000	深鉢	胴部	1183	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
393	D12	Ba	1700	深鉢	胴部	8529	良好	赤褐色	灰褐色	沈	滑らか	赤土	453	E13	Ba	2000	深鉢	胴部	8538	良好	灰褐色	灰褐色	滑らか	滑らか	赤土
394	H1	Ba	1700	深鉢	胴部	7860	良好	褐色	褐色	大沈	滑らか	赤土	454	E12	II	3000	深鉢	胴部	660	良好	褐色	褐色	滑らか	滑らか	赤土
395	D11	Ba	1700	深鉢	胴部	17735	良好	暗褐色	赤褐色	沈	滑らか	赤土	455	H31	Ba	2100	深鉢	胴部	35048	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
396	E4	Ba	1700	深鉢	胴部	-	良好	赤褐色	赤褐色	沈	滑らか	赤土	456	H24	Ba	2100	深鉢	胴部	34748	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
397	F12	Ba	1700	深鉢	胴部	6985	良好	赤褐色	褐色	沈	滑らか	赤土	457	H24	Ba	2100	深鉢	胴部	35013	良好	褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
398	D13	Ba	1700	深鉢	胴部	7911	良好	褐色	褐色	沈	滑らか	赤土	458	E13	Ba	2100	深鉢	胴部	3386	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
399	F1	Ba	1700	深鉢	胴部	-	良好	赤褐色	赤褐色	沈	滑らか	赤土	459	D12	Ba	2100	深鉢	胴部	1183	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
400	G28	Ba	1700	深鉢	胴部	14416	良好	赤褐色	灰褐色	滑らか	滑らか	赤土	460	I17	Ba	2100	深鉢	胴部	11728	良好	灰褐色	灰褐色	滑らか	滑らか	赤土
401	D12-G16	Ba	1700	深鉢	胴部	12759	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土	461	D12	Ba	2200	深鉢	胴部	17936	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
402	G14	Ba	1700	深鉢	胴部	19109	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土	462	D14	Ba	2200	深鉢	胴部	79898	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
403	G14	Ba	1700	深鉢	胴部	1809	良好	赤褐色	灰褐色	滑らか	滑らか	赤土	463	D12	Ba	2200	深鉢	胴部	35504	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
404	E13	Ba	1700	深鉢	胴部	8021	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土	464	F14	Ba	2200	深鉢	胴部	38918	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土
405	G14	Ba	1700	深鉢	胴部	1808	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土	465	H23	Ba	2200	深鉢	胴部	35454	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
406	G14	Ba	1700	深鉢	胴部	1808	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土	466	F20-F20	Ba	2200	深鉢	胴部	12911	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
407	H24	Ba	1900	深鉢	胴部	35315	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土	467	E11-F17	Ba	2300	深鉢	胴部	1183	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土
408	H24	Ba	1900	深鉢	胴部	34448	良好	赤褐色	赤褐色	滑らか	滑らか	赤土	468	I30	Ba	2300	深鉢	胴部	21386	良好	暗褐色	暗褐色	滑らか	滑らか	赤土

第16表 土器観察表(4)

観測番号	西のX	層	分層	器種	部位	記載番号	形状	外面の色	内面の色	外面の装飾	内面の装飾	取土	埋蔵番号	西のX	層	分層	器種	部位	記載番号	形状	外面の色	内面の色	外面の装飾	内面の装飾	取土		
																										外面の色	内面の色
469	D16	Bs	230a	鉢	口縁	10697	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	529	E23	Bs	270a	鉢	口縁	10695	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
470	G22	Bs	230b	鉢	口縁	11335	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	530	E13	Bs	270a	鉢	口縁	10696	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
471	-	-	230c	鉢	口縁	-	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	531	G14	Bs	270a	鉢	口縁	10697	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
472	G24	Bs	230d	鉢	口縁	10698	3079	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	532	表	表	270a	鉢	口縁	10698	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
473	D14	Bs	230e	鉢	口縁	10699	10115	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	533	D14	Bs	270a	鉢	口縁	10699	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	横石	
474	H18	Bs	230f	鉢	口縁	10700	25295	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	534	E13	Bs	270a	鉢	口縁	10700	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	横石	
475	D12	Bs	230g	鉢	口縁	11292	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	外石	535	D14	Bs	270a	鉢	口縁	10701	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
476	20-25	20-25	230h	鉢	口縁	9727b	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	外石	536	E23	Bs	270a	鉢	口縁	10702	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
477	D12	1c	240a	鉢	口縁	10691	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	外石	537	H12	Bs	270a	鉢	口縁	10693	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
478	G12	Bs	240b	鉢	口縁	10692	7353	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	538	G12	Bs	270a	鉢	口縁	10694	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
479	D13	Bs	240c	鉢	口縁	10693	-	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	539	D13	Bs	270a	鉢	口縁	10695	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
480	H14	Bs	240d	鉢	口縁	10694	7300	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	外石	540	E13	Bs	270a	鉢	口縁	10696	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
481	D12	Bs	240e	鉢	口縁	10695	50666	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	外石	541	D13	Bs	270a	鉢	口縁	10697	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
482	E13	Bs	240f	鉢	口縁	10696	3273	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	外石	542	H12	Bs	270a	鉢	口縁	10698	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
483	G24	Bs	240g	鉢	口縁	10697	10601	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	外石	543	D13	1c	270a	鉢	口縁	10699	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
484	Bs	Bs	240h	鉢	口縁	11295b	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	544	H12	Bs	270a	鉢	口縁	10700	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
485	E13	Bs	240i	鉢	口縁	10698	424	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	外石	545	F12	Bs	270a	鉢	口縁	10701	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
486	K23	Bs	240j	鉢	口縁	-	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	外石	546	H14	Bs	270a	鉢	口縁	10702	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
487	D13	1c	240k	鉢	口縁	10699	815	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	547	F12	Bs	270a	鉢	口縁	10703	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
488	K23	Bs	240l	鉢	口縁	10700	2387	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	548	G23	1	270a	鉢	口縁	10704	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
489	D12	Bs	240m	鉢	口縁	10701	16742	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	外石	549	F12-G2	Bs	270a	鉢	口縁	10705	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
490	D14-G2	Bs	240n	鉢	口縁	10702	10120	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	外石	550	E12-G2	Bs	270a	鉢	口縁	10706	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
491	D14	Bs	240o	鉢	口縁	10703	8971	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	外石	551	D14	Bs	270a	鉢	口縁	10707	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
492	H14	Bs	240p	鉢	口縁	10704	1000	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	外石	552	D12	Bs	270a	鉢	口縁	10708	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
493	G15	Bs	240q	鉢	口縁	11318	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	外石	553	D12	Bs	270a	鉢	口縁	10709	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
494	D12	Bs	240r	鉢	口縁	11843	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	外石	554	E14	Bs	270a	鉢	口縁	10710	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
495	G23-G2	Bs	240s	鉢	口縁	10705	15640	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	555	D12	Bs	270a	鉢	口縁	10711	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
496	E12-G2	Bs	240t	鉢	口縁	10706	45030	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	横石	556	D13	Bs	270a	鉢	口縁	10712	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
497	E13	Bs	240u	鉢	口縁	10707	1276	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	557	G2-G2	Bs	270a	鉢	口縁	10713	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
498	F12	Bs	240v	鉢	口縁	10708	5235	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	558	E12	Bs	270a	鉢	口縁	10714	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
499	F13	Bs	240w	鉢	口縁	10709	822	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	横石	559	G13	Bs	270a	鉢	口縁	10715	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
500	E13	Bs	240x	鉢	口縁	10710	3169	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	560	E14	Bs	270a	鉢	口縁	10716	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
501	E12-G2	Bs	240y	鉢	口縁	10711	54786	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	横石	561	E12-G2	Bs	270a	鉢	口縁	10717	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
502	F12-G2	Bs	240z	鉢	口縁	10712	26320	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	562	E14	Bs	270a	鉢	口縁	10718	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
503	E14	Bs	240aa	鉢	口縁	10713	43418	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	563	E12-G2	Bs	270a	鉢	口縁	10719	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
504	G13	Bs	240ab	鉢	口縁	11325	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	564	D14	Bs	270a	鉢	口縁	10720	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
505	D11	Bs	240ac	鉢	口縁	11743	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	565	E13	Bs	270a	鉢	口縁	10721	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
506	E14	Bs	240ad	鉢	口縁	11918	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	566	G13	Bs	270a	鉢	口縁	10722	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
507	20-25	20-25	240ae	鉢	口縁	11948	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	567	E13	Bs	270a	鉢	口縁	10723	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
508	E13	Bs	240af	鉢	口縁	10714	3965	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	横石	568	D14	Bs	270a	鉢	口縁	10724	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
509	E12	Bs	240ag	鉢	口縁	10715	6317	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	569	E14	Bs	270a	鉢	口縁	10725	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
510	H13-G2	Bs	240ah	鉢	口縁	11048	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	外石	570	G13	Bs	270a	鉢	口縁	10726	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
511	H13	Bs	240ai	鉢	口縁	10716	8927	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	571	F13	Bs	270a	鉢	口縁	10727	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
512	G12	Bs	240aj	鉢	口縁	10717	7227	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	横石	572	E13	Bs	270a	鉢	口縁	10728	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
513	H13	Bs	240ak	鉢	口縁	10718	1679	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	横石	573	E13	Bs	270a	鉢	口縁	10729	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
514	E13	Bs	240al	鉢	口縁	10719	10051	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	横石	574	F14	Bs	270a	鉢	口縁	10730	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
515	E13	Bs	240am	鉢	口縁	11449	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	横石	575	E14	Bs	270a	鉢	口縁	10731	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
516	G13	Bs	240an	鉢	口縁	11406	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	576	E12-G2	Bs	270a	鉢	口縁	10732	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
517	D12-13	Bs	240ao	鉢	口縁	11528	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	577	G15	Bs	270a	鉢	口縁	10733	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
518	F11	Bs	240ap	鉢	口縁	11974	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	578	G11-G12	Bs	270a	鉢	口縁	10734	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
519	F12	Bs	240aq	鉢	口縁	10644	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	579	E14	Bs	270a	鉢	口縁	10735	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
520	H12	Bs	240ar	鉢	口縁	12718	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	580	E14	Bs	270a	鉢	口縁	10736	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石		
521	表	表	270a	鉢	口縁	-	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	横石	581	E12-G2	Bs	270a	鉢	口縁	10625	54158	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
522	H14	Bs	270b	鉢	口縁	10700	8700	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	外石	582	E13	Bs	270a	鉢	口縁	10646	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
523	G13	Bs	270c	鉢	口縁	11522	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	583	E13	Bs	270a	鉢	口縁	10662	3952	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
524	F12	Bs	270d	鉢	口縁	10603	8063	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石	584	E13	Bs	270a	鉢	口縁	10663	51758	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石
525	D12	Bs	270e	鉢	口縁	12014	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	585	E13	Bs	270a	鉢	口縁	10664	3384	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
526	E13	Bs	270f	鉢	口縁	12181	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	横石	586	F20	Bs	270a	鉢	口縁	10665	4267	良好	褐色	褐色	横リ	ナシ	横石	
527	F13	Bs	270g	鉢	口縁	4099	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	外石															
528	D12	Bs	270h	鉢	口縁	14676	良好	褐色	褐色	ナシ	ナシ	横石															

第17表 土器観察表(5)

観測番号	西X区	層	土器	部位	記号	形状	外面色	内面色	外面調整	内面調整	取上	観測番号	西X区	層	土器	部位	記号	形状	外面色	内面色	外面調整	内面調整	取上
547	E3	Ⅰ	3000	深鉢	1048	5.11.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	547	F13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	6.22.7	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
548	3000	深鉢	1048	6.65.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	548	F13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	6.69.7	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ		
549	G14	Ⅲ	2050	深鉢	1048	11.11.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	549	G14	Ⅲ	2250	深鉢	1048	11.39.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
550	E13	Ⅱ	2050	深鉢	1048	3.27.1	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	550	E13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	5.24	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
551	E14	Ⅱ	2050	深鉢	1048	3.99.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	551	E14	Ⅱ	2250	深鉢	1048	1.19.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
552	E19	Ⅱ	2050	深鉢	1048	3.43.3	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	552	G12	Ⅱ	2250	深鉢	1048	3.91.5	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
553	E14	Ⅱ	2050	深鉢	1048	3.94	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	553	30-20	Ⅱ	2250	深鉢	1048	6.61.7.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
554	F13	Ⅱ	2050	深鉢	1048	2.92	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	554	G22	Ⅱ	2250	深鉢	1048	5.96.7	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
555	H12	Ⅱ	2050	深鉢	1048	1.72	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	555	F12	Ⅱ	2250	深鉢	1048	6.61.7.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
556	H13	Ⅱ	2050	深鉢	1048	1.624	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	556	D11-D13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	1.623.2.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
557	E13	Ⅱ	2050	深鉢	1048	3.94	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	557	G11	Ⅱ	2250	深鉢	1048	1.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
558	E13	Ⅱ	2050	深鉢	1048	7.90	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	558	D13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	7.13.7	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
559	D12	Ⅱ	2050	深鉢	1048	1.254	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	559	D11	Ⅱ	2250	深鉢	1048	3.16.2	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
560	G12	Ⅱ	2050	深鉢	1048	6.27	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	560	G11	Ⅱ	2250	深鉢	1048	1.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
561	C-D14	1c	2050	深鉢	1048	1.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	561	E13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	1.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
562	D2-D12	Ⅱ	2150	深鉢	1048	4.69.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	562	E13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	6.61	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
563	G14	Ⅲ	2150	深鉢	1048	8.74	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	563	D11	Ⅱ	2250	深鉢	1048	8.95	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
564	F13	Ⅱ	2150	深鉢	1048	41.9	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	564	D11-D13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	6.59.4.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
565	D2-D12	Ⅱ	2150	深鉢	1048	16.71.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	565	F13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	6.62.7	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
566	E13	Ⅱ	2150	深鉢	1048	1.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	566	F14	Ⅲ	2250	深鉢	1048	1.10.5	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
567	D2-D12	Ⅱ	2150	深鉢	1048	4.64.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	567	F12	Ⅱ	2250	深鉢	1048	2.66	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
568	F14	Ⅲ	2150	深鉢	1048	1.1	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	568	G22	Ⅱ	2250	深鉢	1048	6.244	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
569	G13	Ⅲ	2150	深鉢	1048	1.29.7.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	569	D13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	7.12.7	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
570	D2-D12	Ⅱ	2150	深鉢	1048	1.99.6.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	570	D14	Ⅱ	2250	深鉢	1048	1.91.5	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
571	D14	Ⅱ	2150	深鉢	1048	1.30	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	571	E14	Ⅱ	2250	深鉢	1048	3.93	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
572	F14	Ⅲ	2150	深鉢	1048	6.18	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	572	D13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	6.69	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
573	D2-D14	Ⅱ	2150	深鉢	1048	6.97.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	573	G21	Ⅱ	2250	深鉢	1048	6.66	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
574	E14	Ⅱ	2150	深鉢	1048	1.02	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	574	D14	Ⅱ	2250	深鉢	1048	9.63	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
575	H19	Ⅱ	2150	深鉢	1048	14.53.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	575	H13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	1.66	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
576	E14	Ⅱ	2150	深鉢	1048	1.81.7	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	576	F14	Ⅲ	2250	深鉢	1048	2.93.2.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
577	H12	Ⅱ	2150	深鉢	1048	3.72.1.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	577	G12	Ⅱ	2250	深鉢	1048	1.94.6.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
578	G14	Ⅲ	2150	深鉢	1048	1.27	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	578	G14	Ⅲ	2250	深鉢	1048	3.91.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
579	E13	Ⅱ	2150	深鉢	1048	5.59.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	579	E11	Ⅱ	2250	深鉢	1048	1.23.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
580	G13	Ⅲ	2150	深鉢	1048	3.62	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	580	H13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	1.262	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
581	E14	Ⅱ	2150	深鉢	1048	6.29	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	581	H13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	1.39.2	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
582	G14	Ⅲ	2150	深鉢	1048	8.74	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	582	G14	Ⅲ	2250	深鉢	1048	8.74	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
583	D11	Ⅱ	2150	深鉢	1048	1.73	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	583	E14-D15	Ⅱ	2250	深鉢	1048	3.41.8	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
584	G14	Ⅲ	2150	深鉢	1048	1.14	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	584	G14	Ⅲ	2250	深鉢	1048	3.97.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
585	E13	Ⅱ	2150	深鉢	1048	3.93.1.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	585	H19	Ⅱ	2250	深鉢	1048	1.654	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
586	E13-D13	Ⅱ	2150	深鉢	1048	2.94.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	586	G14	Ⅲ	2250	深鉢	1048	1.12.8	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
587	-	805	2150	深鉢	1048	-	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	587	E14	Ⅱ	2250	深鉢	1048	3.19	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
588	E14-D14	Ⅱ	2150	深鉢	1048	6.95.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	588	E13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	6.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
589	F14	Ⅲ	2150	深鉢	1048	2.91.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	589	E14	Ⅱ	2250	深鉢	1048	6.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
590	G12	Ⅱ	2150	深鉢	1048	3.53	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	590	F14	Ⅲ	2250	深鉢	1048	6.29	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
591	E13	Ⅱ	2150	深鉢	1048	6.69	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	591	30-20	Ⅱ	2250	深鉢	1048	1.27.6.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
592	D14	Ⅱ	2150	深鉢	1048	1.1	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	592	E13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	2.19.6.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
593	H13	Ⅱ	2150	深鉢	1048	1.57	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	593	E12	1c	2250	深鉢	1048	1.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
594	D12	Ⅱ	2150	深鉢	1048	1.23.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	594	E12	Ⅱ	2250	深鉢	1048	6.63	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
595	E13-D13	Ⅱ	2150	深鉢	1048	9.21.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	595	E14	Ⅱ	2250	深鉢	1048	2.25	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
596	E13	Ⅱ	2150	深鉢	1048	1.49.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	596	E13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	5.47	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
597	H12	Ⅱ	2150	深鉢	1048	7.72	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	597	G23	Ⅱ	2250	深鉢	1048	6.29	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
598	F14	Ⅲ	2150	深鉢	1048	11.31	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	598	G11	Ⅱ	2250	深鉢	1048	1.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
599	D14	Ⅱ	2150	深鉢	1048	4.70	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	599	E14	Ⅱ	2250	深鉢	1048	9.19	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
600	D11	Ⅱ	2150	深鉢	1048	3.16	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	600	F12	Ⅱ	2250	深鉢	1048	6.634	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
601	-	805	2150	深鉢	1048	-	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	601	F12	Ⅱ	2250	深鉢	1048	6.691	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
602	E14	Ⅱ	2250	深鉢	1048	3.93.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	602	G14	Ⅲ	2250	深鉢	1048	1.11.8	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
603	30-20	Ⅱ	2250	深鉢	1048	4.97.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	603	E14	Ⅱ	2250	深鉢	1048	1.71.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
604	E13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	4.97.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	604	E12	Ⅱ	2250	深鉢	1048	6.273	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
605	G12	Ⅱ	2250	深鉢	1048	1.41.2.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	605	D13	Ⅱ	2250	深鉢	1048	9.62	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ
606	E14	Ⅱ	2250	深鉢	1048	3.29	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ	606	F12	Ⅱ	2250	深鉢	1048	3.56.6	良好	赤褐色	赤褐色	調整済	ナ

第18表 土器観察表(6)

図号	器種	内径	口径	器形	部位	記載	形状	外面	内面	内面	脚土	図号	器種	内径	口径	器形	部位	記載	形状	外面	内面	内面	脚土	
番号	名	mm	mm	名	名	番号	名	色	色	色	名	番号	名	mm	mm	名	名	番号	色	色	色	名		
707	J11	30	24	浅鉢	口縁	22499	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	708	D2	30	24	浅鉢	器底	5072	良好	明褐色	淡褐色	ナ	ナ	
708	J2	30	24	浅鉢	口縁	33567	良好	明褐色	黄褐色	ナ	ナ	709	D2	30	24	浅鉢	器底	16716	良好	黄褐色	黄褐色	ナ	ナ	
709	E38	30	24	浅鉢	口縁	31124	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	710	D4	30	24	浅鉢	器底	7664	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	
710	E34-10	30	24	浅鉢	口縁	33488	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	711	F11	30	24	浅鉢	器底	11971	良好	明褐色	淡褐色	ナ	ナ	
711	E14	30	24	浅鉢	口縁	3207	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	712	E14	30	24	浅鉢	器底	3308	良好	淡褐色	淡褐色	ナ	ナ	
712	E14	30	24	浅鉢	口縁	3198	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	713	F12	30	24	浅鉢	器底	6445	良好	淡褐色	淡褐色	ナ	ナ	
713	D14	30	24	浅鉢	口縁	16211	良好	明褐色	赤褐色	ナ	ナ	714	G11	30	24	浅鉢	器底	8847	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	
714	E14	30	24	浅鉢	口縁	4292	良好	赤褐色	赤褐色	ナ	ナ	715	D4	30	24	浅鉢	器底	10248	良好	淡褐色	淡褐色	ナ	ナ	
715	D12	30	24	浅鉢	器底	9767	良好	褐色	褐色	ナ	ナ	716	E14	30	24	浅鉢	器底	233	良好	褐色	淡褐色	ナ	ナ	
716	D12	30	24	浅鉢	口縁	17919	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	717	E14	30	24	浅鉢	器底	321	良好	灰褐色	灰褐色	ナ	ナ	
717	G12	30	24	浅鉢	口縁	7948	良好	赤褐色	淡褐色	ナ	ナ	718	E14	30	24	浅鉢	器底	3366	良好	淡褐色	淡褐色	ナ	ナ	
718	D13	30	24	浅鉢	器底	6960	良好	褐色	灰褐色	ナ	ナ	719	F14	30	24	浅鉢	器底	3989	良好	褐色	灰褐色	ナ	ナ	
719	G22	30	24	浅鉢	器底	12308	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	720	G22	30	24	浅鉢	器底	12285	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	
720	D11	30	24	浅鉢	器底	18922	良好	明褐色	赤褐色	ナ	ナ	721	G11	30	24	浅鉢	器底	14385	良好	明褐色	灰褐色	ナ	ナ	
721	D11	30	24	浅鉢	器底	650	良好	赤褐色	赤褐色	ナ	ナ	722	D12	30	24	浅鉢	器底	21188	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	
722	D12	30	24	浅鉢	口縁	17927	良好	暗褐色	褐色	細線	ナ	723	E11	30	24	浅鉢	器底	11628	良好	暗褐色	淡褐色	ナ	ナ	
723	F13	30	24	浅鉢	口縁	4133	良好	灰褐色	灰褐色	細線	ナ	724	F13	30	24	浅鉢	器底	6396	良好	暗褐色	淡褐色	ナ	ナ	
724	F13	30	24	浅鉢	器底	4285	良好	灰褐色	灰褐色	細線	ナ	725	表	30	24	浅鉢	器底	一	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	
725	D4	30	24	浅鉢	器底	4935	良好	暗褐色	褐色	ナ	ナ	726	H23	30	24	浅鉢	器底	3533	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	
726	D14	30	24	浅鉢	口縁	3342	良好	褐色	褐色	ナ	ナ	727	表	30	24	浅鉢	器底	一	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	
727	E13	30	24	浅鉢	器底	4301	良好	褐色	黄褐色	ナ	ナ	728	I13	30	24	浅鉢	器底	21037	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	
728	D15	30	24	浅鉢	口縁	7700	良好	灰褐色	黄褐色	ナ	ナ	729	I30	30	24	浅鉢	器底	21211	良好	赤褐色	褐色	ナ	ナ	
729	D2-2	30	24	浅鉢	器底	36908	良好	褐色	暗褐色	ナ	ナ	730	H12-2	30	24	浅鉢	器底	16768	良好	灰褐色	褐色	ナ	ナ	
730	G12	30	24	浅鉢	器底	7351	良好	褐色	淡褐色	ナ	ナ	731	F12-2	30	24	浅鉢	器底	5537	良好	灰褐色	黄褐色	ナ	ナ	
731	器底	30	24	浅鉢	器底	141-58	良好	褐色	褐色	ナ	ナ	732	G12	30	24	浅鉢	器底	3921	良好	暗褐色	明褐色	ナ	ナ	
732	G13	30	24	浅鉢	器底	8386	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	733	F13	30	24	浅鉢	器底	2809	良好	褐色	灰褐色	ナ	ナ	
733	G12	30	24	浅鉢	器底	9645	良好	暗褐色	暗褐色	ナ	ナ	734	G14	30	24	浅鉢	器底	7112	良好	褐色	褐色	ナ	ナ	
734	F13	30	24	浅鉢	器底	2786	良好	褐色	暗褐色	ナ	ナ	735	E13	30	24	浅鉢	器底	5321	良好	淡褐色	灰褐色	ナ	ナ	
735	E13	30	24	浅鉢	器底	4382	良好	褐色	淡褐色	ナ	ナ	736	E13	30	24	浅鉢	器底	6566	良好	褐色	暗褐色	ナ	ナ	
736	D14	30	24	浅鉢	器底	7987	良好	褐色	暗褐色	ナ	ナ	737	F13	30	24	浅鉢	器底	4077	良好	赤褐色	暗褐色	ナ	ナ	
737	G13	30	24	浅鉢	器底	1330	良好	灰褐色	黄褐色	ナ	ナ	738	F14	30	24	浅鉢	器底	676	良好	淡褐色	灰褐色	ナ	ナ	
738	D14	30	24	浅鉢	器底	8910	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	739	E14	30	24	浅鉢	器底	8281	良好	淡褐色	黄褐色	ナ	ナ	
739	E14	30	24	浅鉢	器底	39373	良好	褐色	暗褐色	細線	ナ	740	G12	30	24	浅鉢	器底	2505	良好	灰褐色	黄褐色	ナ	ナ	
740	F12-2	30	24	浅鉢	器底	975	良好	黄褐色	淡褐色	粗線	ナ	741	D2-2	30	24	浅鉢	器底	34284	良好	褐色	褐色	ナ	ナ	
741	E14	30	24	浅鉢	器底	一	良好	褐色	淡褐色	粗線	ナ	742	D13	30	24	浅鉢	器底	7034	良好	灰褐色	黄褐色	ナ	ナ	
742	D14	30	24	浅鉢	器底	8958	良好	褐色	淡褐色	粗線	ナ	743	D13	30	24	浅鉢	器底	7803	良好	褐色	灰褐色	ナ	ナ	
743	E14	30	24	浅鉢	器底	30319	良好	明褐色	明褐色	粗線	ナ	744	H13	30	24	浅鉢	器底	7478	良好	褐色	褐色	ナ	ナ	
744	F12-1	30	24	浅鉢	器底	25789	良好	灰褐色	明褐色	ナ	ナ	745	F13	30	24	浅鉢	器底	4381	良好	褐色	暗褐色	ナ	ナ	
745	G13	30	24	浅鉢	器底	8888	良好	明褐色	明褐色	粗線	ナ	746	E13	30	24	浅鉢	器底	77502	良好	褐色	褐色	ナ	ナ	
746	F12	30	24	浅鉢	器底	8471	良好	灰褐色	黄褐色	ナ	ナ	747	E13	30	24	浅鉢	器底	一	良好	褐色	淡褐色	ナ	ナ	
747	H25	30	24	浅鉢	器底	34386	良好	明褐色	赤褐色	細線	ナ	748	E13	30	24	浅鉢	器底	5114	良好	明褐色	灰褐色	ナ	ナ	
748	F12	30	24	浅鉢	器底	6441	良好	明褐色	黄褐色	細線	ナ	749	表	30	24	浅鉢	器底	一	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	
749	C13	30	27	浅鉢	器底	16112	良好	淡褐色	灰褐色	粗線	ナ	750	C13	30	27	浅鉢	器底	16112	良好	淡褐色	灰褐色	粗線	ナ	ナ
750	C13	30	27	浅鉢	器底	16115	良好	淡褐色	灰褐色	粗線	ナ	751	G12	30	27	浅鉢	器底	12385	良好	暗褐色	赤褐色	ナ	ナ	
751	G12	30	27	浅鉢	器底	4476	良好	明褐色	赤褐色	赤口	ナ	752	E13	30	27	浅鉢	器底	6099	良好	暗褐色	赤褐色	ナ	ナ	
752	E13	30	27	浅鉢	器底	6099	良好	暗褐色	赤褐色	赤口	ナ	753	E13	30	27	浅鉢	器底	2103	良好	暗褐色	淡褐色	ナ	ナ	
753	E14	30	27	浅鉢	器底	3256	良好	明褐色	赤褐色	赤口	ナ	754	F12-2	30	27	浅鉢	器底	一	良好	褐色	暗褐色	ナ	ナ	
754	D2-1	30	27	浅鉢	器底	一	良好	淡褐色	赤褐色	赤口	ナ	755	F13	30	27	浅鉢	器底	39634	良好	暗褐色	赤褐色	ナ	ナ	
755	F14	30	27	浅鉢	器底	2982	良好	明褐色	赤褐色	細線	ナ	756	D11	30	27	浅鉢	器底	32145	良好	淡褐色	灰褐色	ナ	ナ	
756	E13	30	27	浅鉢	器底	5385	良好	明褐色	褐色	細線	ナ	757	F12-2	30	27	浅鉢	器底	18898	良好	赤褐色	暗褐色	ナ	ナ	
757	H12	30	27	浅鉢	器底	7282	良好	明褐色	赤褐色	赤口	ナ	758	D12	30	27	浅鉢	器底	12971	良好	赤褐色	灰褐色	ナ	ナ	
758	F14	30	27	浅鉢	器底	864	良好	淡褐色	赤褐色	細線	ナ	759	D14	30	27	浅鉢	器底	8466	良好	赤褐色	灰褐色	ナ	ナ	
759	H28	30	27	浅鉢	器底	33529	良好	明褐色	褐色	粗線	ナ	760	E13	30	27	浅鉢	器底	37	良好	暗褐色	暗褐色	ナ	ナ	
760	D12	30	27	浅鉢	器底	一	良好	明褐色	赤褐色	赤口	ナ	761	D13	30	27	浅鉢	器底	7607	良好	明褐色	明褐色	ナ	ナ	
761	D13	30	27	浅鉢	器底	9591	良好	淡褐色	明褐色	粗線	ナ	762	T	30	27	浅鉢	器底	11797	良好	褐色	明褐色	ナ	ナ	
762	G13	30	27	浅鉢	器底	一	良好	明褐色	明褐色	粗線	ナ	763	F12-2	30	27	浅鉢	器底	2994	良好	灰褐色	灰褐色	ナ	ナ	
763	D12	30	27	浅鉢	器底	17877	良好	褐色	褐色	ナ	764	E12	30	27	浅鉢	器底	5868	良好	黄褐色	黄褐色	ナ	ナ		
764	E11	30	27	浅鉢	器底	12249	良好	明褐色	明褐色	ナ	765	F14	30	27	浅鉢	器底	680	良好	褐色	褐色	ナ	ナ		
765	E13	30	27	浅鉢	器底	4479	良好	明褐色	淡褐色	ナ	766	F13	30	27	浅鉢	器底	2422	良好	灰褐色	褐色	ナ	ナ		
766	F12-2	30	27	浅鉢	器底	2349	良好	褐色	暗褐色	ナ	767	G17	30	27	浅鉢	器底	11643	良好	褐色	明褐色	ナ	ナ		
767	E13	30																						



第20表 土器観察表(8)

観測番号	地区	層	分期	器種	器名	記号	形状	外周色	内周色	外周調整	内周調整	胎土	観測番号	地区	層	分期	器種	器名	記号	形状	外周色	内周色	外周調整	内周調整	胎土	
1542	紀伊(2)	I-1b	成	甕	細頸一筋瓶	1048	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1562	H13	Bb	成	甕	細頸一筋瓶	1064	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1543	D15	Ba	成	甕	細頸一筋	1049	良好	褐色	赤褐色	調整	調整	赤土	1563	C14	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	1061(1)	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1544	D15	Ba	成	甕	細頸一筋	1047(9)	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1564	I31	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	1163(1)	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1545	D15	Ba	成	甕	細頸一筋	1129(2)	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1565	H24	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	1043(3)	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1546	I31-D14	Ba	成	甕	細頸一筋	1131(2)	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1566	I31	Bb	成	甕	細頸一筋瓶	1131	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1547	D14	Ba	成	甕	細頸一筋	1041(5)	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1567	F11	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	1130	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1548	F13	Ba	成	甕	細頸一筋	4196	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1568	志	志	成	甕	細頸一筋	1131	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1549	I-1b	成	甕	細頸一筋	4222(8)	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1569	D13	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	1080	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土		
1550	D13	成	甕	細頸一筋	1048	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1569	H11	Bb	成	甕	細頸一筋瓶	1048	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土		
1551	紀伊(2)	I-1b	成	甕	細頸一筋	1048	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1571	F21	Bb	成	甕	細頸一筋瓶	1174(4)	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1552	F11	Ba	成	甕	細頸一筋	1048	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1572	G10	成	甕	細頸一筋	1090	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土		
1553	F13	I-1	成	甕	細頸一筋	1048	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1573	I31	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	1130	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1554	R12	Ba	成	甕	細頸一筋	5550	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1574	H30	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	1200	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1555	R11-F12	Ba	成	甕	細頸一筋	5548(8)	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1575	G11	Ba	成	甕	細頸一筋	1203	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1556	I41-D14	I-1b	成	甕	細頸一筋	4366(8)	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1576	D16	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	1090	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1557	I31	成	甕	細頸一筋	1498	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1577	D12	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	1168	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土		
1558	C14	Ba	成	甕	細頸一筋	1629(9)	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1578	G14	Ba	成	甕	細頸一筋	1218	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1559	H17	I-1b	成	甕	細頸一筋	1131	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1579	D13	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	6033(3)	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1560	H12	Ba	成	甕	細頸一筋	1205	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1580	D11	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	1168	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1561	D13	Ba	成	甕	細頸一筋	4657	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1581	D11	Bb	成	甕	細頸一筋瓶	1247(2)	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1562	志	志	成	甕	細頸一筋	1131	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1582	F16	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	1110	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1563	C14	Ba	成	甕	細頸一筋	18219	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1583	H16	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	1160	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1564	F17	Ba	成	甕	細頸一筋	30763	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1584	G12-G12	Ba	成	甕	細頸一筋	9379(8)	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1565	志	志	成	甕	細頸一筋	-	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1585	G11	Bb	成	甕	細頸一筋	-	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1566	G17	Ba	成	甕	細頸一筋	10917	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1586	I32	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	1160	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1567	F17	Ba	成	甕	細頸一筋	10984	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1587	H30	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	1216	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1568	J12	Ba	成	甕	細頸一筋	8029	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1588	G27	Bb	成	甕	細頸一筋	10813	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1569	G17	Ba	成	甕	細頸一筋	1131	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1589	D15	I	成	甕	細頸一筋	-	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1570	C14	Ba	成	甕	細頸一筋	16215	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1591	F17	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	11284	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1571	D13	Ba	成	甕	細頸一筋	16113	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1592	G11	Ba	成	甕	細頸一筋	1040	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1572	D13	Ba	成	甕	細頸一筋	4734	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1593	I32	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	1174	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1573	I36	Bb	成	甕	細頸一筋	11248	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1594	I36	Bb	成	甕	細頸一筋瓶	1174	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1574	H17	Bb	成	甕	細頸一筋	12265	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1595	I31-I32	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	11248	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1575	D14	Ba	成	甕	細頸一筋	16190	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1596	志	志	成	甕	細頸一筋	-	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1576	D16	I-1	成	甕	細頸一筋	-	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1597	H17	Bb	成	甕	細頸一筋瓶	1148	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1577	H19	Ba	成	甕	細頸一筋	10408	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1598	E16	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	10513	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1578	G17	Ba	成	甕	細頸一筋	10548	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1599	I31	Bb	成	甕	細頸一筋瓶	1198	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1579	H17	Ba	成	甕	細頸一筋	10555	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1600	F16	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	1174	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1580	E12	I-1	成	甕	細頸一筋	10551	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1601	H17	Bb	成	甕	細頸一筋瓶	1174	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1581	H17	Bb	成	甕	細頸一筋	11684	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1602	紀伊(2)	I-1b	成	甕	細頸一筋	1498	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1582	H17	Ba	成	甕	細頸一筋	10791	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1603	E13	I-1b	成	甕	細頸一筋	11-101	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1583	I31	成	甕	細頸一筋	154	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1604	E14	Ba	成	甕	細頸一筋	4962(2)	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土		
1584	H17	Bb	成	甕	細頸一筋	11130	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1594	D13	I-1	成	甕	細頸一筋	-	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1585	E12	Ba	成	甕	細頸一筋	3708	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1605	I31-G13	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	6712(1)	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1586	E12	I-1	成	甕	細頸一筋	-	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1606	紀伊(2)	I-1b	成	甕	細頸一筋	1048	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1587	H17	Bb	成	甕	細頸一筋	11611	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1607	F14	I	成	甕	細頸一筋	1060	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1588	G16	志	志	成	甕	細頸一筋	-	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1608	F13-F13	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	10130	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土
1589	I31-F12	Ba	成	甕	細頸一筋	11721	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1609	I31-G13	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	7818	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1590	I31-G13	Ba	成	甕	細頸一筋	11722	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1610	G15	Ba	成	甕	細頸一筋	11144	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1591	I31-G13	Ba	成	甕	細頸一筋	11723	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1611	D11	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	10190	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1592	I31-G13	Ba	成	甕	細頸一筋	11724	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1612	D11	Ba	成	甕	細頸一筋瓶	1272	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1593	I31-G13	Ba	成	甕	細頸一筋	11747	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1613	E13	Ba	成	甕	細頸一筋	2752	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1594	H17	Bb	成	甕	細頸一筋	11689	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1614	I31	I	成	甕	細頸一筋	1048	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1595	H17	Bb	成	甕	細頸一筋	10319	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1615	I32	Bb	成	甕	細頸一筋	1080	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1596	F12	Ba	成	甕	細頸一筋	4986	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1616	I32	Bb	成	甕	細頸一筋	118	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1597	F12	Ba	成	甕	細頸一筋	13401	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	1617	E12	Ba	成	甕	細頸一筋	12284	良好	褐色	褐色	調整	調整	赤土	
1598	F21-F21	Ba	成	甕	細頸一																					





第22表 土器観察表 (10)

図記番号	器名	器種	器形	器口	器底	器高	器径	器厚	器重	器色	器文	器用	器所	器年	器出	器名	器種	器形	器口	器底	器高	器径	器厚	器重	器色	器文	器用	器所	器年	器出																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
1822	G17	土器	杯	直口	底	10.667	10.667	1.0	10.667	黒色	なし	+	+	+	+	1892	表	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1893	表	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1894	G17	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1895	E11	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1896	G17	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1897	表	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1898	G17	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1899	表	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1900	F12	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1901	表	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1902	表	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1903	G17	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1904	G17	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1905	G17-18	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1906	E14	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1907	E12	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1908	H29	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1909	表	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1910	表	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1911	H29	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1912	表	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1913	E14	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1914	G17	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1915	E14	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1916	G17	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1917	E14	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1918	F21	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1919	H11	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1920	F11	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1921	F11	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1922	表	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1923	表	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1924	表	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1925	G13	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1926	E4	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1927	G13	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1928	E4	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1929	F3	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1930	E4	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1931	E4	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1932	E4	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1933	E4	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1934	E4	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1935	G17	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1936	E4	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1937	F11	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1938	G17	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1939	E4	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1940	F3	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+	1941	F3	土器	杯	直口	底	1.0	1.0	0.1	1.0	黒色	なし	+	+	+	+



第24表 石器観察表(1)

標本 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	分類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	注記番号	備考
22	1	G-14	Vlc	台形石器	-	Ob1	2.60	1.7	0.8	4.07	13530	ブロック1 一側縁加工
	2	G-14	Vlb	台形石器	-	Ob1	(1.4)	1.9	0.8	(1.53)	13587	ブロック1 單の止型
	3	G-14	Vlc	使用痕のある石器	-	Ob1	(2.1)	(1.4)	0.8	(2.35)	13624	ブロック1 ナイフ石器?
	4	G-14	Vlc	使用痕のある石器	-	Ob1	(2.1)	(2.0)	0.8	(1.73)	13537	ブロック1 折断断片
	5	-	-	加工痕のある石器	-	Ob1	3.0	1.7	1.2	4.25	一括	ブロック1
	6	G-14	Vlc	加工痕のある石器	-	An2	4.0	2.5	1.6	11.75	13603	ブロック1
	7	F-14	V上	加工痕のある石器	-	Ob1	2.7	1.0	0.9	1.95	9839	(ブロック1)
	8	G-14	Vl	石核	-	Ob1	1.8	2.6	2.6	8.92	13556	ブロック1
	9	G-14	Vla	石核	-	Ob6	1.6	3.4	1.6	7.75	13606	ブロック1
23	10	H-15	Vla	ナイフ形石器	-	Sh1	4.7	1.9	0.9	5.91	13771	ブロック2 二側縁加工
	11	H-15	Vla	ナイフ形石器	-	Sh1	4.05	2.1	0.9	6.15	13705	ブロック2 部分加工
	12	H-15	Vla	ナイフ形石器	-	Sh1	(3.2)	(2.0)	0.9	(3.87)	13744	ブロック2 一側縁加工
	13	H-15	Vla	ナイフ形石器	-	Ob1	2.8	1.4	0.9	2.87	13695	ブロック2 二側縁加工
	14	H-15	Vla	ナイフ形石器	-	Ob1	(2.2)	(1.3)	0.8	(1.98)	13749	ブロック2 二側縁加工
	15	H-15	Vlb	ナイフ形石器	-	Ob1	2.8	(1.3)	0.8	(2.55)	14131	ブロック2 一側縁加工
	16	H-15	Vla	台形石器	-	Sh1	1.4	1.5	0.8	3.28	13768	ブロック2 二側縁加工
	17	H-15	Vla	台形石器	-	Sh1	3.3	2.2	0.8	4.25	13731	ブロック2 二側縁加工
	18	H-15	Vlc	台形石器	-	Ob1	(2.9)	(1.6)	1.0	(3.62)	14072	ブロック2 二側縁加工
	19	F-14	V一括	台形石器	-	Ob1	0.7	1.8	0.8	2.91	V層一括	ブロック2 單の止型
	20	H-14	Vla	台形石器	-	Ob1	(2.8)	(2.1)	(0.8)	(1.87)	13829	ブロック2 二側縁加工
	24	21	H-15	Vlb	加工痕のある石器	-	Ob1	(3.5)	2.2	(0.8)	(2.04)	14111
22		H-14	Vla	加工痕のある石器	-	Ob1	(1.8)	(1.4)	(0.8)	(1.86)	13806	ブロック2 ナイフ石器?
23		H-15	Vla	スクレイパー	-	Ob1	3.3	2.5	0.9	6.26	13659	ブロック2 二側縁加工
24		H-16	Vla	スクレイパー	-	Ob1	2.8	2.5	1.0	5.66	14356	ブロック2 ノッチ状
25		H-15	Vla	スクレイパー	-	Sh1	4.2	3.6	1.2	11.89	14348	ブロック2
26		H-15	Vlb	スクレイパー	-	Ob1	3.9	2.3	1.5	11.68	14095	ブロック2
27		H-15	Vlc	台形石器	-	Ob1	2.3	2.0	1.2	3.78	13765	ブロック2 單の止型
28		H-16	Vla	台形石器	-	Ob1	2.3	2.3	0.7	2.73	14354	ブロック2 一側縁加工
29		H-15	Vla	台形石器	-	Ob1	(2.6)	2.2	0.8	(4.52)	13708	ブロック2
30		H-15	Vla	加工痕のある石器	-	Ob1	2.7	1.5	1.1	3.39	13804	ブロック2
31		H-15	Vlb	加工痕のある石器	-	Ob1	3.4	2.4	1.4	11.84	14122	ブロック2
32		H-15	Vlb	加工痕のある石器	-	Ob1	3.2	1.9	0.9	5.42	14102	ブロック2
33		H-16	Vla	加工痕のある石器	-	An2	3.3	1.8	1.6	5.92	14347	ブロック2
34		H-15	Vla	加工痕のある石器	-	Sh1	4.6	2.6	1.2	10.78	13798	ブロック2
35		H-15	Vll	石核	-	Ob1	2.5	3.7	2.2	19.48	14142	ブロック2
36		H-15	Vlb	石核	-	Ob1	1.9	3.4	1.8	9.3	13961	ブロック2
26	37	H-15	Vla	石核	-	Ob1	2.9	3.8	2.9	23.44	13690	ブロック2
	38	H-15	Vla	石核	-	Ob1	3.3	2.4	2.0	12.56	13751	ブロック2
	39	H-16	Vla	剥片	-	Sh1	2.9	1.8	0.8	2.69	13769	ブロック2
	40	H-15	Vla	剥片	-	Sh1	5.0	5.0	3.2	38.23	13665	ブロック2
	41	H-15	Vla	剥片	-	Sh1	2.5	1.6	0.6	1.89	13755	ブロック2 接合資料1
	42	H-15	Vlb	剥片	-	Sh1	5.0	5.1	3.2	75.04	14107	ブロック2
	43	H-15	Vla	剥片	-	Sh1	2.8	5.4	3.4	44.47	13776	ブロック2
	44	H-15	Vla	剥片	-	Sh1	3.7	1.8	0.5	3.36	13741	ブロック2
27	45	H-15	Vll	剥片	-	Sh1	1.9	1.6	0.3	1.67	14011	ブロック2 接合資料2
	46	H-15	Vll	石核	-	Sh1	6.0	6.7	5.3	240.58	14096	ブロック2
	47	H-15	Vla	剥片	-	Sh1	2.7	3.0	0.8	5.79	14006	ブロック2
	48	H-15	Vla	剥片	-	Sh1	1.5	2.4	0.3	0.98	13957	ブロック2 接合資料3
28	49	H-15	Vlb	剥片	-	Sh1	3.4	2.1	1.0	4.45	14110	ブロック2
	50	H-16	Vll	剥片	-	Sh1	3.2	2.3	1.4	29.98	13800	ブロック2
	51	H-16	Vla	剥片	-	Sh1	5.2	3.0	1.7	18.63	14332	ブロック2 接合資料4
31	52	H-16	Vla	剥片	-	Sh1	5.5	4.5	1.5	7.04	13644	ブロック2
	53	H-15	Vla	剥片	-	Sh1	4.1	5.0	0.9	26.17	13801	ブロック2
	54	H-15	Vla	剥片	-	Sh1	5.2	3.0	1.3	9.71	13794	ブロック2 接合資料5
	55	H-16	Vla	剥片	-	Sh1	4.6	2.5	1.7	8.74	14335	ブロック2
	56	H-16	Vla	剥片	-	Sh1	3.0	2.8	1.1	6.06	14342	ブロック2 接合資料6
33	57	H-16	Vla	剥片	-	Sh1	4.4	2.9	1.9	13.98	14337	ブロック2
	58	H-16	Vla	剥片	-	Sh1	5.4	3.3	1.3	38.33	13760	ブロック2 接合資料7
	59	H-16	Vla	剥片	-	Sh1	9.5	6.3	3.1	175.8	14349	ブロック2
36	60	E-18	Vll	剥片	-	Sh1	2.4	2.0	0.9	4.32	33836	ブロック3
	61	E-18	Vll	剥片	-	Sh1	4.8	4.5	4.0	5.26	33617	ブロック3 接合資料8
	62	E-18	Vll	石核	-	Sh1	2.1	2.2	0.4	2.56	33607	ブロック3

第25表 石器観察表(2)

標図 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	分類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	注記番号	備考
36	63	E-19	VII	剥片	-	Sh 1	4.4	2.6	1.4	14.83	33590	ブロック 3
	64	E-17	VII	剥片	-	Sh 1	3.7	3.4	1.2	9.79	33603	ブロック 3
	65	E-19	VII	剥片	-	Sh 1	4.8	4.3	1.0	22.86	33593	ブロック 3
	66	E-18	VII	剥片	-	Sh 1	6.1	3.1	1.5	22.97	33626	ブロック 3
	67	E-19	VII	剥片	-	Sh 1	5.8	4.7	1.1	29.79	33598	ブロック 3
	68	E-19	VII	剥片	-	Sh 1	4.1	3.3	1.5	18.35	33589	ブロック 3
	69	E-19	VII	剥片	-	Sh 1	3.2	2.7	0.6	88.15	33627	ブロック 3
	70	E-19	VII	敲石	-	Op	6.5	4.2	2.8	97.25	33556	ブロック 3
	71	E-18	VII	敲石	-	An 1	6.5	3.5	2.6	89	33672	ブロック 3
	72	H-22	VII	三稜尖頭器	-	Sh 1	3.4	1.6	1.2	5.13	34307	ブロック 4 二面加工
73	I-22	VI	三稜尖頭器	-	Ob 1	3.2	1.5	1.2	4.13	34196	ブロック 4 二面加工	
74	I-22	VII	三稜尖頭器	-	Ob 1	(2.1)	(1.5)	(1.1)	(1.47)	34289	ブロック 4 三面加工	
75	I-22	VII	加工痕のある石器	-	Ob 1	(3.3)	2.5	1.5	(11.56)	34233	ブロック 4 三稜尖頭器?	
76	I-14	VIIa	古形石刃	-	Ob 1	(4.2)	2.3	0.8	(6.92)	13992	ブロック外 二面縁加工	
77	I-32	Vlc	細石刃	I	Ob 2	2.18	0.67	0.8	0.21	2458	ブロック 1 完形	
78	H-11	Vla	細石刃	II	An 2	(2.0)	(0.79)	(0.8)	(0.27)	18327	ブロック 1 尾部破損	
79	G-11	Vlb	細石刃	I	An 2	(2.4)	(0.65)	(0.3)	(0.51)	30140	ブロック 1 面・尾部磨削?	
80	G-11	Vlb	細石刃	I	An 2	2.1	0.6	0.14	0.2	39002	ブロック 1 完形	
81	G-11	Vlb F	細石刃	I	Ob 1	2.09	0.7	0.9	0.3	17352	ブロック 1 完形	
82	G-10	Vlb	細石刃	II	Ob 1	(1.78)	(0.78)	(0.29)	(0.33)	33160	ブロック 1 尾部破損	
83	G-10	Vlb	細石刃	III	Ob 1	(2.1)	0.6	0.14	(0.21)	33910	ブロック 1 中間部以下破損	
84	G-11	Vla②	細石刃	III	Ob 1	(1.26)	0.91	0.2	(0.28)	17516	ブロック 1 中間部以下破損	
85	H-11	Vlb	細石刃	I	Ob 1	1.3	0.41	0.12	0.07	17283	ブロック 1 完形	
86	G-11	Vlb	細石刃	IV	Ob 1	(1.3)	0.55	0.16	(0.12)	30188	ブロック 1 両端破損	
87	H-11	Vlb	細石刃	V	Ob 1	(1.23)	(0.65)	(0.14)	(0.14)	30601	ブロック 1 両端破損	
88	G-10	Vlb	細石刃	II	Ob 1	(1.12)	0.5	(0.16)	(0.11)	32944	ブロック 1 尾部破損	
89	G-11	Vlb上	細石刃	IV	Ob 1	(1.01)	0.77	0.2	(0.15)	17463	ブロック 1 両端破損	
90	G-10	Vlb	細石刃	V	Ob 1	(1.2)	0.58	(0.22)	(0.19)	30208	ブロック 1 両端破損	
91	G-10	Vlb	細石刃	V	Ob 1	(1.05)	(0.6)	(0.15)	(0.06)	33080	ブロック 1 両端破損	
92	G-10	Vlb	細石刃	V	Ob 2	(1.01)	(0.62)	(0.18)	(0.13)	32757	ブロック 1 両端破損	
93	G-11	Vlb F	細石刃	IV	An 2	(0.95)	(0.6)	(0.15)	(0.09)	17944	ブロック 1 両端破損	
94	G-11	Vlb	細石刃	IV	Ob 1	(0.9)	0.75	0.13	(0.10)	30678	ブロック 1 両端破損	
95	G-11	Vla②	細石刃	IV	An 2	(1.15)	(0.81)	(0.15)	(0.18)	17464	ブロック 1 両端破損	
96	G-11	Vlb F	細石刃	III	Ob 1	(0.95)	(0.85)	0.22	(0.18)	18405	ブロック 1 中間部以下破損	
97	G-11	VI	細石刃	IV	Ob 1	(1.2)	(0.8)	0.3	(0.26)	30137	ブロック 1 両端破損	
98	G-11	Vlb F	細石刃	-	Ob 1	2.8	1.5	2.5	9.43	17485	ブロック 1 表面調整	
99	H-11	Vlb F	細石刃	-	Ob 2	2.5	1.5	1.9	5.49	17245	ブロック 1 表面調整	
100	G-11	Vlb F	細石刃	-	Ob 1	2.2	1.9	2.5	7.25	17377	ブロック 1 表面調整	
101	G-10	VI④	細石刃	-	Ob 1	2.4	2.4	2.9	13.89	32752	ブロック 1 石核・表面調整	
102	-	-	表採	細石刃	-	Ob 1	1.2	2.2	1	5.57	表採	- 石核調整
103	H-11	Vlb F	スクレイパー	-	Ob 3	2.2	1.9	1.0	4.11	17246	ブロック 1 円形種器	
104	G-11	Vlb F	敲石	-	An 1	5.8	4.5	4.3	148.73	17397	ブロック 1	
97	875	E-12	IIa-Ⅱ	打製石刃	I a	An 2	(2.2)	(1.9)	0.4	(1.31)	-	片脚破損
	876	F-18	IVb	使用痕剥片	-	An 2	3.5	2.0	0.7	4.87	33227	-
	877	D-19	IVc	磨製石片	I	Sh 2	(4.6)	(2.8)	(1.4)	(12.02)	32792	刃部
	878	H-18	IV	磨製石片	II	Sh 2	(9.9)	(7.0)	(2.0)	(101)	33322	刃部
	879	I-18	IV	打製石片	IV	Sh 2	(9.8)	(7.6)	(3.0)	(186)	33324	基部
	880	H-17	IV	礫器	I	Sa	11.5	13.7	4.6	540	13236	片面加工
	881	E-18	IV	礫器	II	An 1	11.6	14.9	3.8	1040	32652	両面加工
	882	F-10	IVc	磨石	II a	Sa	(4.7)	(3.7)	(1.2)	(25.53)	15746	一部のみ残
	883	F-10	IVc	磨石	II a	An 1	(6.68)	(9.39)	(5.3)	(25.53)	15746	手欠
	884	H-16	IV	敲石	II d	An 1	10.4	9.35	4.3	465	13137	完形
98	885	I-16	IV	敲石	II a	An 1	11.6	10.3	5.8	925	13108	完形
	886	G-20	IV	石皿	I b	An 1	21.3	18.1	3.0	147	33199	完形
	887	F-14	IVa上	石皿	II b	An 1	16.6	18.6	5.3	2750	11353	完形
	888	D-15	IIIb	打製石刃	I a	Ob 2	(2.1)	(1.4)	0.4	(0.56)	10257	片脚破損
	889	D-12	IIIb	打製石刃	I e	Ob 1	1.2	1.2	0.3	0.33	1647	完形
	890	G-21	IIIb	打製石刃	I e	Fe Qu	1.5	1.2	0.4	0.43	15661	完形
	891	H-13	IIIb	打製石刃	I e	Ob 6	(1.6)	(1.4)	0.5	(0.5)	1593	片脚破損
	892	I-31	IIIb	打製石刃	I c	Ob 1	(1.8)	(1.9)	0.5	(0.88)	21571	両脚破損
	893	E-14	IIIb	打製石刃	I d	Ob 1	(1.7)	(1.5)	0.2	(0.21)	3906	片脚破損
	894	F-23	IIIb	打製石刃	I f	An 2	(1.7)	(1.3)	0.4	(0.46)	3789	両脚破損

第26表 石器観察表(3)

標本 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	分類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	注記番号	備考
100	895	D-12	IIIa	打製石礫	I f	Ob 2	1.7	1.1	0.4	0.37	12798	完形
	896	E-15	IIIb	打製石礫	I d	Ob 1	(1.9)	(1.4)	(0.3)	(0.46)	3371	片側刃破損
	897	D-13	IIIb	打製石礫	I g	An 3	(2.9)	2.0	0.5	(1.55)	12537	先端破損
	898	F-14	IIIb	打製石礫	I h	Ob 8	(1.7)	(1.5)	0.2	(0.43)	644	匙端・基部破損
	899	G-12	IIIb	打製石礫	I h	An 2	(2.4)	(2.0)	0.2	(0.77)	一括	両側破損
	900	G-12	IIIb	打製石礫	I i	Ob 1	(2.1)	1.7	0.3	(0.7)	3503	先端破損
	901	G-13	IIIb	打製石礫	I j	An 2	1.7	1.3	0.3	0.5	3568	完形
	902	G-22	IIIb	打製石礫	II a	Fe. Qu	1.6	1.3	0.4	0.6	16041	完形
	903	G-22	IIIb	打製石礫	I j	An 2	1.5	1.4	0.3	0.31	13182	完形
	904	E-13	IIIb	打製石礫	I j	An 2	(1.6)	(1.7)	0.3	(0.66)	2163	先端破損
	905	G-13	IIIb	打製石礫	I j	An 2	(1.6)	1.6	0.4	(0.87)	9712	先端破損
	906	F-13	IIIb	打製石礫	II c	Ob 8	(2.0)	(1.3)	0.3	(0.69)	5372	片側破損
	907	F-14	IIIb	打製石礫	II c	Ob 1	(2.2)	(1.7)	0.3	(0.89)	9165	片側破損
	908	G-13	IIIb	打製石礫	I j	An 2	(2.0)	1.8	0.3	(1.06)	9694	先端・基部破損
	909	H-13	IIIb	打製石礫	I j	An 2	2.5	1.9	0.4	1.15	1660	完形
	910	I-18	IIIb	打製石礫	I j	An 2	(1.9)	(1.6)	0.3	(0.8)	33327	基部破損
	911	G-13	IIIb	打製石礫	II b	An 2	(1.6)	(1.2)	0.2	(0.42)	1294	基部破損
	912	7 T	IIIb	打製石礫	II b	An 2	1.6	1.8	0.3	0.68	11793	完形
	913	E-13	IIIb	打製石礫	I c	An 2	2.0	(1.4)	0.5	(1.04)	13058	片側刃破損
	914	G-13	IIIb	打製石礫	IV	Ob 1	(1.9)	1.7	0.6	(1.03)	3606	基部破損
915	G-13	IIIb	打製石礫未製品	IV	Ob 1	2.4	1.9	0.5	2.13	1238	—	
916	G-13	IIIb	尖頭状石器	—	An 3	4.8	2.5	1.8	16.32	1245	完形	
917	E-13	IIIb	尖頭状石器	—	An 3	4.1	2.3	0.9	7.44	13073	完形	
918	E-13	IIIb	石筴	I b	An 3	2.4	(1.7)	0.2	(0.93)	12921	片側刃破損	
101	919	F-14	IIIb	石錐	II b	Fe. Qu	4.8	1.7	0.4	5.14	2831	完形
	920	F-14	IIIb	楔形石器	II	Ob 1	1.8	2.6	0.8	3.68	6140	—
	921	E-14	IIIb	楔形石器	II	Fe. Qu	2.5	3.0	0.6	3.52	390	—
	922	G-13	IIIb	楔形石器	I	Ob 1	2.7	2.0	1.3	6.04	1423	—
	923	G-14	IIIb	楔形石器	I	Ob 1	2.4	1.4	0.8	2.48	1030	—
	924	E-13	IIIb	楔形石器	I	Fe. Qu	2.5	1.0	0.6	1.17	2138	—
	925	F-12	IIIb	楔形石器	I	Ch	2.6	1.3	1.2	3.66	695	—
	926	F-14	IIIb	スクレイパー	II	Ob 7	4.9	1.7	1.4	9.76	8091	—
	927	F-14	IIIb	スクレイパー	II	Qu	(2.6)	(2.4)	0.5	(2.33)	725	欠損
	928	G-13	IIIb	スクレイパー	II	Ob 7	2.0	2.8	0.7	3.47	1410	—
	929	F-14	IIIb	スクレイパー	II	Ch	2.5	2.6	0.7	5.67	4001	—
	930	G-14	IIIb	二次加工剥片	—	An 2	3.4	1.9	0.9	4.97	11120	—
	931	F-14	IIIb	使用痕剥片	—	An 3	3.0	4.7	1.0	12.74	2852	—
	932	G-13	IIIb	使用痕剥片	—	An 3	4.1	5.2	1.2	23.93	1450	—
	102	933	F-14	IIIb	石核	I b	Fe. Qu	3.5	2.9	2.0	20.59	8092
934		D-12	IIIb	石核	I a	Ob 1	2.5	3.3	1.8	14.01	12430	—
935		H-13	IIIb	石核	I a	Ob 1	3.45	2.95	1.5	13.23	1681	—
936		F-21	IIIb	石核	I b	Fe. Qu	4.2	3.5	3.3	34.95	13147	—
937		D-12	IIIb	石核	I a	Ob 1	2.8	3.6	2.4	18.29	8676	—
938		G-13	IIIb	石核	I b	Ob 1	2.5	3.8	1.6	11.94	1536	—
939		E-13	IIIb	石核	I a	Ob 1	3.1	3.6	1.5	13.91	2165	—
940		F-14	IIIb	石核	I a	Ob 1	1.7	2.8	2.6	10.21	637	—
941		F-15	III b	石核	I a	Ob 1	2.1	3.2	2.1	10.68	4001	—
942		E-13	IIIb	石核	I a	Ob 1	2.2	2.5	2.6	5.4	2174	—
103	943	D-12	IIIb	石核	I a	An 3	1.8	3.5	1.8	9.67	9968	—
	944	E-13	IIIb	石核	I a	Ob 1	2.4	2.95	1.5	7.11	13917	—
	945	F-14	IIIb	石核	I a	Ob 1	3.1	3.4	2.0	18.33	920	—
	946	G-14	IIIb	石核	IVa	Ob 1	2.5	2.7	1.5	10.32	1038	—
	947	E-13	IIIb-一括	石核	IVa	Ob 1	3.3	3.1	2.0	14.43	一括	—
	948	E-11	IIIb	石核	IVa	Ob 7	2.4	2.95	2.0	10.46	12546	—
	949	G-14	IIIb	石核	IVa	Ob 1	1.7	2.8	2.0	15.16	933	—
	950	F-14	IIIb	石核	IVa	Ob 1	1.5	2.9	1.0	4.81	3990	—
	951	F-14	IIIb	石核	IVa	Ob 7	2.3	3.5	2.7	17.88	729	—
	952	F-14	IIIb	石核	IVa	Ob 1	4.3	5.0	3.9	99	2897	—
	953	F-14	IIIb	石核	IVa	Ob 1	1.9	3.5	2.1	9.52	929	—
	954	F-14	IIIb	磨製石斧	I	Sh 2	17.5	8.5	3.9	631	4000	完形
	104	955	G-22	IIIb	磨製石斧	I	Sa	(13.8)	(5.4)	(3.85)	(36.17)	14495
956		E-15	IIIb	磨製石斧	I	Sh 2	(5.52)	(6.4)	(2.3)	(23.65)	3370	基部

第27表 石器觀察表(4)

標本 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	分類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	注記番号	備 考	
104	957	E-13	IIIb	磨製石斧	I	Sh 2	(4.7)	(5.0)	(1.6)	(30.02)	2145	基部	
	958	H-13	IIIb	磨製石斧	I	Sh 2	(4.7)	(3.5)	(1.8)	(40.42)	1652	基部	
	959	G-13	IIIb	打製石斧	I	An 1	14.8	8.3	1.6	238	1483	完形	
	960	G-14	IIIb	打製石斧	I	An 1	13.9	9.3	2.0	248	1113	完形	
	961	G-13	IIIb	打製石斧	I	An 1	13.8	9.4	1.7	238	1534	完形	
	962	G-13	IIIb	打製石斧	I	An 1	13.1	8.5	1.2	122	3548	完形	
105	963	E-13	IIIb	打製石斧	I	An 2	(10.1)	7.0	2.0	(190)	2193	基部破損	
	964	E-14	IIIb	打製石斧	II	An 1	(6.1)	(7.6)	(2.5)	(192)	535	基部	
	965	H-13	IIIb	打製石斧	II	Sh 2	(13.1)	10.4	2.1	(201)	1667	基部破損	
	966	H-13	IIIb	磨石	Va	Sa	5.9	4.15	2.15	72.98	1579	基部	
	967	F-20	IIIb	磨石	Va	An 1	7.0	4.8	3.8	183.31	18514	完形	
	968	G-11	IIIb	磨石	Va	An 1	7.5	5.4	3.6	204.62	16687	完形	
106	969	7 T	IIIb	磨石	IIa	An 2	15.4	11.4	6.1	1610	11785	完形	
	970	G-17	IIIb	磨石	IIIa	An 1	9.8	9.05	3.9	495	11554	完形	
	971	H-25	IIIb-Ⅱ	磨石	IIIa	Gr	7.8	6.3	3.2	213.25	一Ⅱ	完形	
	972	E-13	IIIb	磨石	IIIa	An 1	7.05	5.9	3.4	230.32	6704	完形	
	107	973	D-11-F-11 E-11-F-11	IIIb	磨石	IIb ?	Sa	(14.2)	(16.1)	(8.7)	(1732)	1023+6704 1013+1012	破損
		974	G-12	IIIb	磨製石	IIa	An 1	1.7	6.7	5.4	322	3498	火熱破損 ?
975		G-13	IIIb	磨製石	IIa	Sa	6.9	5.6	2.4	138.9	1454	完形	
976		F-14	IIIb	磨製石	IIc	An 1	6.6	5.8	3.3	190.8	656	完形	
977		F-20	IIIb	磨製石	IIa	An 1	9.8	9.0	5.0	580	13480	完形	
978		D-19	IIIb	磨製石	IIa	An 1	(5.2)	(8.0)	(5.05)	(236.6)	1596	破損	
979		7 T	IIIb	磨製石	IIc	An 1	8.1	6.1	3.1	228.72	11786	完形	
980		—	IIIb-Ⅱ	磨製石	IIa	An 1	7.2	6.9	2.5	161.47	一Ⅱ	完形	
981		H-17	IIIb	磨製石	IIIe	An 1	16.05	9.9	7.75	1510	11502	完形	
982		G-13	IIIb	磨製石	IIa	An 1	(6.8)	(6.1)	3.3	(199)	3337-5934	基部破損	
108	983	H-17	IIIb	敲石	IIa	An 1	10.4	5.8	3.0	241.6	11493	完形	
	984	I-19	IIIb	敲石	IIc	An 1	11.0	9.9	6.3	780	33492	完形	
	985	H-13	IIIb	敲石	IIIe	An 1	10.60	7.7	3.1	383.68	1665	完形	
	986	H-15	IIIb	敲石	IIIe	Sa	(9.6)	(5.7)	5.3	(500)	9348	破損	
	987	F-21	IIIb	敲石	IIa	An 1	12.4	9.45	3.1	440	18515	破損	
	988	F-20	IIIb	敲石	IIa	An 1	13.0	9.6	3.5	425	13491	完形	
	989	G-13	IIIb	磨製石	Ve	Op	7.5	4.1	2.2	94.54	1461	完形	
	990	E-13	IIIb	敲石	Ve	An 1	7.9	3.9	3.6	146.61	2237	完形	
	991	E-13	IIIb	石皿	1b	An 1	16.8	21.5	13.1	6600	5960	完形	
	992	G-13	IIIb	石皿	1b	An 1	26.6	27.6	14.8	15600	1269	破損	
109	993	G-13	IIIa	打製石鏢	1a	Ob 6	(2.6)	1.4	0.3	(0.5)	7461	先端破損	
	994	G-20	IIIa	打製石鏢	1c	Ob 6	(1.6)	(1.5)	0.2	(0.53)	226	先端・側面破損	
	995	F-13	IIIa	打製石鏢	1b	Ob 6	2.3	1.8	0.3	0.9	4270	完形	
	996	D-14	IIIa	打製石鏢	1c	Ob 6	(2.0)	(1.1)	0.4	(0.79)	7679	破損	
	997	D-14	IIIa	打製石鏢	1a	Ob 6	3.4	2.0	0.4	1.68	8531	完形	
	998	H-12	IIIa	打製石鏢	1c	Ob 1	(2.4)	(2.3)	0.3	(0.72)	3645	片側面破損	
	999	H-13	IIIa	打製石鏢	1c	Ob 1	(1.6)	(1.4)	0.3	(0.81)	3766	先端・側面破損	
	1000	E-12	IIIa	打製石鏢	1c	Ob 2	(1.9)	(1.9)	0.3	(1.27)	12268	先端・側面破損	
	1001	I-30	IIIa	打製石鏢	1d	An 3	(2.4)	1.4	0.3	(0.68)	20324	先端破損	
	1002	D-13	IIIa	打製石鏢	1c	An 3	(3.6)	(2.4)	0.5	(2.48)	9788	片側破損	
	1003	E-12	IIIa	打製石鏢	1e	Ob 2	(1.7)	(1.2)	0.3	(0.37)	7964	片側破損	
	1004	F-21	IIIa	打製石鏢	1e	Ob 6	(1.4)	1.3	0.2	(0.35)	14889	先端・片側破損	
	1005	D-19	IIIa	打製石鏢	1e	Ob 6	1.6	1.1	0.2	0.26	31471	完形	
	1006	D-18	IIIa	打製石鏢	1c	Ob 6	1.9	1.2	0.2	0.42	30885	完形	
	1007	E-13	IIIa	打製石鏢	1f	Ob 6	1.7	1.4	0.3	0.43	6796	完形	
	1008	I-30	IIIa	打製石鏢	1f	Ob 6	(1.5)	1.5	0.3	(0.49)	21869	先端破損	
	1009	I-30	IIIa	打製石鏢	1f	Ob 1	(1.8)	(1.5)	0.6	(0.82)	20514	片側面破損	
	1010	G-12	IIIa	打製石鏢	1e	Ob 7	(2.0)	(1.3)	0.4	(0.5)	1897	片側破損	
	1011	D-12	IIIa	打製石鏢	1g	Ob 6	(2.7)	1.5	0.4	(1.25)	16775	先端破損	
	1012	H-24	IIIa	打製石鏢	1f	Ob 6	1.6	1.3	0.3	0.56	34920	完形	
1013	F-13	IIIa	打製石鏢	1f	Ob 8	(2.2)	(1.6)	0.2	(0.61)	2470	片側破損		
1014	F-12	IIIa	打製石鏢	1f	Ob 8	(2.0)	(1.4)	0.3	(0.81)	6952	片側面破損		
1015	D-15	IIIa	打製石鏢	1g	Ch	(2.1)	1.7	0.2	(0.65)	7699	先端破損		
1016	G-13	IIIa	打製石鏢	1i	Ob 1	(1.7)	(1.8)	0.4	(1.14)	1396	先端・片側破損		
1017	E-14	IIIa	打製石鏢	1i	Ob 8	(1.6)	(1.3)	0.3	(0.23)	5901	片側破損		

第28表 石器觀察表(5)

標本 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	分類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	注記番号	備 考
111	1018	H-30	IIIa	打製石鎌	I	Ob 1	1.6	1.5	0.2	0.36	21137	完形
	1019	F-14	IIIa	打製石鎌	I	Ob 1	1.8	1.5	0.3	0.68	843	完形
	1020	D-15	IIIa	打製石鎌	I	Fe. Qu	2.0	1.8	0.3	0.82	3474	完形
	1021	I-30	IIIa	打製石鎌	I	An 2	(1.6)	1.6	0.3	(0.6)	300	先端破損
	1022	F-13	IIIa	打製石鎌	I	Ob 8	(1.3)	1.5	0.3	(0.52)	6674	先端破損
	1023	E-14	IIIa	打製石鎌	I	Ob 1	1.7	1.6	0.5	0.83	198	完形
	1024	F-13	IIIa	打製石鎌	I	Ob 7	(1.8)	(1.5)	0.3	(0.56)	4287	片脚破損
	1025	D-15	IIIa	打製石鎌	I	Ob 1	(1.7)	(1.0)	0.5	(0.87)	3468	片脚破損
	1026	G-13	IIIa	打製石鎌	I	Ob 7	(1.6)	1.7	0.2	(0.24)	1364	片脚破損
	1027	E-12	IIIa	打製石鎌	I	An 2	(1.3)	1.4	0.3	(0.45)	6305	先端破損
	1028	H-12	IIIa	打製石鎌	I	Ob 7	2.13	1.6	0.2	0.41	1862	完形
	1029	F-13	IIIa	打製石鎌	I	An 2	(1.7)	(1.6)	0.3	(0.45)	2513	片脚破損
	1030	I-12	IIIa	打製石鎌	I	Ob 4	(1.7)	(1.5)	0.4	(0.61)	7745	片脚破損
	1031	G-13	IIIa	打製石鎌	I	An 2	(1.6)	2.0	0.4	(1.04)	1431	先端破損
	1032	F-17	IIIa	打製石鎌	I	Ob 1	1.9	1.5	0.2	0.58	30816	完形
	1033	E-13	IIIa	打製石鎌	I	An 2	(1.6)	1.6	0.3	(0.7)	5108	先端破損
	1034	E-12	IIIa	打製石鎌	I	An 2	(2.1)	(1.6)	0.2	(0.71)	6783	片脚破損
	1035	E-14	IIIa	打製石鎌	I	An 2	2.3	1.6	0.3	0.65	303	完形
	1036	G-14	IIIa	打製石鎌	I	An 2	2.4	1.6	0.2	0.71	982	完形
	1037	F-13	IIIa	打製石鎌	I	An 2	(1.6)	1.8	0.3	(0.68)	4195	先端破損
	1038	D-13	IIIa	打製石鎌	I	Qu	2.0	1.6	0.5	1.13	7612	完形
	1039	G-13	IIIa	打製石鎌	I	Ch	1.9	1.7	0.4	1.1	8680	完形
	1040	G-14	IIIa	打製石鎌	I	Ob 7	(1.1)	1.9	0.2	(0.43)	8743	基部残
	1041	E-13	IIIa	打製石鎌	I	An 2	(2.5)	(1.4)	0.2	(0.76)	5354	片脚破損
	1042	G-14	IIIa	打製石鎌	I	An 2	(1.7)	(1.5)	0.2	(0.43)	1100	片脚破損
	1043	G-14	IIIa	打製石鎌	I	k An 2	2.2	1.7	0.3	0.72	8736	完形
	1044	D-14	IIIa	打製石鎌	I	k An 2	(2.0)	(1.9)	0.3	(0.56)	7171	片脚破損
	1045	E-14	IIIa	打製石鎌	I	k An 2	(2.3)	(1.6)	0.3	(0.55)	5093	片脚破損
	1046	F-12	IIIa	打製石鎌	I	k Ob 1	(1.8)	(1.7)	0.3	(0.6)	5394	先端・片脚破損
	1047	D-12	IIIa	打製石鎌	I	k An 2	(1.9)	(1.5)	0.3	(0.68)	10796	先端・片脚破損
	1048	F-13	IIIa	打製石鎌	I	k An 2	(1.8)	(1.5)	0.3	(0.57)	2372	先端・片脚破損
	1049	H-19	IIIa	打製石鎌	I	k An 2	(2.7)	(2.0)	0.4	(0.85)	15345	片脚破損
	1050	E-12	IIIa	打製石鎌	I	k Fe-Qu	(2.6)	(2.2)	0.5	(1.41)	7950	片脚破損
1051	G-11	IIIa上	打製石鎌	I	k An 2	2.5	1.8	0.3	0.95	8795	完形	
1052	D-12	IIIa	打製石鎌	I	k An 2	2.4	2.0	0.3	0.76	12359	完形	
1053	H-12	IIIa	打製石鎌	I	k Ob 2	(1.8)	(2.0)	0.4	(0.95)	3655	先端・片脚破損	
1054	E-14	IIIa	打製石鎌	II	c An 2	2.2	1.6	0.3	0.8	3325	完形	
1055	G-14	IIIa	打製石鎌	II	c Ob 7	1.9	1.8	0.5	1.13	8776	完形	
1056	E-14	IIIa	打製石鎌	I	Ob 4	(1.3)	1.5	0.3	(0.56)	10179	先端破損	
1057	J-18	IIIa	打製石鎌	I	An 2	(1.6)	1.5	0.3	(0.75)	14842	先端破損	
1058	F-12	IIIa	打製石鎌	II	b An 2	1.8	1.3	0.3	0.57	8175	完形	
1059	G-12	IIIa	打製石鎌	II	a Ch	1.7	1.4	0.5	0.58	8696	完形	
1060	D-13	IIIa	打製石鎌	II	b Ob 8	(1.3)	(1.5)	0.3	(0.54)	4663	先端破損	
1061	F-12	IIIa	打製石鎌	II	b Ob 8	(1.6)	(1.5)	0.2	(0.47)	5636	基部破損	
1062	E-12	IIIa	打製石鎌	II	b An 2	(1.7)	(1.8)	0.4	(1.12)	7934	先端・基部破損	
1063	F-13	IIIa	打製石鎌	II	b Ob 1	(1.8)	(1.9)	0.5	(1.23)	4277	基部破損	
1064	F-13	IIIa	打製石鎌	II	b Ob 1	(1.4)	(2.0)	0.5	(1.18)	4034	先端・基部破損	
1065	H-24	IIIa	打製石鎌	II	b Ob 8	2.1	1.7	0.2	0.8	34538	完形	
1066	G-12	IIIa	打製石鎌	III	An 2	(2.1)	(1.5)	0.3	(0.97)	8296	先端・基部破損	
1067	F-12	IIIa	打製石鎌	III	An 2	1.8	1.6	0.3	0.63	5564	完形	
1068	D-12	IIIa	打製石鎌	III	Ob 7	(1.5)	(1.8)	0.3	(0.54)	6612	片脚破損	
1069	H-25	IIIa	打製石鎌	III	An 2	2.0	1.5	0.2	0.66	15185	完形	
1070	E-15	IIIa	打製石鎌	III	Ob 7	1.7	1.3	0.4	0.71	252	完形	
1071	E-12	IIIa	打製石鎌	III	Ob 4	2.1	1.5	0.3	0.55	6777	完形	
1072	G-13	IIIa	打製石鎌	III	An 2	(1.9)	(1.7)	0.3	(0.56)	7444	片脚破損	
1073	I-19	IIIa	打製石鎌	IV	Ob 6	(1.8)	(2.0)	0.4	(1.04)	33269	破損	
1074	D-13	IIIa	打製石鎌	IV	An 2	1.6	2.0	0.5	1.14	10111	—	
1075	G-13	IIIa	打製石鎌未製品	IV	An 2	2.9	1.5	0.5	1.74	1317	—	
1076	E-12	IIIa	打製石鎌未製品	IV	Ob 1	(2.5)	(1.8)	0.4	(1.7)	9606	—	
1077	F-13	IIIa	打製石鎌未製品	IV	Ob 1	2.7	1.9	0.6	1.98	4184	—	
1078	F-14	IIIa	打製石鎌未製品	IV	An 2	2.6	2.3	0.8	4.49	874	—	
1079	E-14	IIIa	打製石鎌未製品	IV	An 2	3.0	1.9	1.3	4.83	5032	—	



第29表 石器観察表(6)

標図 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	分類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	注記番号	備考
113	1080	G-13	Ⅲa	打製石礫未製品	IV	Ob 1	2.8	2.4	1.0	4.21	8394	—
	1081	D-15	Ⅲa	石匙	Ⅱa	Ch	2.5	6.6	0.4	8.01	3459	完形
	1082	D-5	Ⅲa	石匙	Ⅱb	An 3	3.0	3.2	0.5	5.28	17885	完形
	1083	I-19	Ⅲa	石匙	Ⅱa	Fe, Qu	3.2	4.5	0.8	9.36	34076	完形
	1084	H-24	Ⅲa	石匙	Ⅱb	Fe, Qu	3.6	3.9	0.6	6.95	34721	完形
	1085	F-13	Ⅲa	石匙	Ⅱb	Ch	4.2	4.7	1.0	12.89	6843	完形
	1086	F-18	Ⅲa	石匙	Ⅱb	Fe, Qu	3.7	5.0	1.1	11.2	30730	完形
	1087	F-12	Ⅲa	スクレイパー	I	Ob 1	2.7	2.3	1.0	5.82	5568	—
	1088	G-13	Ⅲa	スクレイパー	II	Ob 1	3.4	2.4	0.8	4.59	1349	—
	1089	E-21	Ⅲa	スクレイパー	II	Ob 1	3.8	3.0	0.8	8.94	13459	—
	1090	C-14	Ⅲa・VI	スクレイパー	II	Sh 2	15.7	4.8	1.6	148.4	963・1015	—
	1091	G-12	Ⅲa	石錐	I b	Ob 1	2.4	2.0	0.2	1.92	9666	完形
	1092	G-14	Ⅲa	石錐	I a	Ob 1	2.2	1.9	1.3	2.94	11372	完形
	1093	G-13	Ⅲa	石錐	Ⅱb	Ch	1.8	1.3	0.5	0.43	1367	完形
	1094	F-12	Ⅲa	石錐	Ⅱb	Fe・Qu	1.8	0.9	0.2	0.47	5598	完形
	1095	E-13	Ⅲa	楔形石器	II	Ob 1	2.5	2.5	0.8	4.41	4439	—
	1096	E-12	Ⅲa	楔形石器	I	Ob 7	2.3	1.9	1.1	3.91	5869	—
	1097	E-13	Ⅲa	楔形石器	I	An 2	2.9	2.4	1.4	6.33	4557	—
	1098	E-14	Ⅲa	楔形石器	I	Ob 1	1.7	1.8	0.8	2.29	3983	—
	1099	D-13	Ⅲa	楔形石器	I	Ob 1	2.0	1.8	0.8	1.33	6646	—
	1100	D-13	Ⅲa	楔形石器	I	Ob 1	1.7	1.8	0.8	1.19	10053	—
	1101	D-11	Ⅲa	楔形石器	I	Ob 1	1.9	1.0	0.5	0.74	12653	—
	1102	F-14	Ⅲa	楔形石器	I	Ob 1	2.6	2.0	1.0	4.62	890	—
	1103	E-13	Ⅲa	楔形石器	I	An 3	2.6	1.9	1.0	4.73	5309	—
	1104	D-11	Ⅲa	楔形石器	I	Ob 1	1.8	1.4	1.1	2.07	17864	—
	1105	E-14	Ⅲa	楔形石器	I	Ob 1	2.4	0.5	0.5	0.87	4292	—
	1106	H-13	Ⅲa	楔形石器	I	An 2	3.6	3.2	1.8	18.75	1605	—
	1107	D-13	Ⅲa	楔形石器	I	An 2	3.3	2.4	1.0	7.9	8577	—
	1108	F-14	Ⅲa	スクレイパー	II	Sh 2	6.7	7.6	1.2	52.5	11009	—
	1109	C-19	Ⅲa	二次加工刮片	—	An 2	2.95	4.65	0.95	12.55	31494	—
	1110	E-13	Ⅲa	二次加工刮片	—	Ob 1	4.7	1.6	1.5	9.61	4421	—
	1111	D-12	Ⅲa	二次加工刮片	—	Ch	3.8	1.6	1.3	6.64	10348	—
	1112	D-13	Ⅲa	二次加工刮片	—	Ob 1	2.6	2.7	1.0	8.05	10029	—
	1113	G-13	Ⅲa	二次加工	—	Ob 7	2.0	1.9	0.5	1.77	9672	—
	1114	F-21	Ⅲa-Ⅱ	使用痕刮片	—	Ob 1	2.3	3.3	1.1	7.86	—H	—
	1115	F-13	Ⅲa	使用痕刮片	—	Ob 7	2.4	3.3	0.6	3.86	4371	—
	1116	D-14	Ⅲa	使用痕刮片	—	Ch	3.4	2.3	0.6	4.14	7646	—
	1117	E-21	Ⅲa	使用痕刮片	—	An 2	3.6	3.3	0.7	6.95	12098	—
	1118	F-12	Ⅲa-Ⅱ	使用痕刮片	—	Ob 1	4.5	1.8	0.8	5.88	—H	—
	1119	G-14	Ⅲa	使用痕刮片	—	Ob 1	3.3	1.7	0.7	4.48	1031	—
	1120	I-31	Ⅲ	使用痕のある結晶	—	Cr	2.2	1.8	1.1	5.5	132	—
	1121	H-12	Ⅲa	刮片	—	An 2	2.5	2.9	0.8	3.65	7300	—
	1122	H-12	Ⅲa	刮片	—	Qu	5.5	2.4	0.9	10.67	1760	—
	1123	D-13	Ⅲa	石核	I a	Ob 1	3.0	3.7	1.9	19.42	10375	—
	1124	G-13	Ⅲa	石核	I a	Ob 1	3.8	3.4	2.7	36.88	1397	—
	1125	F-13	Ⅲa	石核	I b	Ob 1	2.3	3.5	1.6	11	2596	—
	1126	G-13	Ⅲa	石核	I b	Ob 7	2.8	3.8	1.9	13.73	8432	—
	1127	F-13	Ⅲa	石核	I a	Ob 7	2.0	2.8	1.1	5.68	4090	—
	1128	F-12	Ⅲa	石核	I a	Ob 1	3.1	2.7	1.7	12.01	6299	—
	1129	H-12	Ⅲa	石核	I a	Ob 1	3.2	3.0	2.0	16.33	7202	—
	1130	D-12	Ⅲa	石核	I a	Ob 1	2.8	3.6	2.4	18.76	12466	—
	1131	G-13	Ⅲa	石核	I a	Ob 1	2.9	4.5	1.6	17.58	8416	—
	1132	H-12	Ⅲa	石核	I a	Ob 1	2.3	3.0	1.5	8.59	1861	—
	1133	F-13	Ⅲa	石核	I a	Ob 1	2.8	3.8	2.4	19.37	2418	—
	1134	F-13	Ⅲa	石核	I a	Ob 1	2.5	3.6	1.2	7.27	2583	—
	1135	E-12	Ⅲa	石核	IVa	Ob 1	1.7	4.6	2.6	14.13	7896	—
	1136	H-13	Ⅲa	石核	I a	Ob 1	1.8	3.2	1.2	5.37	12860	—
	1137	G-13	Ⅲa	石核	I b	Ob 1	3.8	3.7	1.4	15.65	7440	—
	1138	G-13	Ⅲa	石核	I a	Ob 7	2.1	2.9	1.1	5.33	8435	—
	1139	D-12	Ⅲa	石核	I a	Ob 1	2.7	2.4	1.5	7.76	17797	—
	1140	D-12	Ⅲa	石核	I a	Ob 1	2.9	2.2	1.5	7.51	10326	—
	1141	G-13	Ⅲa	石核	I a	Ob 1	3.0	2.5	1.2	6.48	1529	—

第30表 石器観察表(7)

標本 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	分類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	注記番号	備 考
118	1142	E-14	IIIa	石核	IIIa	Ob 1	1.8	3.4	2.4	17.48	251	—
	1143	F-13	IIIa	石核	Ia	Ob 1	2.0	2.4	1.3	5.13	2360	—
	1144	F-13	IIIa	石核	IIa	Ob 1	2.1	2.5	1.1	6.61	6675	—
	1145	H-12	IIIa	石核	Ia	Ob 1	2.3	3.5	1.7	9.29	7269	—
	1146	H-14	IIIa	石核	IIIa	Ob 1	2.8	2.4	2.2	10.64	190	—
	1147	E-13	IIIa	石核	IIIa	Ob 1	2.7	3.1	1.6	10.16	7760	—
	1148	D-11	IIIa	石核	IIa	Ob 1	1.7	3.0	1.7	8.83	12741	—
	1149	G-13	IIIa	石核	IIa	Ob 1	2.7	3.5	3.2	35.12	1375	—
	1150	G-13	IIIa	石核	IIIb	Ob 1	1.6	2.4	1.9	6.36	1438	—
	1151	H-13	IIIa	石核	IVa	Ob 1	2.0	2.5	1.4	6.63	2321	—
119	1152	F-13	IIIa	石核	IIb	Ob 1	3.1	2.7	1.9	13.72	8245	—
	1153	G-14	IIIa	石核	IIb	Ob 1	1.7	2.6	2.0	9.91	9343	—
	1154	E-11	IIIa	石核	IIa	Ob 7	1.9	2.0	1.1	2.91	12421	—
	1155	G-14	IIIa	石核	IIb	Ob 1	2.1	2.0	1.3	3.97	7508	—
	1156	F-13	IIIa	石核	IIa	Ob 1	2.3	1.9	1.3	5.09	2813	—
	1157	G-14	IIIa	石核	Ia	Ob 1	2.0	2.1	1.0	4.24	260	—
	1158	E-13	IIIa	石核	IIb	Ob 1	1.9	1.9	1.1	3.93	5336	—
	1159	G-14	IIIa	石核	IIa	Ob 1	2.3	2.2	1.0	4.38	8745	—
	1160	F-13	IIIa	石核	IIa	Ob 1	3.1	2.6	1.3	10.64	2316	—
	1161	F-13	IIIa	石核	IVa	Ob 1	2.7	2.7	1.9	13.68	2787	—
120	1162	D-12	IIIa	石核	IVb	Ob 7	2.2	2.95	1.6	8.5	11984	—
	1163	E-13	IIIa	石核	IIIa	Ob 1	1.4	4.2	2.2	13.59	225	—
	1164	H-13	IIIa	石核	IVa	Ob 1	1.6	1.8	1.7	6.92	1606	—
	1165	F-15	IIIa	石核	IVa	Ob 1	1.9	2.1	2.2	6.95	6550	—
	1166	G-13	IIIa	石核	IIIa	Fe. Qu	1.5	2.4	1.2	3.53	8180	—
	1167	E-12	IIIa	石核	Ia	Ob 1	3.7	2.4	1.4	10.55	6388	—
	1168	H-12	IIIa	石核	IIa	Ob 1	2.4	3.3	2.7	19.59	13414	—
	1169	F-12	IIIa	石核	IVb	Fe. Qu	1.9	2.0	1.1	3.81	6249	—
	1170	F-13	IIIa	石核	IIa	Qu	2.1	3.0	1.7	10.76	4082	—
	1171	F-12	IIIa	石核	IVa	Ob 1	2.0	2.1	2.8	14.21	6278	—
121	1172	F-14	IIIa	石核	IVa	Ob 1	1.8	3.4	1.4	7.71	832	—
	1173	D-11	IIIa	石核	IVa	Ob 7	3.4	2.1	2.1	12.59	17195	—
	1174	H-11	IIIa	石核	IVa	Ob 1	1.9	3.7	2.4	11.43	7815	—
	1175	E-12	IIIa	石核	IVa	Ob 1	3.1	1.6	1.4	5.41	7931	—
	1176	D-12	IIIa	石核	IIa	An 2	2.4	3.8	1.7	17.95	9981	—
	1177	F-12	IIIa	石核	IIIb	Ob 1	2.3	3.2	0.9	6.11	6258	—
	1178	G-12	IIIa	石核	IVa	Ob 7	1.9	3.1	1.9	9.43	9991	—
	1179	G-12	IIIa	石核	IVa	Ob 1	2.4	3.45	1.25	9.87	8619	—
	1180	F-14	IIIa	石核	IVa	Ob 1	2.8	3.7	1.9	16.13	845	—
	1181	I-30	IIIa	石核	IVa	Ob 1	2.5	2.2	1.8	10.79	21866	—
122	1182	G-24	IIIa	石核	IIIb	Sh 2	2.2	2.2	2.7	9.36	35380	—
	1183	D-13	IIIa	石核	IVa	Ob 7	1.9	4.2	2.5	14.47	4714	—
	1184	G-15	IIIa	石核	IVa	Ob 1	1.9	3.2	1.3	7.60	8786	—
	1185	E-14	IIIa	石核	IVa	Ob 1	2.9	2.1	2.1	10.68	3222	—
	1186	H-13	IIIa	石核	IVa	Ob 1	2.7	2.4	2.0	12.23	12846	—
	1187	E-13	IIIa	石核	IVa	Ob 1	2.7	2.8	2.1	10.05	28220	—
	1188	F-13	IIIa	石核	IVa	Ob 1	2.2	2.4	1.8	9.38	2601	—
	1189	F-11	IIIa	石核	IIIa	Ob 1	2.4	4.1	3.7	34.77	12019	—
	1190	D-18	IIIa	石核	IVa	An 2	5.8	5.12	5.8	12.22	31437	—
	123	1191	D-13	IIIa	磨製石斧	I	Sa	20.1	4.4	4.2	781	1088-1090
1192		F-13	IIIa	磨製石斧	I	An 1	20.1	7.9	4.8	1082	4252	完形
1193		H-13	IIIa	磨製石斧	I	Sh 2	12.9	6.4	2.3	269	1623	完形
1194		H-13	IIIa	磨製石斧未製品	I	An 1	10.95	5.2	2.9	302.16	7470	—
1195		D-12	IIIa	磨製石斧	I	Sh 2	(10.7)	(6.0)	(3.2)	(24.97)	12438	基部
1196		9 T	IIIa	磨製石斧	I	Sa	(6.5)	(4.2)	(2.4)	(64.07)	13096	基部
1197		I-22	IIIa	磨製石斧	I	Sa	(9.1)	(4.4)	(3.2)	(13.79)	35508	基部
1198		F-23	IIIa	磨製石斧	I	An 1	(9.7)	(5.8)	(1.4)	(97.78)	3785	基部
1199		F-14	IIIa	磨製石斧	I	Sh 2	(10.9)	(6.1)	2.5	(23.6)	11054	刃部破損
1200		I-32	IIIa	磨製石斧	I	Sh 2	(6.5)	(3.4)	(3.5)	(86.93)	21576	刃部破損
124	1201	H-24	IIIa	磨製石斧	I	Sa	(5.3)	(6.0)	(1.7)	(51.68)	35324	刃部
	1202	D-12	IIIa	磨製石斧	I	Sa	(14.25)	(6.7)	(4.0)	(86.82)	17837	刃部破損
	1203	E-14	IIIa	磨製石斧	II	An 1	(4.5)	7.2	(2.95)	(12.82)	10184	基部破損

第31表 石器観察表(8)

標本 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	分類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	注記番号	備考
124	1204	G-21	Ⅲa	磨製石斧	I	Sh 2	(9.3)	5.1	2.2	1139.96	14957	基部破損
	1205	E-15	Ⅲa	磨製石斧	I	An 1	(9.0)	5.5	(3.5)	(272)	3417	基部
	1206	H-13	Ⅲa	磨製石斧	?	An 1	(13.4)	6.4	2.9	(13.12)	8389	基部破損
	1207	I-19	Ⅲa	磨製石斧	I	Sh 2	(5.0)	6.2	(2.0)	(78)	33879	刃部
	1208	G-18	Ⅲa	磨製石斧	II	Sh 2	(5.2)	5.9	(2.5)	(84.87)	12808	刃部
	1209	F-12	Ⅲa	磨製石斧	II	Sh 2	(5.0)	7.0	(2.7)	(89.03)	6437	刃部
	1210	F-13	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	(16.5)	11.0	2.5	(455)	650+710	刃部破損
125	1211	D-13	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	20.4	12.4	1.6	412	658+710	完形
	1212	E-Ⅱ-小古	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	15.8	10.1	2.2	245	485+1478	完形
	1213	D-13	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	(16.8)	9.1	2.6	(268)	300+410+4	完形(再加工)
	1214	E-15	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	(13.9)	(9.4)	1.4	(189)	6165	基部・刃部破損
	1215	E-15	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	(13.3)	10.9	1.3	(195)	6166	基部破損
	1216	E-D-E-Ⅱ	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	(10.1)	(12.3)	1.7	(260)	650+710	基部・刃部破損
126	1217	E-13	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	(14)	(10.1)	(1.5)	(243)	4354	完形
	1218	D-13	Ⅲa	打製石斧	I	Sh 2	(13.4)	9.5	1.8	(265)	7023	刃部破損
	1219	G-13	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	11.7	8.5	1.8	174	8473	完形
	1220	F-13	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	(10.1)	9.5	2.0	(172)	5158	完形
	1221	G-13	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	(13.4)	(8.6)	1.9	(230)	7449	完形
	1222	G-11	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	(12.6)	10.2	1.8	(249)	1300+1300	完形
	1223	F-13	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	9.5	(8.5)	2.1	(199)	2799	刃部破損
	1224	E-13	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	13.4	8.1	1.5	158	13928	完形
	1225	D-13	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	11.6	7.8	1.4	139	7025	完形
	1226	F-12	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	(9.9)	(9.0)	0.9	(89)	6255	基部・刃部破損
127	1227	F-13	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	(9.5)	(9.7)	1.2	(125)	2605	基部・刃部破損
	1228	E-14	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	(8.5)	(8.0)	1.2	(82)	230	基部・刃部破損
	1229	E-12	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	(14.3)	10.0	1.8	(210)	7900	刃部破損
	1230	D-13	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	(6.9)	(7.9)	(1.8)	(121)	10083	基部・刃部破損
	1231	F-13	Ⅲa	打製石斧	I	Sh 2	(11.0)	8.5	1.8	(190)	257+470	刃部破損
	1232	D-12	Ⅲa	打製石斧	I	An 1	13.7	7.6	1.4	189	15719	基部破損
	1233	E-14	Ⅲa	打製石斧	III	Sh 2	16.6	7.3	2.0	299.9	660+438	完形
	1234	E-14	Ⅲa	打製石斧	III	An 1	18.4	10.4	2.0	299	4983	完形
128	1235	F-13	Ⅲa	打製石斧	III	An 1	14.8	7.7	1.7	192	2358	完形
	1236	G-13	Ⅲa	打製石斧	III	An 1	12.7	6.2	1.4	130	7431	完形
	1237	F-13	Ⅲa	打製石斧	III	An 1	(10.9)	6.2	2.3	(159)	660+710	刃部破損
	1238	E-13	Ⅲa	打製石斧	III	An 1	(13.6)	7.3	1.5	(170)	600+710	基部破損
	1239	I-19	Ⅲa	打製石斧	III	An 1	(12.1)	(8.9)	2.0	(154.80)	33286	基部・刃部破損
	1240	H-12	Ⅲa	打製石斧	III	An 1	(9.1)	(5.9)	1.1	(82)	1822	基部・刃部破損
	1241	E-13	Ⅲa	打製石斧	III	An 1	(8.7)	7.5	2.0	(152)	10050	柄根部
	1242	F-15	Ⅲa	打製石斧	III	An 1	(8.6)	(6.6)	(1.6)	(70.1)	3420	柄根部
	1243	E-13	Ⅲa	打製石斧	III	An 1	(6.3)	(5.8)	1.9	(80.09)	6077	柄根部
	1244	E-12	Ⅲa	打製石斧	III	An 1	(5.62)	(5.35)	(2.3)	(82.85)	7913	柄根部
129	1245	D-13	Ⅲa	打製石斧	III	An 1	(5.5)	9.1	(1.7)	(94.7)	7143	柄根部
	1246	D-13	Ⅲa	打製石斧	III	An 1	(5.8)	(8.0)	1.55	(101.88)	9025	柄根部
	1247	D-Ⅱ-E-Ⅱ	Ⅲa	打製石斧	A	An 1	(9.7)	(7.5)	1.2	(90)	661+660	基部
	1248	E-13	Ⅲa	打製石斧	A	An 1	(9.5)	(9.4)	1.3	(135)	5124	基部
	1249	F-13	Ⅲa	打製石斧	A	An 1	(7.6)	(6.9)	1.78	(101.38)	2815	基部
	1250	E-13	Ⅲa	打製石斧	B	An 1	(8.4)	(7.2)	1.8	(131.65)	4382	基部
	1251	O-14	Ⅲa	打製石斧	B	An 1	(6.8)	(8.3)	1.1	(60)	8511	基部
	1252	E-15	Ⅲa	打製石斧	B	An 1	(6.9)	(9.0)	(1.2)	(109)	484	基部
	1253	D-12	Ⅲa	打製石斧	B	An 1	(5.85)	(6.7)	(1.35)	(83.21)	9758	基部
	1254	E-13	Ⅲa	打製石斧	B	An 1	(5.4)	(8.2)	1.1	(46.29)	4498	基部
130	1255	D-14	Ⅲa	打製石斧	B	An 1	(5.2)	(5.0)	(1.0)	(30)	1021	基部
	1256	E-12	Ⅲa	打製石斧	B	An 1	(7.1)	(6.68)	(2.0)	(75.44)	6763	基部
	1257	E-12	Ⅲa	打製石斧	B	An 1	(8.7)	(5.3)	1.7	(92)	6735	基部
	1258	F-13	Ⅲa	打製石斧	B	An 1	(7.8)	(7.0)	3.0	(169)	2582	基部
	1259	F-13	Ⅲa	打製石斧	B	Sh 2	(7.6)	(7.8)	2.0	(150)	一拵	基部
	1260	F-12	Ⅲa	打製石斧	B	An 1	(6.2)	(6.7)	(2.0)	(104.11)	11925	基部
	1261	C-14	Ⅲa	打製石斧	B	Sh 2	(5.6)	(7.6)	(1.5)	(71)	11085	基部
	1262	F-11	Ⅲa	打製石斧	C	An 1	(5.6)	(8.6)	1.4	(105)	一拵	基部
	1263	F-13	Ⅲa	打製石斧	C	Sh 2	(5.8)	(7.1)	(1.4)	(48.86)	2389	基部
	1264	F-13	Ⅲa	打製石斧	C	An 1	(8.0)	(9.8)	1.4	(93.71)	4098	基部
1265	D-14	Ⅲa	打製石斧	B	Sh 2	(4.7)	(5.45)	(1.8)	(45.93)	660+710	基部	

第32表 石器観察表(9)

標本 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	分類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	注記番号	備考
130	1266	G-12	IIIa	打製石斧	B	An 1	(4.7)	(6.0)	(1.9)	960.31	2024	基部
	1267	E-13	IIIa	打製石斧	C	Sh 2	(3.4)	(6.9)	(1.5)	37.36	4547	基部
	1268	D-13	IIIa	打製石斧	C	An 1	(5.45)	(7.25)	(1.45)	73.16	7002	基部
	1269	F-12	IIIa	打製石斧	C	An 1	(5.6)	(6.9)	(1.8)	998	9082	基部
	1270	I-30	IIIa	打製石斧	D	An 1	(11.2)	(7.5)	1.3	(98)	21213	基部
	1271	E-14	IIIa	打製石斧	c	An 1	(11.4)	9.2	1.4	(11.72)	ベルト一係	刃部
131	1272	F-12	IIIa	打製石斧	c	An 1	(13.2)	11.7	1.7	(310)	6295	刃部
	1273	D-13	IIIa	打製石斧	c	An 1	(10.8)	10.3	0.7	(200)	4670	刃部
	1274	E-14	IIIa	打製石斧	c	An 1	(10.4)	10.1	1.6	(72.27)	3257	刃部
	1275	E-14	IIIa	打製石斧	c	An 1	(10.1)	8.8	1.8	(138)	9146	刃部
	1276	D-14	IIIa	打製石斧	c	An 1	(9.7)	9.3	1.8	(192)	7662	刃部
	1277	E-14	IIIa	打製石斧	a	An 1	(9.8)	(7.7)	(1.8)	(182)	3211	刃部
	1278	D-13	IIIa	打製石斧	a	An 1	(10.0)	8.4	1.5	(137.27)	6582	刃部
	1279	F-13	IIIa	打製石斧	a	An 1	(12.5)	9.8	1.7	(221)	4061	刃部
	1280	D-11	IIIa	打製石斧	a	An 1	(6.9)	(8.6)	(1.8)	(100.78)	12596	刃部
	1281	D-14	IIIa	打製石斧	a	An 1	(12.9)	9.5	5.6	(225)	8974	刃部
132	1282	F-15	IIIa	打製石斧	a	An 1	(14.1)	10.0	1.0	(161)	611	刃部
	1283	E-15	IIIa	打製石斧	a	An 1	(9.8)	(5.5)	2.0	(95)	388+389	刃部
	1284	G-12	IIIa	打製石斧	a	An 1	9.4	6.5	1.4	80	8358	刃部
	1285	D-14	IIIa	打製石斧	a	An 1	(5.15)	(7.03)	1.5	(54.68)	9050	刃部
	1286	G-12	IIIa	打製石斧	b	An 1	(8.3)	8.0	1.6	(106.49)	1029	刃部
	1287	E-13	IIIa	打製石斧	b	An 1	(9.1)	8.5	1.3	(113.54)	5311	刃部
	1288	E-13	IIIa	打製石斧	d	An 1	(8.5)	(9.6)	1.8	(167.33)	5285	刃部
	1289	D-12	IIIa	打製石斧	d	An 1	(8.15)	10.05	1.4	(108.0)	16683	刃部
	1290	I-18	IIIa	打製石斧	b	Sh 2	(5.5)	(7.1)	1.9	(179.5)	33375	刃部
	1291	E-14	IIIa	打製石斧	b	Sh 2	(8.0)	(8.7)	1.7	(135.4)	238	刃部
133	1292	I-24	IIIa	打製石斧	d	An 1	(8.5)	8.5	1.4	(99.65)	35558	刃部
	1293	E-13	IIIa	打製石斧	IV	An 1	8.0	7.0	1.5	72	6084	完形
	1294	E-12	IIIa	打製石斧	IV	An 1	(11.8)	8.0	2.1	(203)	6812	基部破損
	1295	D-13	IIIa	打製石斧	IV	An 1	(10.5)	7.5	1.7	(120)	ベルト一係	基部破損
	1296	I-18	IIIa	打製石斧	V	An 1	14.6	8.0	1.6	226	15043	完形
	1297	E-13	IIIa	打製石斧?	-	An 1	(9.9)	(10.45)	1.65	(101.49)	5281	-
	1298	D-14	IIIa	打製石斧?	-	An 1	(13.6)	(10.6)	2.0	(327.32)	8536	-
	1299	E-14	IIIa	打製石斧?	-	Sh 2	(9.3)	(7.0)	1.3	(111.72)	ベルト一係	-
	1300	H-13	IIIa	打製石斧?	-	Sh 2	(11.0)	8.68	1.75	(284.62)	1609	-
	1301	D-18	IIIa	打製石斧?	-	Sh 2	(6.0)	(3.7)	(1.05)	(14.7)	31389	-
134	1302	D-14	IIIa	石錘	-	Sa	7.7	10.2	1.9	150	8510	両面加工
	1303	G-22	III	礫器	II	Sa	13.8	10.65	4.0	688.61	34060	両面加工
	1304	C-19	IIIa	礫器	II	Sa	13.39	11.6	5.25	1010	32288	両面加工
	1305	H-24	IIIa	礫器	II	Sa	16.0	15.5	2.5	658	35149	-
	1306	H-13	IIIa	磨石	Ia	An 1	10.45	8.0	6.7	790	7543	側面破損
135	1307	E-14	IIIa	磨石	Ia	An 1	6.5	4.9	4.6	203.8	3332	完形
	1308	F-13	IIIa	磨石	IIa	Sa	10.1	8.7	2.9	390	4174	完形
	1309	D-12	IIIa	磨石	IIa	An 1	10.6	(5.3)	4.6	(325)	11940	半破損
	1310	D-14	IIIa	磨石	IIa	Sa	12.6	11.4	5.0	1065	7151	完形
	1311	IJ-30	III	磨石	IIIa	An 1	9.0	6.95	2.8	222.66	ベルト一係	完形
	1312	I-29	IIIa	磨石	IIIa	An 1	8.0	8.0	3.4	360	21603	完形
	1313	I-30	IIIa	磨石	IVa	Sa	15.35	8.0	5.55	1000	20570	完形
	1314	E-21	IIIa	磨石	IVa	An 1	12.0	6.5	3.35	360	13433	完形
	1315	D-15	IIIa	磨石	IIIa	An 1	13.8	11.4	10.0	2300	7691	完形
	1316	F-14	IIIa	磨石	IIIa	Sa	9.8	8.05	5.0	440	12860	完形
136	1317	D-14	IIIa	磨石	IIIa	An 1	(8.2)	(8.4)	7.9	(580)	10222	破損
	1318	E-13	IIIa	磨石	Va	Sa	4.3	3.7	1.6	35.55	5153	完形
	1319	H-12	IIIa	磨石	Va	Sa	3.7	3.8	1.6	34.09	1701	完形
	1320	F-13	IIIa	磨石	Va	An 1	6.1	4.35	1.9	69.37	4065	完形
	1321	D-12	IIIa	磨石	Va	An 1	5.2	4.1	2.7	88.81	12409	完形
	1322	D-12	IIIa	磨石	Va	An 1	4.5	2.8	2.1	34.53	12213	完形
	1323	D-12	IIIa	磨石	Va	An 1	4.0	4.1	3.0	55.9	16750	完形
	1324	D-12	IIIa	磨石	Va	An 1	4.9	3.9	2.2	54.33	18380	完形
	1325	F-12	IIIa	磨石	Va	Sa	6.65	1.9	1.3	18.78	6224	完形
	1326	C-15	IIIa	磨石	Va	Sa	5.4	2.5	1.9	46.01	16480	完形
138	1327	E-13	IIIa	磨石	IIa	Sa	7.9	6.0	3.4	247.61	5161	完形

第33表 石器観察表 (10)

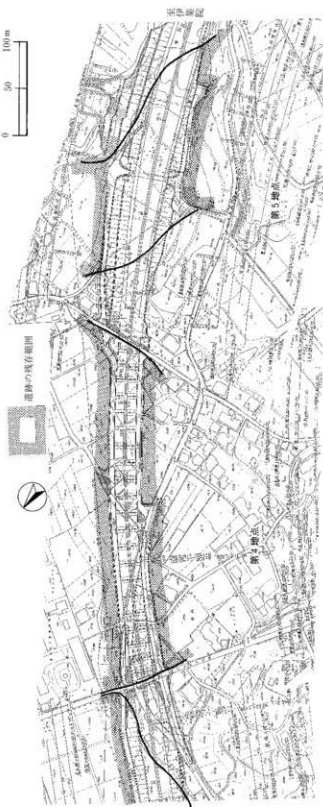
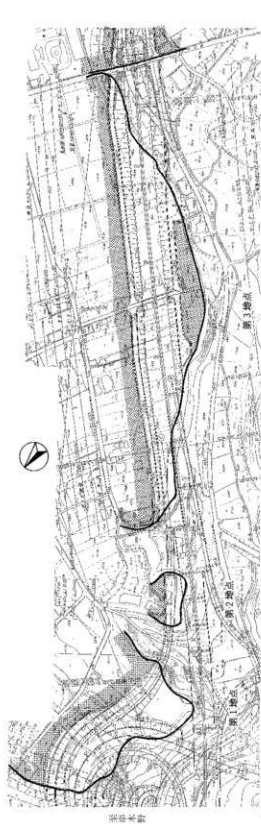
標本 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	分類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	注記番号	備 考
138	1328	H-24	IIIa	磨蝕石	IIa	An 1	(7.0)	(9.3)	(5.5)	(400)	34990	半破損
	1329	I-32	IIIa	磨蝕石	IIa	An 1	10.1	9.1	3.4	452	20329	完形
	1330	F-13	IIIa	磨蝕石	IIa	Sa	(9.6)	(6.0)	(4.1)	(340)	2592	破損
	1331	I-30	IIIa	磨蝕石	IIb	An 1	11.3	8.8	4.4	685	21855	完形
	1332	C-19	IIIa	磨蝕石	II d	An 1	5.7	6.7	4.1	234.96	32290	完形
	1333	D-12	IIIa	磨蝕石	IIb	Sa	13.6	9.3	4.4	858	12456	完形
	1334	G-II-B-II	IIIa	磨蝕石	?	Sa	(9.7)	(7.8)	6.2	(580)	1288-887	破損
139	1335	F-13	IIIa	磨蝕石	IIc	An 1	(7.8)	(10.0)	4.9	565	2507	半破損
	1336	D-12	IIIa	磨蝕石	IIc	Sa	8.7	6.5	3.4	261.41	16839	完形
	1337	H-12	IIIa	磨蝕石	II f	An 1	10.9	11.4	2.5	920	7203	完形
	1338	E-14	IIIa	磨蝕石	IIc	An 1	9.8	8.9	5.2	690	4891	完形
	1339	G-13	IIIa	磨蝕石	IIc	Sa	9.1	8.2	4.3	480		一拵
	1340	I-31	IIIa	磨蝕石	IIc	Sa	9.1	6.8	4.1	350	21905	完形
	1341	I-30	IIIa	磨蝕石	IIc	An 1	9.9	7.4	5.8	590	22312	完形
140	1342	F-11	IIIa-拵	磨蝕石	IIe	Sa	14.0	11.2	5.2	1225		一拵
	1343	H-11	IIIa	磨蝕石	II g	Sa	9.6	6.9	3.2	301.53	8948	完形
	1344	J-17	IIIa	磨蝕石	IIe	Sa	15.1	6.8	5.3	820	14869	完形
	1345	D-13	IIIa	磨蝕石	IIa	Sa	(4.6)	(3.7)	(1.9)	(37.7)	7086	破損
	1346	G-14	IIIa	磨蝕石	IIa	An 1	5.5	4.2	2.3	77	7513	完形
	1347	E-14	IIIa	磨蝕石	IIa	Sa	5.1	3.95	2.7	82.21	9633	完形
	1348	D-12	IIIa	磨蝕石	IIc	An 1	6.7	3.5	3.1	111.34	16744	完形
141	1349	I-31	III	磨蝕石	II d	An 1	5.4	4.0	2.8	78.05	20153	完形
	1350	H-30	III	磨蝕石	II g	An 1	11.0	6.6	3.8	400	50	完形
	1351	H-30	IIIa	磨蝕石	II g	An 1	10.0	4.8	3.5	226.66	20665	完形
	1352	F-14	IIIa	磨蝕石	II g	Sa	7.5	3.3	3.8	136		一拵
	1353	D-18	IIIa	磨蝕石	IIa	An 1	10.4	8.4	5.2	622	31458	完形
	1354	E-13	IIIa	磨蝕石	IIa	An 1	10.6	10.3	4.7	770	5320	完形
	1355	E-12	IIIa	磨蝕石	IIb	An 1	(8.6)	8.4	6.0	(720)	6371	半破損
142	1356	E-13	IIIa	磨蝕石	IIb	Sa	(7.3)	(10.0)	4.8	(515)	6807	半破損
	1357	I-18	IIIa	磨蝕石	IIb	An 1	8.75	7.7	3.7	370	14762	完形
	1358	H-25	IIIa	磨蝕石	IIb	Sa	11.1	10.6	4.4	815	15217	完形
	1359	D-13	IIIa	磨蝕石	IIb	An 1	16.2	14.2	8.5	2140	4684	完形
	1360	H-19	IIIa	磨蝕石	IIb	Sa	10.0	6.9	5.5	550	34069	完形
	1361	I-31	IIIa	磨蝕石	IIc	Sa	10.4	6.0	2.9	280.6	20831	完形
	1362	C-18	IIIa	磨蝕石	IIb	Sa	10.5	7.7	4.8	690	32280	完形
143	1363	H-13	IIIa	磨蝕石	IIc	Sa	8.5	7.0	4.25	350	1619	完形
	1364	E-14	IIIa	磨蝕石	IIc	An 1	8.7	8.7	3.3	280	219	完形
	1365	H-29	IIIa	磨蝕石	IIc	Sa	13.7	10.5	5.2	1100	20007	完形
	1366	H-12	IIIa	磨蝕石	IIc	An 1	(8.3)	7.8	4.8	(470)	1772	完形
	1367	G-12	IIIa	磨蝕石	IIc	An 1	11.1	8.7	5.2	735	7350	完形
	1368	I-18	IIIa	磨蝕石	IIc	Sa	11.5	9.3	6.0	850	14810	完形
	1369	G-17	IIIa	磨蝕石	IIb	An 1	(7.8)	(6.8)	6.8	(450)	10444	端部破損
144	1370	I-30	III	磨蝕石	IIb	An 1	16.0	8.9	6.7	1180	20070	完形
	1371	G-21	IIIa	磨蝕石	I d	Sa	5.2	4.7	4.6	153.00	15921	完形
	1372	G-13	IIIa	磨蝕石	IIa	Sa	5.5	4.2	2.3	94.16	7446	完形
	1373	G-13	IIIa	磨蝕石	IIa	Sa	6.0	4.7	3.2	125.06	1293	完形
	1374	F-13	IIIa	磨蝕石	IIa	Sa	4.90	2.95	2.55	51.93	4093	完形
	1375	H-18	IIIa	磨蝕石	Ve	An 1	9.1	4.8	3.7	242.43	33336	完形
	1376	D-13	IIIa	磨蝕石	Ve	Sa	7.75	3.1	2.4	75.48	7013	完形
145	1377	D-11	IIIa	磨蝕石	Ve	Sa	4.7	2.0	1.3	20.03	16870	完形
	1378	D-13	IIIa	磨蝕石	I b	Sa	16.4	34.2	11.4	8100	7022	完形
	1379	G-24	IIIa	磨蝕石	I b	An 1	24.5	27.2	8.4	9100	35304	完形
	1380	H-24	IIIa	磨蝕石	IIa	Sa	15.8	8.98	4.1	635	35031	完形
	1381	I-31	III	磨蝕石	I b	An 1	12.7	12.1	5.6	1460	20172	完形
	1382	H-20	IIIa	磨蝕石	IIIa	Sa	23.2	16.0	3.4	1750	15290	完形
	1383	H-13	IIIa	磨蝕石	I a	An 1	14.3	14.8	9.7	2415	3764	完形
145	1384	G-19	IIIa	磨蝕石	I b	An 1	22.1	28.5	7.3	3415	32813	完形
	1385	F-12	IIIa	磨蝕石	I b	Sa	11.8	13.8	6.1	1300	6892	完形
	1386	F-12	IIIa	磨蝕石	I b	Sa	12.8	13.0	5.4	1100	6893	完形
	1387	E-16	IIIa	磨蝕石	I b	T u	13.2	9.4	7.3	780	9138	完形
	1388	E-11	IIIa	磨蝕石	IIa	An 1	6.73	10.05	3.6	420	12305	完形
	1389	F-13	IIIa	磨蝕石	I	An 1	7.0	5.9	2.4	111.06	4289	完形

第34表 石器観察表 (11)

標本 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	分類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	注記番号	備 考	
145	1390	D-15	IIIa	砥石	I	An 1	4.5	5.4	2.9	102.68	7694		
	1391	D-13	IIIa	砥石	I	An 1	12.0	5.3	1.6	164.16	7003		
	1392	E-13	IIIa	砥石	I	An 1	9.3	5.2	3.0	135.1	4317		
	1393	D-14	IIIa	砥石	II	Sa	5.5	7.2	2.1	103.68	10219		
	1394	E-14	IIIa	砥石	II	Sa	5.6	2.7	1.5	43.7	326		
	1395	D-14	II	打製石磯	I c	Ob 1	(1.2)	(1.3)	0.3	(0.33)	3448	両脚破損	
	1396	-	IIa	打製石磯	I j	An 2	1.4	1.4	0.2	0.37	-	完形	
	1397	-	IIb	打製石磯	I j	Ob 7	(1.6)	(1.4)	0.3	(0.44)	-	片脚破損	
	1398	E-13	IIIa-一括	打製石磯	I j	Ob 7	(1.9)	(0.7)	0.3	(0.42)	IIa-一括	両脚破損	
	1399	E-14	II	打製石磯	I j	Ob 7	(1.9)	(1.5)	0.3	(0.69)	114	片脚破損	
146	1400	I-31	II	打製石磯	I d	An 3	(2.0)	1.5	0.2	(0.66)	2192	先端破損	
	1401	H-13	IIIa-一括	打製石磯	I j	An 2	1.8	1.7	0.3	0.65	IIa-一括	完形	
	1402	C-13	IIIa-一括	打製石磯	I j	Ob 1	2.1	1.6	0.5	1.05	IIa-一括	完形	
	1403	G-13	IIb	打製石磯	I j	An 2	2.3	1.8	0.2	0.7	1501	完形	
	1404	H-20	IIIb-一括	打製石磯	I j	Ob 1	2.2	1.4	0.4	0.88	IIb-一括	完形	
	1405	F-13	IIIa-一括	打製石磯	II c	An 2	(1.6)	2.1	0.3	(1.11)	IIa-一括	先端破損	
	1406	E-14	II	打製石磯未製品	-	An 2	1.9	1.9	0.3	0.97	3079	-	
	1407	E-14	II	楔形石器	I	Sh 1	1.8	1.0	0.5	0.68	3152	-	
	1408	F-13	II	スクレイパー	II	Ob 1	(2.4)	(2.5)	0.5	(4.12)	2463	破損	
	1409	F-13	II	楔形石器	I	Fc Qu	2.7	1.6	0.7	2.87	2759	-	
147	1410	E-14	II	石核	III	Fe Qu	3.1	3.0	3.4	25.3	3124	-	
	1411	F-14	II	石核	I Va	Ob 1	2.5	2.5	1.3	5.95	3007	-	
	1412	F-14	II	打製石屑	I	An 1	(10.2)	9.6	1.6	(10.2)	2997	基部・0部破損	
	1413	F-14	II	打製石屑	I	An 1	(6.8)	(6.4)	2.0	(96.23)	2969	柄根部?	
	1414	E-14	II	磨石	IIa	Sa	14.7	10.8	5.1	1140	272	完形	
	1415	E-14	II	磨石	IIb	Tu	10.1	7.5	5.2	390	3131	完形	
	1416	I-30	II	砥石	IIb	Sa	12.3	7.1	3.9	555	22143	完形	
	1417	E-14	II	軽石製品	-	Pu	10.0	6.7	3.1	37.85	-	-	
	1418	-	IIIa	打製石磯	I j	Ch	1.3	1.4	0.3	0.37	-	完形	
	1419	-	IIIa	打製石磯	I j	An 2	1.8	1.4	0.3	0.49	④	完形	
148	1420	E-14	IIIa-一括	打製石磯	I e	Ob 6	1.8	1.5	0.3	0.5	-	完形	
	1421	D-12	I c	打製石磯	I d	Ob 4	(2.2)	(1.6)	0.4	(0.86)	11386	片脚破損	
	1422	E-13	IIIa-一括	打製石磯	I j	Ob 1	(2.3)	(1.8)	0.4	(1.24)	-	一括	
	1423	G-13土坑	Va	打製石磯	I g	Ob 1	(2.0)	(1.8)	0.3	(0.54)	30	片脚破損	
	1424	古遺跡A	IIIa	打製石磯	I e	Fe Qu	2.2	(1.6)	0.3	(0.61)	A	片脚破損	
	1425	古遺	IIIa	打製石磯	I c	An 3	(2.4)	(1.4)	0.2	(0.47)	58	片脚破損	
	1426	E-14	IIIa	打製石磯	I e	C h	(3.0)	(1.8)	0.4	(1.34)	榎板	片脚破損	
	1427	土坑1	IIa	打製石磯	II c	An 2	1.7	1.3	0.2	0.4	土坑1-100	完形	
	1428	榎板①	IIa	打製石磯	I j	An 2	(1.8)	(1.3)	0.3	(0.51)	榎板①	片脚破損	
	1429	-	土坑1	打製石磯	I j	Ob 8	1.8	1.6	0.3	0.64	土坑1-40	完形	
149	1430	-	表採	打製石磯	I j	An 2	(1.7)	(1.8)	0.5	(1.27)	-	片脚破損	
	1431	H-26	古遺-一括	打製石磯	I j	An 2	2.0	1.5	0.4	1.11	古遺一括	完形	
	1432	E-13土坑	-	打製石磯	I i	Ob 2	1.6	(1.8)	0.3	(0.72)	32	片脚破損	
	1433	CD-13	古遺-一括	打製石磯	I j	An 2	1.7	1.6	0.3	0.71	古1a-一括	完形	
	1434	G-17	-	一括	打製石磯	II c	Ob 8	1.7	1.6	0.3	0.58	-	一括
	1435	G-12	土坑1	打製石磯	IIb	Ob 7	2.2	1.8	0.4	1.18	土坑1-18	完形	
	1436	E-13	I c-一括	打製石磯	IIb	Ob 7	1.9	1.5	0.3	0.94	-	一括	
	1437	G-13	-	一括	打製石磯	IIb	Ob 1	(1.7)	1.8	0.4	(1.02)	-	一括
	1438	D-14	-	一括	打製石磯未製品	-	Ob 1	(2.0)	1.9	0.8	(2.58)	-	一括
	1439	D-12	I c-一括	打製石磯未製品	-	Fe Qu	2.5	2.4	0.6	3.11	I c-一括	-	
149	1440	G-17	-	一括	打製石磯未製品	-	Ob 7	2.6	1.5	0.7	2.49	-	一括
	1441	-	表採	石筴	IIb	Ob 1	3.5	3.6	0.7	5.57	表採	完形	
	1442	-	道一括	石筴	I b	Fe Qu	(5.1)	2.9	1.2	(10.5)	道一括	片脚破損	
	1443	-	表採	石筴	I b	An 2	4.0	2.7	0.5	5.45	表採	完形	
	1444	G-12	土坑1	石筴	IIb	An 2	(2.0)	(1.2)	0.2	(0.94)	土坑1-22	-	
	1445	-	表採	楔形石器	II	Ob 1	1.9	2.7	0.5	3.11	表採	-	
	1446	E-12	I c-一括	楔形石器	II	Ob 1	2.6	3.0	1.1	6.36	I c-一括	-	
	1447	E-11	I c-一括	スクレイパー	II	Ob 7	1.7	2.7	0.6	1.45	I c-一括	-	
	1448	D-13	I c-一括	スクレイパー	II	Ob 1	2.3	2.4	1.4	5.89	I c-一括	-	
	1449	-	表採	スクレイパー	II	Ob 6	(3.1)	(1.6)	0.5	(2.52)	表採	-	
1450	D-13	I c	スクレイパー	II	Ob 7	3.9	3.4	1.1	4.82	D13一括	-		
1451	-	道一括	スクレイパー	II	An 2	6.02	3.4	1.8	34.33	道一括	-		

第35表 石器観察表 (12)

標本 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	分類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	注記番号	備 考
1452	D-11	古道	スクレイパー	II	An 2	6.5	2.3	1.2	13.04	32140	—	
1453	I-12	I	スクレイパー	II	Ob 2	2.7	1.4	0.6	2.88	9902	—	
1454	G-20	古道B	二次加工刮片	—	Ob 7	1.9	2.0	0.3	1.23	古B	—	
1455	—	道一拵	二次加工刮片	—	An 1	3.5	2.1	0.6	5.59	道一拵	—	
1456	E-12	Ic-拵	二次加工刮片	—	An 3	2.05	1.6	0.3	0.88	Ic-拵	—	
1457	H-21	古道B	二次加工刮片	—	Sh 1	2.5	1.2	1.3	1.05	6294	—	
1458	E-13	Ic-拵	使用痕刮片	—	Ob 1	2.6	3.7	0.9	8.44	Ic-拵	—	
1459	E-13	Ic-拵	使用痕刮片	—	Ob 1	2.3	3.9	1.2	8.34	Ic-拵	—	
1460	—	表採	石核	IIIa	Ob 1	2.2	2.45	1.8	7.53	表③	—	
1461	—	表採	石核	Ia	Ob 1	2.6	2.8	1.7	10.85	表②	—	
1462	E-14	表採-拵	石核	IIIb	Ob 1	2.4	4.55	1.9	18.4	表採一拵	—	
1463	—	樹痕①	石核	IVa	Ob 1	2.1	3.0	0.9	5.98	樹痕①	—	
1464	—	表採	石核	IIb	Ob 1	2.0	2.7	2.7	15.39	表①	—	
1465	E-13	Ic-拵	石核	IIa	Ob 1	3.1	4.4	2.9	39.39	Ic-拵	—	
1466	D-11	IIb	磨製石斧	II	Sh 2	13.7	5.9	2.0	267.4	32415	—	完形
1467	G-13	土坑1	打製石斧	I	An 1	16.3	9.3	2.4	398	土坑1-5	—	完形
1468	—	樹痕②	打製石斧	I	An 1	(12.9)	10.0	1.1	326.37	樹痕②	—	基部破損
1469	E-15	Ic上	打製石斧	I	An 1	13.0	(8.6)	1.8	(143)	3949	—	基部破損
1470	D-11	古道B	打製石斧	I	An 1	14.1	9.8	2.0	177.44	32908	—	完形
1471	—	表採	打製石斧	I	An 1	(13.9)	9.5	2.1	(57.74)	表採	—	完形?
1472	—	表採-拵	打製石斧	I	An 1	(11.4)	9.4	1.7	(212)	表一拵	—	基部破損
1473	D-13	Ic	打製石斧	I	An 1	(10.0)	10.0	0.8	(168)	6543	—	基部破損
1474	E-14	Ic-拵	打製石斧	I	An 1	(11.5)	12.9	3.3	(288)	一拵	—	刃部
1475	CD-13	古	打製石斧	I	An 1	(7.4)	(5.3)	1.1	(49)	古一拵	—	刃部
1476	—	表採	打製石斧	I	An 1	(12.0)	10.5	2.3	(342)	表	—	刃部
1477	—	表採-拵	打製石斧	I	An 1	(8.3)	(8.7)	(1.9)	(171.2)	表一拵	—	刃部
1478	—	土坑1	打製石斧	I	An 1	(8.5)	(9.0)	(2.0)	(118.9)	土坑1-29	—	刃部
1479	G-20	IIIa	打製石斧	I	An 1	(6.8)	(7.7)	1.38	(56.40)	古6	—	刃部
1480	—	道一拵	打製石斧	I	An 1	(9.34)	7.9	1.5	(120.6)	道一拵	—	刃部
1481	—	道一拵	打製石斧	I	An 1	(5.5)	(5.7)	(1.2)	(37.91)	道一拵	—	基部
1482	—	樹痕②	打製石斧	I	An 1	(5.3)	(6.0)	(2.1)	(89.68)	樹痕②	—	基部
1483	—	表採	打製石斧	I	An 1	(7.0)	(6.4)	(1.3)	(10.37)	表採	—	基部
1484	—	表採	打製石斧?	I	An 1	7.4	7.7	1.3	104.45	表採	—	括れ部?
1485	CD-12	古道-拵	打製石斧?	I	An 1	8.7	10.0	1.5	130.97	古一拵	—	括れ部?
1486	D-山道道	IIb	打製石斧?	I	An 1	(6.1)	(9.4)	(1.6)	(106.7)	32125	—	刃部?
1487	—	—	磨石	Ia	An 1	7.8	4.7	3.6	122.61	—	—	完形
1488	—	—	磨石	IIa	An 1	4.8	3.6	2.1	48.5	—	—	完形
1489	—	—	磨石	IVa	An 1	7.5	7.2	3.3	231.1	—	—	端部破損
1490	GH-20	古B	磨石	IIa	An 1	11.1	6.55	3.5	370	古B	—	完形
1491	—	—	磨石	IIa	An 1	12.3	9.0	4.0	560.0	—	—	完形
1492	D-11	IIIb	敲石	IIa	Sh	5.6	4.1	3.4	76.03	32369	—	完形
1493	H-25	道	敲石	IIa	An 1	14.0	11.4	8.35	1799	—	—	完形
1494	—	表採	研磨痕のある磯	—	An 1	(10.2)	(5.2)	(2.3)	(106.6)	表採	—	破損
1495	—	—	石皿	Ib	An 1	28.1	28.6	10.2	10000	—	—	
1496	—	表採	石皿	Ib	An 1	28.6	32.2	15.1	11100	—	—	
1497	—	—	石皿	Ib	An 1	13.4	18.4	13.2	3610	—	—	
1498	—	—	軽石製品	—	Pu	7.35	6.48	3.6	25.4	—	—	破損
1499	—	—	軽石製品	—	Pu	10.1	8.8	4.9	123.71	—	—	完形
1500	—	—	軽石製品	—	Pu	8.1	6.8	3.8	66.68	—	—	完形
1501	—	—	軽石製品	—	Pu	11.4	10.1	5.3	150	—	—	破損
1523	I-30	III	磨製石鎌	—	Sh 2	(4.1)	2.6	0.25	(3.02)	20109	—	先端破損
1524	F-13	IIIa	磨製石鎌	—	Sh 2	(1.0)	1.5	0.2	(0.37)	2350	—	先端破損
1525	D-13	IIIa	垂飾	—	Ja	(3.5)	2.0	0.3	(2.5)	7603	—	両端破損
1526	—	—	管玉	—	?	3.7	1.9	1.6	(6.24)	—	—	端部破損
1527	E-23	IIIb	有溝砥石	—	Sh 2	(7.6)	(4.2)	1.6	(1.65)	13144	—	破損



第199図 遺跡の残存状況図



## 第V章 発掘調査のまとめ

### 第1節 調査の成果

市ノ原遺跡は鹿児島県の西半にある薩摩半島の中央部西側の日置市に位置する。遺跡は、平成3年度の南九州西回り自動車道建設に伴う分布調査で確認され、平成8年度の確認調査で遺跡の範囲が判明した。その結果、市ノ原遺跡は当時の東市来町から市来町までの広域に及ぶ遺跡であることが確認されたため、地形により5つの地点に分けて調査を行った。市来町側を第1地点とし、以下、南に向かって第2、第3、第4地点とし、最も南側に当たる本地域を第5地点と呼称して平成9年度と平成10年度に本調査を行った。

調査の結果、市ノ原遺跡（第5地点）からは、旧石器時代から中世・近世にかけての遺構・遺物が確認された。

旧石器時代ナイフ形石器文化期では、ブロックが4か所確認され、頁岩製の接合資料8点のほか、ナイフ形石器・台形石器・三稜尖頭器・敲石などが出土した。出土資料のうち注目すべきものとして、ブロック1から出土したNa2、ブロック2から出土したNa19・Na27の台形石器がある。Na19・27は素材となる剥片を横位に利用し、打面部側に背面側から整形加工し、その整形加工面から背面に平坦加工が施されるものである。Na2は素材剥片が薄かったためか平坦剥離が認められないが、そのほかの特徴は共通する。これらの台形石器にみられる一連の製作工程は、いわゆる「原の辻型台形石器」の製作技法に認められるもので、左側縁にノッチ状の加工がみられないタイプに該当する。原の辻型台形石器は、長崎県壱岐島の原の辻遺跡出土の台形石器にちなんで型式設定され（萩原・川道1981）、萩原博文氏によって詳細な製作技法の解明と編年の位置付けが行われている（萩原1983）。本遺跡の出土資料は中川和哉氏分類のB類に該当するものと思われる（中川1994）。規則性の高い工程で製作されることが指摘されている石器であり、本遺跡では明確な接合関係の把握にまで至っていないが、原の辻型台形石器と製作技術が共通する資料として捉えておきたい。また、ブロック4は示準となる石器が三稜尖頭器のみの出土となっており、特徴的なブロックであるといえる。

旧石器時代細石器文化期には、礫群1基のほか、ブロックを1か所として認定している。接合資料は確認されていないが、細石刃・細石刃核・敲石などが出土している。

細石刃核の分類については、これまで宮田栄二氏（宮田1993）や桑波田武志氏（桑波田1999）による論考がある。Na98は桑波田分類のBc類、99はAc類に該当すると考えられ、本遺跡から出土した細石刃核は若干の技術的な違いは認められるものの、いわゆる「野岳・休場型」の範疇に含まれるものと考えられる。

縄文時代早期には集石6基が検出されたが、1基以外は掘り込みを持たない平面的なもので、構成される礫の数も20～50個程度で、規模の小さなものと言える。また、縄文時代晩期になると、遺構・遺物共に急増することから、本遺跡の中心をなすと考えられる。遺構としては、土坑3基のほか、打製石斧集積が1基検出されている。土坑は楕円形を基本としているが、深さは50cmと1m程度のものがあり、性格の差を表している可能性もある。

ここで、出土した土器について、類別に時期と形式名をあてはめて考えておきたい。

早期に該当するのは出土した層位がIV層であることにより、1類から7類までであろう。1類は山形の、2類は楕円形のそれぞれ押型文が器面全体に施されていることから、前葉の押型文土器であろう。3類はやや開き気味の円筒形をしており、器面には貝殻腹線による縦方向の条痕がまばらに施文されていることから桑ノ丸式土器であろう。4類は円筒形の深鉢が頸部から大きく外反して

バケツ状となり、沈線及びそれに囲まれた部分に網目が付されることから塞之神式土器と言える。5類は口縁部の沈線や列点から平椀式土器と考えられる。6類は直線的な円筒形の外面全体に横な斜め方向の貝殻腹縁による条痕が付されることから前平式土器であると言えよう。7類は薄い器壁に貝殻腹縁の押圧や楔形の三角形の突帯が付されることからいわゆる加梁山タイプの土器と言える。8類は薄い器壁に貝殻による押し引き文が付されることから吉田式土器と言える。

前期に該当するのはIV層からの出土した土器の中で、9類から10類までであろう。9類は器壁が薄く、外面に短い沈線が連続して付されることで幾何学的となることから、曾細式土器であろう。10類も器壁は薄く、貝殻腹縁による条痕とみみず腫れ状の突帯が貼り付けられていることから、轟式土器であろう。

中期に該当するのはIIIb層から出土した土器の中で、11類から16類までであろう。11類は厚い器壁の内外両面に貝殻腹縁による条痕で器面調整された大きく開く器形の深鉢であることから、深浦系の条痕土器であろう。12類は薄い器壁の外面に細かな点状の刻みを付す突帯を貼り付け、突帯間には細い沈線が見られることから、深浦式土器であろう。13類も突帯が見られなだけで細かな沈線が同様に付されることから、深浦式土器の1類型と言えよう。14類も細い沈線のほかに列点や貝殻の肋と思われるU字状の押圧が見られるが、これも深浦式土器の1類型であると考えられる。15類は貝殻腹縁を向きを変えて繰り返して押圧することで波状の文様を作りだしているが、これも深浦式土器の1類型と捉えられる。16類は口縁部が大きく弧状に内湾してキャリバー状を呈することから、春日式土器と考えられる。

後期に該当するのはIIIa層から出土した土器の中で、17類から24類までであろう。17類は外面の口縁部付近に鉤状や長靴形などの沈線文が見られることから、指宿式土器であろう。18類は口縁部が三角形を呈する深鉢が中心となるもので、市来式土器であろう。19類は口縁部を肥厚して作り、幅の狭い口唇端部に縦方向の短い沈線とともに、縄目の文様を横に転がすもので、北久根山式土器と考えられる。20類は若干肥厚させた口縁部の外面に短く縦あるいは斜め方向の沈線を付すもので、出水式土器と考えられる。21類は口縁部に2本組の細い沈線を斜めに交互に付すことで格子状の文様を作りだしているものであるが、形式名は不明である。22類は外面に丸や四角の沈線を付し、その内部に摺糸を密に付けるもので、南福寺式土器であろう。23類は口縁部の両面に列点を何段かにわたって付すものであるが、形式名は不明である。24類はある程度の幅を持った口縁部に2条の沈線を巡らすもので、西平式土器であろう。

晩期に該当するのはIIIa層から出土した土器の中で、25類から40類までであろう。25類は幅の広い口縁部に3～5条ほどの幅の狭い沈線が巡るもので、上加世田式土器であろう。26類は頸部が明瞭な稜を持ち、大きく内傾するもので、入佐式土器と考えられる。27類は頸部の稜が不明瞭で、口縁部の内傾度も小さいものであるが、やはり入佐式土器の範疇で捉えてよいと考えられる。28類から33類までは刻目突帯文の土器である。28類は口縁部が大きく内傾しており、29類はそれよりも幾分傾斜が弱く、30類から段階的に傾斜がさらに弱くなる。31類になると口縁部はほぼ直立するようになる。32類から33類では完全に外反するようになっていることから、それ以前を夜白式土器と捉え、これ以降の土器を板付I式土器と捉えておきたい。34類は粗製の浅鉢、35類は組織痕土器、36類は篋目圧痕土器、37類は布目圧痕土器である。いずれも黒川式土器の1類型と考えられる。そのほかに底部や特殊な土器が見られる。これらはいずれも細分の余地はあると思われるが、今回は細片であることなどから細かく分けることはできなかった。本遺跡の中心をなす晩期の土器は口縁部と胴部に突帯文を持つ深鉢で、底部は安定した平底である。ただ、弥生時代の当初の甕も同様な形態を

持つことから、厳密に分けることはできなかったことから、この時期とした土器の中にも弥生時代に含まれるのか相当と考えられるものもあることを付記しておく。この時期の土器の中には北陸・関東地方に出自があると考えられる大洞式系の土器も見られ、注目に値する。これは、三角壺形の土製品及び石製品が北陸あるいは東北地方にその出自を求めるべきであるとの考えもあることから、これらの地域との交流・交易についても考えてみなくてはならない重要な問題を含んでいると言えよう。

縄文時代の石器は多様である。打製石鏃は深い挟りの入った長脚のものから浅い凹基及び平基のものまで、また細長い三角形から鈍角の三角形、円形、不整形を呈するものなど時期によって様々なタイプが見られる。そのほかの小型の石器には、石匙、石錐や楔形石器、スクレイパーなどがある。石匙には横型・縦型何れのタイプもある。大型の石器には、石斧に磨製のものとして乳棒状や定角式状のもの、打製のものは晩期に属すると考えられる深い挟り（括れ、以下括れ）の入ったラケット形のものを中心に、括れない撥形、短冊形などが少量出土している。この中で、深い括れを持つものは、横方向に2～3か所で折損している。打製石斧集積が1基確認されたことと考えあわせて、折損した打製石斧の製作及び保管、使用とそれによる折損について好資料が呈示されているのかも知れない。これについては、後ほど考察を行ってみたい。

磨石や敲石、その双方の機能を持つ磨敲石については、形状や作業面の位置などから分類した。また、石皿についても、使用する石材の当初の形状や使用面の磨りや凹みの程度、それから破損の状態から考えると、打製石斧の使用による折損とはまた異なった原因や要因が考えられることから、一考を要する問題であると思われる。石皿については、台石との機能差も考えるべきであろう。

弥生時代については、先ほども述べたように煮沸具と考えられている甕の形状において、縄文時代晩期の深鉢形土器との差異の認定が大きな問題であろう。刻み目を有する突帯文が口縁部や胴部上部に巡るという要素は同一であっても、それが伴っているその他の土器の器種によって、その属する時代・時期を判断せざるを得ない現状であってみれば、平面的な広がりを持つ遺跡の出土状況で、それに伴う別な器種が判然としない場合に、その属する時代・時期を明確にすることは極めて難しいことと言わざるを得ない。本遺跡の場合、壺形土器は明確に弥生時代に属すると考えて掲載したが、甕（あるいは深鉢形土器）について掲載していないのは、上記の考えによるものである。煮沸具である甕（あるいは深鉢形土器）を伴わない保存具の壺だけの器種構成というものはあり得ないことであることから、今後、セット関係の詳細な検討が必要となることは言うまでもない。縄文時代晩期とした刻目突帯文土器の中に稷痕の残るものが相当数あることも含めて検討を要する問題である。弥生時代の石器として明確なものとして磨製石鏃が出土している。点数は多くはないが、この遺物の出土が即戦闘状態を意味していることすれば、あまりにも少数の出土数であることから、当時の状況や環境等についての判断は慎重に行われるべきであると考えられる。

古墳時代には、在地的な性格の極めて強い土器である成川式土器が多数出土している。口縁部の形態が割合に明確な“く”字状を呈しているものが多いことから、本遺跡でも中心となるのは古墳時代の中でも割合に早い時期、5～6世紀頃と考えられる。器種も豊富で、甕、壺、高坏、鉢のほか、小型丸底壺（埴）や手捏ね土器なども見られる。成川式土器の中には、破片に稲穂の痕跡の残るものが数点見られるが、これらの土器が胎土に長石や石英、角閃石など当地で普遍的に見られる鉱物が含まれていることや、色調が赤～黄褐色を呈することなどからこの地域で作られた土器である可能性が高いことから、この地域のそれほど離れていない場所で稲作が行われていたことが考えられる。それは、本遺跡が九州の西側の、海岸からさほど離れていない場所に位置しており、しか

も、稲作が西日本に伝播したとされる縄文時代晩期、そうでなくても確実に弥生時代には当地域には人が住み着いており、土器の多さが人口の多さをある程度意味しているとすれば、古墳時代には確実に稲作が近隣のいずれかの場所で行われていたと考えることはあながち誤りであるとは言えないと思えるのである。

古代の遺物としては、土師器の甕や壺・坏・皿、それに須恵器の甕などが見られる。土師甕は口縁部が胴部と同程度あるいは若干肥厚しているもので、胴部が膨らみ、底部は丸底である。調整は、外面が刷毛目あるいは叩き目が見られ、内面はケズリ痕の見られるものが多い。壺や坏には内黒土師器や赤色土器もあるが、明確な黒書土器は確認されていない。須恵器は外面に格子状の、内面には同心円状あるいは平行の叩き目が見られるもので、大甕の破片と考えられる。

中世の遺物としては、青磁や白磁、染付がある。青磁は碗と考えられるもの、外面の連弁は明瞭ではない。白磁も全体の形状がわかるものは出土していない。染付は、描かれる模様は明瞭なもの極めて少数である。

近世になると、陶器の出土数が多くなっていく。本県の特徴的な陶器である薩摩焼の中でも、庶民の日常雑器と言われる“黒薩摩”（いわゆる黒もの）が多く出土している。本市には、当地域から南約2.5km離れたところに薩摩焼の窯跡が多数残っていることから、当地からの流通品と考えられる。甕や茶家（ちゃか）などが多く、摺鉢や捏ね鉢なども見られる。このような在地の陶器ばかりでなく、他地域からの流入品も若干見られる。唐津や伊万里などからのものと考えられる。

遺構として道跡が多く検出されているが、これらの遺構の正確な使用時代・時期については明確にはし得ないものかほとんどであった。それは、道跡遺構に伴って土器を中心として遺物も出土しているものの、それによって確実な時代・時期としうるのか、という根本的な解決すべき問題があるからに他ならない。

調査を開始した頃には、調査地点から若干離れた西側を幅員約4mの道がほぼ南北に通っていたほか、4地点との間をほぼ東西に横切る道が主要な道として機能していた。南北方向の道は、その延長がその後の発掘調査によって第4地点の北側に検出された旧薩摩街道（出水筋）につながるものと考えられた。つまり、近世の街道が、あるいは地中に深く埋もれ、あるいはまた、現代まで埋もれずに使用されて来たということが、発掘調査で明確になってきたのである。これら2本の現道以外には、当時あった家や畑に行くための道しかなかったわけであるが、発掘調査によって調査開始時には埋もれていた道が次々に顔を出して来たばかりでなく、本調査で検出した遺構の中で最も多い数を道跡が占めてきたのである。検出した層位も上位から下位まで種々あることから、古くは古代、ひよっとすると古墳時代、あるいは縄文時代晩期にまで遡る可能性があるほか、新しくは開発に伴って深く埋もれてはいたものの、つい最近まで使われていた道跡もある可能性も考えられる。そして、それらの道跡は、ほとんどと言っていいほどに南北方向を向いているのである。これは調査を行った第5地点の地形自体が東に対して傾斜していることによると考えられる。つまり、遠見番山から東の方向に割合に急な傾斜で下がっている地形のこの場所において、東西方向に山から低地へと降りる道ではなく、南から北（あるいは逆）に本地域を通り抜ける道であったことが判明したのである。調査か所の北端では上下に幾層にも重なっている様子が観察されたほか、そこより若干南側では同じような方向でありながら、東西方向にずれた状態で検出されており、これの原因が何によるものか興味のあるところではあっても、調査では明確にすることはできなかった。

2年次にわたる発掘調査によって、南九州自動車道の道路敷となった市ノ原遺跡（第5地点）の調査範囲は失われてしまったが、第199図に示すように、西側の現道にかけての部分と、東側の緩や

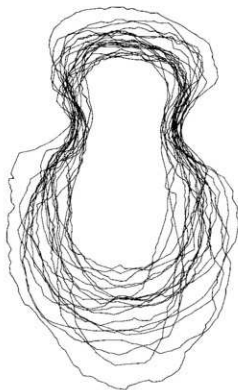
か東側への傾斜面の部分については遺構・遺物の残存している可能性が極めて大きいことから、今後の開発については日置市教育委員会に照会のうえ、協議を行う必要がある。

## 第2節 考察

### (1) 打製石斧の形状・折損部位と使用方法について

本遺跡の中心をなす縄文時代晩期の出土遺物のなかに大量の打製石斧がある。これまで各研究者によって有肩石斧・石鎌・打製土掘具などと呼ばれているものである。本遺跡で出土した打製石斧には完形品（未使用品あるいは最終的な残存状況によって見かけ上の完形品として捉えられるものを含む。以下完形品と呼称する。）のほか、折損しているものが極めて多く認められるのが特徴である。これらの折損は使用によって生じたものと考えられ、刃部に使用による縦方向の摩耗痕や刃こぼれが見られることから推定される。ここでは打製石斧に認められる折損部位や形状差から使用方法や固定法について考えてみたい（註1）。

まず折損の部位による最終的な残存形態を1～15に分類し、第78図に示した。全体的に括れ部を挟んだ上下の部位で横方向に折損しているものが多く認められる。これは括れ部が木柄に結束して固定する部位であるとした場合、石斧の使用によって固定部に不規則で強い力が継続的にかかったため、耐えきれずに折れてしまったものと考えられる。また、括れ部と刃部の中間付近が折損しているものは、使用による継続的な強い力がある一瞬にさらに強く加わったために破損したものと考えられる。これらの折損の理由は大きく2つに分類が可能である。①は打ち付け時の衝撃によって生じた刃こぼれ（欠け）および斧身の折れであり（模式図の2・5・12・14）、②に固定部にかかった不規則な力による圧力での折れと考えられるもの（模式図の3・4・6・7・13・15）である。その他（8～11）については①・②の複合形と考えられるものである。斜め方向の折れは石斧を打ち付けた後に土を引き起こす動作や側縁部を使用して土を動かす動作があったことを想定させる。No105・107・108・1234などには基部から括れ部にかけて木柄との固定によって生じたと考えられる摩擦痕が残存することから、3・8・13などの折損部は、木柄の固定部端である可能性も考えられる。折損部位と固定によって生じた摩擦痕の詳細な観察によって固定部の長さを把握することも可能となるであろう。次に打製石斧の形状差について考えてみたい。



第200図 打製石斧多重投影図

I類～III類（括れ部のあるもの）として分類した完形品のシルエットを固定部と考えられる括れ部を中心に投影したのが第200図である。この多重投影図から受ける全体的な印象として、括れ部の幅は大きな差がなくまとまる傾向にあるものの（最小3.2～最大5.7cm，平均4.88cm・基部厚は1.0～2.4cmで、類別による傾向は見出せ

ないようである), 刃部および側縁部方向においては器幅に大きな差を生じていることである。刃部方向からの器長の減少は, 縦方向の使用による刃こぼれや破損, あるいは再加工・再利用によるものとして理解できるが, 側縁部方向からの器幅の減少をどう捉えるかであろう。これを理解するために出土資料の観察から得た視点をいくつか列挙したい。①刃部の残存形状に斜刃状(石斧集積 Na107・108・1222・1288・1289)や三角形(Na1281~1285)を呈する刃部があること。これらは持ち手との関係による刃部から側縁部方向へかけての使い減り(片減りや表裏付け替えによる両減り)や斜め方向への破損として捉えられること, ②Ⅲ類とした石斧に側縁部を横方向に使用した使い減りや摩滅痕が認められること(Na1233・1234や石斧集積のNa107), ③Ⅰ・Ⅲ類の側縁部の刃部角を比較した場合, Ⅰ類は比較的鋭角(Na106の左側縁部角18°・右側縁部角29°, Na961の左側縁部角33°, 右側縁部角46°, Na963の左側縁部角47°, 右側縁部角28°など)になるのに対し, Ⅲ類は(Na105の左側縁部角67°, 右側縁部角48°, Na1233の左側縁部角48°, 右側縁部角79°, Na1236の左側縁部角55°, 右側縁部角47°など)でやや鈍角となる傾向があること, である。これらの点から打製石斧はⅠ類を原形とし, 縦・横両方向の使用や破損, 再加工, 再利用を繰り返す中で縦横両方向への変形や側縁部角の鈍化が生じ, 最終的な残存状況によってⅠ類とⅢ類の間にみられるような形状差となったものとして捉えられる可能性がある。また, これらの打製石斧の使用方法としては, 第1に横方向の折損や刃部の刃こぼれ, 摩滅痕などを根拠として縦方向の動作(打ち込み, すくい上げ, ほぐす, さらう, あつめるなど)を伴うことが考えられること, 第2に側縁部の刃部角の鈍化や摩滅痕などから, 持ち手を回転させた上で側縁部を使用した横方向の動作(土ならしや除草など)があったことが想定される。固定法については, 括れ部には木柄との固定性を高めるため敲打による刃潰し状の加工を施すものが認められるほか(962・964・1210・1213・1216・1221・1226・1233・1235・1236・1238), 固定後の使用によって生じたと思われる摩擦痕を観察できることから, 本遺跡から多量に出土する折損した打製石斧は, 現在の鎌のように, 木の本体部分と枝の部分を利用した膝柄(ひざえ)に装着して使用する形態であったと考えられる。

## (2) 落し穴について

落し穴が4基確認されたが, 3基は2~3個の逆茂木痕を有するもので, 1基にはその痕跡は確認されなかった。平面の形状は何れも細長い長方形から若干隅が丸みを帯びる長方形であるが, 短軸と長軸の比で見ると, 逆茂木痕の確認されなかったものが0.25, 逆茂木痕を持つものが0.32~0.47となることから, 形態の差として特徴付けるのであれば, 逆茂木痕の有無によって形態が異なっていることが可能かもしれない。そうであれば, 時期差にも係わって来る可能性も出て来よう。埋土の状況から逆茂木痕のないものは旧石器時代(細石器文化期)に, また, 逆茂木痕のないものは縄文時代のもつと判断した。今後の類例の増加を期待したい。

## (3) 靱痕について

縄文時代晩期の刻目突帯文土器と古墳時代の成川式土器の破片に靱痕の付着が認められた。1遺跡から2~3点程度出土することはそれほど珍しいことではないが, 本遺跡では複数の時代の靱痕土器が, 遺跡の規模がそれほど大きいとは思えないにもかかわらず割合に多数出土しており, 注目に値するものと考えている(図版44下段参照)。

縄文時代晩期の土器は刻目突帯文土器であることから, この形式の土器をもって弥生時代早期あるいは前期とする考え方もあり, 靱痕が見られることはこの考えを支持するものとして受け入れら

れることであろう。この時期の5点の土器片の7か所に榎痕が見られる。器種は深鉢または甕形土器である。外面だけでなく、内面にも残るものもあり、また、1点の土器片に複数の榎痕が残っているものもある。このことから、少なくともこれらの土器を製作したところでは、榎が周囲に散在していた様子がうかがえる。また、古墳時代の土器は、在地的な性格の強い土器で、成川式土器と呼ばれている。このうちの4点の土器片の7か所に榎痕が見られる。器種は甕である。

これらの榎痕を、当センターの電子顕微鏡で観察及び撮影して検計を行った。その結果、これらの榎痕を計測する限りは、短粒種のジャポニカ種と考えられるという所見であった。

### 第3節 今後の課題

本調査を通じて解明できなかった課題も残っている。その主なものとしては、①石器の形態による時期比定、②突帯文土器の時期区分、特に縄文時代晩期と弥生時代前期の土器のセット関係、③三角錐形土・石製品の出自及び系統・伝播ルート、④各時代・時期の住居の場所、⑤稲作の伝播時期と耕作場所、⑥各時代・時期の(集落)景観、などである。資料の増加に期待をかけた。

(註1) 打製石斧にみられる形状差や折損、使用方法等に関する視点については、山田昌久氏(首都大学東京都市教養学部助教授)から貴重な指導・助言をいただいた。

#### 〈参考・引用文献〉

- 萩原 博文・川道 寛 「田助遺跡発掘調査概報」『九州の旧石器文化(1)』九州旧石器文化研究会・長崎県旧石器文化研究会 会
- 萩原 博文 「原の辻型古形石器について」『人間・遺跡・遺物』(麻生 優編)1983 文獻出版
- 中川 和哉 「原の辻型古形石器に関する若干の考察」『百花台東遺跡』1994 同志社大学文学部考古学研究室
- 桑波田武志 「細石刃文化期における石材利用状況と細石刃核の分類(1)―石材と技術からみた核細石刃核の評価―」『鹿児島考古』第32号 1998 鹿児島県考古学会
- 萩 幸二 「九州地方の角錐状石器の製作技術に関する一考察」『九州旧石器』第4号 一橋昌信先生還暦記念特集号―2000 九州旧石器文化研究会
- 白石 浩之 「角錐状石器の分布論的研究―九州の角錐状石器の分布論的視点―」『九州旧石器』第4号 一橋昌信先生還暦記念特集号― 2000 九州旧石器文化研究会
- 宮田 栄二 「細石刃の打面と頭部調整について―細石刃製作技術の追求のために―」『九州旧石器』第4号 一橋昌信先生還暦記念特集号― 2000 九州旧石器文化研究会
- 馬籠 亮道・長野 真一 「角錐状石器の製作技術について」『九州旧石器』第8号 2004 九州旧石器文化研究会
- 山田 昌久 「縄文時代の鉤類について―集落整備の土工具としての鋤鍬と日本列島における縛り固定鉤の承譜―」『人類誌集報』1999 東京都立大学考古学報告4
- 大坪 志子 「九州地方の縄文時代硬玉製品」『玉文化』創刊号 2004 日本玉文化研究会
- 「大牟田遺跡ほか3遺跡」吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1985 吾平町教育委員会
- 「水の谷遺跡」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 1986 鹿屋市教育委員会
- 「塚ノ越遺跡ほか2遺跡」吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 1990 吹上町教育委員会
- 「榎崎B遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(4) 1993 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 「小牧3A遺跡・岩本遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(15) 1996 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 「桐木遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(75) 2004 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 「大坪遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(79) 2005 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 「藤平小田遺跡」南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 2002 南種子町教育委員会

## 分 析 結 果



# 鹿児島県，市ノ原遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

## 1. 市ノ原遺跡における植物珪酸体（プラント・オパール）分析

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（ $\text{SiO}_2$ ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。

### 2. 試料

分析試料は、J-17区、D-12区、H-12区、H-13区の4地点から採取された計20点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

### 3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対して直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g添加  
（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}\text{g}$ ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヨシ属（ヨシ）の換算係数は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

## 4. 分析結果

### (1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定

量を行い、その結果を表1および図1～4に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ族型

〔イネ科—タケ亜科〕

ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科—その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、その他

## （2）植物珪酸体の検出状況

### 1) J-17区（図1）

IIIa層（試料1）とIIIb層（試料3）について分析を行った。その結果、IIIb層（試料3）では、棒状珪酸体が比較的多く検出され、キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族型、クマザサ属型なども検出された。また、クスノキ科などの樹木起源も比較的多く検出された。IIIa層（試料1）でも同様の結果であるが、同層ではススキ属型、ミヤコザサ節型、およびブナ科（シイ属）なども検出された。棒状珪酸体はおもにイネ科植物の結合組織細胞に由来しているが、イネ科以外にもカヤヅグサ科やシダ類などでも形成される。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。

### 2) D-12区（図2）

IIIa層（試料2）とIIIb層（試料4）について分析を行った。その結果、J17区と同層準とおおむね同様の結果であるが、ここではススキ属型やウシクサ族型が比較的多く検出された。

### 3) H-12区（図3）

IV層（試料3）からVIIa層（試料16）までの層準について分析を行った。その結果、VIIa層（試料15、16）では植物珪酸体がほとんど検出されなかった。VIC層（試料13）ではミヤコザサ節型や棒状珪酸体が比較的多く検出され、ウシクサ族型やクマザサ属型なども検出された。VIIb層下部（試料11）ではミヤコザサ節型が大幅に増加しており、クスノキ科などの樹木も少量検出された。VIIb層上部（試料9）からVb層（試料7）にかけては、クマザサ属型がやや増加しており、ミヤコザサ節型は減少傾向を示している。また、Vb層ではススキ属型が出現している。Va層（試料5、6）ではクスノキ科が増加傾向を示し、ブナ科（シイ属）も検出された。IV層（試料3、4）ではクスノキ科がさらに増加しており、クマザサ属型やミヤコザサ節型は減少している。

### 4) H-13区（図4）

VIIa層（試料1）からVIIa層の下層（試料5）までの層準について分析を行った。その結果、全体

的にミヤコザサ節型や棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族型やクマザサ属型なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、全体的にミヤコザサ節型が卓越していることが分かる。

#### 5) イネ科栽培植物について

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネをはじめオオムギ族(ムギ類が含まれる)、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属型(シコクビエが含まれる)、モロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

### 5. 植物珪酸体分析(プラント・オパール)から推定される植生と環境

以上の結果から、市ノ原遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

旧石器時代遺物包含層のVIIa層から桜島薩摩テフラ(Sz-S, 約1.1~1.2万年前)直下のVIa層にかけては、クマザサ属(おもにミヤコザサ節)などのササ類を主体としたイネ科植生が継続されていたと考えられ、とくにVIb層の堆積当時はミヤコザサ節が繁茂する状況であったものと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属ネザサ節は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、両者の推定生産量の比率である「ネザサ率」の変遷は、地球規模の氷期-間氷期サイクルの変動とよく一致することが知られている(杉山・早田, 1996)。ここでは、クマザサ属が圧倒的に卓越していることから、当時は寒冷な気候条件下で推移したものと推定される。また、クマザサ属のうち、チシマザサ節やチマキザサ節は現在でも日本海側の寒冷地などに広く分布しており、積雪に対する適応性が高いが、ミヤコザサ節は太平洋側の積雪の少ないところに分布している(室井, 1960, 杉山・早田, 1997)。VIb層より下位ではミヤコザサ節が卓越していることから、当時は寒冷で乾燥した気候環境であったものと推定される。

クマザサ属は氷点下5℃程度でも光合成活動をしており、雪の中でも緑を保っていることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている(高槻, 1992)。気候条件の厳しい氷期にクマザサ属などのササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

桜島薩摩テフラ混のVb層からVa層にかけては、ササ類が減少してススキ属やチガヤ属などが見られるようになったものと推定される。ススキ属やチガヤ属は日当りの悪い林床では生育が困難であることから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく、比較的開かれた環境であったものと推定される。

その後、Va層上部の時期には、周辺でクスノキ科やブナ科(シイ属)などの照葉樹林が成立したものと推定される。南九州の沿岸部では、約7,500年前にはシイ属を主体とした照葉樹林が成立していたと考えられており(杉山, 1998)、本遺跡周辺でも同様の状況であったものと推定される。

縄文時代後期~晩期の遺物包含層とされるIIIa層の堆積当時は、ススキ属やチガヤ属などが生育する開かれた環境であったと考えられ、周辺にはクスノキ科やブナ科(シイ属)などの照葉樹林が分布していたものと推定される。なお、同層準ではイネ、ヒエ、アワなどのイネ科栽培植物の検出が期待されたが、今回の調査ではこれらの植物珪酸体は認められなかった。

#### 参考文献

- 杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点. 植生史研究, 第2号, p.27-37.
- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.
- 杉山真二・早田勉 (1996) 植物珪酸体分析による宮城県高森遺跡とその周辺の古環境推定—中期更新世以降の水期—間水期サイクルの検討—. 日本第四紀学会 講演要旨集, 26, p.68-69.
- 杉山真二・早田勉 (1997) 南九州の植生と環境—植物珪酸体分析による検討—. 月刊地球, 19, p.252-257.
- 杉山真二・早田勉 (1997) 植物珪酸体分析による古環境推定—ササ類の植生変遷と積雪量の変動—. 日本第四紀学会 講演要旨集, 27, p.134-135.
- 杉山真二 (1998, 投稿中) 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史. 植生史研究.
- 高槻成紀 (1992) 北に生きるシカたち—シカ, ササそして雪をめぐる生態学—. どうぶつ社.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 室井純 (1960) 竹笹の生態を中心とした分布. 富士竹類植物園報告, 5, p.103-121.

表1 鹿児島県、市ノ原遺跡5地点における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群/試料	J-17			D-12			H-12									H13							
	1	3	2	4	3	4	5	6	7	8	9	10	13	15	16	1	2	3	4	5			
イネ科																							
キビ族型		7					22	7	14	14	22										7		
ヨシ属		7						7															
ススキ属型	49		157	51	7	22	52	7	7												7		
ウシクサ族型	91	22	165	66	63	66	52	101	72	29	51	52	7			37	22	14			22		
タケ亜科																							
ネザサ節型							15	7													7		
クマザサ属型	7	15	30		28	37	52	43	129	186	140	81	14			66	29	36	15		7		
ミヤコザサ節型	63		15	7	7	15	37	43	43	86	169	376	130	38		234	352	289	192		119		
未分類等			37	66	14	15	74	36	50	57	140	29	22			59	144	87	59		15		
その他のイネ科																							
表皮毛起源					14	15		7		14	15	15	14			15	22				15		
棒状珪酸体	245	112	217	212	134	139	312	231	316	308	589	324	166			271	359	246	185		82		
未分類等	455	350	644	490	317	381	490	484	460	480	618	546	360	7	30	592	596	477	473		334		
樹木起源																							
フナ科 (シイ属)	28		7	22	14		7																
クスノキ科	77	82	142	146	49	95	59	7				15											
その他	14	74	37	15	7	22	7		7			7									7	7	7
植物珪酸体総数	1029	670	1452	1075	656	807	1181	982	1093	1181	1743	1445	713	7	68	1280	1529	1163	647		602		

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

ヨシ属	0.47						0.46															
ススキ属型	0.61		1.95	0.63	0.09	0.27	0.64	0.09	0.09							0.09						
ネザサ節型							0.07	0.03								0.03						
クマザサ属型			0.05	0.11	0.22	0.21	0.27	0.39	0.32	0.97	1.40	1.05	0.61	0.11		0.49	0.22	0.27	0.11		0.06	
ミヤコザサ節型	0.19		0.04	0.02	0.02	0.04	0.11	0.13	0.13	0.26	0.51	1.13	0.39		0.11	0.70	1.06	0.87	0.58		0.36	

タケ亜科の比率 (%)

ネザサ属型							12	7													3
クマザサ属型	22	100	83		91	86	68	66	88	84	67	35	22			41	17	24	16		14
ミヤコザサ節型	78		17	100	9	14	19	27	12	16	33	65	78	100		59	81	76	84		86

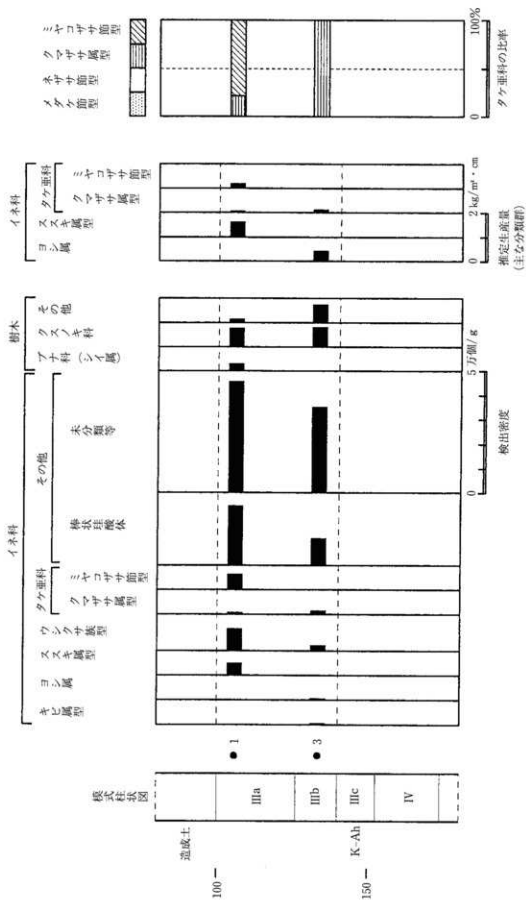


図1 市ノ原遺跡5地点、J-17区における植物珪酸体分析結果

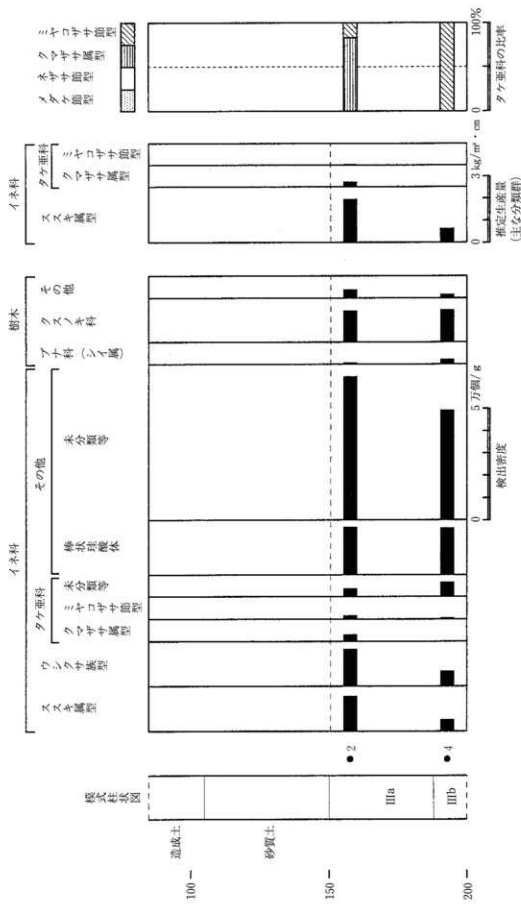


図 2 市ノ原遺跡 5 地点、D-12区における植物珪酸体分析結果

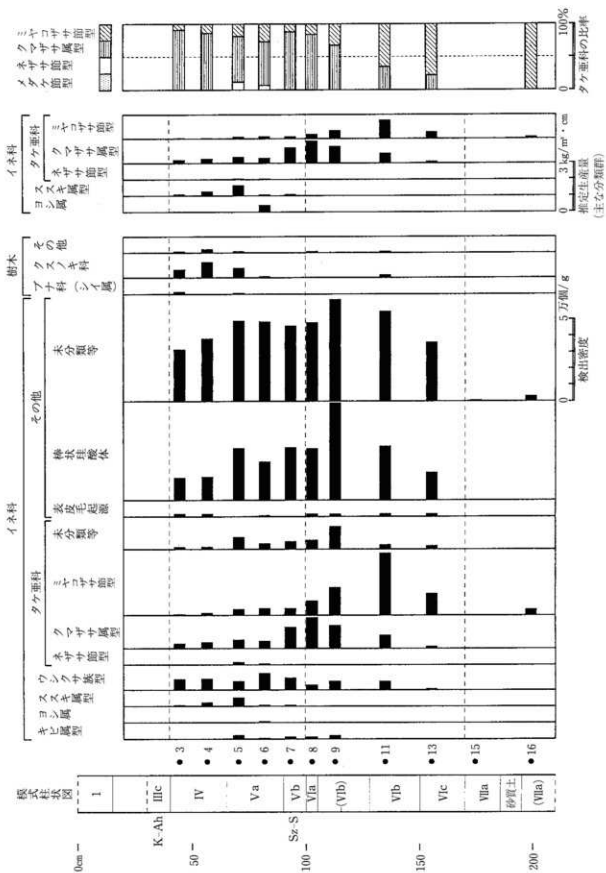


図3 市ノ原遺跡5地点、H-12区における植物珪酸体分析結果



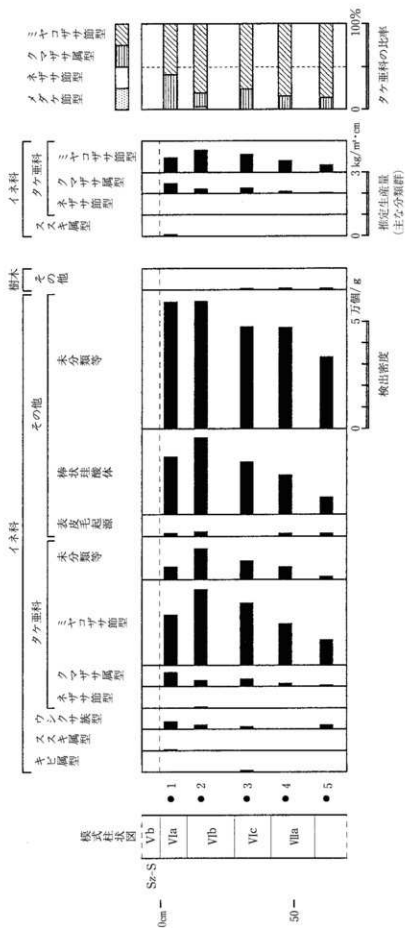
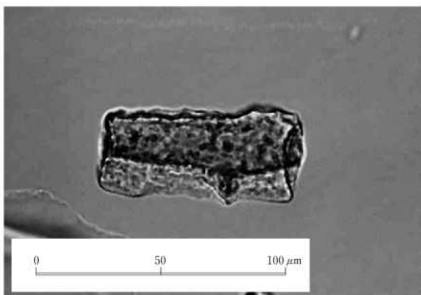


図 4 市ノ原遺跡5地点、H-13区における植物珪酸体分析結果

## 植物珪酸体の顕微鏡写真

(倍率はすべて400倍)

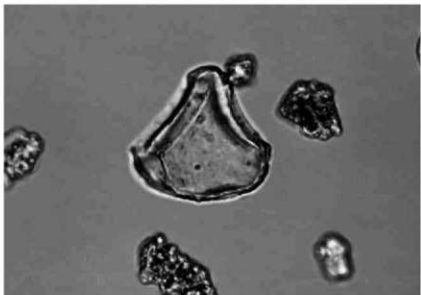
No.	分類群	地点	試料名
1	キビ族型	H-12区	7
2	キビ族型	H-12区	5
3	ススキ属型	J-17区	1
4	ウシクサ族型	H-13区	5
5	クマザサ属型	H-13区	1
6	ミヤコザサ節型	H-12区	4
7	棒状珪酸体	H-12区	5
8	ブナ科 (シイ属)	D-12区	2
9	クスノキ科	J-17区	1



No. 1

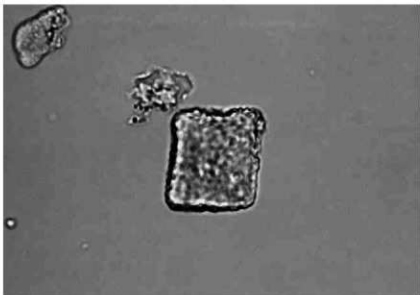


No. 2

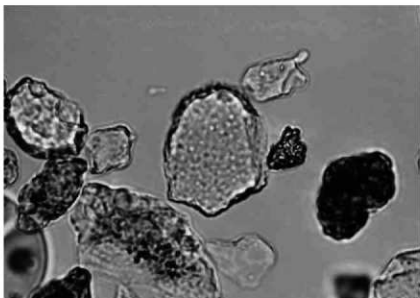


No. 3

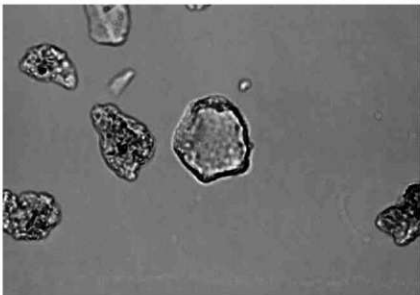
No. 4

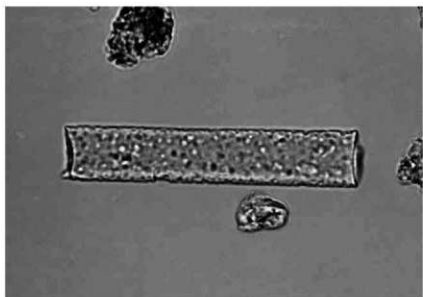


No. 5

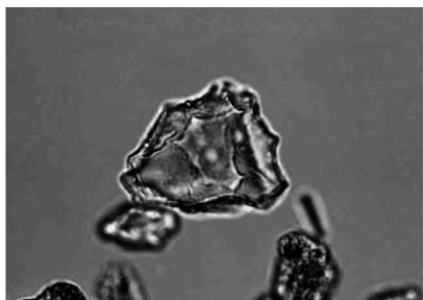


No. 6

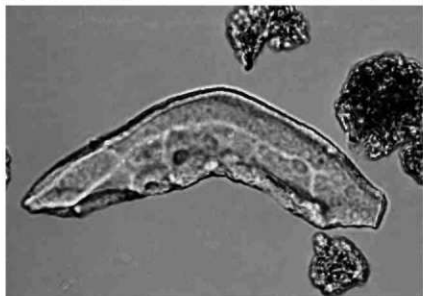




No. 7



No. 8



No. 9

## II. 市ノ原遺跡における花粉分析

### 1. 試料

試料は、H-12区のVIa層（試料8）、VIb層（試料9、11）、VIc層（試料13）、VIIa層（試料15）の5点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

### 2. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイファン（一）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類したが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

### 3. 結果

分析の結果、樹木花粉1、草本花粉2の計3分類群が検出された。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。

### 4. 考察

H-12区のVIa層、VIb層、VIc層、VIIa層について分析を行った。その結果、VIa層（試料8）からコナラ属コナラ亜属とキク亜科、VIc層（試料13）からイネ科が検出されたが、いずれもごく少量である。おそらく、乾燥の土壌生成作用によって花粉が分解されたものと考えられる。

### 参考文献

中村純（1973）花粉分析、古今書院、p.82-110。

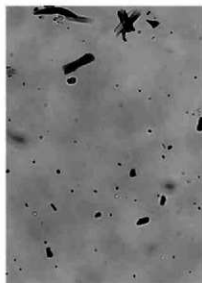
- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
- 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 中村純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
- 中村純 (1974) イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として, 第四紀研究, 13, p.187-193.
- 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

表1 市ノ原遺跡における花粉分析結果

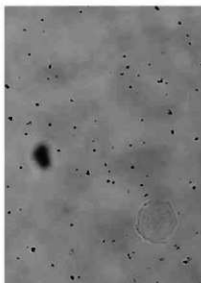
学名	分類群	和名	H-12区				
			8	9	11	13	15
Arboreal pollen		樹木花粉					
Quercus subgen. Lepidobalanus		コナラ属コナラ亜属	1				
Nonarboreal pollen		草本花粉					
Oryza type		イネ属型				1	
Asterioideae		キク亜科	1				
Arboreal pollen		樹木花粉	1	0	0	0	0
Nonarboreal pollen		草本花粉	1	0	0	1	0
Total pollen		花粉総数	2	0	0	1	0
Fern spore		シダ植物胞子	0	0	0	0	0
Unknown pollen		未同定花粉	0	0	0	0	0



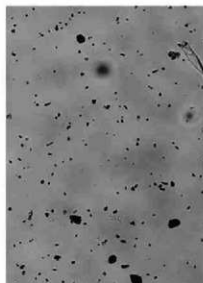
市ノ原遺跡の花粉分析写真



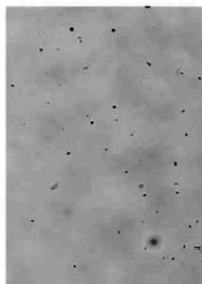
1 H-12区-8



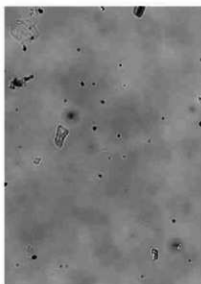
2 同-9



3 同-11



4 同-13



5 同-15

————— 180  $\mu$ m

# 写 真 图 版



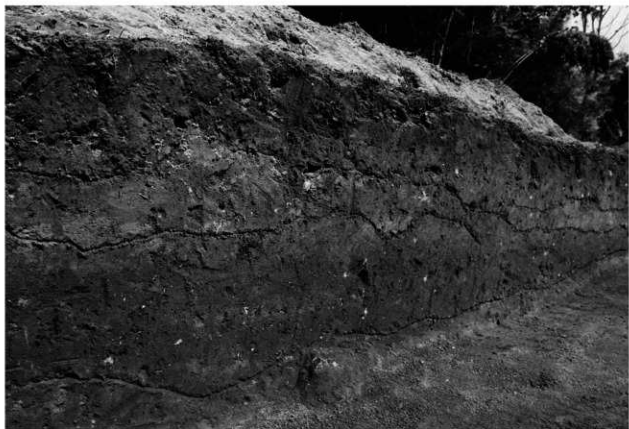
遺跡遠景

(西より)



遺跡近景

(南より)



標準土層



標準土層



遺物出土状況（細石器文化期）



遺物出土状況（Ⅲa層）



礫群



2号落し穴



3号落とし穴



逆茂木痕 (2号落とし穴)



3号落し穴



逆茂木痕 (3号落し穴)

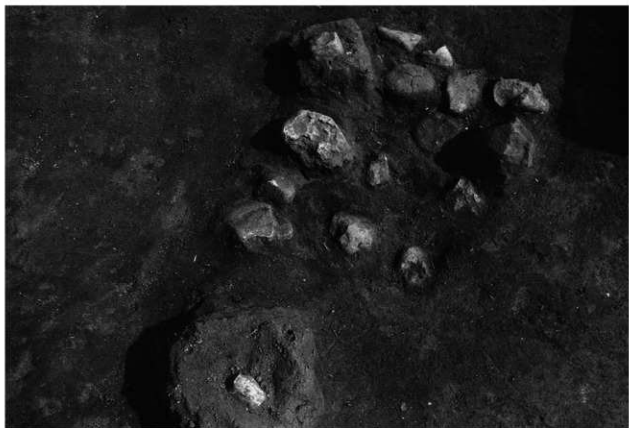




4号集石



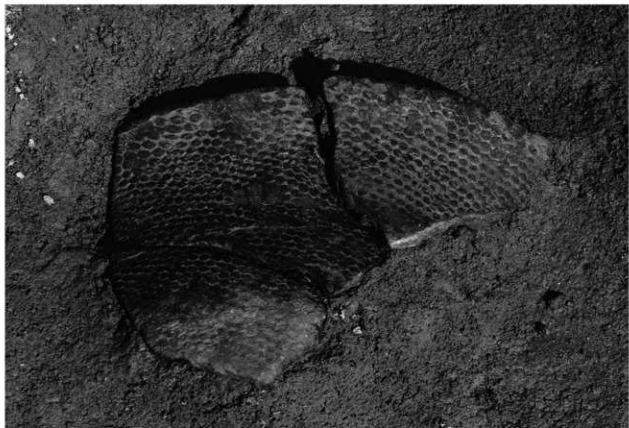
6号集石



6号集石



6号集石



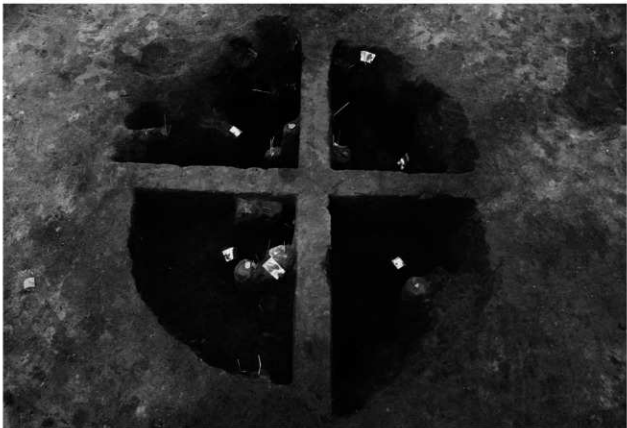
椭圆形押型文土器出土状况



山形押型文土器出土状况



1号土坑



2号土坑



3号土坑



石斧集積



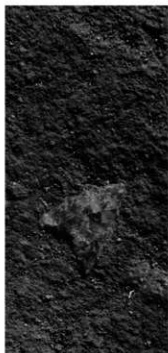
石皿出土状況



磨石出土状況



1523 磨製石鏃出土状況



打製石鏃出土状況



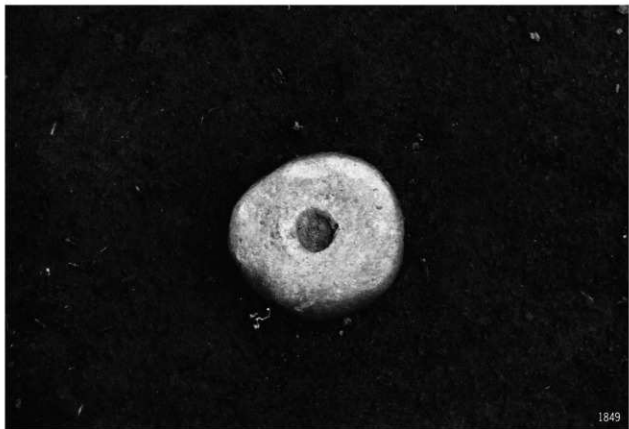
スクレイパー出土状況



打製石斧出土状況



磨製石斧出土状況



紡錘車出土状況



紡錘車出土状況

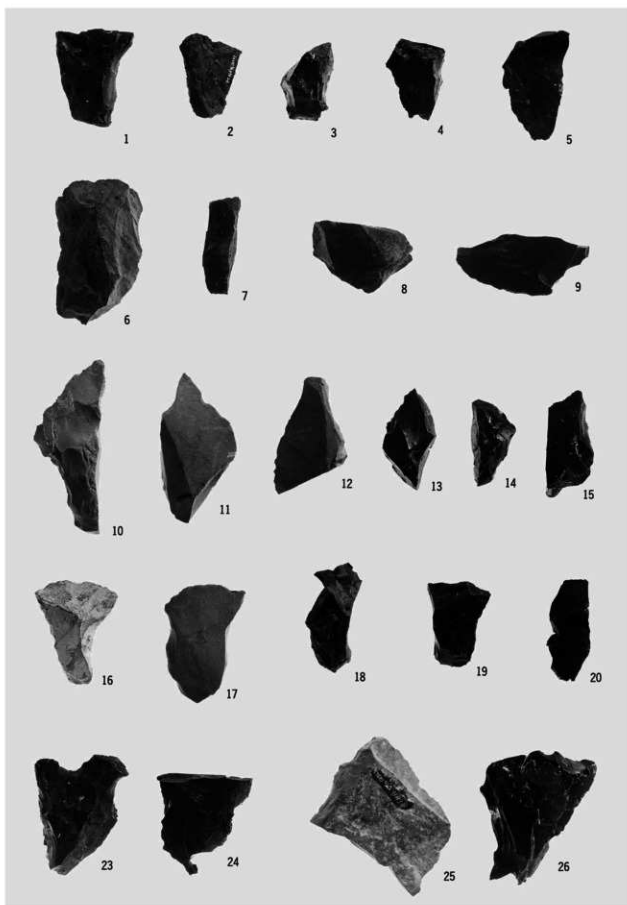




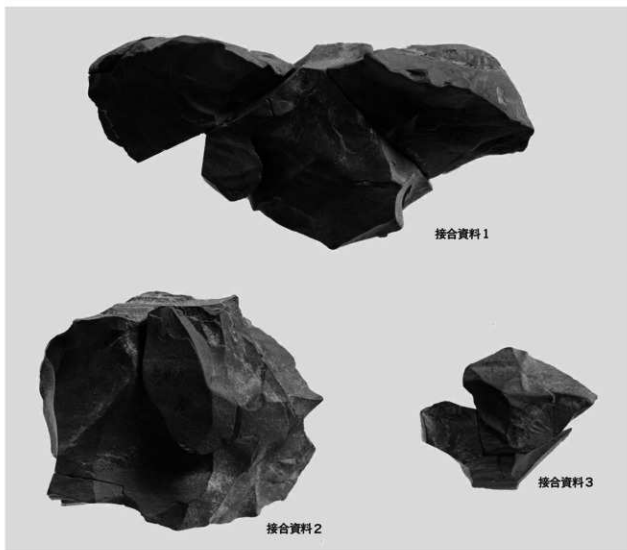
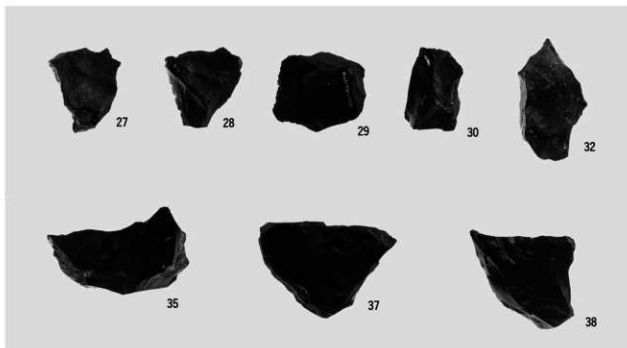
道跡 (D・E-13~16区上面)



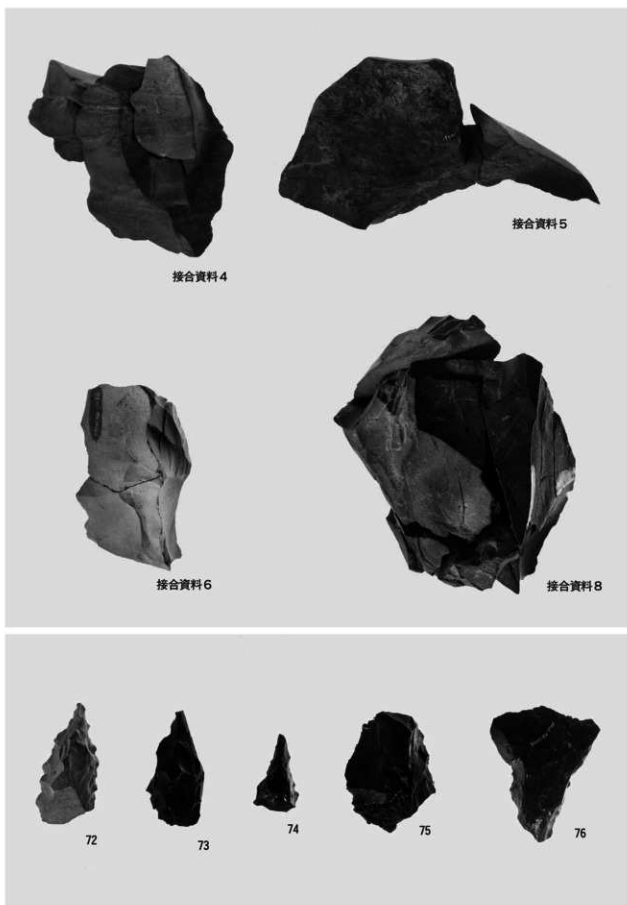
道跡 (D・E-13~16区下面)



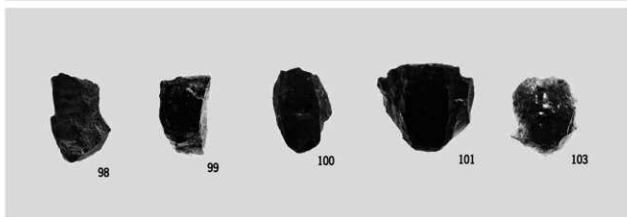
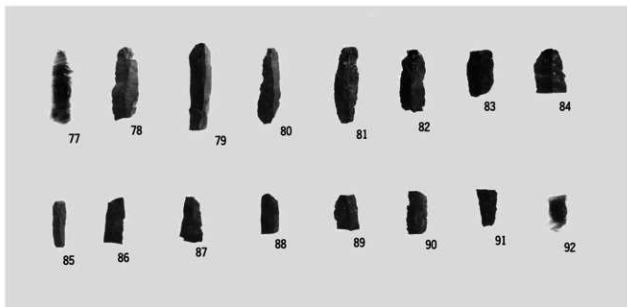
ナイフ形石器文化期の石器 (1)



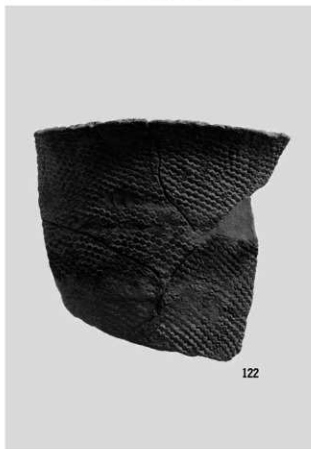
ナイフ形石器文化期の石器 (2)



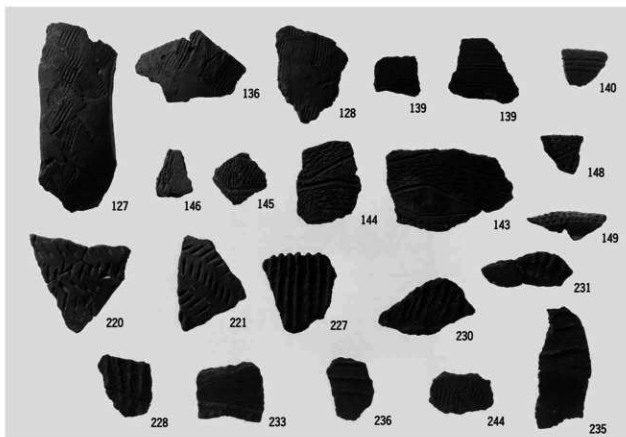
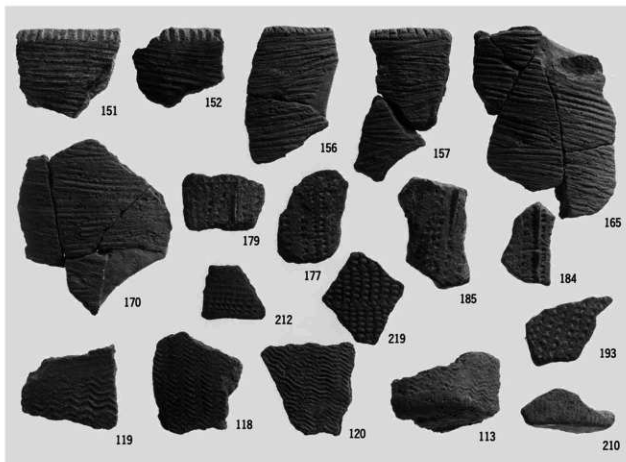
ナイフ形石器文化期の石器（3）



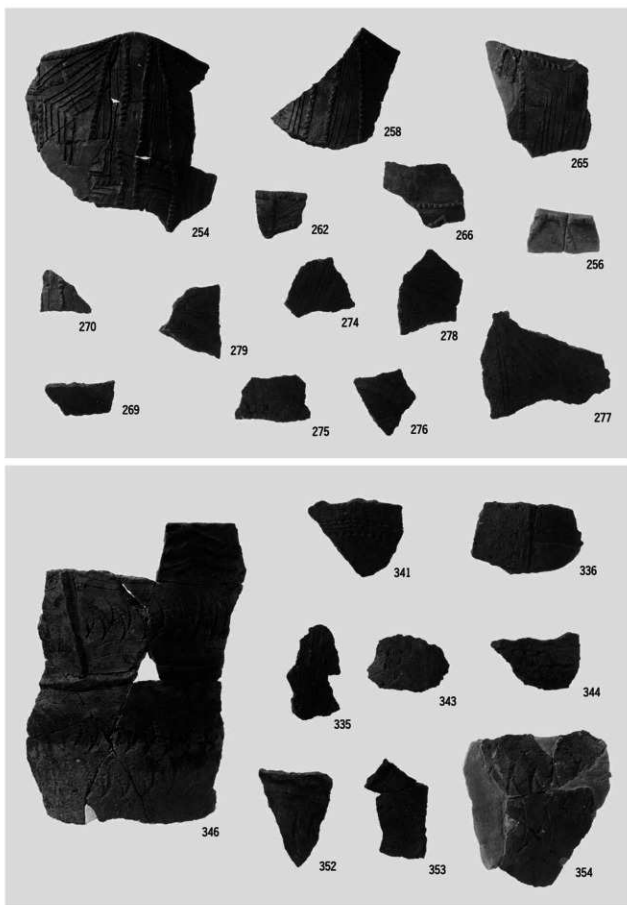
細石器文化期の石器ほか



縄文時代早期土器

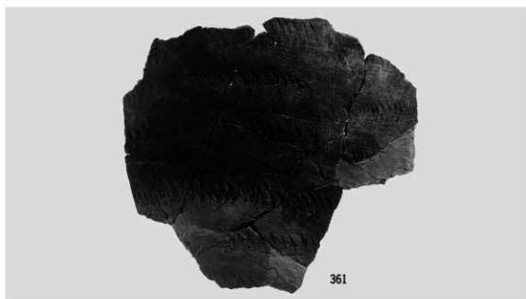


縄文時代早期～前期土器

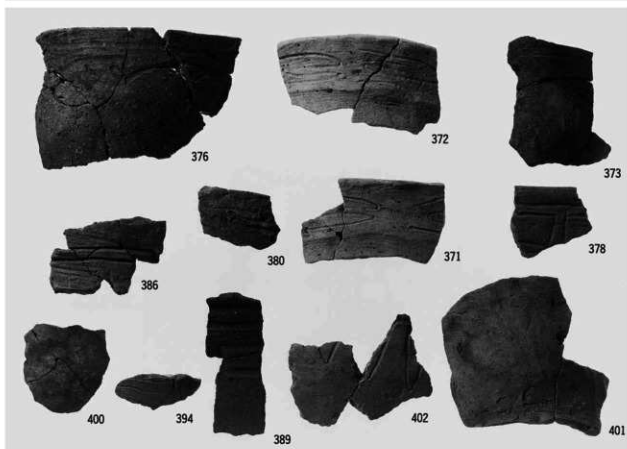
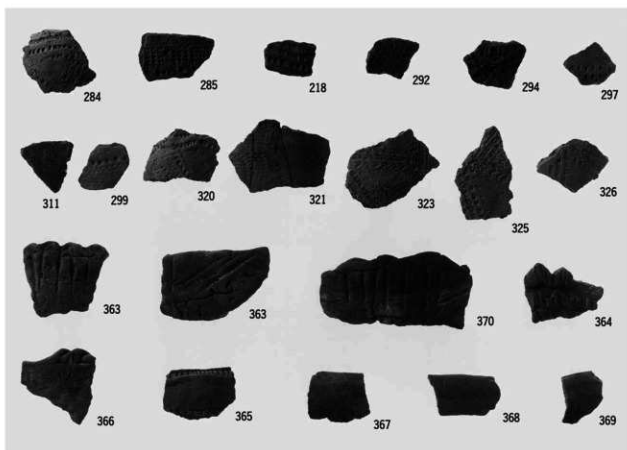


縄文時代中期土器 (1)

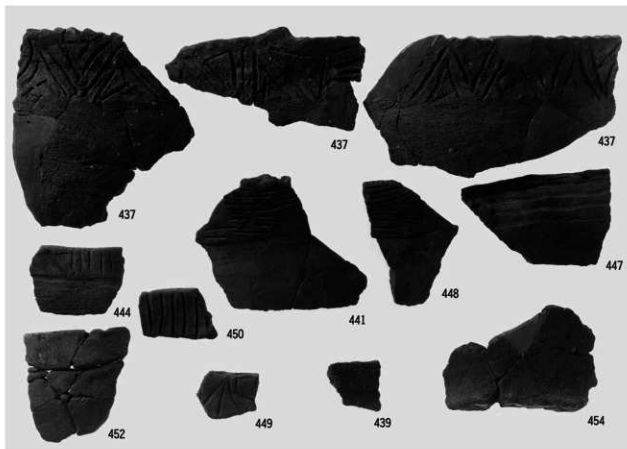
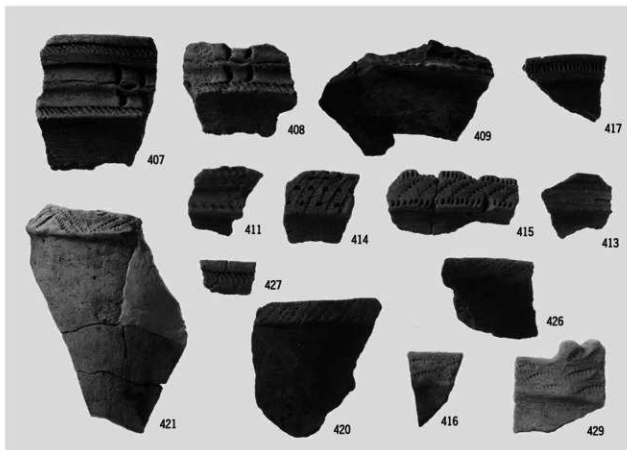




縄文時代中期土器（2）



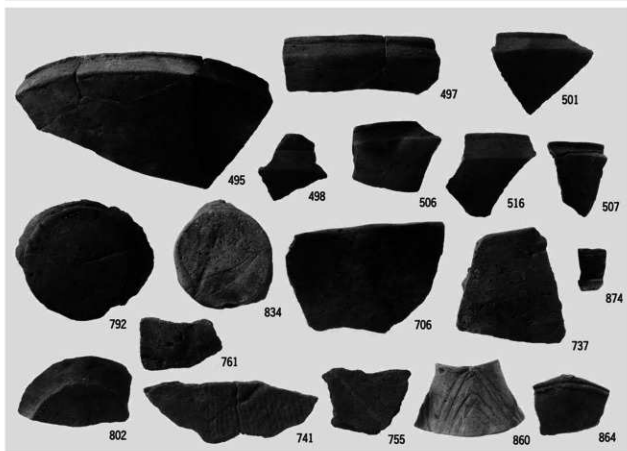
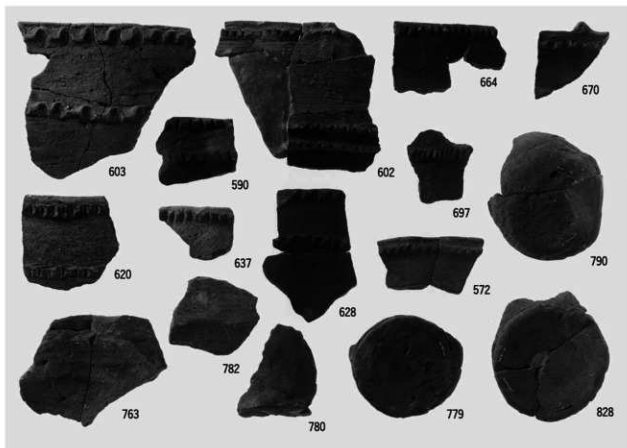
縄文時代中期～後期土器



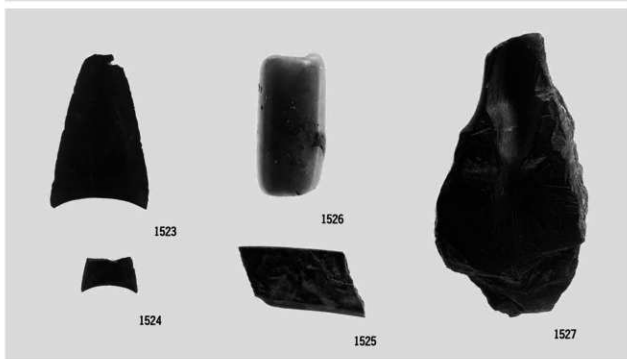
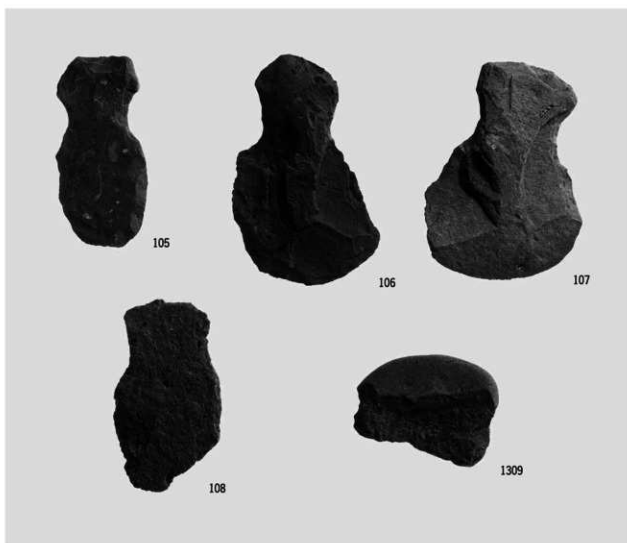
縄文時代後期土器



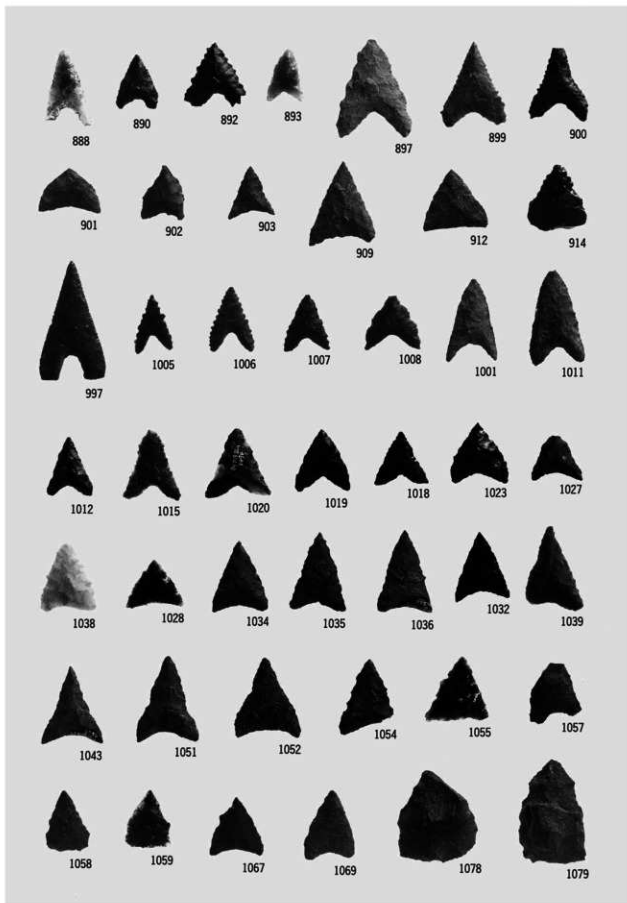
縄文時代晩期土器



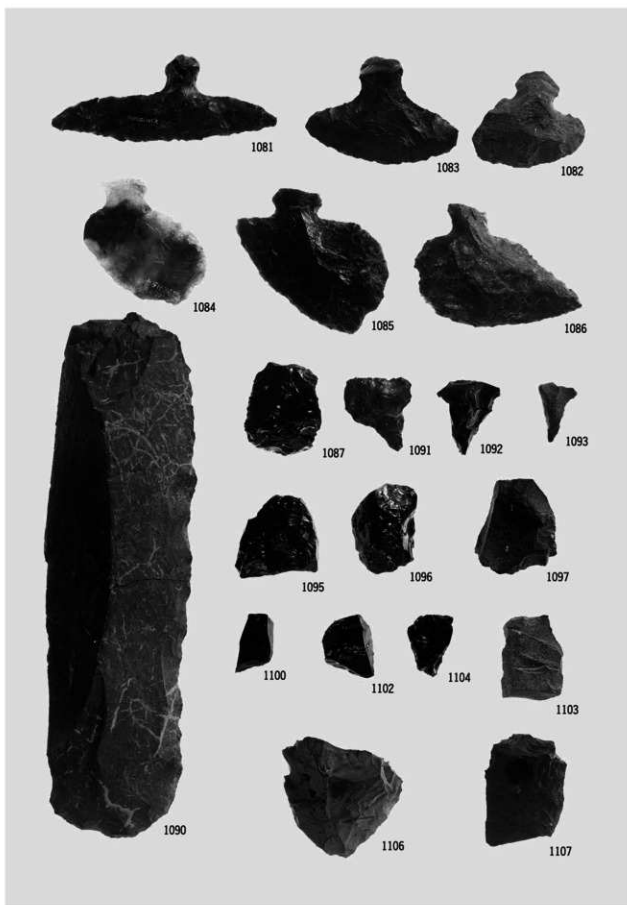
縄文時代後期～晩期土器



縄文時代石器（1）ほか

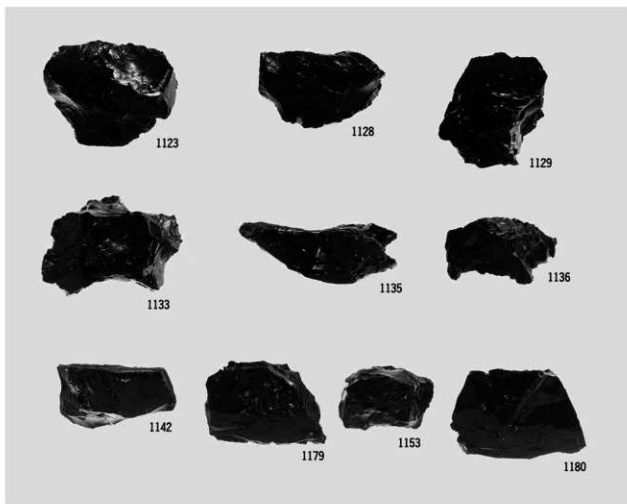
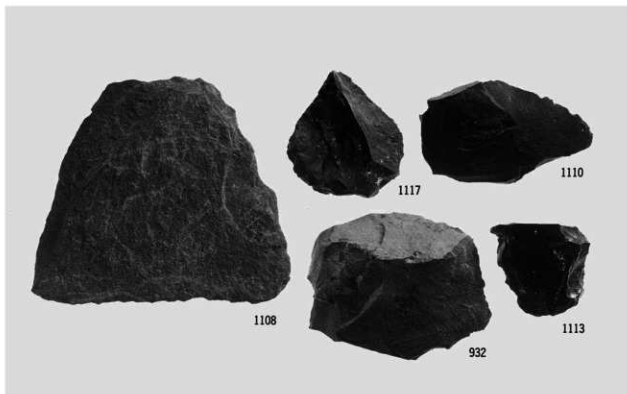


縄文時代石器（2）

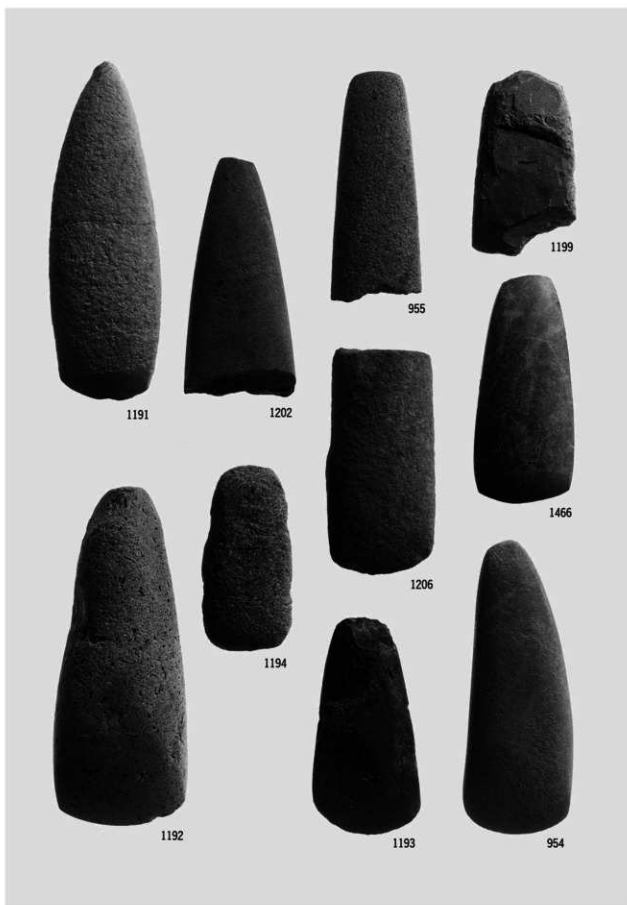


縄文時代石器（3）

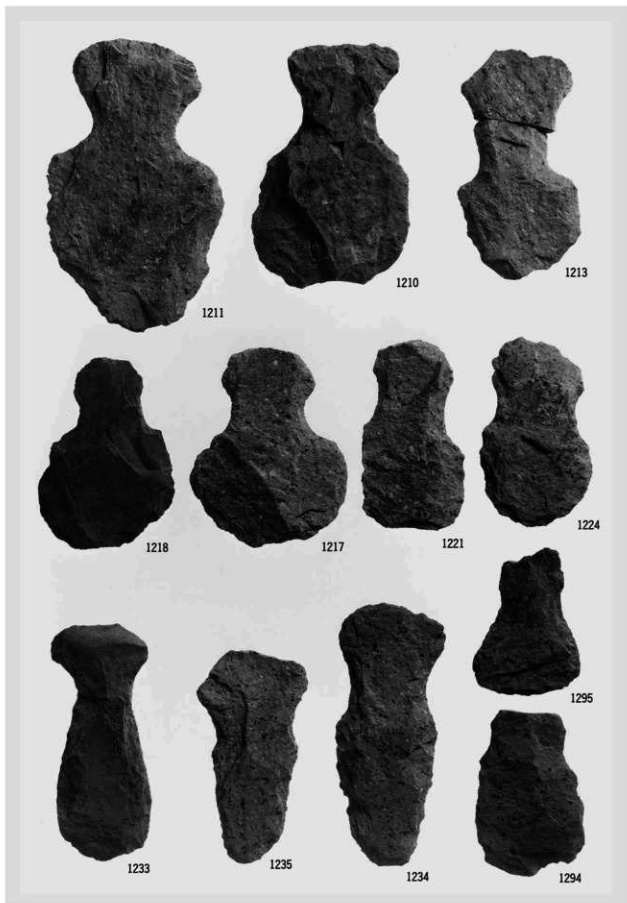




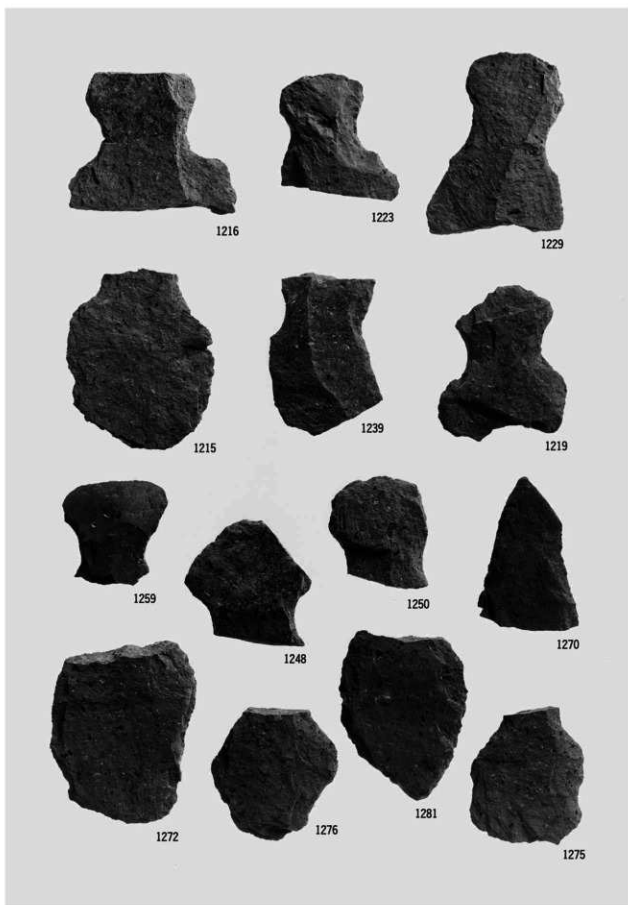
縄文時代石器（4）



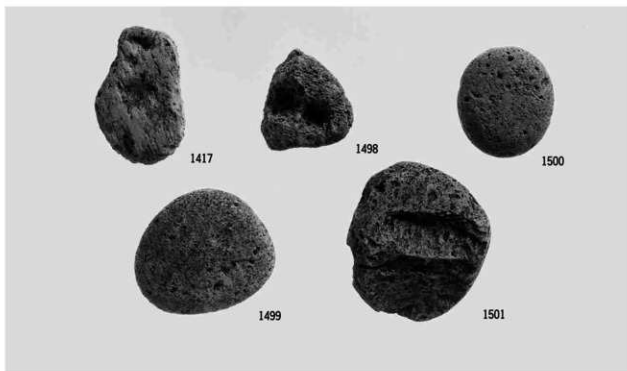
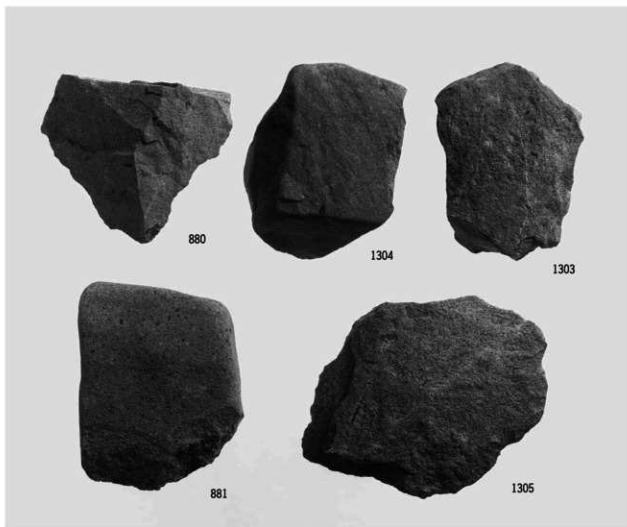
縄文時代石器（5）



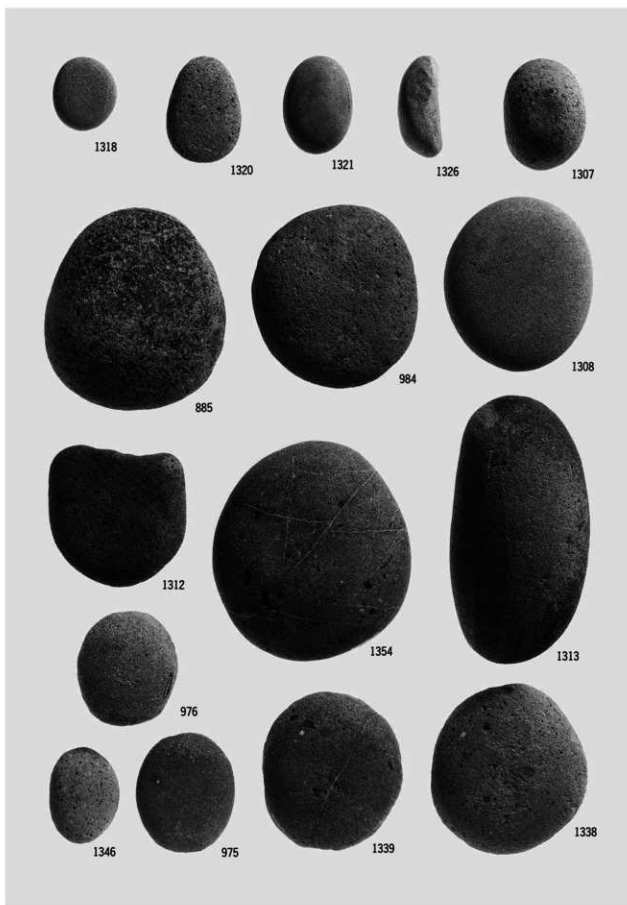
縄文時代石器（6）



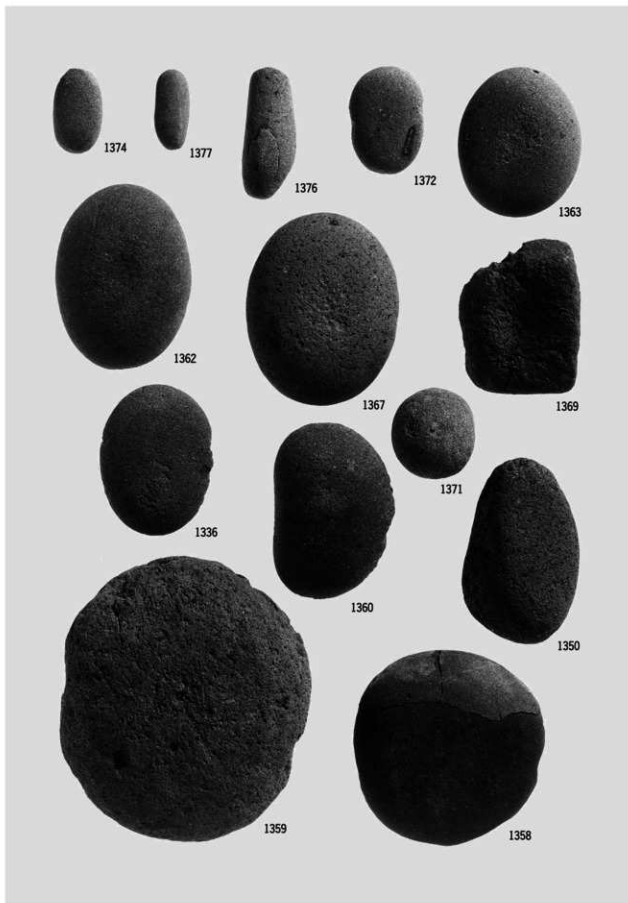
縄文時代石器（7）



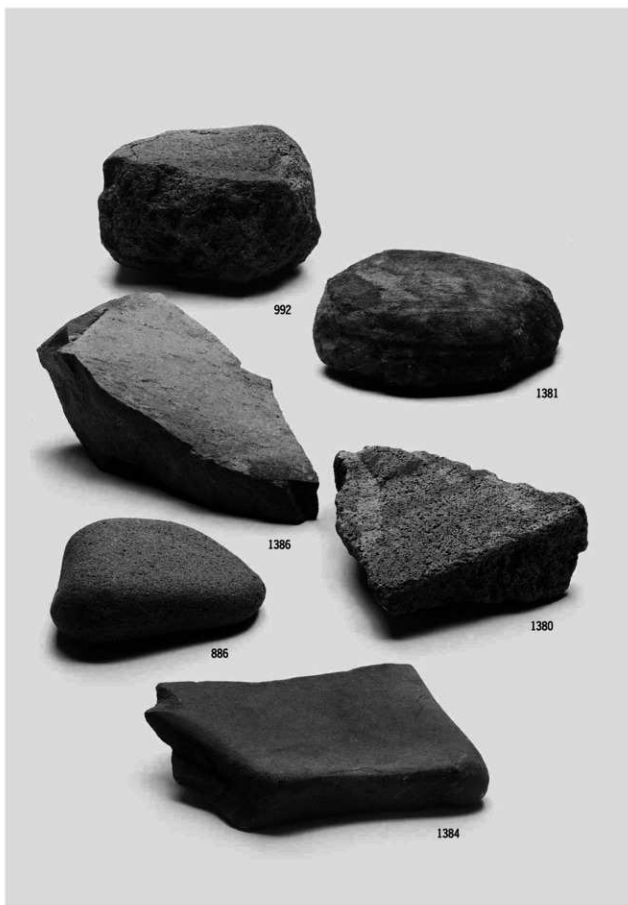
縄文時代石器（8）



縄文時代石器（9）

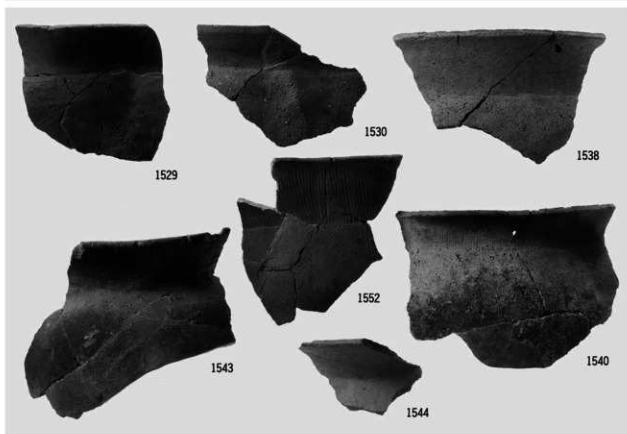
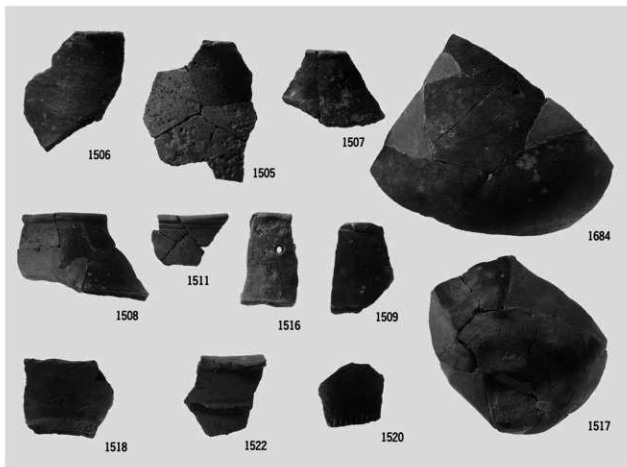


縄文時代石器 (10)

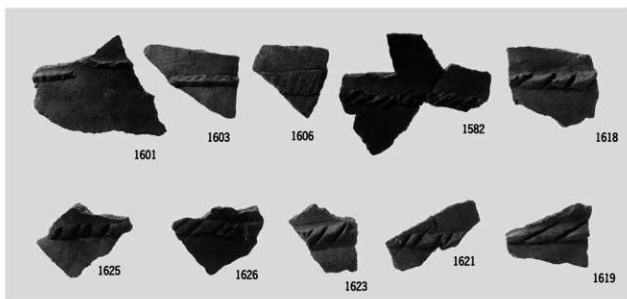


縄文時代石器 (11)





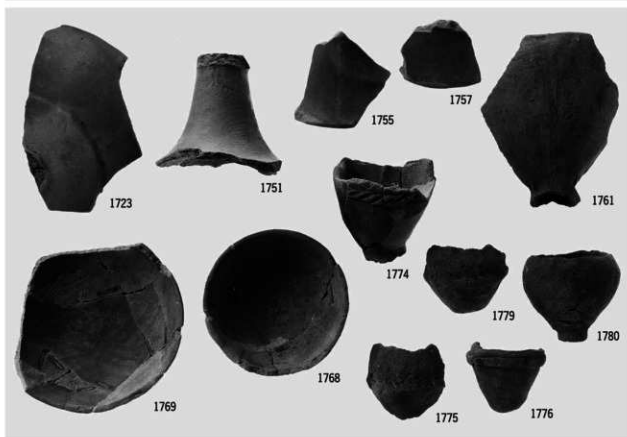
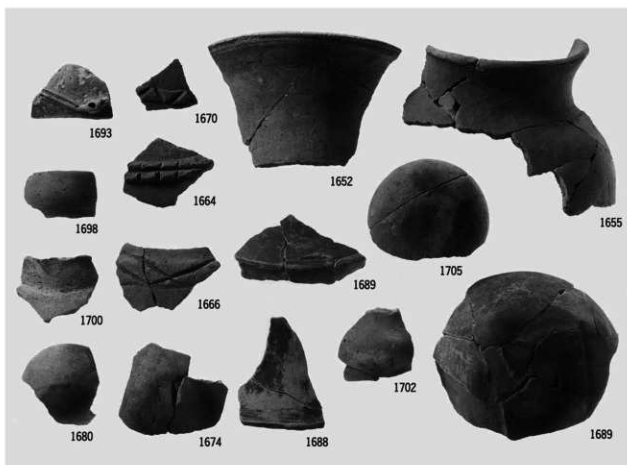
弥生～古墳時代土器



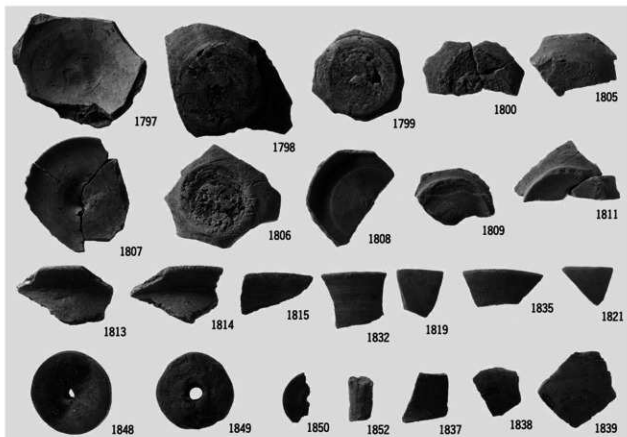
古墳時代土器（1）



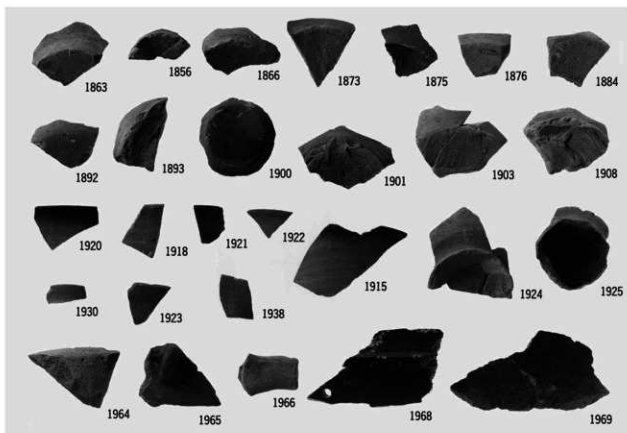
古墳時代土器（2）



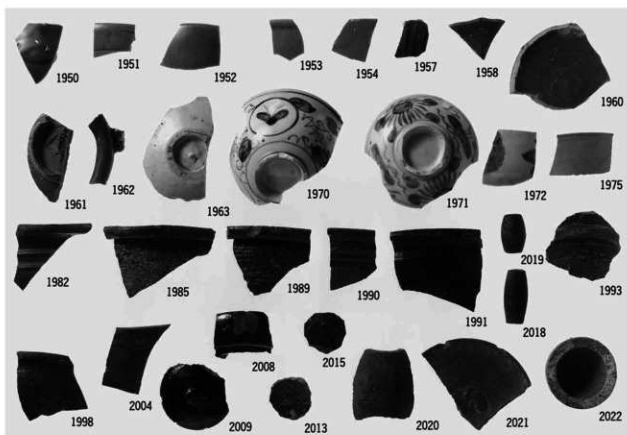
古墳時代土器（3）



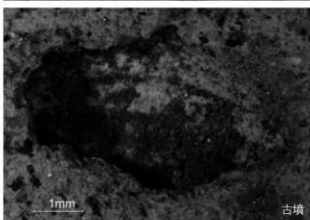
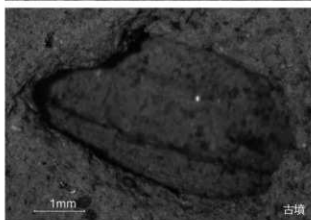
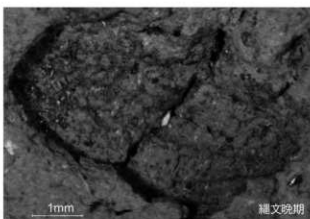
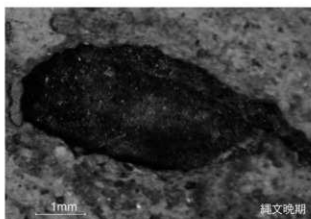
古代の遺物



中世の遺物



中世～近世以降の遺物



靱痕

## あ と が き

鹿児島市から国道3号線沿いに北上して川内、出水、水俣を経て八代にいたる南九州西回り自動車道は、平成17年春には串木野市（当時、現いちき串木野市）までを結ぶ基幹道路となり、流通の要として重要な位置を占めるに至っている。今後とも、止むことなく延び続けることだろう。

伊集院インターチェンジ～市米インターチェンジ間の調査は、平成8年度から平成12年度にかけて発掘調査が行われた。16に上る遺跡の中でも、日置市東市米町からいちき串木野市市米町にかけて広域に広がる市ノ原遺跡は、調査対象面積が62,000㎡にも及ぶ本路線中最大規模の遺跡であった。調査は平成8年度から平成11年度までかけて行われたが、総延長約3キロメートルにも及んだため、5つの地点に区切って調査を行った。

第5地点は市ノ原遺跡の中でも最も南側に位置しており、遺跡全体として高低差の大きい区域であった。

確認調査で遺跡の残存範囲が絞られていたものの、当時荒蕪地で立ち入れなかった南側の地域にも遺跡が広がっていき、最終的に足かけ2年次に渡る調査となった。

調査の成果については本報告書に記載した通りであるが、全体をくまなく網羅したつもりではあっても、なにせ調査から長い年月が流れたことで当時の記憶を呼び戻すのに膨大な時間と労力を要することになってしまった。その結果として、遺漏のあることが懸念されるのである。

整理・報告書作成作業中に冷や汗の出たこととして、「重要石器の大量発見」という出来事があった。これは、最終的には前任者と全ての遺物・書類を引き継いだ段階でそれと認識していなかったことに起因する極めて初歩的なミスと言えるものであるが、とにかく重要であることを確実に把握せずに引継を受けた結果起こったことという、実にお粗末なものであった。つまり、重要遺物にはその旨が朱書されているものと思い込んでいたことから、黒色で「重要遺物」と記載されていたものをバンケースごと失念していたものである。ただ、その後の対応が素早かった(?)ことから、今回の報告書刊行にこぎつけることができた、というものであった。

今、どうにか報告書刊行にたどり着いた。発掘調査中のいろいろな出来事や整理・報告書作成作業中の諸々の思い出など、枚挙に暇がない。完全とは間違っても言えないにしても、あらん限りの知識や知恵を出して完成させることができたことだけを一縷の心の救いとして駄文を閉じることとしたい。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(105)

## 市ノ原遺跡 (第5地点)

発行 2006年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

印刷 凸版印刷株式会社